

海の女司祭

ダイアン・フォーチュン著

江口之隆訳

第一章

日記をつけるという作業は、同世代の人間からは悪徳の一種と見なされる。しかし、ご先祖さまがつけた日記となれば、美德の産物と見なされるであろう。さよう、自分はこの悪徳の犠牲者であると告白しよう。まあ、これを悪徳というべきなのか、さだかではないのだが、私はかなり詳細な日記を長年にわたってつけてきたのだ。観察は大好きだが、想像力に欠けているから、私の本当の役目はボズウエルのそれである。だが、悲しいかな、まだジョンソン博士は現れたことがない。だから私は自分自身をジョンソン博士にするはめになった。好きでこうなったのではない。むしろ偉人伝の作者にでもなったほうがずっとましだが、偉人ともつきあったことがない。だから、自分を書くか、なにも書かないか、なのである。自分の日記が文学であるなどとはこれっぽちも思っていないが、日記はある意味で精神的安全弁である。私の日記も、緊急時には、その役を果たしてくれる。日記なしではしよっちゅう爆発していただろう。

冒険は冒険好きの者にやってくる、と言われていた。しかし扶養家族を抱えた人間が冒険を求めることなどできやしない。一緒に冒険と直面してくれる若い妻でもいけば、話はまた違うだろうが、姉は私より十歳年長だし、母は半病人である。私が家業を継いだばかりで駆け出しだったころ、三人がやっとな食べていけるだけの収入しかなかった。ゆえに、冒険は私には無縁の存在であり、わが身に危険が及ばぬ他人の冒険だけがよろしいとされた。したがって、安全弁も必要になるのだ。

昔の日記は何冊も重ねられて屋根裏部屋の錫製トランクにしまっている。ときどき拾い読みするが、退屈な代物である。書くことだけに楽しみがあったのだ。田舎の実業家の目を通して見た事物を、年代順に客観的に記しただけなのだ。酒にたとえるのはよくないかもしれないが、実に弱いビールというところだ。

しかしある時点から変化が生じている。主観的であろうとすることが目的となつていくのだ。どこから、どうしてそうなったのかはわからない。あのことをすべてをはっきりさせようという考えで、私はその後の日記を系統だてて読みはじめ、全体をまとめて書き下ろそうとしてみた。それは奇妙な物語となり、自分でも理解しているふりをしたくない。書いているうちにはつきりするだろうと願っていたのだが、そうはならなかった。

た。実際の話、もっとややこしくなっただけである。日記をつける習慣さえなかったら、たいていのものは無難に忘却のかなたへ消えていったことだろう。そして意識に残ったものは既成概念に適合するように再構成される。不適合なものはこっそりとゴミ箱に捨てられるという仕組みである。

しかし白地に黒く書き記されたものはそういうわけにもいかず、私はあの出来事の全体を直視するはめになった。あれにどういいう価値があるのかわからないが、とにかく記録しておくことにする。あの出来事の価値を判断するのにもっとも適していない人間が私である。私には、あれが思想史における奇妙な一章であるという気がする。文学的にはともかく、資料的には興味深いものだろう。あれを経験して学ぶところが大であったように、書き下ろすことから学ぶものがあれば、それで本望である。

すべてはある金銭上の紛糾から始まった。うちの商売は父から受け継いだ不動産屋である。取引自体はいつも良好なのだが、投機のためにかなりの借金を背負っていた。父は掘り出し物に手を出す誘惑を押さえたためしかなかった。建築に一万ポンドかかっていると知ってる家が二千ポンドで売りに出たら、買わずにはいられない性分だった。しかしそんなだだっ広い邸宅を欲しがる者は誰もいないので、私はずらりと並んだ無用の

長物をしよいこむことになったのである。二十代の日々を費やし、三十代もたつぷりかけて、私はこの長物と格闘し、ばらばらにしてやり、ついに健全経営を回復した。私は長らくやりたかったことをやれる立場にたてた―不動産業自体を売り飛ばし（この商売も、あの半分死んだような町も大嫌いだった）、その金でロンドンの出版社の共同経営権を買収するのだ。そうすれば、憧れの人生を始められると考えていた。経済的に見ればそれほど無鉄砲な計画には思えなかった。煉瓦を売ろうと本を売ろうと、商売は商売である。出版界を扱う伝記の類いは手に入るかぎり読んでいたし、商取引に精通した人間にはチャンスもあると思われた。もちろん、本や作家と直接つきあったことがないから、甘いといわれるかもしれないが、私にはそう思えたのである。

そこで私は母と姉に計画を打診してみた。二人は反対はしなかったが、自分たちにもロンドンに來いなどと要求しなければ、という条件つきだった。これは予想もしない渡りに舟だった。私は母のために別の家を一軒用意しなければと考えていたのだ。母はフラットなど絶対に我慢できない性分だったからだ。かつて夢想だにしなかった新局面が眼前に開けてきた。ボヘミアンの連中とつきあう自分が見える、クラブで過ごす自分が見える、なんであれ気楽な独身生活を送る自分が見えた。それから頭に一撃を食らった。

うちの会社の事務所は巨大なジョージ朝建築物の一角にあり、建物自体は私たちが日ごろ寝起きしている家なのだ。会社は売るが社屋は売らないというわけにはいかない。町一番の見晴らしのよい位置にあるからだ。そして母も姉も売ることに同意しないだろう。

無理やり押し切って、頭越しに家を売却することもできただろうと思うが、それはしなくなかった。姉は私の部屋にやっできて、家がばらばらになったら母は死ぬだろうと言った。私は手元の許すかぎりで好きなところに好きな家を建ててやると申し出たが、姉はだめだと言い、母は落ち着かないだろうと主張した。たしかに、母の余生を平安に送らせてやるべきだろう。もうそれほど長くはないはずだ。（これが五年前のことであり、母はまだまだ元気である。あのとき頑固につっぱれば、私は禁治産者にされていただろう）

それから母が私を自室に呼びつけ、家を売り飛ばせば姉の仕事は完全にだめになってしまうだろうと言った。姉の《フレンド婦人会》の本部はうちの地階にあり、集会は大広間で催されていたからだ。姉は全人生をこの仕事に打ち込んでおり、家がなくなれば仕事もなくなるだろう。私はこれすべてを突破してわが道を行くのもどうかと思った。それで不動産業に専念する決心をしたのである。人生には相応の補償というものがある。

仕事柄、自動車に乗って田舎回りもやれたし、元来大変な読書家である私は、本を読む時間もあつた。本当の悩みは腹を割って話せる友人がいなかったことであり、それもあつて出版業への転身を考えていたのであつた。それでも、読書は決して悪い代用品ではなく、敢えて言えば、ロンドンまで友人を作りに行つても、ひどく幻滅しただけだったかもしれない。実際の話、冒険をしなかったのは正解だった。この直後、喘息が始まり、ロンドンの喧噪など耐えられるはずもなかっただろう。売却先の会社は町に支店を開設してしまい、売り手有利の機会は終わってしまった。

これでは取引上の紛糾のように聞こえないかもしれない。また、実際の決定にはなんら紛糾はなかつたのである。紛糾はすべてが決着したあとにやってきた。日曜の夕食のときだった。いずれにせよ私は冷めた夕食は嫌いだし、牧師はその晩、一段とあほらしい説教をぶつてくれた。母と姉は気にいらしいが、私にはあほくさく思えたのである。一同は討論をし、私が口を挟もうとしないので、私の意見を求めたのである。そして馬鹿な私は、思ったことを口に出して厭味を言い、どういう理由でかいまでもわからないが、向こう見ずにものを言い、あげくにテーブル上の食事の費用は自分が出てるのだから、好きなことを言わせてもらおうと放言してしまった。それから大笑いが始

まった。女性軍は生まれてこのかたそんなことを言われたことがなかったから、お気に召さなかったようだ。姉も母も練達の教区奉仕活動家だったから、一旦怒りだせば私など敵ではなかった。私は部屋から出る際に扉を思い切り閉めてやった。それからおぞましくも冷めた日曜の夕食を胃に入れたまま、三段まとめて階段を駆け上がっていて、踊り場で最初の喘息発作を起こしたのである。

下の連中は物音を聞いて顔を出し、手擦りにもたれかかった私を発見して、おびえた。私もおびえていた。臨終のときが来たかと思った。喘息は、慣れてしまった人でもびっくりする。しかも私はこれが最初の発作だった。

しかし、私は生き延びた。その後のすべての源泉は、発作後寝台に横になっていたこの時期に求めることができる。かなり激しく薬物投与されていたように思う。とにかく私は朦朧状態で、自分の肉体から半分出たような、半分入ったような感じだった。家の連中はブラインドを降ろしわすれていて、月光は直接寝台を照らし出していた。私はふらふらで、それを降ろしに布団から這い出ることもできなかった。満月が薄雲越しに夜空を滑りゆくさまを横になったまま眺め、誰も知らない月の裏側はどうなっているのだろうと思っていた。夜空はいつも私を強く魅了するものがあった。星を見ればいつでも

驚異の念を覚えるし、星間宇宙はもっとすごい驚異である。私には星間宇宙こそが万物の始源と思えるからだ。赤土からアダムを造ったなどといわれてもぴんとこない。神はもっと幾何学を学ぶべきだと思う。

横になり、朦朧、困憊、月に半分催眠術をかけられたような状態で、私は時間を飛び越え始源にまで精神をうつろわせた。《神々の夜》の中、深藍の空間に無限に広がる海を見た。暗闇と静寂の中に万物の種子があるように思われた。その種子の中には未来の花が種子とともに折りたたまれており、その種子の中にも花が、というふうには、すべての創造が無限の空間に内包されていて、私はそれを追っていた。

横たわり、身も心もどうしようもない状態で、なおも星にまで系統をたどるといふことが驚異のように思える。そう思うと奇妙な感覚が全身に広がり、自分の魂がさらに暗闇へと進んでいくように思えるが、それでも恐怖感はなかった。

自分が死んだのではないかと思ひ、嬉しかった。死は解放を意味していたからだ。

それから自分が死んでいないことに気づいた。ただ、衰弱と薬物のために心のたがが緩んでしまっていたのだ。だれの心の中にも見る事ができない月の裏側のような部分

があるのだが、私はそれを見る特権を得ていたのである。それは《神々の夜》の中にある星間空間のようなもので、私という存在の根源でもあった。

これを認識すると、深い安堵感があった。自分の魂のたがが二度と完全に締まることなく、誰も見たことがない月の裏側へ回りこむ逃げ道を発見したことがわかったからだ。そして私はブラウニングの一節を思い出した――

「神に感謝を、もつとも卑しき人といえども

魂に二面を有したり。一方は世間に立ち向かうため、

他方は愛する女を見せるため」

さて、これは妙な経験だった。しかし私は幸福感を覚え、平静に病気に直面できるようになった。病気が見知らぬ門を開けてくれるように思えるからだ。私は長いあいだひ

とりきりで横たわり、周囲の魔法が解けるといけないから、読書する気も起きなかった。日中はまどろみ、夕闇迫れば月を待ち侘び、月が出たなら、彼女と交信していた。

いまとなつては、月になにを言ったのか、月がなにを言ったのか、わからない。それでも私は彼女をよく知るようになった。そして彼女からこういう印象を受けたのだ―彼女は物質的でも霊的でもない王国、いわば彼女自身の不思議な月の王国を支配している。その中を潮は動く―満潮、干潮、止水、高潮、決してとどまることなく、常に動く。上に、下に、前に、後ろに、盛り上がり、へこみ、押し寄せ、引き下がる。そしてすべての潮がわれわれの生命に力を及ぼすのである。誕生と死亡と肉体の機能に影響する。動物の交尾と植物の生育と疾病の内的作用に影響する。薬物の反応にも影響するし、それによつて伝承もある。月との交信から私はこれらすべてを肌身で感じ、もし月の潮流のリズムと周期性さえ学ぶことができれば、もっと多くのことがわかるだろうと確信した。しかしこれは私には学べなかつた。彼女は抽象的なことしか教えてくれなかつたし、細部は私の精神からすり抜けてしまったからだ。

月とつきあえばつきあうほど、彼女の潮流を意識するようになり、私の生活はそれとともに流れるようになった。自分の生気が潮のように満ち引きするのが感じられた。月

について書いているときさえ、彼女のリズムにあわせて書いていることに気づいた。日常のことを記すときは、私は歯切れのいいリズムで書いている。いずれにせよ、私は病にふせつているとき、実に奇妙な様式で月と一緒に生きているのであった。

しかし、ほどなく喘息も峠を越してしまい、私は半分死んだような有りさままで階下に這い降りてきた。家族は完璧に怖じけづいていたため、大変に気を使ってくれた。全員が私をめぐって大騒ぎしていた。しかし、発作が日常茶飯事となることがわかり、新鮮味が失われるや、誰もが少々飽きてきた。どんなに私が死にそうに見えても、死にはしないと医師が太鼓判を押してくれた。それから家族は冷静さを増し、私が発作を起こしても、終わるまで放置するようになった。私の場合はそうはいかなかった。いつもパニックを起こし、どうして冷静ではいられなかったように思う。理屈の上では死なないとわかっていても、空気の補給が断たれるとなれば、これは驚かざるを得ないから、思わずパニックを起こしてしまうのだ。

とにかく、いま書いたように、みんな慣れてしまい、飽きてしまったのである。地下室から私の寝室まで、盆を持って駆けつけるのは一大運送作業である。私自身もいささかうんざりしていた。ぜいぜい言いながらこの階段を上り下りするのはやっとしさだっ

たからだ。そこで部屋を変えろという問題が起きた。唯一の引越先としては、（誰かを部屋から追い出さないとすれば）庭に面する一種の地下牢みたいな部屋があった。私は地下牢は気に召さないと云わざるを得なかった。

それから頭にひらめくものがあつた。一応のところ庭と称している長細い土地のどんぶりまりに古い厩舎があり、そこに独身用住居みたいなものをこしらえることが可能かもしれない。そう思いつくや、その考えの虜となつて、私は月桂樹の荒れ野を下り、やれるかどうか見に行った。

なにもかも伸び放題という有り様だったが、なんとか分け進み、よくわからない小道をつたつて目的地にたどりついた。そこには教会の扉のような先端の尖つた扉があり、古びた煉瓦に直接取り付けられていた。施錠してあり、私は鍵を持っていなくつたが、肩で一押しするとなんなく開いた。内部は厩舎そのものであつた。一方には馬房があり、他方には馬具置き場がある。隅には蜘蛛の巣と暗闇へ続く螺旋階段があつた。かなりぐらぐらしているので、注意深く昇ると、干し草置き場に出た。ここはまったくの闇であり、よろい戸の隙間から光が洩れさしているだけだつた。

よろい戸を一枚開けようとしたが、それは外れて手の中に落ちた。大きく開いた空間から日光と新鮮な空気がかび臭い薄闇へ流れこんできた。私は身を乗り出し、目にしたものに驚かされた。

私の住む町の名前はディックフォードであるから、おそらくなんらかの川の近くにあるに違いないとはわかっていた。「訳注一フォードは浅瀬の意」おそらく十マイル離れた海沿いの観光地ディックマウスから伸びている川だろう。まあ、ここにその川があったのだ。たぶん、ディック川というのであり、この地に生まれ育った私でさえ、本当に存在するのか疑っていた代物なのだ。いささか植物が茂りすぎた溪谷を下るその流れは、やぶ越しに見たところでは、かなりの水量だった。それは明らかに少し先の暗渠に流れ込んでおり、多くの家に乗せる古い橋の下を横切っている。それまで私は、ブリッジ・ストリートが実際に橋だったとは思いつかなかった。しかしここには本物の小川、幅約二十フィートの流れがあり、テムズの上流のような伝統的シダレヤナギに囲まれている。私は生まれてこのかたこれほど驚いたことはなかった。川のすぐそばに生まれ育って、その存在をそれまで知らないという人がいたなどと、まして男の子がいたなどと、誰が考えようか？　しかし私はこれほど完璧に隠蔽された川を見たことがなかった。長

細い庭の背後はすべて溪谷に隣接しており、樹木と灌木が茂るだけ茂っていた。土地の腕白坊主どもはみんな知っていただろうと思うが、私は育ちが良かった。育ちは人の生き方を束縛するものである。

ともあれ、川はそこにあつたし、この地方の心臓部であつたかもしれないものだった。川岸に沿って生い茂る樹木の葉のために煙突一本見えず、いわば緑のトンネルを流れる川となっていた。おそらく若いころにこの川を発見しなくて幸いだったかもしれない。きつと魅了され、はまっていたことだろう。

私はその場を見回した。それはしつかりとした造りのアン王朝風の建築で、広い屋根窓付きの空間を仕切って、部屋と風呂場を造作するのはたいした仕事ではないだろう。すでに煙突が片隅にあり、階下に水道と排水孔があるのは確認済みだった。自分の発見に心浮き浮きと家に帰れば、いつものように冷や水を浴びせられた。私が病気になるっても、召し使いが盆を持ってあの小道を下るなど論外であると言われた。地下牢に行くか、あきらめるかのどちらかだと連中はぬかした。私は言った―くたばれ召し使い、くたばれ地下牢、そして外回りに出掛けると称して車を出し、家の連中を怒らせるままにした。

仕事は単なる名目というわけではなかった。わが社は石油ポンプのために引き倒される予定の一連の小屋の買収を引き受けていた。一人の老婦人が立ち退きを拒んでいたため、その説得に当たらなければならなかった。こういった仕事は自分でやりたかった。執行史その他はひどく怒鳴りちらすし、できるものならこの手の老人を法廷に追いやるようなことは避けたかったからだ。関係者全員にとって、嫌な仕事なのだ。

その小屋はもともとは田舎屋であったが、市街が周囲に広がって取り残された形となり、最後の住人が小柄な老婦人、その名はサリー・サンプソンであった。彼女は大昔からここに住んでいて、引越そうとはしなかった。わが社としては、代替住居その他を提供すると申し出ていた。しかし、どうも民事法廷を開かなければならない雰囲気であり、私としては、わずかな財産にしがみつこういったお年寄り相手にそれをやりたくなかった。そこで私はサリーの小さな緑色の扉を小さな真鍮製のノッカーでノックして、心を鬼にしようと腹を決めた。私はこんなことは上手ではないのだが、法廷執行史に較べればまだ私のほうがましだろう。

サリーはドア・チェーン付きの扉を一寸ちほど開け、私の用事を尋ねた。このチェーンを引けば小屋全体を引き倒すこともできそうだった。きつと手には火掻き棒を持つ

ているだろうと私は想像した。しかし私は、幸か不幸か、かなり急な道を歩いてきたため息が切れており、一言も発することができなかった。ただ戸口の側柱にもたれて、魚のように口をぱくぱくさせることしかできなかった。

サリーにはそれで十分だった。彼女は扉を開け、火掻き棒を床に置き、私を中に運び入れ、ひとつしかない肘掛け椅子に私を座らせ、紅茶を入れてくれた。そこで私はサリーを追い出すかわりに、一緒にお茶を飲んだ。

そしていろいろと話し合った。彼女はまったくの年金暮らしであることがわかった。しかしこの小屋にいれば、サイクリング客に紅茶を飲ませることで少しばかり稼ぐことができる。しかしわが社が申し出た家ではそれができないのだ。もし少しばかり稼ぐことができれば、彼女はおしまいであり、救貧院に行かなければならないのである。老婦人が渋ったのは無理もなかった。

そのとき、私の頭にまたひらめいた。私の独身部屋の問題点が召し使い問題となるのであれば、ここに解決策があるではないか。私はサリーの自分の考えを告げた。するとサリーは純粹に喜んで涙にくれた。どうやら愛犬が最近死んでしまい、日中は寂しく、

夜は不安だったらしい。そしてどうやら私が代替物としてうってつけと考えていたようだった。そこで私たちはあれこれ取り決めをした。私があの場合をそれふうにご造作し、そのあと二人で移り住んで、落ち着きしだい家事を始めることになった。それで石油ポンプも平安に作動できる。

そこで私は帰宅して家族にその旨を告げた。しかしそれでも母も姉も気にいらなかった。それでは噂の種になるというのだ。私は言ってやった。老齡年金は結婚証明書の次にちゃんとしたものだし、そうでないとしても噂をする者などいるものか、あの場合も道から見えないし、自分が宿を変えたなど人に教える必要がどこにあるう。母と姉は、召し使いが噂すると言いだすので、言ってやった―召し使いなど地獄に落ちろ。二人が言うには、もし召し使いが辞めると言い出しても、私は家事などする気がないだろうし、そう気安く召し使いを地獄に送ることもできない―それは事実だった。私が返した言葉は―召し使いは醜聞のために辞めるとは言いださない、なぜなら通例彼らはとどまって最後まで見届けたいからだ。実際、戸棚に骸骨をしまっておくことほど、召し使いたちを足止めする良策はないのだ。姉は言った―もし私が庭の隅っこで罪もあらわにサリ―と生活するようでは『フレンド婦人会』などやっていけない、たとえ実際になにもなか

ったとしても、と。私は言った―くたばれ ≪フレンド婦人会≫。それでこの件は放り出された。しかし、一番上等の黒いビーズ付きボンネットをかぶったサリーに会ったとき、姉もやや口が過ぎたことに同意した。それで私たちも落ち着いた。サリーは馬房を得、私は屋根裏を得た―いわば蛇が来るまでのエデンの園郊外版といったところだった。

第二章

あの場所は気にいっていと書いておかなければならない。私の居間は真南に面した四つの屋根窓を有しており、寝室は東向きで、毎朝太陽に起こされた。幅広煉瓦で暖炉を据えつけ、泥地から取ってきたピートを燃やした。暖炉の両脇には本棚を作りつけ、前から欲しかった書物を集めはじめた。以前の寝室には余裕がなかったから、これをやれなかったのだ。おまけに私は自分の本を家のあちこちに分散したくはなかった。本というものは極めて個人的かつ内輪の代物だと思う。本からは人の個人的傾向が明らかになってしまう。私は自分の本を持ち歩いて姉にとにかく言われるのは嫌いだ。おまけに、私の本はたぶん『フレンド婦人』たちを墮落させてしまいうし、召し使いたちはいろいろと噂を立てるだろう。

少々せこいと思われるかもしれないが、私は自分の厩舎に姉が訪問してくることを考えただけでも嫌だった。姉は姉なりにまっとうな生物なのだろうとも思うし、事実姉は町ではきわめて評判が高いのだが、私とまったく共通点がなかった。母は常々私のこと

を取り替え子だと言っていた。どうして私のような者が家族に生まれてきたかは神のみぞ知る。姉と私はいつも犬と猫のような関係にあり、私が喘息を起こして短気になってからは、私が猫になっていく。いずれにせよ、私は姉には用がないのだ。それでも、姉を完全に締め出すのは絶望的だろうとはわかっていた。私にできることといえば、扉にエール錠を掛け、姉に不意打ちをさせないことくらいだった。

しかし、物事は私の予想以上にうまく展開した。姉はそうそうにサリーを自分の仕事に引きずり込もうとしたことで、サリーとうまくいかなくなった。サリーがあまりいい清掃家ではないことは認めよう。しかし彼女は最高の料理人である。姉は掃除はうまいが、料理はとことん下手だった。サリーは姉に向かって、自分は若旦那のために働いているのであり、若旦那以外の誰からも指図は受けないと言いつつ放った。姉は私のもとにやってくるまで、サリーの首を大皿に乗せるように要求した。私はサリーと気が合うから、くびにする気はないと宣言した。私は泥だらけの家が好きだった。そっちのほう落ち着くのだ。姉はサリーがいるかぎり、たとえ私が死の床にあっても二度とこの場所には足を踏みいれないと言った。私は、そりゃ結構と言ってやった。そのほうが嬉しいわけだ。かくしてこの件は終わり、姉は誓いの言葉を守った。

結局、この場所に足を踏み入れた人間は私の共同経営者であるスコッティーと医者
二人だけということになった。そして二人はこの場所が気にいった。問題は、一旦連中
がうちに来ると、追い出すこともならず、ただ座って馬鹿話をえんえんしているとい
うことだった。さても連中はそれなりに気の良さやつらである。ことにスコッティーはそ
うだった。実際の話、町には結構まともな男たちもいる。困ったときに相談に行けるや
つらだ。私は連中をみんな知っているし、仲良くしている――まあ、そうすることが商売
の一環のようなものだ。それでいて、おそらくスコッティーを除けば、私には本当の友
人がいなかった。彼と私はほとんど共通点がなく、それぞれ我が道を行くというところ
だが、どんな緊急事態でも彼を信頼することができる。世の中にはもっとひどい友情の
基盤もある。

スコッティーは妙ちくりんな来歴を持つ妙ちくりんな人物である。彼の両親は舞台に
立っていた。そして旅回りの一座に加わって当地で興行していたときに、流感に倒れて
しまい、一人死に、もう一人も死んで、スコッティー少年は救貧院に送られることにな
ってしまった。しかしわずか三才という幼少のみぎりに於いて、彼のスコットランド
訛りは確立されていたのである。それは決して消えることがなく、その後身についたも

のはなんであれ、親譲りの素質の上に花咲いた。彼は土地の貧民の方言を覚えてしまったし、神の御心により、救貧院の院長夫妻はコクニーだった。結果として、アクセントのタータン・チェックが出来上がってしまった。幸運なことに彼は無口な男だった。

しかしスコッティーは無気味な沈黙を守り、私はえげつない取引を嫌がるので、わが社は誠実であるとの評判が異様に高かった。それは長い目で見れば、その場の暴利よりもはるかにペイするものであったが、姉はわが社の取引状況をたまに耳にすると泡を吹いたものである。もし全員が各々の権利を存分に生かしたとすれば、姉が商売を切り盛りし、私が《フレンド婦人会》をやっていたことだろう。

スコッティーの教育はありふれたものだだった。しかし、転んでもただでは起きないスコットランド気質が顔を出し、彼は教育を最大限に活用したのである。もし誰か奨学金を考えてやる人間がいれば、もっと上の学校に行っていただろう。しかし、奇特な人物はおらず、彼は義務教育を終えるとわが社の事務員見習いとして就職し、自活するようになった。

私の教育もありふれたものだった。私は地方名士の子弟のための学校に送られた。こ
ういえば、どんなものかわかるだろう。心身ともに衰弱させるための施設である。そこ
で学んだからといって、格別有益なことはなかったが、振り返ってみれば、別に有害で
もなかった。この学校は、校長が土地のお菓子屋の小娘と駆け落ちしたとき、閉鎖され
た。お似合いの結末だったともいえよう。この学校はサツカリンと糞を驚くべき方法で
一緒にしたようなものだったからだ―教室で教わる非実用的な高邁と、寄宿舎での信じ
られないような下劣な生活は、顎を外すほどの落差だった。幼いころ、私は校長には少
年時代などなかったのではないかと思っていた。私が得たものは、こういった環境に置
かれた思春期のワルガキが得る類いの世俗的叡知でしかなかった。なにもないよりはま
しだったと思っている。私は短期休暇を除いては、決して家から離れようとはしなかつ
た。

私が父の下で働くようになったとき、スコツティーはすでに一人前であり、驚くべき
ことに勤続数十年の年長社員という風格だった。私が現れてからは、彼は父のことを常
にミスター・エドワードと呼んでいて、自分の父親の下で地位を得たかのようにだつた。
しかし、私の看病をしてくれているときでも、彼は私をミスター・ウィルフレッドとし

か呼ばなかった。私たちはほぼ同年齢だったが、スコツティーは周到な商売人であり、私は尻の青い若造でしかなかった。

私は老練なスコツティーを最初から気にいつていたが、父は彼が救貧院出身だということで、決して個人的な友人関係を築こうとはしなかった。しかし、父の死去がすべてを混乱の淵にたたきこんだとき、ことを仕切ったのはスコツティーであった。わが社の老番頭はただめそめそ泣くだけだった。若輩ながら、スコツティーと私が彼を支えたのである。老番頭が私を指導したとみんな思っているし、一件落着後に彼の発言力が増したと思う人もいるかもしれないが、実のところ、スコツティーだったのである。

喘息が始まるや、自分が商売上、非常に不安定な要素となるだろうとわかった。毎日の作業を私に期待してもむだであった。好調なときでさえ、私は競売人としてはあまり上等ではなかった。うまい競売人とは神の賜物である。さらに、私は少し近視の気があるし、婦人客の付け値を見落としては憤激を買い、えこ贖肩をしていると責められることもあれば、欲しくもない人へ品を落札してしまうこともある。いっぞやは、くしゃみを押さえている様子を付け値していると見まちがえ、連続五点をその気のない不運な人

間に押し付けて、冷や汗をかかせたこともあった。私の得意技は価格評価である。私は
絵画以外ならなんでも価格評価する。

私の体調が回復しはじめたとき、医者が共同経営者を得るべきだろうと進言してくれ
た。私は医者に頼んで、その共同経営者が実務にも参加する旨を家族にそれとなく言っ
てもらった。医者はそうしてくれ、家族も同意した。母も姉もまだ私のねじを巻き上げ
て働かせる意図を有していた。二人が同意しなかったのは、私が選んだ共同経営者、す
なわちスコッティーだった。彼女たちが希望していたのは、ずたずたの財政をなんとか
修復したいと欲している地方名士の類いだったのである。

思っていたとおり、二人は恐ろしい悲鳴を上げた。私とてスコッティーが下品である
ことは認める。服装の趣味はひどいものだし、Hは発音されたりされなかったりする。
しかし彼は正直で抜け目なく、親切な男であり、労働者としては特級であった。私はそ
う主張して頑張った。

わが社を訪れる顧客の類いが、不動産売買を依頼しなくなったからといって、うちの
格が落ちたとは思わない。どのみち彼らはわが社に依頼はしないのであるし、私とて彼

らが依頼してくるなどという幻想を抱いたことは一度もないのだ。姉は違うかもしれないが。「旗の日慈善募金」のための使用人を欲しがると、つきあつて楽しいかどうかはまったく別物である。私が喘息を引き起こしてから、私の寢台につきそつてくれたのはおなじみスコッティーだけだったので、これがいい証だった。彼はめんどりのように座り、一言も発さなかつたが、それでも非常に友愛的だった。そこで私は彼を共同経営者に引き入れた。これは素晴らしい買い物だったと思う。反対する理由もないのに必死で反対するというのはうちの家系の奇妙な特徴である。

共同経営者になつてから、ほどなくスコッティーは結婚した。相手の細君を気に入つたとしても、こういう場合には友情に変化が起こらざるを得ないものだと思うし、おまけに私はその細君が気にいらなかつた。彼女はそれなりに良い人間だった。姉は彼女を大変に買つていた。彼女は土地の葬儀屋の娘だった。さて競売業者は葬儀屋よりも一段位が上であるから――葬儀屋がどんな相手と組んで審議拒否するかは知らない――姉などはいよいようちの格が落ちたと考えそうなものだが、明らかにそうではなかつた。奇妙なことだが、私の我慢できないものは、スコッティーの小品さではなく、細君の小品さであつた。そして姉は細君の小品は問題とせず、夫君のそれには我慢できなかつた。ス

コッテイーの結婚はおよそ埋めがたい溝を残してしまった。彼は相棒としてはそれほどでもなかったが、友人としては問題がまったくなかった。

スコッテイーが共同経営者として落ち着いて以来、私は日常業務からきれいに手を引き、もっぱら資産評価に専念した。これはうちの営業内容の中でも、好きな部門だった。田舎回りができるし、殊に巡回裁判開廷期であれば、面白い人間にも会える。私はしばしば専門家として証人喚問されることが多く、これはユーモアのセンスさえあれば、きわめて楽しいものなのだ。ときおりある弁護士が私に証言するように求め、また別のおりに別の弁護士が同様の要請をする。そしてある巡回法廷で私の証言を決定的なものと提示した人間が、次の法廷で私の証言をくそみにけなすのである。それからすべてが終われば、私は連中と「ジョージ」で食事をするのである。そして私の友人である店主はわれわれ全員をうまくまとめようと取り掛かるが、彼は私に対してうまく工作できただけでなかった。いずれにせよ不当な小細工はできなかったのだ。私は彼の在庫をよく知っている——よく彼のために競売にかかった現物をとっておいてやったものだし——しかも、なかなかいいものを——それでも私たちはおおむね内輪で話をつけていた。

この手のことはそれは面白いものであり、私は心底楽しんだ。しかし弁護士たちは昨日はここ、明日はあちらと行ってしまうので、つきあうのは楽しかったが、友情にまで実を結んだことは一度もなかった。

しかし結局、私は多少なりとも落ち着いてしまい、サリーと書物とラジオを相手にするようになった。みんなは私のことをどうしようもなく人付き合いの悪い人間だというのが、気があう仲間さえいれば付き合いが悪いわけではない。私は喘息を最大限に利用しているような気もする。

そういうわけで、さまざまな本を読み、また奇妙な本を読んでいた。神智学関係のものを山ほど読んだが、これは家にいれば落ち着いて読めるはずもなかったものである。気にいったものもあつたが、そうでないものもあつた。転生論は受け入れた。これは色々読んだ中でもっとも良かったものであり、ずいぶんと助けになった。今世はもう色褪せた代物だったから、私は来世に望みをかけた。することがないときは、前世についてよく考えていた。

喘息発作後の数日は横になっていることをいつも余儀なくされた。こうなると読書も食傷するものである。また私は気分がいいときでも来客を奨励したことがないし、こんなときに気分がいいわけもないのだ。来客があっても、ろくに会話もできなかったらう。そこで私は横になったまま、考えたり不思議に思ったりしながら、自分の前世を再構築して遊んでいた。

いまとなつては不思議なことだ。人間観察は大好きなのだが、小説のためのプロットすらまともに組み立てられない私が、実に複雑かつ幻想的な自分の前世を構築できたのである。さらに、一日中そういつた作業を続けたあとは、それに関する夢を見るようになった。また、投薬されたおりに、異常ともいえるほどの鮮烈さで夢に見るのである。私は睡眠と覚醒の中間に横たわっていたものだ。たとえ家が火事になっても、体がぴくりとも動くとは思えなかった。この状態では、私の精神はどんなときにもないような貫徹力を持っているようだった。通常、私は事物の表面を滑っているだけで、煉瓦の塀の向こうはなにも見えない。そして自分自身が覚える感覚は、曖昧な泥のようなもので、私があるべき姿、それになろうと本心から試みているものによって覆われているのだ。しかし、投薬されているときには、こんな欺瞞はない。

さて、奇妙なものは、この状態に於ける不思議な倒錯した現実感であった。通常の事ははるか遠くに離れ、どうでもよくなってしまう。しかし注射一本で連れていかれる内なる王国では（私はこう名付けている）、私の願望はそのまま法則となり、ただ考えるだけであらゆるものを創造できるのであった。

どうして人々が薬物に現実逃避を求め、パイプの夢のために人生を放棄して悔いることがないのか、私にはかなりはつきりわかった。私は麻薬取締法に少なからず感謝しなければならないと、この場で言っておこう。私の人生はビタミン不足の食事に比較すると実にびつたりくる――栄養分はばっちりなのだが、健康を意味するなにかが少々足りないのである。いわば、精神的ワサビがきいていないのだ。手入れの悪い馬は、かえば桶かじりのような悪癖を身につけると言われている。私は薬物夢と神智学関係の読書を通じて、ピーター・イベツトソンの言う「現実には夢を見る」に手を出しはじめた。徐々に白昼夢のこつを体得し、薬物投与時ほどの現実感を得られなかつたにせよ、かなりの成果があった。私はしばしば白昼夢を夜の夢にまで持ち越し、本当に価値あるものを得たのであった。

私が行っていたことは、非常に優れた小説読書の一種だったと思う。結局、われわれは日常生活の補填として小説を読むのである。客車の中で実に温厚そのものと見える人物の肩越しに、なにを読んでいるのか覗いてみれば、それがどうしようもない血生臭い小説だったりする。温厚であればあるほど、読むものは血生臭くなるのだ——いわんや、婦女子に於いておや！ 肌の日焼けの跡を残した頑健そのものような人は、恐らく園芸新聞でも読んでいるだろう。スリラー小説は、われわれの精神的食事にビタミンを与える試みのように思える。もちろん、問題は、必要とするスリラーの処方はどうやって得るか、である。ヒーローと同化してわがことのように冒険を体験できたとしても、ヒロインはたいい薄馬鹿である。私は徐々に自分用のロマンスを処方する達人となり、次第に出来合いの小説などには依存しなくなった。私はほとんど次の喘息発作を期待するまでになった。それが投薬を意味しており、幻想は現実味を増すことを知っていたからだ。そして私はなんとも異常なやりかたで「人生経験を積む」ようになったものである。

また私は自然の事物と「共感」する力を発達させた。私が最初に得たこの種の経験は、最初の喘息発作でたまたま月と接触したことであった。後日、アルジャーノン・ブラッ

クウツドの小説を数冊読み、またマルドゥーンとカリントンの『星幽体投射』も読んだ。これらの書物がアイデアを与えてくれた。マルドゥーンも体が弱く、病床に伏しているときに肉体から滑り出られることを発見している。喘息もまた人の生命力を低下させるものなのだ。幻視を欲する神秘家たちは常に断食する。安眠したい喘息患者は胃袋を空にして就寝する。喘息、薬、断食就寝、これら三者を組み合わせれば、肉体から滑り出る条件がすべて揃う、と私には思えた。唯一の欠点は、肉体に戻るかどうかの一人か二人かである。本当に正直なところを言えば、私は戻れなかったとしてもたいして気にならない――まあ、これとて理論的なもので、一二度、実践を試みてはみたが、必死で肉体にしがみついたものである。この種の話で読者が退屈しなければいいと思うが、当時、私はこのうえなく楽しんだものである。どうせ全員を楽しませることができないのであれば、せめて自分だけでも楽しませるしかないのである。

第三章

さて、続けるとしよう。転生幻想を構築する力を徐々に発達させたと前に書いたが、これは一面に於いては本当であり、一面に於いてそうではなかった。それは階段的に発達したのである。しばらく続けてもなんの進歩もないと思うと、急に一段上がるのだ。それからまたしばらく無駄足を踏み、また一段上がるわけである。

ある神智学文献で、前世を思い出す最良の方法は逆向き瞑想であるということを読んだ。これは、就寝前に、その日の出来事を逆向きに想起するというものである。私も試してみたが、別に役に立つとは思えなかった。やってみればわかるが、実際に逆向きに想起することなどできず、ただばらばらの映像が逆の順番で並ぶだけなのだ。まあとにかくやってみたが、誰か他の方法をやる人がいれば、ぜひお話しをうかがいたい。個人的には、すなおに寝たほうがいいように思う。

私はいつも古代エジプトに魅せられていた。この幻想の領域では、別段余分な幻想補充も必要がないので、前世はエジプト人だったと想像するのは楽しかった。ただ、エジプトの前世にはあちこち長期にわたる欠落があり、ミミズと寝ていたと思えば、退屈な

職業についていたりするので、私は自分が錬金術師でもあったと決めた。いうまでもなく《賢者の石》を発見するのである。

それから、ある日曜の晩、私は家族と教会に行つた。私とてときどき教会くらいには行くが、これは安息と平穏と商売のためである。小さな町に住んでいれば、こういったことも必要なのだ。そのときは巡回説教師が教訓を読み上げていた。これがなかなかうまかつた。それまでは、欽定訳聖書がこれほど壮大な文学だとは思いつきもしなかつた。この時の演目は「エジプト逃避行」、黄金と乳香と没薬、星に導かれる「東方の三賢者」であり、私は魅了された。帰宅すると、聖書を捜し出した。洗礼のときに貰い、それつきり強制されたとき以外は見もしなかつたのだが、このときばかりは全頁読破したのである。

私はまたモーセがエジプト人たちの叡知を学びつつ育つたことを読み、ダニエルがバビロニア人の叡知を授かつたことも読んだ。ダニエルとライオンの穴の話はよく聞くが、ダニエルがバビロニア王直属の魔術長官職であるベルテシャザルの地位にあり、カルデアの太守であったことなど誰も語らない。また私の興味を引いたものは、王たちが谷で四対五で戦うという不思議な仕事である――シナルの王アムラペル、エラサル、王アリオ

ク、エラムの王ケダラオメル、ゴイムの王テダル。この連中に関して私はなにも知らないが、その名前は壮大なものであり、私の頭の中に鳴り響いたのであった。それから、さらに不思議なのがメルキセデクである。彼はサレムの王にしていと高き《神》の司祭であり、戦が終わりに、王たちが全員アスファルトの穴に落ちたあと、パンと葡萄酒を持ってアブラハムに会いに行く。アブラハムが称えたこの忘れられた祭儀の司祭は何者なのだろう？ 旧約聖書にあまり誉められない偉人が山ほどいることは率直に認めるが、この連中には魅力を感じた。そこで私は自分の前世コレクシヨンにアブラハム時代のカルデア人を加えた。

それから私の努力は挫折を迎えた。ある日、神智学協会の地方ロッジが主催する転生論の講演の宣伝を目にしたので、行ってみたのだ。講演はなかなか良かったが、質疑応答の最後に、ある婦人が立ち上がり、自分はヒパティア「訳注―美貌で知られるギリシヤの女流哲学者」の生まれ変わりだと言いはじめた。すると議長が立ち上がり、そんなはずはない、それはベザント夫人の前世であると言った。それから婦人が抗議を始め、関係者はピアノを弾いて彼女の声を掻き消した。私はしつぽを巻いて逃げ帰り、ケダラオメルご一行様を廃棄処分にした。

それ以来、私は転生幻想を少々恥じるようになり、以前の興味の対象であった月との交信を再開した。窓の下に見える小川には潮の干満があり、そのさざめきを聞くことではるか海岸の潮の模様を知ることができる。庭のすぐ上には堰があり、潮水の上限を記していた。それは満ち潮のときは沈黙しているが、引き潮のときにすてきな銀の鈴の調べを奏でる。また、そういったときには、はっきりと潮の香りを嗅ぐことができるので、かなり気にいっていた。しかしそれが健康に良くないと思われているのもわかっていた。どうして自称喘息患者の私がこんな水の上の生活に耐えられるのか、医者はいつも当惑していて、そのうちに喘息はこの塩水のせいだと考えるようになった。しかし実際のところ、喘息は家族とのあほな喧嘩が原因で始まったと私は思っており、最初に安堵感を覚えたのは家を出て厩舎に移り、扉を後ろ手にばたんと閉めたときだった。結局、喘息は気管支炎とは違うのである。実際の身体機能に悪い点はない。ただ、伸筋と屈筋が相違的活動をせず、肺をふさぐのである。

ともあれ、私は低水位の際に漂ってくる海草の匂いが好きだった。水面から立ちのぼる霧が深い溪谷に流れるが、私の窓の所にまで達することはなく、まるで月光に映える潮溜まりや潟のように見える。その間から生える樹木は満帆の船のようだった。入り江

から潮が引き、塩水が淡水を押し戻すと、堰にぶつかった淡水がついには溢れて水門からほとぼしる。それがごぼごぼいう際に水から奇妙な声が聞き取れた。海と陸があい争っているみたいなの、不穏ないさかいの声だった。

陸の水が海の水を押し戻そうとするさまに耳を傾けつつ、私はよく郷土史の書物で読んだことを思い出していた。このあたりはすべて水没した陸地なのだ。塩水湿地帯から島のように突出する小丘が数多くあり、潮位が高い時には泥濘地を突っ切る海道もある。これらの土地はすべてウェールズ丘陵地帯から運ばれてきた河口水域特有の沈泥だからである。もし海の砂州が入り江まで近づけば、満潮時の海水は六フィートの深さにまで至るだろう。オレンジ公ウイリアムは堤防を築造したが、一度それが決壊したことがあり、そのときは水が教会にまで押し寄せた。ディックマウスに半潮のときにだけ開く水門があるのはこのためである。

私たちと海のあいだにあるのはすべて塩水湿地帯であり、町は土地隆起部の先端上に立っている。町の背後には道を通す森の境界が迫っている。夕闇のなかをこの道づたいに家路につくと、霧に包まれた湿地帯が何マイルも何マイルも続くさまが見える。月が

輝く晩には、それが水面のように見えるので、海が再び陸を呑み込みにきたと思えるほどである。

私が常に不思議な魅力を感じるのは、ライオネスの失われた大地とその水没した教会が深みで鳴らす鐘の音の話であった。私はディックマウスの沖合にボートを漕ぎ出してみたことがある。このあたりには嵐の晩に川筋が変わったため水没してしまった古い修道院がある。その塀と尖塔を、小潮の澄み切った止水を通してはつきりと見てとることができた。

また、私はしばしば、ブリトン人の伝説である失われたイースの都とその魔法使いたちのことを考えてきた。裏切りによって水門が開かれ、海が殺到し、都を沈めた話を思った。そして私はカルナック列石群の謎を思い、また英国のストーン・ヘンジを思った。これらを建造したのは誰なのか、またなぜなのか？ 私には、どうやら二つの信仰、太陽崇拜と月崇拜があるように思われた。太陽崇拜が私たちよりも古いものであるように、私の月と海への愛は太陽崇拜より古いものであると思った。そして私は、太陽宗の司祭であるドルイド僧たちが、忘れられた崇拜形式である不思議な海の焚火を見て、怪訝に思ったに違いないと信じている。ちやうど私たちが古墳や支石墓を見るときのように。

なぜならば、なぜだかわからないが、こう考えるようになったからだ。月と海を崇拝していた人々は、年一番の小潮のときに大なる焚火を焚き、潮が満ちるとともに焚火は海に連れ去られるのである。年に一度だけ、剥き出しの岩に積み上げられた流木の燃えさかる炎を見ることができた。黒い岩は深海の泥濘と巨大なヒバマタと漁師を恐れないう巨大蟹の群れに覆われていた。ピラミッド状に積まれた流木の焚火は、塩分のために青い火炎をあげていた。潮が満ちるにつれ、緩やかな波が岩肌をなめるように這上り、しゅつと音を立てては焚火の底部を黒くしていく。ついには高みにある炎冠は火花を發しつつ海中に没し、すべてが沈黙した。暗い波がゆつくりと岩肌を洗い、巨大ヒバマタと巨大蟹を故郷の深海へと連れ戻す音だけが残った。内的視覚によるこの種の幻視は、しばしば私にとっては不思議な現実感と正当性を有していた。この手の幻視には、ただの夢ではまず経験できないことがある――私は、燃える木材に海水をかけて消すときの、あの独特の刺すような匂いを嗅ぐことができた。

第四章

とにかく、私はいつも通り、良くもなければ悪くもない日々を送っていた。実のところ、全体として少し良かったのではと思っている。悪魔のような喘息発作を終えたばかりで、春も近づく三月第一週、もちろん事務所は特に大忙しだったが、このとき私はとても奇妙な経験をした。先の発作でねじを巻かれた医者が、たいしたことにはなるまいと想定して、私に大量の薬物を注射した。そのため私はいつもの死にかかったような状態、空が落ちてこようと知るかとばかりに横たわっていた。このとき、睡眠と覚醒の中間状態で奇怪な幻視を見たのである。

私はマルドゥーンの手記に書いている方法で肉体から出てしまったようであり、ベル・ヘツドに向かう塩水湿地帯の上にいる自分を発見した。足元が、現在の黒い沖積泥ではなくて、しっかりと黄色い砂堤だったことに気づいて驚いたことを覚えている。明らかに、それは海水路ではなく、水があるときはちゃんと水、陸になるときはちゃんと陸というはつきりした代物で、現在の泥のぐちゃぐちゃではなかった。

私は周囲に鳥の巣がたくさんある離れ磯に立っているようだった。頭上には高い竿の先端に篝火用の籠があった。背後のわずかな砂浜には、小さな漕ぎ舟が引き上げられており、それは歴史書に載っていた小舟の図にそっくりのものだった。私は灯台のそばで、船が湿地帯を抜ける水路を上ってきたときに、いつでも火をともせるように待機していた。私たちは何日もその船を待っていて、見張りを続けていた。船は大航海の果てに到着する予定となっており、私はこの仕事にかなり嫌気がさしていた。そのとき、予期せぬほど近くに、海霧と夕闇のなかから船が現れた。それは長く低い船体をもつ船であり、中央部には甲板がなく、漕ぎ手たちが配置されている。巨大な紫色の帆を持つ一本帆柱があり、帆には色褪せた深紅の竜の刺繍が残っていた。

船が接近してきたので、私は叫び声を発した。もう篝火をともしても手遅れだった。船のほうでは一気に帆を降ろし、漕ぎ手たちは逆に漕いでなんとか砂堤を回避した。船がすぐそばを通過したとき、船尾楼甲板上部に据えられた彫刻椅子に座る女を見た。彼女は膝の上に大きな書物を持っていた。帆が上がるとともに彼女も上を向いたので、蒼白の顔に真っ赤な唇、潮にゆらめく海藻のような長い黒髪を持ち主であることがわかった。髪は宝石をちりばめた黄金の環でとめられていた。船が砂堤を回避するわずかなあ

いだ、私は彼女の顔を覗きこみ、彼女も私の顔を覗きこんだ。彼女の瞳は不思議な瞳、海の女神の瞳だった。私たちが待っていた船が連れてくる人間が、太陽の沈む果ての国から来た不思議な女司祭であることを思い出した。彼女は私たちの祭儀に必要な人間であった。海が堤防を破壊し、国全体を呑み込もうしている今、彼女はそれを鎮める魔法を知っていると言われていた。さては彼女こそ、私たちが待っていた海の女司祭なのだ。そして私は彼女を見つめていた。彼女も私を見つめていた。

それから彼女は船内に入り、霧と夕闇の中に消えていった。彼女が内陸部に数マイル入ったところにある河口中に突出した小高い丘に向かいつつあることはわかっていた。その頂には太陽を祭る石の露天神殿と絶やさぬ火があった。しかし地下には海洞窟があり、その岩に生け贄を生きたまま縛りつけ、満ちる潮に捧げるのであった。海の女司祭は海のために多数の生け贄を要求すると噂されていた。彼女の冷たい奇妙な瞳を思い出し、それは本当だろうと私は思った。

それから私は自分に気合を入れ、スコツティーの上半期決算を手伝わなければならない、もはや海の女司祭その他の白昼夢を見るひまなどなかった。

さて、私の祖父の代のころ、この近辺に多くの土地を所有していたモーガンという名前の老紳士がいた。やがて、その土地管理はわが社に委託されたのであった。それから彼は他界し、財産は老嬢の妹に引き継がれた。この老嬢の妹には付き添いがいた。姪という触れ込みの、フランス系と評される異国の風貌を持つ女性だった。モーガン一族もまた、その名の示すように、どこかでウェールズの血が混じっていたに違いなかった。ともあれ、彼らは何世代にもわたってこの地に住みついていたにもかかわらず、決してここに根を張ったようには思われなかった。さて、その老嬢は全財産を付き添いに譲るといふ遺言を残した。彼女には親戚もなく、一族の最後の一人だったから、これはそれほど不条理なものではなかった。ただ老嬢は付き添いの女性がモーガンを名乗ることを条件に財産を譲ると遺言し、付き添いはそれに従って、ル・フェイ・モーガンを名乗った。彼女の元来の名字はル・フェイだったからである。もちろん近所近辺はル・フェイ・モーガンという名前になじむことができず、彼女をミス・ル・フェイとして知っている世代が死に絶えてしまうと、次の世代は敬意をもって彼女をミス・モーガンと呼ぶようになった。

私の父は、初代ミス・モーガンの代理として、老モーガン大佐が大事にしていた農地をすべて抵当に入れ、ディックマウスの区画地を多数買いまくっていた。鉄道が近くまで伸びてきていたから、いずれは海岸線に達するものと決め、そうならば保養地ディックマウスの地価は高騰すると父は信じていたのである。しかし幸か不幸か、当時、鉄道建設ラッシュが停滞してしまい、路線はそのまま伸びなかった。ほどなく父は持つ価値のあるものをすべて売却し、価値のないものを抱えこんでしまった。父にとっては幸いなことに、老嬢は死去してしまった。さもなければ、父はいろいろと言われたことだろう。

予想された海岸線保養地ブームを当てこんで、父はディックマウスのあらゆる場所にあった生け垣テラス付きの見掛けだおしの別荘を競売に出した。わが社に残されたものは、駅があるべきはずの場所にある小店舗とひどくみすばらしい商店街だけだったし、建設予定の埠頭敷地もあったが、埠頭は建設されなかった。自動車時代の到来とともに、ディックマウスも少しは活気づくようになり、結局わが社はすべての物件を賃貸にしていた―相当の高値で。しかしそこから上がる家賃収入の多くが、契約が終わるころには家の補修その他に費やされてしまっていた。おやじは手抜き大工を嘆く預言者エレミヤ

みみたいなものだった。結果として、老嬢の意図がそのまま反映されていけば、ずっと裕福にすごせたはずの付き添いの女性は、ただ生きていくのがやつとという金銭しか得られず、みすぼらしい服をまとうことになっていた。

その後、わが社が出血価格で二十一年のリース契約を結んだ直後に、鉄道がディックマウスまで伸びてくれたものだ。わが社の七十五ポンドリースは、所有者が変われば四百から五百ポンドのプレミアがつくようになった。しかし、何事にも終わりが、リースにさえ終わりがあるのであり、そうなれば、今度はわが社が儲ける番である。このころの決算期、私は二代目ミス・モーガンにかなりいい額の小切手を送ることができた。ゆえに、彼女は、あたかも中年時代に苦しんだ爪に火を灯すような生活の穴埋めに、いささかなりと繁栄の晩年を過ごせるように思われた。

いまやリースの期限が切れつつあるので、不動産に関していろいろと手を打たなければならなかった。父が残した厄介なお荷物を修繕したところで無益のように思われた。事実、その何軒かは、修繕のために先回りしてリース契約にしてあった。残りはこちらにはねかえってきつつあった。なにがどうなるか、わかったものではなかった。私は彼女のために埠頭用敷地をいい値段で売却したし、過去五年間、危険建築物として閉鎖さ

れていたおぞましい商店街はそれは結構な値段となった。しかし私は、インサイド・インフォメーションによって鉄道が電化されるとの話聞き込んでいたから、これ以上敷地を売却するのは惜しいと考えた。そこで私はミス・モーガンと契約を結べないものかと思つた。彼女が敷地を提供し、再開発のための資金はこちらで調達し、あがる利益は応分に配当するという計画である。これは彼女にとつても大変によい取引となるだろうし、わが社は手続きの際にあつちで少し、こつちで少しと頂戴するのである。これぞ不動産屋の生きる道―最後の最後まで、かじる、かじる、かじる。

父はこれらのどうしようもないお荷物物件を可能なかぎり修繕リースにしていた。修繕リースというのは面白い契約で、他人が他人の財産のために金を費やすのである。リースが期限切れするころには、当然、金を費やせなくなる。父はまた安物煉瓦の上塗りに薄いセメントを用いることを信奉していた。兄弟よりも堅い契約の義兄弟的上等セメントを使うのならば、問題はないのだ。しかし、そうでなければ、実際おやじはそうしなかつたから、最初の霜で皺がより、最初の台風で剥げ落ちるのであった。こんな家を修繕リースで借りた哀れなやつは、どれくらい損な取引をしたことになる。

さて、家もリースも期限が切れつつあるので、なにか手を打たなければならなかった。スコツティーが顧客の一人の訴訟のためにロンドンに行つて証言をすることになつていたから、ついでにミス・ル・フェイ・モーガンに面会して敷地売却の代わりに再開発する件を打診するよう提案した。私の経験からいつて、女性は書面よりも口頭で伝えられた物事に、より信頼を置くのである。実際の話、不動産ということになれば、女性は計画よりも人物を重視する。私はスコツティーが誠実と慎重という点で大いに感銘を与えるに決まっていると確信していたから、彼を送り出したのであつた。

ほどなくスコツティーは、ノアの鳩のように戻つてきたが、口にオリーブの小枝をくわえていなかった。彼は事件に遭遇してしまつたのだ。どうやらわが社の帳簿に記載されている住所を訪ねてみると、それはスタジオに改築された馬屋の類いだつたらしい。スコツティーが鶏小屋の階段みたいなものの上つて、屋根裏風の部屋に行きつくと、その椅子がすべて脚を切り落とされておぼろげなのがわかつた。これでは人は事実上、床に座り込むに等しいことになる。また壁のぐるりには、マットレスにペルシャの敷物を掛けて床に直接置いただけという工夫の長椅子があつた。それがマットレスであるとスコツティーに確認できたのは、布を持ち上げて脚を見ようとしたからである。マットレスと

いうものは、スコツテイの頭の中では切り放し難くベッドと結びついていて、それで彼はショックを受けた。私は、相手の年令を考えれば、安全だろうと指摘してやったが、むだだった。また、布を持ち上げ脚を見るなどという儀に及んだスコツテイのほうにずつとショックを受けたと言つてやった。これがまたよくなかった。彼が言うには、部屋に入って脚を切られた椅子を見たときから、なにかおかしいと感じたし、婦人が入ってきたときに、自分の予感が的中したと思つたという。

「このご婦人とわが社は何年くらい取引していやす？」と彼は言つた。

「神のみぞ知る」と私は言つた。スコツテイは鼻を鳴らした。彼は主の名前をみだりに唱える私にどうしても慣れることができないのだ。

「この名前は私が入社したときから帳簿に載つてやしたよ」と彼が言つた。

「ぼくが生まれたときにはすでに帳簿にあつた」

「さて、このご婦人はおいくつだと思いやすか？」

「かなりのもんだろうな」と私。「ぼくが三十六才なんだ。一番古い記憶でも、彼女はうちの親にしつかりくつついていた」

「どっこい」とスコッティーが言った。「女が部屋に入ってきたんでやす。まあ、あれは部屋じゃなくて、納屋でんね。それで私は言ったんす。“ミス・ル・フェイ・モーガンにお会いしたい”と。すると女が“わたしがミス・ル・フェイ・モーガンです”と言いやがる。そこで私は女に言っちゃった。“失礼ながら、マダム、おたくは保存状態が非常によろしいようですね”。すると女は真っ赤になって怒り、“あなたとは書面で取引をしたほうがよいようですね”と言いやがる。で、私は“そうすればよかったですと思っ

てやす”と言いやした」

話を総合すると、わが社が長年ミス・ル・フェイ・モーガンとして結構な取引をしてきた婦人は、何者が知らないがミス・ル・フェイ・モーガンではなかったのだ。

さて、これではわが社の立場は実に妙なものになってしまう。本物のミス・ル・フェイ・モーガンを掘り出すこともうちの業務だろうか？ 私たちは家庭用聖書ほどの分厚さになっている文通ファイルを調べてみたが、署名は時代を通じてまったく変わってい

なかった。私は最古の署名と最新の署名と中間のいくつかを抜きだして、銀行の支配人のもとに行った。支配人も出納係もそれを見て、まったく問題なしと宣言した。私はスコツティーのもとに戻り、二人で頭を掻きむしった。そのとき、午後の郵便配達が出て、私たちはさらに頭を掻きむしることになった。ミス・ル・フェイ・モーガンからの手紙が届き、ディックマウスのグランド・ホテルに滞在しているとの通知である。そして、筆頭経営者が迎えに出て、不動産を見せて回るようにと書いてあった。それが「筆頭経営者の父君とのいつもの取引方法であったから」だという。

「ふざけた女だ」というのがスコツティーのコメントだった。「行きやすか？」

「そりゃ行くさ」と私は言った。

「金だけは取られないように」とスコツティーは言った。

第五章

私はデイックマウスまで車を飛ばし、グラント・ホテルに着くとミス・ル・フェイ・モーガンを呼び出した。ボーイが広大なシュロ園に案内してくれたので、人々を眺めて楽しんでいた。デイックマウスはなかなかお洒落な場所になりつつあり、人々は鑑賞に値した。どうして女性は美しくみせるために本質的に醜悪なものを着用するのか、私にはいつも不可思議な謎だった。

それから、一人の女性が入ってきた。彼女は長身でほっそりしていた。黒ヴェルヴェットのダイヤモンド留め金付き大黒帽子をかぶっていて、どでかいカラーとカフをあしらった黒い毛皮のコートを着ていた。なかなか似合っていると私には思えたが、彼女は周囲とはまったく異なっていた。彼女は長いストレートのドレープを着ているのだが、まわりの御婦人連はあちらこちらにごたごたとくつついているからであった。彼女の帽子は耳元まで深くかぶさっていて、カラーは立てられていたから、顔は見えなかった。しかしその物腰から非常に美しい女性であることは断言できた。

彼女は誰かを探すかのように周囲を見回し、それからボーイを呼ぶと、ボーイは私を指さした。

「さてさて」と私は独り言をつぶやいた。「おたくが椅子の脚を鋸で切ったレディーというわけか」

彼女がこつちにやってきたので、私は挨拶しようとして立ち上がった。カラーのために顔がよく見えなかったが、しかしスコッティーが慌てて帰ってきた理由はすぐに呑み込めた。素晴らしい瞳の持ち主で、その唇は真つ赤に塗られていた。もちろん、これだけでスコッティーには闇夜にどつきりなのだ。

後の人生で大きな役割を演じることになる人物との最初の出会いを思い起こすのは奇妙な気分のものである。まして、その予感があったかどうか、考えるだに不思議である。正直なところ、私はこの女性の顔を見ていないにもかかわらず、彼女が部屋にいる間、彼女以外の誰も見ていなかった。

彼女が手を差し出し、私たちは挨拶を交わした。私は彼女をじっと見た。彼女も私の目を見据えていた。私のひどい勘違いでなければ、彼女は難局に対処すべくやって来た

のだ。スコツティーは明らかに彼の状況判断において隠しごとなどしていなかった。彼女が現れた理由を推測するのは難しくはなかった。葬儀屋の娘と共に契るスコツティーは、極度に燃えにくい性質であるから、ミス・ル・フェイ・モーガンは賢明にもなにも仕掛けなかったのだ。しかし、父の血を受け継いでいるとすれば、私はものが違うのである。父は母にさんざん迷惑をかけたものだった。

「ミスター・マックスウェル？」と彼女が言った。

「ええ」と私が言った。

「あなたのお父上を存じあげておりました」

私にはこの女性に面と向かって嘘つき呼ばわりすることができなかった―また、したくもなかった。私はかつてサラ・ベルナルが『小鷲』の一場面をミュージック・ホールで演じたのを聞いたことがある。ベルナルは老女であったし、この女性も老女に違いない―もし彼女のいうことが本当であればの話であり、また私はこの時、半分以上彼女を信じてもいい気分になっていた―そして彼女はベルナルと同じ種類の黄金の喉

を持っていた。リア王は低い声の女性は素晴らしきと言っていたが、果たしてこの種の低い声を念頭に於いての発言であったのか、疑わしいと思う。

私は彼女を車に連れていった。彼女はもうしゃべらなかつた。明らかに沈黙すべき時を心得ている女性である。これは正しいやり方を知っていれば、実に力を発するものなのだ。彼女を車に乗せる時、その足首を観察した。

（若作りの婆さんじゃないな）と足首を見ながら私は独り言をつぶやいた。彼女は極上の黒いストッキングをはいていた。ストッキングは女性のステータスを如実に示すものなのである。

彼女は車内でも黙ったままだった。私はなにかしゃべらなければと感じた。場所について二三発言してみたが、彼女は「ええ」と言うだけで、それっきりだった。しかし私は横に座っているだけで、毎分ごとに彼女の存在を強く意識させられるようになった。

私の計画は一周視察だった。私は車を戦略的地点に駐め、家屋を訪問しはじめた。それから私はミス・ル・フェイ・モーガンの別の面を知った。家作に関することで、彼女が知らないことはあまりなかつた。さらに彼女は建築業者の専門用語―それにいろん

手口―を知っているのみならず、第一原則をしつかりと把握していたのだ。これは誰もが身につけられるものではない。例え経験を通してでも、である。しかしミス・モーガンとの手紙のやり取りで、私をいつも驚かせてきたものは、彼女の示す素晴らしい第一原則の把握であった。私は同伴者がカラーを立ててくれたことに感謝した。特に彼女の顔を見たかったわけではなかった。実のところ、まったく見たくなかったのだ。

私たちは遊歩道の端にある家屋を見に行くために道を下っていた。そのため、車に戻るためにかなり歩かなければならなかった。それは町から離れた土地付きの小住居であったが、かなり痛んだ代物で、背後の窓から河口付近の湿地帯が一望できる。私は外を見たが、悪魔のごときスコールが海面からこちらにやってくるのがわかった。

「あれが降り止むまで待ったほうがいいでしょう」と私は言った。

彼女も外を眺め、遠い丘が雨に掻き消える様を見ると、同意した。

私たちはガス燈式の書齋のような小部屋にいた。皿洗い室にコイン投入式のスロット・メーターがあることに気づいていたから、私はシリリング貨を入れ、マツチで火をともした。しかし、座るためのものがなにもなかった。ミス・モーガンはその問題を直ち

に解決した。彼女は床に座り、背を壁にして、長くほっそりした脚をまっすぐ延ばして足首を組んだ。私はふたたび極上のストッキングを拝んだ。

「わたしは床にすわるのが好きです」と彼女は言った。

「それで椅子の脚を切り落としたのですか？」と自分でもなにを言ってるのかわからないうちに聞いてしまった。それまで、私は彼女に対して、極力職業上の存在であろうと心がけていたのだが。

彼女は笑った―深みのある、黄金の笑いだったので、私は初めて聞いたにもかかわらず、変な気分になった。

「どうやら、わたしはあなたの共同経営者にとって少々重荷だったようです」

「ええ、そのようでした」と私はまた考えもなしに言ってしまった。

「あの人は物事を説明できる相手ではありません」

「すると、私は？」と言ったが、誘惑されたような気分我突然反発を覚えた。

彼女は私を値踏みしていた。「あなたはあの人よりもいいようです—しかし、それほどありません」と彼女が少し考えて付け加えたので、私たちは笑った。そのとき私はひらめいた。彼女は私の反発を感じ取って、素早く話題を変えたのだ。そうでないとしたら私を誘惑する気など毛頭なかったのだろう。私は後者の意見にくみしだした。本能的に、ミス・ル・フェイ・モーガンにはどこか素敵なところがあると感じた。いずれにせよ、彼女は明らかに一個の人物であり、人はそれだけで多くのことを許すことができるのだ。

暴風雨が窓を激しくたたき、私たちの気をそらした。これは有り難いことであり、私としてはなんとか身をとりつくろってプロ根性という安全地帯に這い戻りたかったのである。まあ、ひとかどの人物と一緒に床に脚を組んで座っていながら、それが可能とすれば、の話であるが。しかしミス・ル・フェイ・モーガンの相手はひとかどの人物ではなかった。彼女は難局に対処するためにきたのであり、いまから対処するのである。

「おはなししたいことがあります」と彼女は言った。

私は顔を引き締め、なるべく無表情を装い、身構えた。

「あなたの共同経営者ははばかりなことなく、わたしを泥棒呼ばわりしました」と彼女は言った。「そして、わたしが間違っていないければ、わたしを人殺し呼ばわりする気でもいたようです」

「確かに私どもとしましては、ミス・ル・フェイ・モーガンがどうなされたのかを知りたいところです」

「わたしがル・フェイ・モーガンです」

私は答えなかった。外は地獄の川よろしくの土砂降りだったから、両者ともつかつか歩いてドアをたたきつけるように閉める気分にはなれなかった。

「わたしのいうことが信じられませんか？」彼女が尋ねた。

「私は判断を下す立場にいないのです」と私は言った。「そのカラーではお顔すらよく拝見できません」

彼女は手を上げて、コートの首のあたりを緩めた。するとコートは後ろに落ちて、顔と胸元が現れた。

彼女は黒髪の女性で、瞳は茶色、眉は黒く、やや鷹鼻だった。肌はとても薄いオリブ色だったが、実のところ、オリブよりもずっと滑らかだった。目はマスカラで黒く染められてはいなかった―その必要がないのだ―唇は郵便ポストの赤色だった。彼女の腕はほっそりと長く、爪はやすりで研いだように尖り、血に浸したように赤かった。黒い毛皮と白い顔、それに飛び散る口と爪の緋色がまとまって、彼女はまったく驚くべき姿であり、ドイツクフオードの如きせい田舎の独身男をめるめるにするに十分すぎるほどのものだった。彼女がコートの前を開いたとき、一陣の甘くはない芳香が漂い、私のもとにまで達した。それは実に奇妙な香りであり、多分に麝香が混じっているように思われた。私は猫背になって不動産業に集中しようとした。

「わたしが何才だと思えますか？」彼女が尋ねた。

私は彼女を見た。肌は完璧になめらかで、皺ひとつなく、まるでアイヴオリー・ホワイトのヴェルヴェットのようだった。これほど素敵な肌を見たことがなかった。姉の肌と比較れば、チーズとチョコレート、月とスッポンである。それでも、目は娘の目ではなかった。目の周囲にはまったくたるみがなく、皮膚は若い女性のようにぴんと張りがあるが、目そのものは経験を積んだ周到さを湛えた独特の面持ちであった。彼女はその姿態

にもかかわらず、決して若い娘ではない。それは百歩譲って認めよう。しかし、ミス・ル・フェイ・モーガンは―スコツティ―の恐ろしい言い回ししか思いつかなかつた―かくも保存状態が良いのだろうか？

彼女は私の考えを読み取つたようだった。

「では、あなたは若さを保つ美容術の力を信じない、と？」

「あなたほどの若さは保てないと思いますが」

「たとえ腺療法を用いたとしても？」

「正直言つて、無理でしょう」

「でも、これすべてが精神の力の知識によつてささえられているとすれば、どうでしょう？」

私はためらつた。すると突然、以前に見た顔、彼女に非常によく似た顔が記憶に蘇つた―あの幻視に見た海の女司祭、分厚い書物を膝に乗せ、船尾楼の大きな彫刻椅子に座つていた女の顔だった。

それが私にもたらした効果は異常すぎるものだった。一瞬、私は海霧と夕闇の河口に戻っていた。時間も場所もわからなくなり、私は時のない世界へと滑りこんでいた。きっと何を考えていたのか、顔に出ていたのだろうと思う。ミス・ル・フェイ・モーガンの黒い瞳が突然ランプのように輝くのが見えたからだ。

私は正常に戻り、彼女を見た。それは妙な状況だった。豪華な毛皮に包まれた彼女がいて、みずぼらしいレインコート姿の私がいる。私はライダー・ハガードの小説『洞窟の女王』の素晴らしい一場面、洞窟の女王がカーテンの間から腕を差し出す様子を思った。あたかも前に座る女性がカーテンに手をかけ、その気になれば、それを引いてなにか不思議なものを開示してくれるかのようだった。

それから彼女が口を開いた。「わたしはどうてい若い女性とはいえない存在です」と彼女は言った。「わたしはミス・モーガンの付き添いになった時ですら、若くはありませんでした。もっと近くからご覧になれば、わかるでしょう。わたしは肌に気を使っています。体を大事にするようにしてもいます。それだけです」

彼女の物腰は確かに若い女性のそれではなかったが、しかしわが社は彼女の名前を半世紀前から帳簿に載せているのだ。せいぜい少く見積もつても、彼女は七十の坂を越えていなくてはならない。この話を了承するのは骨である。

「まあ、ミス・モーガン」と私は言った。「あなたのお年がお幾つなのか、わが社の業務に関係があるとは思えないのです。当方といたしましては、いつもの通りにいつもの住所へ小切手を送るだけで、いつも通りに領収書を戴ければ、それで満足です。私に見解をまとめる役がとまるとも思えません。あなたは大変お若く見える。それが日ごろのお手入れの賜物だとおっしゃるのなら、私は反駁する立場ではないのです」

「あなたは骨董品の権威でらっしゃると思っておりますのに」とミス・ル・フェイ・モーガンがいたずらっぽい微笑を浮かべながら言ったので、私は思わず笑ってしまった。しかし、彼女はカーテンをふたたび降ろしてしまったので、両者とも楽に呼吸ができるようになったと思った。

彼女は立ち上がり、窓に歩いていった。

「この土砂降りほどのくらい続くとお思いですか？」

「こんな状態は長くないでしょう」と私は言った。「すこし軽くなったら、抜け出して車を取ってきましょう」

彼女はうつろな様子で頷き、私に背を向けて立ったまま窓の外を眺め、物思いに耽っていた。なにを考えているのだろう、と私は思った。もし彼女が本当にミス・ル・フェイ・モーガン本人だとすれば、それはもう考えることはたくさんあるに違いない。おそらく彼女は、クリミヤ戦争は無理としても、普仏戦争は覚えているだろう。

私は、この件に口を閉ざしたままだった場合、どの程度の厄介に巻き込まれることになるのか、ざっと見積もろうとしていた。もちろん、彼女は初代ミス・モーガンの古色蒼然たる付き添いではない。私は女慣れしていないかもしれないが、それほど慣れてないわけでもないのだ。私は本物のミス・ル・フェイ・モーガンはどうなったのだろうかと考えた。一度、探偵小説で、裕福な老婦人が大陸で亡くなってしまい、付き添いが彼女に化ける話を読んだことがある。二代目ミス・モーガンが現れないからといって、すぐに殺人事件を想定する理由はない。三代目ミス・モーガンは二代目の最期をかいがいしく看取ってやり、それから完璧に先代を丁重に隠蔽してしまったのかもしれない。二代目ミス・モーガンが初代の例にならない、甥も姪もいなかったもので、忠実な付き添いにする

べてを遺したというのはあり得ない話ではない―それはそれで、まっとうなことだと思う。少なくとも、組織的慈善よりもはるかにましである。それから、どこか遺言状に差し支えがあつて、証人がいなかつたかなんかで、忠実な付き添いは約束の財産が親戚の親戚のまた親戚に相続されることを知つたとか。その親戚がすでに十分裕福だったりしたために、彼女は遺言状を譲渡証書ということにしてしまい、我が社に葬儀通知を出すことを忘れ、領収書の署名をなぞり書きしていた云々。

この推理は子細に検討すればただの見掛けだおしだと思う。しかし、確実なことはひとつ、私は私立探偵になる気など毛頭なかつたし、純粹な利他的動機で面倒に巻き込まれる気もなかつた。私はミス・モーガンが好きになつたなどという気もまつたくない。そうなるにはあまりに彼女を信用していなかつた。ただ、彼女が実に刺激的だと思つたのである。私がロンドンに行こうとしたのは、この種のことのためだつた。私は物書きの女性はきつとこんなタイプだろうと思つていた。しかし今では、もしロンドンに行つていたら、さぞかし幻滅しただろうと思つている。私が会つたことがある唯一の女流作家は狂乱シーンのオフィーリアのような代物で、どこまでが髪の毛で、どこからが藁くずなのか、判明しない女性だつた。

ミス・ル・フェイ・モーガンは私の存在を忘れてしまったようだったので、私としてはスコッティーとヘドリー（わが社の顧問弁護士）とよく話し合うまで、これ以上深入りしないですむように本心から願っていた。もしなにか本当にうさん臭いことが生じた後で、わが社がアクセサリーまがいな事件とともに語られるなど、真つ平ごめんだった。考えてみれば、嵐の日にミス・ル・フェイ・モーガンと二人きりで空き家に閉じこもることくらい、深入りの原因となるものもなさそうなので、私は彼女の注意を引かないようにこつそりと部屋を横切って、コートの際を立ててから扉をすり抜けた。雨は風を受けて横殴りに走っていて、私の首筋にどんどん流れこんでくるが、どうしようもないので、全力疾走で車まで駆けた。それからミス・モーガンを拾って、ホテルまで送りとどけた。彼女は雨の中を出ていった私を実に母親的に叱った。私は羊の如く気弱な気分になつていたが、その半分ほど外見に出ていたとしたら、きっと捕獲された羊のように見えたことだろう。彼女は私を引き留め、お茶を飲ませようとしたが、私は帰宅して着替えなければならぬと言つて断つた。それはそつけない真実でもあった。しかし、たとえそういう事情がなくとも、断つたに違いない。午後一回分としては、私はもう十二分にミス・ル・フェイ・モーガンを持て余していたのであるから。

第六章

もちろん、起こるべきものが起こった。私は高熱を発し、喘息発作を併発して倒れてしまった。

ミス・ル・フェイ・モーガンは次の約束のためにオフィスに電話をかけてきた。まだ私との用件は終わっていないからだ。スコッティーは私が病気であることを伝え、自分が行くと申し出た。彼女はそれをはねつけ、私の容体を質したが、彼女を快く思っていないスコッティーが、回答を拒否した。最終的には片方が片方を吊しあげたらしいが、どちらがどちらか、私にはわからなかった。

スコッティーはヘドリーに面談しに行き、あらゆる悪い話をぶつけてみた。しかしヘドリーはこの件は口外無用と言い切った。何も証明できないのだから、何もしないほうがいいというのである。死体が発見されないかぎり、告発はできないし、いまのところ死体は一つもなかった。たとえ死体があるにせよ、ミス・ル・フェイ・モーガンがその中に入って歩き回っているのである。おそらくスコッティーはミス・モーガンが私に及

ぼす道徳的危険に關してもヘドリーの意見を求めたのだろうか、ヘドリーは彼女が私にとって良い刺激となるだろうと考えた。結局、スコツティーは当てが外れて、不機嫌なまま帰ってきた。それから私に説教をたくらんだが、私はいびきをかいて、無意識を装った。喘息をしよういこむ羽目になったなら、少しはそれを利用したほうがいい。

ともかく、かなり一方的な熱のこもった話から察するところ―私はあやふやな正義感からミス・ル・フェイ・モーガンを地に引きずり降ろす必要がないとのことで、どのみち私にはそんなことにはこれっぽっちも熱意が湧かないのであった。

私に会ったからといって、少しもいらいらが収まらなかったスコツティーは、そのままオフィスへ帰っていった。おそらく若いのに八つ当たりするのだろう。ともかく、その若いのは予想もしない方法で彼に逆襲することになり、その影響ははるか私にまで及ぶのであった。

さて、その若い小僧はオフィスで電話回線盤操作の仕事についていた。ここでややこしいのは、回線盤操作ができるくらいに知恵のある小僧を雇うと、そいつは電話の内容に興味を抱くくらいの知恵はあるのだ。特にこの小僧は明らかにスコツティーとミス・

ル・フェイ・モーガンが丁丁発止と電話でやり合う様を聞いていたらしく、独自の形勢判断に達していたようだ。ともかく、翌日の午後、素敵な婦人がオフィスに現れて、私の容体をたずねたとき、こいつは奥の部屋にいるスコッティに知らせることなく、自分の責任で行動し、彼女にあることないことしやべりまくったのであった。半クラウン銀貨が手から手へ動いたとしても、私は驚かない。ともかく小僧はその晩、教会合唱隊の練習をさぼって映画を見にいつてしまった。私がこの件を知ったのは、牧師が姉に言い、姉が私に言いつけて、一言注意して欲しいと戻込んだからである。それは私には関係ないと断った。あの小僧をいじめるにはあまりにせこい方法である。また、姉も牧師も、いわんやスコッティも、ミス・ル・フェイ・モーガンの話は露ほども聞かずじま이었다。あの小僧はそれなりに男である。

さて、半クラウン銀貨か騎士道精神か知らないが――聞きたくもないし、聞いたところで真実がわかるとも思えない――ともかく小僧が素敵なご婦人を地階まで案内し、そこから裏庭に出て、灌木を通り抜けて私の住居まで連れてきた。小僧は台所の窓から顔を出してサリーを呼んだ。私宛の郵便物を持ってくる時にはいつもこうするのである。サリーが扉の鍵を開けると、彼は窓から降りて、中に入った。こいつやスコッティのよう

に、よく知っている人間にはこうさせるのである。そこで小僧は意気揚々と進み、二階に上がり、私がちゃんとした服装をしてるかどうか聞きもせず、ミス・ル・フェイ・モーガンを部屋に通したのであった。

言うまでもなく、私はちゃんとした服装ではなかった。パジャマとガウンといういでたちだったが、神に感謝を、髭だけは剃っていた。

「わたしのせいでご病気になられたようなものですから、お伺いして、お詫びしたほうがよいように思いました」とミス・ル・フェイ・モーガンは言った。

私は完全に虚をつかれ、ただ彼女を眺めるだけだった。ちやうど注射を一本打たれたばかりだった。こういう状態では頭はよく働かないが、口がすべすることはままある。そのことをわが身に思い知らされることになった。

私はソファから立ち上がって挨拶をした。しかし彼女は私を押し戻し、実に母親的なやさしさで布団をかけてくれた。それから私のそばの、お盆代わりに使っていたソファに腰をおろした

「どうしてベッドに寝てらっしゃらないのです？」と彼女が聞いた。

「嫌いなんですよ」と私は言った。「なるべくなら起きて、うろちよろしいのです」

さて、理論的にいえば、私はまったく型破りな人間であるが、それまで型破りな女性とつきあったことはなかったから、このときはすっかり彼女とうまが合わず、牧師のように慎ましやかにしていた。また頭が薬物でくらくらしていたので、この状況下で自分を押さえなかつたら、何を言い出すか、何をするか、わかったものではなかった。こういった具合で、奔放だとわかつている女性を前に、私はまるで初めてカクテル・パーティーに出た禁酒主義者のようだった。

ミス・ル・フェイ・モーガンは微笑みだした。「顧客と友人になるのは職業上の礼儀に反することなのですか？」

「そんなことはありません」と私は言った。「職業上の礼儀に反しはしませんが、それをやる奴は馬鹿だと思えますね」

彼女は不意をつかれたようだった。私はすぐさま本当に悪かったと思い、また後悔した。二度とないチャンスを自らだいなしにしてしまったのだ。私はこういったことを求めてロンドンに行こうとしていたのに、自分の殻を破れずに人見知りしてしまった。きっと薬物のせいだったのだろう。なんであれ、まずいことは薬物の影響にしようことである。しらふのときなら、もう少しましな行動がとれたはずだと思い、自分を慰めている。

ミス・モーガンは柳眉を逆立てたが、私が普通の状態ではないことがわかったのだと思う。ともあれ、私の無作法を無視して、会話を転じた。

「素敵なお部屋ですこと」と彼女は言った。

私は救われたように黙って頷いた。

「家屋に関して、すべてをご存じの方々が」と彼女。「どんな家をご自分用にお選びになるのか、前から知りたかったのです」

スコツティーの住居やうちの本社家屋を見たなら、さぞかし幻滅するだろう。

彼女が本棚を眺めはじめたので、こちらは身の縮む思いだった。他人に本棚を覗かれるのは大嫌いだった。あまりにも私という人間があからさまになってしまふからだ。特にミス・モーガンには見られたくなかった。彼女が文化と教養の権化であることは確かだったし、私がそうではないことも確かだったからだ。私の蔵書は雑多の一語に尽きた。私の身が縮んだのを察知したのだろう―彼女は極めて洞察力に富む人物だった―本棚に背を向け、窓辺によって、外を眺めだした。風景は私の責任の及ばぬところであるから、これは気にならなかった。

それから堰の水音が聞こえた。

「あの川はこのおうちの下を流れているのですか？」と彼女が聞いた。

そうですと私は答えた。

「ディックマウスから伸びている川？」

その通りと答えた。「ナロー・ディック川ですよ」と私は言った。「ブロード・ディック川がどこにあるのか、全然発見できずじまいでした。地図には載っていないのです」

「ブロード・ディック川などというものはありません」と彼女が言った。「この川の本来の名前はナラデックだったのです。“ナロー・ディック”というのはただの訛音です」

「どうしてそれが？」と私。

「わたしはそういつた物事に関心があります。だから自分で調べあげました」と彼女。

「どこでお知りになったんですか？」と私は言った。私自身、郷土史には非常に興味があり、たいがいこのことは知っているつもりだったが、こんな話は初めてだったのだ。

彼女は不可思議な微笑を浮かべた。「もしお話ししたとしても、あなたは信用なさないでしょうね。わたしがヴィヴィアン・ル・フェイ・モーガンという名前だとお話ししても、信用なさないみたいに」

その名前にはなにか驚くほど聞き慣れた響きがあったため、しばらく注意力が散漫になってしまった。どこで聞いたのか、思い出せなかったし、その名前にどういう意味が

あるのかもわからなかった。ただ、思い出すことさえできれば、大変に意味のある名前であるとは確信していた。

ミス・ル・フェイ・モーガンは再び微笑した。

「お気づきではないと思いますが」と彼女が言った、「ディックマウスで名前をちやんとお教えしてますのに、あなたは今日、わたしのことをモーガン・ル・フェイと呼んでらっしゃる」

そのとき私は思い出した。モーガン・ル・フェイはアーサー王の妹で、魔法使いマーリンがすべての秘儀を伝えた魔女の名前なのだ。

彼女はまた微笑した。「わたしは一部分ブリトンの、一部分ウエルズの血を引いています」と彼女は言った。「父はわたしをヴィヴィアン・ル・フェイにちなんで、ヴィヴィアンと名付けました。ブロセライアンドの森で老齡のマーリンを騙したあの若い邪悪な魔女のことです。おそらく父は正しかったのでしようね。わたしにはわかりませんが。しかしミス・モーガンは決してわたしをその名前では呼びませんでした。嫌いだったのです。そしてわたしに財産を分けくださる際に、モーガンの名前を引き継ぐこと

を条件となさったのです。あなたの呼び方を彼女が聞いたら、どういう顔をするか、わかったものではありません！」

彼女の話を横になって聞いていると、神経をさかなでされる思いだった。この話を黙って受け入れるわけにはいかなかったが、面と向かって不信の言葉を吐くこともできなかった。そこで私は論評を差し控えて、話題を変えた。

「ナロー・ディスクがかってナラデスクだったというお説の論拠をまだ伺ってませんが」

「考古学がお好きなの？」

「この地方にかかわるものに関していえば、ええ、大変に好きです」

「それなら、潮の干満があるベル・ノールの地下洞窟の所在をお教えいただけそうですね」

一瞬、私は答えそうになった。その洞窟の位置を正確に知っていたからだ。私の心の目には、洞窟の様子がはっきりと映し出されていた。それは旧河川敷に下っていく丘の

斜面の窪地にあり、もはや降雨時に地表をちよろちよろ水が流れるだけで、すっかり干上がっていた。それから唐突に思い出した。私があのだ窟について知っていることは、すべてあの海の女司祭の到来に関する奇妙な夢の中で見たことであり、そして眼前の女性には不思議なまでに海の女司祭に似ていた。

私はひじについて上体を起こし、彼女を見つめた。言葉もなかった。まったく驚愕していたのだ。

彼女もとても奇妙な面持ちで私を見つめていた。彼女もまた驚いていたのだと思う。こんな反応は予期していなかったのだ。

「このあたりにそういった窟があるのですか、それとも——そういった窟の伝承とか？」

私は首を横に振った。「私の知るかぎりでは」

「それなら——海洞窟のことを申し上げたとき、なぜそんなに激しく反応なされたのでしょうか。なにをご存じなのですか？」

こちらのほう分が悪かった。出来ることといえば、寝返りを打って、窓の外を眺めることだけだった。彼女は沈黙したまま、待っていた。どのみち私が返事をせざるを得ないことがわかっていたからだ。

私はどうなってもいいという気分になっていた。薬物はいつもそういう効果を及ぼすのだ。寝返りを打って、彼女に顔を向けた。

「まあ、お聞きになりたいのなら」と私は言った。「私は最近とても奇妙な経験をしました。モルヒネを注射されたあとのことですよ。先史時代のこの近辺の夢を見ましてね。今はもうないけど、そのときには洞窟があったんです。海が引いてしまい、川が流れを変えてしまったから、洞窟も干上がってしまったわけ。私はその洞窟の位置を大体つかんでる。いまは見えないけれども、おそらくあそこにあるでしょう。岩だらけの窪地にあれの痕跡を発見したときはなんとも奇妙な気分になったけど、まあ、潜在意識的記憶とかで説明はつく。しかし、あなたがそれを口にしたから、もっと奇妙な気分になされた。私はまだ誰にもこの件をしゃべってはいないからです。あなたもあれを夢に見たのですか？ それとも、あれは歴史的に有名なのですか？」

「わたしはあれを夢に見たものではありません。水晶球の中に見たのです」

「やれやれ」と私は言った。「こりや、どうなるんだ？」

「わたしが知りたいのもそのことです」と彼女が言った。

「いいですか」と私。「私はたつぷり薬を打たれているんです。もう口を閉じたほうがいいでしょう。馬鹿なことばかり口走っているようだから」

「とんでもない」と彼女。「あなたは完璧に正しいことをおっしゃってる。ただ、聴衆を選んだほうが賢明とは思いますが」

私は笑った。薬物のために半分らりっていたのだと思う。

「私の見た夢の話聞けば、まじめには受け取らなくなりますよ」と私。「私はあなたを夢に見たんです。それでも信じるというのなら、私もお返しに、あなたがミス・ル・フェイ・モーガンか、モーガン・ル・フェイであると信じてもいい」

彼女は私を眺めた。そして彼女の瞳が突然、輝いた。初めて会った日、カラーを倒して私を驚かせたときに見せた輝きだった。

「あなたが本当のことをおっしゃっているのはわかっています」と彼女はゆっくりと言った。「なぜなら、あなたに素顔を見せたとき、あなたがわたしに見覚えがあつたということがわかっていたからです」

「ええ、しっかり見覚えがありましたよ」と私は言い、笑った。

「そんなふうに笑わないでください」と彼女は言った。「いらいらします」

「こりや、失礼」と私は言った。「狂った世の中ですよ」

「いいえ」と彼女、「狂っているわけではありません。薄弱なのです。そしてあなたとわたしは他の人々より、少しだけ正気を保っていられるし、お互い、巡り会うほど幸運です。そろそろ、手持ちの札をテーブルに広げませんか？ 知ってることを話してくれたら、わたしも知ってることを話しましょう」

こういう条件が不動産屋に、特にスコツティーに仕込まれた業者に提示されることはまずない。しかし、私は完全にくたばっていたし、たつぷり薬も効いていた。そして病気にもたいがい飽きていたから、もう人生がどうなるうと知ったことではなかった。矢

でも鉄砲でも持ってこいというところだった。口実が必要であるとすれば、これが私の口実である。

そこで私は話を始めた。話をまとめるのは非常に困難だったし、もちろん話しはじめの場所を間違えてもいた。しかし、質問と忍耐心によって、彼女は断片的な話をまとめあげたのであった。

「あなたは月を通して海の女司祭を得たのだわ」と彼女は言った。「月は海を支配するのだから。二つの別個の体験ではなく、一つの体験の連続的部分です。そして現在――あなたはわたしを得た。わたしはその体験を完成させる第三の部分なのよ、わかるでしょう」

私はやさしく自分の腕の柔らかい部分を押した。そこは私の医者へのベアードモアが針を突き立てた箇所だった。「私はたくさん薬を打たれてましてね」と私。「あなたは幻覚でしょう」

彼女は笑った。「では、わたしのほうの話聞かせてあげましょう」と彼女。「それからご自分で判断してください」

第七章

ミス・ル・フェイ・モーガンの語った物語は確かに驚くべきものだった。要約すると、だいたい次のようなところである。

彼女の先祖はナント勅令廃止のころに英国に落ち着いたブルターニュ出身のユグノー教徒の一家だった。先祖たちは他のフランス難民と婚姻関係を結び、後には英国人も血縁となり、すべては極めて平穩に進んでいたが、一族の末裔である彼女の父がウェールズ女性と結婚した。かくして二つのケルトの血脈、ブリトン系とウェールズ系が互いを強めあい、彼女を世に送り出したのであった。

「わたしは名前ばかりじゃなくて、生れつき、妖精じみています、」と彼女は言っている。

それから父親が死去し、自分の面倒を見なければならなくなったので、彼女は田舎回りのパントマイム一座のコーラスに加わって舞台上上がり、そこから人生を切り開きはじめた。

「わたしの大当たりの役は、“ジャックと豆の木”の悪魔の女王でした」と彼女は言った。

私は納得した。彼女は素晴らしい女メフィストフェレスになれたに違いない。

ともあれ、生活の基盤はあやふやだったから、共通の友人からミス・モーガンの付き添いという職を紹介されたとき、彼女はそれに飛び付いたのであった。

当時はテーブル・ターニングに代表される心霊術が大変に流行していた。老ミス・モーガンはとても熱心な心霊術信奉者であり、同好の隣人を招いてのテーブル・ターニング集會に催す際に、新しい付き添いに手伝わせた。すると、それまでほんのわずか脚を動かすだけだったテーブルが、突然後足で立ち上がり、ジグを踊ったのであった。

老ミス・モーガンは骨の髄まで戦慄したが、それはミス・ル・フェイも同じことであり、二人とテーブルは大騒ぎをしたのであった。テーブルは扱いにくいことが判明したので、彼女たちはプランシエットを手にした。そして最初にベル・ノールの海洞窟のことを語ったのは、このプランシエットであった。

「それを発見すれば」とプランシエットは綴った。「すべての謎を解く鍵を発見するであろう」

当然ながら、二代目ミス・モーガンは、私があの方法で海洞窟の知識を得たことを知って、大きく心を揺り動かされたのである。私は彼女に知るかぎりの考古学的見解を教えた。ベル・ノールは元来はバル、あるいはバアル・ノール、太陽神の丘の意であり、人々は有史時代から連綿と、五月一日前夜、つまりベルテインの夜にベルファイアを焚いてきたのである。最近、心ある某婦人がこのすてきな慣習を復活させていた。彼女は牧師に声をかけ、一連の行事を祝福させることまでやってのけた。牧師は自分がどういうものの手伝いをしているか、ほとんど知らないだろう！

プランシエットは、洞窟が川に面しており満潮時に水で溢れることを正確に描写していた。しかし昨日一日をつぶして洞窟を捜していたミス・ル・フェイ・モーガンは、十三世紀に川筋が変わっていて、いまやベル・ノールの裏側に回り込んでいることを知らなかった。ついでながら、当時繁栄を極めていた某修道院が水没の憂き目を見ている。伝承によれば、修道士たちはお祭り好きの連中であり、ある晩どんちゃんやっているところへ川が流れを変え、彼らの大多数を呑み込んだのであった。この話を聞いたとき、ミス・モーガンの瞳が再びランプのように輝いた。プランシエットを操作していた霊の一人が、自分は溺死した修道士であると主張していたからである。私は気が大きくなつて、小潮で一番潮が引くときに来れば、ボートでその場を見せてあげられると言つた。すると彼女はその約束の期日を予約した。それで私はどうやってスコツティヤや家族に言い訳して抜け出そうか、頭をひねることになった。

明らかに彼女たちはプランシエットを通じて様々なものをどっさり得ていた。その中にはナラデック川の情報も含まれていた。これは自らを《月の司祭》と名乗る指導霊が語ったところ、この地域を根城にしていたアトランティスからの植民者が、失われた祖

国アトランティスにあったナラデック川を偲んでつけた名前だという。彼はまた、古代の太陽神賛歌の言葉を書き綴った。その末節はこうである。

「我が魂をナラデックの川に流したまえ、

生命と光と愛をもたらしたまえ」

彼女はおとがいを上げ、深い羽音のように響く低い声で、喉を鳴らすみたいに口ずさみつつ、それを私に歌って聞かせた―それで、私はもうおしまいだった！ もう彼女は“信じようと信じまいと”などという必要がなかった。私の中で何かが湧き上がっていたし、不完全で証明もできないが、彼女が真実を語っているという奇妙な確信が心中に生じていたからだ。

これが九〇年代に初代ミス・モーガンの付き添いをつとめていたヴィヴィアン・ル・フェイによって語られた物語であった。

彼女たちは頑張ってプランシエツトを続け、様々な《内界》の友人を作った。後日、ミス・ル・フェイは当時の記録帳を見せてくれたが、これはもつとも納得のいくものであった。なぜなら、一体どこのどいつが正気でこれほど手間のかかった詐欺をやらかすというのだ？ しかも何の目的で？ この記録帳は初代ミス・モーガンが亡くなって、ミス・ル・フェイが財産を手にした後もずっと続けられていた。後日、ミス・ル・フェイはプランシエツトを止めて水晶球に変えた。そのため、以降の彼女の日記からは証拠性が消えているが、その内容にある予言的要素はもつとも注目し値するものだと言わざるを得ない。

さて、プランシエツトで始まった最初の霊界通信の通信者は溺死した修道士であり、いろいろと言いつつ訳をしたがっていた。彼は明らかに自分たちが修道院で行っていたことが原因で海に呑まれた件を正当化しようとしていた。自分たちが墮落坊主だったから海が怒ったというのは歪曲された伝説であり、大破局を招いたのは独創的な線で行われた実験が失敗したからであって、ありがちな破戒三昧ではないと主張していた。

彼が語るには（これは私も支持する）、私たちの住む地域は古代文明の中心地であった。そして、今日なら霊能者ともいえるべき某修道士が、多くの奇怪な夢を見て、それ

を土台にキリスト教徒にあるまじき過去への旅をなし、酒に夢中になるようにそれらすべてに魅惑され、取り憑かれてしまった。老修道院長が一番ひどかった―彼はかなりはまっていた。次に現れた若い修道士はたいした人物ではなく、有象無象の一人であり、常にこれらの成り行きにまったくおびえきっていた。実際、彼は出来るかぎり、他の修道士の話をしたくはなく、ただ安息を得られるように自分の魂のためのミサをしてほしいの一点張りだった。そこで初代ミス・モーガンは例外的に好意的な土地の司祭を見つけて、一同のためのミサを行うように手配した。もちろんミサは相手あつてのことである。しかしミス・ル・フェイはすべてがそういうわけではないでしょうと言った。多くを語らずとも、司祭はだいたいを理解したようだった。

彼女たちは若い修道士がいなくなっても残念ではなかった。彼は自分の罪悪のことがかり口走り、彼女たちが本当に興味を持っている事柄には触れようとしなかった。それは結局、彼の罪悪のことなのだが、彼の念頭にあるような罪悪ではなかったのである。そこで彼女たちはこの線を一端切り、別の誰かと交信を試みることにした。そして今度は思わず引き込まれそうになるほどの大魚をひっかけたのであつた。ともかく彼女たちは、霊媒修道士を通して老修道院長と交信していたという霊に遭遇したのである。

この個人は自ら《月の司祭》と名乗っていて、それはもう、大物であった。私は後日彼に会ったので、わかっている。一見するところ、彼は罪悪など気にしておらず、昔日の祭儀を復活させ、ふたたび機能させることに躍起になっていた。

そこで二人の良き女たちは彼に手を貸すことを引き受けた。水没した修道院という先例が眼前にありながら、どうしてそうなったのか神のみぞ知る。しかし、こういった事は、前も言ったように、酒の誘惑に近い異常な魅力があるのだ。かくいう私とて、同様に恐ろしい先例を前にして、まったく同じことをやらかしていたのである。

さて、ミス・モーガンは大変な高齢であり、ミス・ル・フェイも、彼女自身の言葉によれば、およそ小娘ではなかった。そして老婦人が最後の病に罹り、昼夜わかたず看病される身になったとき、もはやオカルト関係に首を突っ込むひまもなくなった。しかしミス・モーガンはミス・ル・フェイに対して、自由の身になり次第、作業を続ける旨を約束させた。そしてそれを条件に全財産を相続させたのだが、無論、この件は遺言状には明記されていない。それから、私の不運なおやじのおかげで、残すほどの金銭もなく、全計画は途絶してしまった。

そこで二代目ミス・モーガンはわずかな身の回りの物だけを持って大陸に移り住んだ。英国よりも生活費が安くあがるため、身寄りと金のない多数の老婦人がこうしていたのである。しかし彼女はプランシエツトは携えており、ほどなく水晶球も購入した。そして《月の司祭》もまた彼女についていったようだった。いずれにせよ、作業は、実践はともかく理論的には前進していった。

それから奇妙なことが起こり始めた。ミス・ル・フェイ（もうミス・ル・フェイ・モーガンと呼ぶべきだろう）はすでに自分を枯れた老女と思ひこんでいて、これらラテンの国々を一人旅する習慣を有していた。妙齡の女性には不可能な作業である。しかし、ほどなく彼女はこれがうまくいかなくなったことに気づいた。土地の若い男たちがひどくつきまとうようになったのだ。特にプランシエツトと《月の司祭》相手に一夜を過ごした後はひどかった。そして水晶球を使うようになってからは、事態は信じられないほど悪化し、嬉しいことに彼女は若くて美しい娘のように立ち振る舞いに注意を払わなければならなくなった。

彼女がこの事実を認識するには随分と時間がかかった。それは彼女が老ミス・モーガンの衣装戸棚の服を出しては着ていたからだが、ある日、あるデザイナーが競馬会で

のファッション・モデルの仕事を彼女に持ち掛けてきた。このときは卒倒するほど驚いた。彼女はその仕事を受け、昔日の華やかさを楽しんだ後、ふたたび舞台に復帰した。彼女はアングロ・サクソン諸国では決して人気が出なかったそうだが、ここは甘いガキの小娘が受ける国である。しかし、“性的魅力”をそのものとして鑑賞するラテン諸国では、彼女は《五月姫》の如き人気者となった。彼女は当時発展しつつあったアルゼンチンに渡り、また絶頂期のメキシコに渡ったときには、偉大なるディアズ大統領とも知り合いになった。ともあれ、なにがどうなったのか詳しくは聞かなかったが、彼女はかなりの金を作り、不動産からの上がりも合わせれば、もう働く必要がなくなったのであった。そこで彼女はロンドンに戻り、スコッティーが行ったあの部屋兼干し草置き場に落ち着いて、本気で作業に取り掛かったのである。透視力で知られるハイランド・ゲール系の血を引くスコッティーが、あの干し草置き場に怖じけづいたのは無理もなかった。彼女が水晶球の離れ業を行っていたのがあの場所だったからである。

これが現在までの公式発表であった。それから金銭が大量に入り始めたので、彼女は元来の計画を実行に移す機が熟したとわかった。しかし、彼女はまた、スコッティーがカルヴァンの良心という恐ろしい発作に襲われていることを見抜き、これまでしたよう

な説明を彼にしても無駄であると悟ったのである。しかし彼女は、物事をはっきりさせておかないと、別の面倒が生じる可能性もあることもわかっていた。私の父を知っていた彼女は、私はものが違うかもしれないと思い、思惑つきでここまで下ってきて、ついでに将来の計画のために現地視察を行うつもりだった。そして私がまったく自覚のないまま同じ道を横切っていたことを知ったのであった。

「さて、もうわたしのことが信じられますか？」と話の最後に彼女が言った。

「ええ」と私。「信じます。もし嘘をおつきなら、もしまました嘘をつかれるでしょうから」

そのとき、サリーが私のためのお茶を持って入ってきた。そして私に客がいることを知るや、幽霊でも見たかのように驚いた。彼女はしばらくの間、どちらにお茶を出すかためらっているかのようにだった。前にも書いたように、私はサリーの愛犬の代役をつとめているし、老齢年金といえども“女のさが”を根絶やしにはしないからである。しかし、結局のところ、この美女が私を元気づけるであろうとの結論に達したらしく、サリーは別のカップを持ってきて、心のこもったサンドイッチを作ってくれた。私は心底感

謝した。サリーが扱いにくくなったら、それはもう厄介の種は尽きないからである。

第八章

約束では、私が回復次第、すぐにディックマウスのホテルに滞在しているミス・ル・フェイ・モーガンに電話を入れ、家探しの遠足の予定を組むということになった。そして嘘か真か、私は翌朝にはひどく元気がよくなったのであった。大体なら回復には一骨折りあるところなのだ。しかし私は少し静かに考えたかったので、じっと横になっていた。実際、考えることはたくさんあった。

二つに一つは明らかだった。ミス・モーガンが真実を語っているか、否か、である。そして、真実を語っていないとしても、それがなんだというのだ？ ヘドリーは関係ないことには首を突っ込むなと私たちに忠告していたし、もし厄介事が後に生じたとしても、私たちが巻き込まれることはないだろうという意見であった。ともあれ、運任せでやってみるほうがいいのであり、下手につけば、名誉毀損で訴えられる可能性はあるだろうし、商売をおしやかにすることは必然であった。後者の論拠はスコッティーに訴えるところ大であり、彼は良心という帆をたたんでしまった。万が一、三代目ミス・モ

ーガンが二代目ミス・モーガンを殺害していたとしても、わが社に降りかかる最悪の事態は、公判に於いて判事から少々厭味を言われるくらいのものでらう。誰もこの件で刑務所送りにされるとは思えなかった。

その後、スコッティーはいささか鎮静化してしまったが、ミス・モーガンのことになれば、それが何代目であろうとも、彼はくすぶる火山のようなものだった。彼女が私のモラルにとって極めて悪い影響を及ぼすものであると考えていたからだ。それに彼は心霊術の匂いを嗅ぎつけていた――黙らせておくためには少々情報を与えざるを得なかったためだが、私は考古学だと言い張っておいた。スコッティーは心霊術となるといよいよ不自然で、魂に良くないと考えていた。目に余る不道徳はまだ自然なのだそうだとあれ、あれこれあつて、スコッティーには悲嘆の材料が多く、私たちはなるべくこの話題には触れないようにしていた。

私の考えるかぎり、たとえミス・モーガンが嘘つきで男たらしでただの女山師であつたとしても、金さえ取られなければ、私が本当に深刻な被害を被るとは思えなかった。よしんば金を取られたとしても、それが私の懐の許すかぎりであれば、構わないと思つた。人は娯楽のためには妥当な額の金銭を支出しなければならぬものである。そして

彼女がスコツテイーの主張するすべての存在であったとしても、私は青春を謳歌することになるのだ。実際、その半分でも青春を謳歌できるだろうし、これまでろくなことがなかった私だって、たまにはいい目を見たかった。

もちろん、もし彼女が真実を語っていたとすれば（私は半ばそうだろうと信じていた）、それはそれですごいことになるだろう。そこで私はミス・モーガンに関しては両面作戦でいくことにした。私は四次元の冒険に喜んで手を出すし、それが物質化―この脈絡で用いるにふさわしい言葉がどうかわからないが―しなくても、私は妥当な範囲での男たらしに反発するものではなかった。

そこで私は翌日の正午ころに起き上がり、オフィスに這うように入った。実のところ生まれてこのかた、これほど生氣漲る気分だったことはなかったのだが、そこはそれ、まるで半病人のような顔をして、デイツクマウスとスターバー界隈にある住居のリストを漁り、ミス・ル・フェイ・モーガンの注文に沿うような物件を探しはじめた。私のしていることを理解すると、スコツテイーは物々しく鼻を鳴らしたが、ぶつぶつ言うのを止めた。スコツトランドでも、商売は商売なのだ。

彼女の注文する家は、大きな部屋と地階を有する孤立した一軒家で、人目につかず、なるべく海に近いものがいいという。実際のところ、窓から海が見えることが必須条件だった。ちやうど彼女の要求にぴったりの物件を、事実上紅茶一ポンド相当の金額で売り飛ばしていたことを思い出し、頭にきた。地階と孤立という条件は召し使いを雇いにくいという問題を浮き彫りにしていたし、こういった家屋に使用人を住まわせるとなると、かなりの金額を払わなければならない。私は以前、モーガン不動産を車で回り、各家にガソリンを撒いて、窓から吸いかけの煙草を投げ込もうかと真剣に考えたことがあった。長い目で見れば、経済的な行為となるはずだった。

それから突如、彼女の希望に完璧に合致するものがあつたことを思い出した。スコツティーは私を罵った。寝ているお荷物不動産を目覚めさせるよりも、他人の物件を斡旋して手数料を戴くほうがいいと思っていたからだし、問題の物件はわが社のものではなく、彼女のものだったからだ。ディックマウスのはるか郊外、ディック川の岸から離れたところに、海に一マイルほど突出する大きな岬がある。その先端に、防備を取り外した要塞がある。これは国防省が時代遅れとしてカラスたちに明け渡した代物で、父がお買い得品としてモーガン不動産のために拾っておいたものだった。父は、背後の丘陵を

ゴルフ場にすれば、この要塞が素晴らしいホテルになるだろうと考えたのだが、購入する前に水道施設の点検を忘れていたのだ。この要塞の水補給が屋根の雨水タンクに依存していると判明したとき、ホテルとして使いものにならないことも判明した。ろくに顔も洗わない一個中隊の兵隊さんの役には立つだろうが、おやじが頭に描いていたグラッド・インペリアル・ホテルにとってはどうしようもない愚物だった。そこでおやじは完全な損失として帳簿に記し、それっきりにしておいたのであり、借りたい人間がいれば貸すというだけだった。そして岬の陸側にある農場が見捨てられてしまったとき、もう借りる人すらいなくなつた。どの町からもあまりに遠すぎたからである。

そこで私はミス・モーガンを額面通りに受け取る腹を固め、彼女自身のお荷物不動産を彼女に押しつけ、少しばかり人生を楽しませてもらい、スコッティーには私の魂のために祈ってもらうことにした。私は全身全霊をかけて冒険に邁進していった。損得を勘定して、得が大であるとの気分で、ミス・モーガンに電話をかけた。特別の神の摂理が私たちを見守ってくださいっていると告げると、彼女はそれを信じているようだった。それに《月の司祭》が神殿を用意して彼女を待っていると告げ、視察のために翌日早朝に迎えに行くから、ホテルでお弁当を作ってもらおうように頼んだ。（私は姉にこの件を説

明していなかった。彼女はミス・ル・フェイ・モーガンが遠足にいく年ではないと信じていたからだ)

しかし翌朝、彼女に会うや、私は彼女を誤解していたことに自責の念を覚えた。いかなる慣習的基準で判断するにせよ——そして南米の大統領たちと友人だった女性はどうみても慣習的な代物ではない——彼女が偽物ではないことがわかった。彼女はまったく真剣なのであり、その言葉が真実でなかったとしても、それは嘘をついているからではなくて、なんらかの幻覚のせいなのだ。

私が懸念を抱いていたのは、もし車で岬の先端まで行けなかった場合、彼女はあのハイヒールでどうするつもりなのか、ということだった。しかし、ホテルから出てきた彼女は、もっとしつかりした靴に履きかえていた。それでもゴツゴツした靴ではなく、流線形だった。明らかに、運河のはしけのような形をしていない作業靴を入手することが可能な女性もいるのだ(姉は不可能と言ったが)。彼女はまた、ゆったりとした厚手のウールの灰緑色のコートに着替えており、大きなふんわりした毛皮襟のカラーを立てていた。そのために彼女の目しか見えなかった。明らかに道端でミス・ル・フェイ・モーガンの顔を見た人間はいないのだ。その取り合わせには、奇妙な、尋常ならざるスマー

トさがあつた。サンルームにいる客たちが彼女を見ていることがわかつた。わたしはこれまで、他の男たちがあからさまな羨望の眼差しで眺める女性をエスコートしたことがなかつたし、発作のためにどこか疲れた様子が私に残っていたとすれば、これはいよいよ効果的なのであつた。

彼女は大變魅力的で友好的であつたが、私のほうはというと、彼女を誤解していた自責の念やら、一緒にいるところを人に見られて嬉しいやらで、しばらく社交的会話も忘れて、競売人そのものになつてしまつた。これはなんとか洒落た台詞でも吐かねばならぬと思うのだが、喘息と一緒にようなもので、緊張すればするほど悪化するのである。いずれにせよ、彼女は私の合図を見て取つて、控え目な言動に戻つてしまつた。私は遠足をだいなしにしたと思ひ込み、口を閉ざしてしまつた。

ベル・ヘッドは入り江の彼方に迷ひ鯨の如く横たわっているが、そこに行き着くには一旦デイクフオードまで戻らねばならなかつた。河口のフェリーは車に乗せられないのである。しかし、ほどなく私たちは石炭運搬船のための旋回橋を渡つて、湿地帯に入つていつた。

ここから風景が変わり、私の気分も変わった。私が初めてモーガン・ル・フェイを夢に見たのがこの一帯なのだ。背後には長い尾根が続き、その一番端の支脈に、浅瀬と堅固な大地の利を生かして、ディックフォードが建てられている。およそ古い町というものは、すべからず訳あってその地に建てられているのだ。そして仕事柄田舎回りをしながら、ある村落がどうしてここにあるのか、なぜ道がそこを通っているのか等を考えるのは楽しかった。農場がある場所や泉の位置を結んでいけば、土中に埋もれた尾根の砂州の先端をたどることができるのである。

このあたりの湿地帯は高い水路と水門で区分されており、育ちの悪い緑色の草を家畜が食していた。しかし、さらに進むにつれ、水路は終わり、土地は元来の所有者に明け渡される―水鳥と海の神たちである。いまや道路だけが堤防化されており、道路脇の側溝には逃げもしないアオサギが立っている。連中は車が通る様をほとんど目にしたことがないので、それがなんなのか、わからないのだ。そこで、とにかくと立っていれば、魚と同じく私たちにも自分の姿は見えないはずだと思っていたのである。

突然、アオサギたちが一斉に私の頭上に舞い上がった。私はミス・モーガンのほうを向き、言った。「あなたが最初に来たとき、私はここで霧の日の焚火をたいて、あなたを誘導しなければならなかったんですよ」

彼女が笑ったのか、笑わなかったのか、大きな毛皮のカラーのためにわからなかった。しかし彼女の声は深く、つややかだった。

「では、覚えてらっしゃるのね？」

「たぶん」と私は言い、運転に専念した。私は自分の発言に慌てていたからだ。女性とろくにつきあったことがないだけに、私はなんともぞんざいな物言いをするか、かしまりすぎるかのどつちかなのだ。ともあれ私たちは高さ十フィートの堤の上の草ぼうぼうの道を走っていたから、運転は集中力を必要としていた。わたしはアオサギのお仲間に加わりたくはなかった。

私たちの左手はるか彼方に、ベル・ヘッドが姿を現した。広大な湿地帯にそびえる完璧なピラミッドのようだった。その側面の窪地にはモミの木が森があったが、その頂上は風に吹きさらされるため禿げていて、なかなか気高い様子であり、平坦な土地を見

下ろすかのようだった。私は車を止め、問題の海洞窟があると思われる窪地を指さした。そして、十フィートの高潮すら手が届かない堤の上にいるという地の利を生かして、ミス・モーガンに曲がりくねる浅い川筋跡を見せてやった。その底にはあちこちに溜まり水がきらきら輝いており、これが流れる方向を変えて修道院を水没させる以前の、古のディック川の名残であった。

彼女は、女性であるから、当然寄り道をして、もっと詳しく調べたが、水路を渡る橋は近辺にないから無理だった。一番近い橋は三マイル先のスターバーにしかなかった。これはディックマウスのとりにある沿岸の町である。まあ、あれを町といふのであればの話であって、私に言わせれば、いま漁村でしかなかった。かつてはスターバーもかなりの広がりを持つ港であり、ウイリアム王土地台帳にもその旨が記してあった。ディック川の水流がもたらす浚渫効果のために、港を開いておけたからである。しかし、川筋が変わり、栄光は離れ、いまや浜に引き上げることができる小船しか利用できないものになっている。しかし、町の背後には石造建築の跡が長く続いており、これはかつては巨大な埠頭であったが、以来ずっと採石場としてこの地域をまるごと建築し、舗装するために使われてきた。いまや足場を示す溝だけが残っている。私の父は最後の石材

を購入し、それでお荷物屋敷をたくさん作ったものだった。いまでもよく覚えてる。まだ自動車が私たちのような手合いには無縁だったころ、子供の私は父と二輪馬車に乗って、巨大な石塊に楔を打ち込み、手頃な大きさに割る作業を見にきていた。もちろん一つ目巨人がやるような石細工であった。おまけにあのセメントは、ウエフアースのように薄いくせに、石の接合部分を割るよりも石自体を割ったほうが早いほどの接着力を有していた。あのセメントの製造法の秘訣がわかれば、一財産築けるだろう。最近ではああいう品は手に入らない。

私がかういったところを語ると、ミス・モーガンは笑った。

「スターバーが“イシユタルのベア”つまり港のことだとご存じ？ あの場所におたしは急いでいたのに、あなたは危うくわたしを砂堤に座礁させるところだったのよ。それも、今日みたいに白昼夢を見ていたという理由で」

「実に申し訳ない」と私は言った。「それほど変わり者というわけではないんですよ、本当に。私という人間をよくお知りになれば、わかるでしょう」

「これまで誰かにご自分を知らしめたことがおありなの？」と彼女が言った。

第九章

堤防は道路を運び、古のディック川の浅い溝を横断し、かつては船が航行できた流れに排水管を通じて水を与えていた。ここでは明らかにかつての引き船道だったと思われる痕跡を見ることができた。扱いにくい船が大三角帆をたたみ、ディックフォードの湿地帯を抜ける水路を洩かれていくとき、奴隷たちの足で踏み固められたものであろう。そして背後の丘から降りてきた錫職人たちがここで船と合流するのである。堤防上の小径が海に向かってくねくね伸びているので、これを利用して私たちはベル・ヘッドのもとにある遺棄された農場に向かった。これはまた、ミス・モーガンの財産でもあった。

狭い庭と広大な湿地帯を分割する崩れた乾式石塀越しに農場が見えた。かつては、このあたりの風習である白漆喰に塗られていたのだが、漆喰はもう剥げ落ちていて、ところどころに癩のように残っているだけであり、石塀は塩湿地帯の草のように灰色にだった。

家屋は低くてどっしりとした箱のようであり、画才のない子供が石盤に描きそうな代物だった。庭の形跡はほとんどないが、一叢の草ぼうぼうがかつて肥料の山が置いてあった場所を示していた。それが不吉なほど裏口に近い――借家人のグレードは衛生的整頓によつて計るのが一番である――しかし、家の背後の岩肌にまで伸びる急勾配の草原には耕作の痕跡がちらほらあった。ベル・ヘッドはしっぽを海につけてしゃがんだライオンのような形をしており、農場はその前足の間に位置していて、西から吹く突風から隠れる形だった。ライオンの胸部に続く斜面にはいつの間にか段々畑にされていて、アザミや成長の遅い草が生える以前にさらに上まで耕されていた。

ミス・モーガンはすぐにライオンの形に言及し、前足の間にある段々を指さしながら、こう言った。「あそこで彼らは葡萄を育てたのよ」

「誰ですって」と私は驚いて言った。

「ベル・ノールを神殿として用いていた人々です。わたしもここに戻ってこられたら、葡萄を育てましょう」

私たちはいまや国防省がこしらえた道路に入っていた。この道は偉いさんが地図上に気軽に定規で線を引き、くたびれた兵隊さんが余暇につるはしを振るった代物であった。この線はベル・ヘッドの陸側の尾根の急な坂を斜めに横切るものであり、頂上部のU字カーブでは、車がひっくりかえろと思つたほどだった。輸送自動車もない時代に、ここまで補給物資を持って上がってきた兵隊さんを思うと、実に気の毒な気がした。

魂が凍るようなカーブを後にすると、道路はふたたび直線となり、そのまま岬まで続いているのが見えた。私たちの頭上、丘の頂上には石らしきものを積んだケルンがたくさんあつたので、ミス・モーガンは興味を抱いた。しかし私は寄り道を許さず、一千万羽のウサギが跳ねるなかを疾駆し、道の外れまで来て、要塞を見た。助手席に座るミス・モーガンは興奮して大喜びだった。

それは小さな家であるが、砲火に備えて大部分を土中に埋めた建物でもあり、定規で道を設計した想像力のない建築家がこのあたりで採れる石灰岩を使って造つたものであつた。錆びた門は蝶番いから外れており、私たちはそのまま車で前庭に乗り入れた。私たちの背後には兵舎があり、正面には半円の砲座が幾つもあつた。その向こうには満潮時には沈む岩が長い舌のように続き、海中に没していた。その先端のさざ波や渦を見

るだけで、たとえ凧の日であっても潮がどちらに流れているか、一目でわかる。時化た日には、波が一発であれを突破することを覚悟するべきだった。

ミス・モーガンは一回りしてから、この場所が理想にぴったりであると言った。私は哀れな兵隊さんのここでの暮らしがどんなものだったのだろうと想像し、それからお弁当のバスケットを屋根付きの砲座に運んだ。

しかしミス・モーガンはまだ落ちついて昼食をとる気分ではないらしく、銃眼をよじ登り、水の中に向かって五十フィートほど伸びる剃刀の峰のような岬の突端まで歩いていった。彼女は打ち寄せる波のすぐそばに佇み、海を見つめていた。私は心配になった。もし彼女がフジツボだらけの岩で足をすべらせたなら、あの逆巻く潮流では救助する手だてがないからだ。そこで彼女に声をかけ、海水浴用の砂浜を見に行こうと叫んだ。彼女は返事もせず、私が煙草を三本吸うあいだ、ただ佇むだけだった。満ち潮だったから、時折、打ち寄せる波に一步退いていた。

灰緑色のウールのコートを着ている彼女は、まったく海の色と同じだった。灰色の昼の薄日の中に立つと、海と識別することがまず無理であり、コートの裾は風の日の旗の

ようにばたばたとためていた。それから彼女は帽子をとり、髪から鼈甲細工の櫛を抜き取ると、首を振って黒髪を風になびかせた。私は魅惑された。必要以上に魅惑されてしまった。こんなふうには振るまう女性に会ったことがなかった。私は二本目の煙草を急いで吸った。しかし、三本目を吸い終わるころには、かなり冷めてしまった。彼女がいつまでも髪と服を風になびかせて立っているの、私も降りて行って、岩場から戻るのに手を貸そうと思った。

彼女は振り返り、手を差し出した。戻る際に重心を安定させるためだろうと思ったので、私はその手をとった―しかし、違っていた。彼女は私を引き降ろし、狭い突端の横に立たせ、私にしがみついたのだ。

「さあ、海を感じて」と彼女は言った。

私は無言のまま横に立ち、彼女がしていたように、風圧に負けまいと体を前に傾けた。風は冷たくはなく、全身を強く包みこむ暖かい風だった。足元にはさざ波が絶えることなく打ち寄せ、彼方には大波が岩に砕けて不断に轟いている。魅力的だった。海は深く、

力強く、私たちの回りに広がり、波に洗われる細長い岩の刃が要塞まで伸びているだけだった。私は魅惑に身を委ね、立ち尽くしていた。

それから、岩に砕ける波音に耳を傾けていたときから気づいていたものに心を向けた——水中の鐘の音だ。もちろん、騒音が生む幻聴である。律動的な音によって疲労した耳自体の中の残響の一種である。貝殻の中の潮騒が鼓動するような音、とでもいおうか。私はうっとりしながら、耳を傾けていた。聞くうちに、その捕らえがたい貝殻の潮騒的な特質は消えていき、はつきりとした打音となった。あたかも真鍮のラツパをがらんがらん打ち鳴らして、海の王宮の門を開くかのように、深い海底から音が聞こえてきた。それから突然、耳の中の声に起こされた。

「ねえ、目を覚まして！ 落ちるわよ！」

私は振り返り、驚いた。ミス・ル・フェイ・モーガンが横にいて、まだ私の手をしっかりと握っていた。

私たちは急な滑りやすい岩棚を登り、要塞に戻った。認めたくはないが、私は肩越しに振り返り、海の神々がついてきていないか確かめていた。彼女の声に遮られとき、私は二つの王国が会う場所に立っていて、海の王国の門が私を迎えようと開きつつあったように思える。換言すれば、それは溺死を意味しており、ミス・ル・フェイ・モーガンが起こしてくれなかったら、私は海の住民の一員となるべく、あの冷たい小道をたどっていたところなのだ。

それからお弁当を食べ、彼女を車で送っていった。彼女がああ場所を気にいってくれて、嬉しかった。自分が遠足のお相手としては完璧な落第者のように思えていたからだ。

ホテルの外で別れることにしたのは、中に入って彼女とお茶を飲みたくなかったからだが、そのとき、彼女は私の腕に手を置いて、こう言った。「あなたとお友だちになりたいの。わたしに変な下心がないって、いつわかっていただけるかしら？」

私は狼狽してしまい、なんとも返事のしようがなかった。返事ができたとしても、自分の声がそれを発せられるとは思えなかった。私はあまり優雅でないことをぼそぼそつ

ぶやき、その場から逃走した。もし彼女がしがみついていたなら、聖書にある紳士のよ
うに、片袖をその場に残して逃げたであろう。

家路につく途中、私は土地の交通警察に止められた。知り合いでなかったら、ぶちこ
むところだと言われた。どうしてそんなむちやな運転をしたのかと尋問された。喘息の
ために貰った薬かなにかか？ そうかも知れないと私が答えたら、彼は他人事と思って、
喘息をがまんしろとぬかしてくれた。

第十章

私はドラステップ・ウィットなるものの秀でた開陳者として知られている。つまり、扉を後ろ手で閉めた後でいろいろと素晴らしいことを思いつき、ほんの少し前に思いついていれば、洒落たことを言つてやれたのに、と考えるのである。さらに私には、このメカニズムが公正に働かないという不利も加わっている。頭にきた時には素早く毒舌が回つて、しばしばずっと後悔することになるのだ。しかし、感動し、特に返答したい時には、私は犬も同然の如く黙りこくつてしまう。

ミス・モーガンに私の無礼を我慢してくれとは言えなかった。ロンドンまで探しに行こうとまでしていた交際関係が、向こうの方からこちらを捜し出したというのも実に奇妙な話である。こちらはもう希望を捨てていたというのに―それでいて、私はしつこく断っているのだからお話しにならない。あれでは、私の本心がなんであれ、誰だって疑いようのない断り方である。この次ミス・モーガンに会う時は、一杯ひっかけて、それで抑制が外れるかどうか、見てみるつもりだった。

しかし、慰めの種も一つはあった―ミス・モーガンは私にあの要塞を人間の住居に改造する仕事を与えたのであった。確かに戦前に国防省が兵隊さんを飼っていたあの場所は、とうてい人間の住居とは言えなかった。なにはともあれ、私は彼女にもう一度、ではなくて数回会わなければならなくなった。慣れてしまえば私も少しは柔順になるだろう。そこに一縷の望みを託すのみであった。

私は改築作業をやる会社を捜した。いつもの工務店は使いたくなかった。くだらない噂がたつのはごめんだからだ。最終的にはこのあたりの教会の修理で有名な、風雅な老人を思いついた。教会は非常に特殊な建築物であり、その修理というのは結構見込みのある商売であった。なかなか素敵な村の教会が当地には多いのである。

老人はその名をビンドリングといい、道具一式と職人三人（しかない）、それに知恵遅れの伴を巨大な干し草馬車に積み込んで、それを毛むくじやらの老馬二頭に引かせ、近隣四州のどこにでも仕事に出掛けるのである。彼らは野越え山越えやってくるので、契約を結んでから、到着するまで結構時間がかかる。そして到着しても慌てず騒がず仕事をするのである。しかし、彼らは絶対に仕事の手を休めようとはしないから、最終的には予定通りに仕事が終えるし、どうかすると正統的かつ近代的な業者よりも早いこと

がある。知恵遅れの伴は天才的な彫刻師である。作業中止の笛が鳴った時、一番早い方法で降りてくる（つまり空中に足を踏み出す）ので、足場に鎖でつないでおかなければならなかったが、彼こそは商売の中枢なのであった。

ビンドリング老人は要塞に向かってごろごろ進んでおり、一週間か十日で到着の予定だった。彼がどうやってあの軍用道路を登り、あのヘアピン・カーブを曲がったのかは神のみぞ知る。しかし、彼はやってのけたのである。要塞自体は砲火に耐えるように建造されていたから、基本構造の補修は必要なかった。しかし、もちろん窓ガラスは一枚もなかったし、旅行者のおかげで扉は蝶番いから外れていたし、水道管の中にはなにかが死んでいた。それは結局カラスであると判明したが、哀れな小鳥がここまで来るとは、ここまで上がれるとは、誰も本気にしなかっただろう！

私は、建築士の資格を持っていなかったが、建築士の仕事はできた。そこで私は測量をし、一方ビンドリング氏とご一行様はカラスを引きずりだそうとしていた―我々全員は少なくとも羊かなにかと確信していた―順次交替しては釣り上げ作業に打ち込み、一人が投げ出せば次が取り掛かるという風で、知恵遅れの伴がその場の雰囲気が一番合致

していた。この若者には、他の方面すべてに欠落している分だけ、なにか素晴らしい素質があった。

私の希望は、この監獄みたいな場所を私の海の女司祭のための神殿に変貌させることであつた。海の女司祭―私はこっそりミス・モーガンをこう呼んでいた。もちろん面と向かつて言う度胸はないのだが、言えば彼女は氣にいつてくれたらうと思つてゐる。私には手近な作業がなかつた。あの頑強な石造建築に下手な装飾を貼りつけても無駄であるからだ。まるで紙の帽子をかぶつたほろ酔いの助祭みたになつてしまふだらう。私は世界中の建築関係書籍を多数ひもといた―ミス・モーガンは自分があやうくアステカの神殿に住む羽目になりかけたことなどまったく知らない―そして、ついにこれだというものを見つけ、そこからヒントを戴いた。それはイタリーのアペニン山脈にある古い修道院であり、裕福なアメリカ人の別荘となつてゐた。建築家はなかなか良い仕事をしており、本来の峻厳さを保ちつつ、窓の造りで破調をかもし、蔓棚が柔らかさを出していた。

私は自分のアイデアをぎっとたたき出し、要塞にもそれが似合うと思った。そこで縮尺図を描き上げ、ロンドンに戻って久しいミス・モーガンに送付した。彼女の返信は丸一週間ほど心を暖めてくれるものだった――

「お部屋を拝見した時から、あなたが芸術家でらっしゃることはわかっておりました。しかし、これほどの芸術家でらっしゃるとは思いもしませんでした」

いうまでもなく、私は見積書の添え状として、業務用便箋にお礼の手紙を書いた。本当にそうなのだ！

明らかに、モデルとなった建築物に隷従して、蔓草に覆われた蔓棚を造作するのは不可能であった。蔦を別にすれば、どんな蔓草でも最初の嵐の晩で海の藻屑と化すだろうし、蔦がこの環境にある蔓棚を覆うには一世代、いや二世代はかかるだろう。そこで私は考えを変え、石造りの蔓棚に海草と奇怪な海獣を彫刻するというデザインでいくこと

にした。そのモデルとして、岩の突端で巨大ヒバマタを採取しようとしていて、危うく生命を落とすところだった。ビンドリング老人が水中に滑り落ちようとする私の襟首をつかんで、聖なる建物とされるものは、たとえ小さな礼拝堂であっても、その建築時に生命を要求するものだとか教えてくれた。それで彼は教会を修理はしても、造ろうとはしないのだそうだ。彼は今海の神々のための神殿を造っているということをはほとんど知らなかったし、まして神々が私の生命を貰おうと押し掛けてきたのがこれで二回目だったことは知らなかった！

前出の感謝の手紙に元気づけられ、私は手間暇かけて蔓棚の彫刻をデザインし、かなり気にいるものが出来上がったので、その図をミス・モーガンの大陸の旅行先に書留で送付した。しかし彼女は前にもまして心温まる礼状をよこしただけでなく、それを誰か知人に見せたらしい。結果として私の図は美術雑誌に掲載されることになった。それから彼女はその図を額に入れた。彼女は知らなかったことだが、私は再び頭を山ほどひねって、知恵遅れのビンドリングの俵のための作業計画を構成しなければならなかった。もちろん、第二版は初版ほど複雑なものにはならなかったが、ともあれ私は、これまで

やらかした様々な失言のために溜まったりリビドーの幾つかを、この愛の骨折りによって解消していたのであった。

私は既存の建物の頑強な外観を、すべての窓にゴシック風のアーチを取り付けることで破調させた。要塞に入るには、堀の上いっぱい懸かる目の眩むような板橋を渡るしかないから、それは効果満点の代物だった。私はこの腐れ材木の橋を廃棄処分にし、代わりにかわいい小振りな丸いアーチの石橋を設置した。これは喘息を患う前にカンバーランドを徒歩旅行した時に見た橋をモデルにしている。トンネルのような入り口の上には士官用の区画があり、そこから中庭に出る。ここは内装をゴシック風にすることにした。外装をゴシック風にすると、このいまましい区画が頭の上におっこちてくるからだ。そこでトンネルの入り口に巨大な油引きのオーク材の二枚扉を取り付けた。これは大聖堂からのコピーであり、土地の鍛冶屋に特注した素晴らしい鍛鉄の蝶番いが付いている。私自身がデザインしたもので、言わせてもらえば、純粹な職人魂のこもった品であり、誰でも一目は見たくなる代物だった。この仕事を終えると、かなりの評判が立ち、私の姉は鷹の如く飛びついてきた。しかしミス・モーガン相手に冗談の種にしていた神の摂理はまだ私たちを見守っていたらしく、この蝶番いは土地の美術工芸品展覧会に出

品され、ついでにロンドンの展覧会にも貸し出された。こうなると我が一家にもかすかな栄光の雲が漂いはじめるわけであり、姉は私の通い仕事にケチをつけられず、またミス・モーガンが九十才以上であると信じていたので、私が何も言わなくても許していた。

「ミス・モーガンは大丈夫なの？」ある日、姉は尋ねた。

「ぼくには大丈夫のように思える」と私。「でも、スコツティーは危ないと考えている」

実際、彼はそう思っていたのだが、姉たちの受け取った意味ではなかった。

その後、彼らも私が要塞に入り浸るのを大目に見るようになった。実際、私はほとんど毎日通うようになっていた。私は海風が喘息に素晴らしい効果をもたらすことを知り、これには彼らも気がついた。そういうわけで《運命の女神》は私の手の中で遊んでいたも同然だった。私はこの気まぐれな女神に信頼を置いたことがあまりない。彼女は常に私をいい方向に導き、土壇場ですべてをすっぱ抜いてきたのだ。こういう全員が顔見知りというような場所では無理もないと思う。町は密猟者だらけだし、およそ求愛は垣根の下で行われる。密猟者が見落としたものは、恋するカップルが見つけるといふ具合で、

両陣営とも自分の活動の性質上、周囲に鋭く気をくばり、目配せ一つ見落とさせはしないのだ。

私はついに結論に達した。この地域では正直が思慮の大半、素直にものを言ったほうがいいのだ。とは言つても、自分に関係のないことに首を突っ込んでくる連中に嘘をついたとて、私はなんら良心に痛痒を覚えない。この姿勢は、地方名士の子弟の学園で教育を受けたことに由来するのだと思っている。ここで最初に学び、しかも完全に身につく唯一のものは、いかにして想像力の助けを借りて難局から抜け出すか、なのである。ミス・モーガンが言ったように、私は芸術家であるから、これは彼女が想像する以上に上手なのだ。私が名門校のタイを締めた本物の旦那であったなら、また話は違つただろうが、殉教することなしに名誉を達成するにはかなりの資本がいる。そして私たちの資本はすべて家業に直結しているのだ。しかし、私の姉が数限りなく私のことを嘘つきだと言いつながら、一度も私を牽制球でアウトにしたことがないのも奇妙なことだ。彼女は人間性というものに対して限られた知識しか持ち合わせていないため、いつも間違つた方向に球を投げてきたのだ。

最近になって、私は人々が事情を知ろうと知るまいと、たいして気にならなくなった。新しく得た気性が私を保護しているのである。これまでの人生で、喘息を患うまで、私はずっと気の弱い母親子だった。それから喘息の到来とともに、私は殻を破ったのである。神々の祝福には常に代償を払うことになると言われていたが、私の場合、かなりはつきりした呪いを送りつけてきた神々が、他の方向で私にたっぷり資金供与してくれたようだ。手を心臓にあて、正直に述べるが、もしこの先の人生で喘息患者と母親子のどちらかを選べるとすれば、両方経験してみた私としては、喘息患者のほうを選ぶだろう。しかし、母も姉も、私が彼女たちにくたばれ云々言い始めた時、気にしたようである。ウサギに噛みつかれるようなものだったのだろう。

私たちは夏中ずっと要塞で作業をした。そして成功だったと言わねばなるまい。陸側から眺めると、それは僧院の廢墟のように見える。窓は尖っているのに、屋根は尖っていないからだ。屋根は風の抵抗をなるべく軽減するように平屋根とし、瓦はとうの昔におしやかになっていたから、コストウォールド地方の小屋のように、ざら石で葺いてみた。かなり良くなった。

三基の砲座には浅い半円の階段と低い手擦りをつけ、全面に海馬やその他の珍獣の彫刻を施した。それから、あの岩の岬の鼻まで、階段をつけ、出来るかぎり手擦りもつけた。ミス・モーガンに海に滑り落ちてもらいたくなかったからだ。また、海水浴用の砂浜に続く愉快な湾曲した手擦り付きのバルコニーも作った。この砂浜は海を望む小さな入り江で、岬の陰のちょうど真下にあった。ここには流木が驚くほど大量に流れつくのである。石油を使って調理をするのであれば、ミス・モーガンに石炭を運ぶ必要があるとは思えなかったし、おそらくそうするだろうと私は思っていた。知恵遅れの倅が手持ち無沙汰の時、流木を拾いに行かせた。こうしておけば、妙なはずもないわけである。私はミス・モーガンの到着に備えて、大量の流木を備蓄しておきたかったのである。本物の海の焚火で我が海の女司祭を歓迎することができれば、かなり素敵だろうと思っていた。海水に浸った材木が放つ青い炎は、それは美しいからである。

私は人夫たちを雇って、あのヘアピン・カーブの整備をさせた。それでもまだ危ない箇所があったが、ともあれ家具屋の荷車を無事故で上らせることができた。もつとも、かなり罵り、怒鳴りまわったことは認めざるを得ない。ミス・モーガンは農場の管理をさせるための男とその妻をよこした——コーンウォール産の人間であり、立方体の如き体

格であった。つまり、横幅が身長と同じ、横幅と厚みも同じなのである。夫妻が彼女を崇拝しているのは見てとれた。この場所の世話をするのも彼らの仕事となる予定だった。

彼らは農場に住み、要塞までがたごと仕事をしに行き、終わればがたごと帰ってくることになる。そしてミス・モーガンは彼らのための自動車を一台都合するよう私に言うてきた。片道一マイルちよつとはあるからだ。この仕事のための車選びは慎重に考慮する必要があつた。トレスオーウェンには運転手の素質があるとは思えなかつた―ギヤ・チェンジなどという高等技術を期待するのも間違つていた―ゆえに急勾配を上がるだけの馬力は必要だが、さりとて彼が持ち逃げするような車を与えたくはなかつた。結局、私は古色蒼然たる年代物のフォードを見つけた。これは電柱でもよじ登りそうな代物で、フード付きの猫背風ツ―シーターであつた。もつとも、彼らはあの岬の上では良い天気の日以外にフードなど決して使うことができなかった。トレスオーウェンとおかみさんが前に乗り、後ろにほうきやブラシを積み込んで、この車をころがす様は、ちよつと見られぬほど滑稽なものだった。彼は時速十マイルという猛スピードで駆け回り、ウサギを追い払うのである。彼は追い払うのが好きだった。彼はすぐに車を壊してしまったから、新しい追い払い道具を与えてやらなければならなかつた。彼はそれ以上のスピー

ドを平地でも出さなかったが、またカーブでもスピードを落とそうとはしなかった。あのヘアピンを彼が時速十マイルで抜ける様は、血も凍るような光景だった。

彼らはすぐにこの場所を多少なりとも船の形に仕上げていたが、もちろん最後の総仕上げはミス・モーガンが到着してからのことである。私のやるべき仕事はすべて終了していて、要塞通いもこれで最後だった。私はビンドリング老人を干し草馬車に押し込もうとせきたてていた。ミス・モーガンがその午後到着するとの電報があり、ビンドリングは前日には出立しているはずだったからだ。しかし、バベルの塔が倒壊して、立ち話していた大工を押し潰して以来、建築業者はいつの世も一緒なのであった。

彼女が乗ってくるはずの列車はデイツクマウス着五時十五分の予定であり、そこから要塞までは一時間のドライブとなるから、私にはずらかるまでたっぷり時間があった。そこで最後の一回りをすることにした。私は実質一夏をまるまるここで過ごし、毎日食糧を持参していた。それからトレスオーウェン夫妻が到着し、食事を作ってくれるようになった。家には寝に帰るだけだった―神の恩寵といふべき安息だった。

自分がなした仕事すべてを見届けると、まるで子供を世に送り出す母親のような気分になった。創造的芸術家の中では、作家が一番恵まれていると思う。作家は作品が出版されても、それを失うことがない。しかし画家は絵を購入者に譲り渡さなければならず、作曲者ですら演奏者の解釈に身を委ねている。建築家ときた日には、哀れな話だ、時代の家に魂と限りない調査を注ぎ込み、あげくに購入者が入居してきて、ピンク色のペンキを塗りたくるのである！

注意を促すような音はなにも聞こえなかった。私は暇にまかせてぼんやり歩きまわり、私がこの世に生み出した海馬たちや他の奇妙な獣たちにさよならを告げていた。その時、黒いスポーツ・カーがアーチ門の下をくぐって入ってきた。そしてミス・モーガンがいた。

私は不意を突かれてしまい、ただ耳から耳までにたりと笑って、こう言った。「やあ？」これは一流の不動産業者が顧客に挨拶する方法とはかけ離れていた。

「こんにちは、お元気？」と彼女は言い、カラー越しに私に微笑した。夏中不思議に思っていたことは、彼女が暑い季節にどうやってあのカラーの面倒を見るのか、それと

も素顔で公衆の面前に現れることを余儀なくされるのか、ということだった。しかし、それはとんでもない話であつて、彼女は実に巧妙に対処していたのであつた。彼女は耳までくる大きな防風カラー付きの絹のレインコートを着ていたし、ルンペン風のつばひろソフト帽をかぶつて、カラーの上端に合わせていた。ゆえに彼女はいつもながら個室に在るが如く、遮断されていたのであつた。

私のほうとしては幸運にも変にかしこまる必要がもうなかつた。“やあ”一発で型通りの殻を破つてしまつたからだ。トレスオーウェン夫妻が出て来て、歓迎の微笑を浮かべた。それからビンドリング氏も紹介されなければならず、知恵遅れの伴は追い払われた。老人が挨拶をしている間、私が伴の注意をそらす役を引き受けた。この精薄児はここを離れまいと決心していたようで、たつぷりよだれを垂らし、他にも好ましくない特徴を有していたから、あまり歓迎されるものではなかつたからだ。しかし、老職人が救援に駆けつけてくれ、彼に鈎竿を持たせ、流木拾いに行かせた。潮が満ちつつあつたから、岩場に通じる階段から拾うことになる。流木を見た瞬間に彼はミス・モーガンのことをすべて忘れた。それで誰もが上機嫌だつた。

ビンドリング老人と私が彼女を案内し、検分してもらうことにした。彼女は喜び、な
んとも快活だった。老人が一生懸命カラー越しに、あるいは帽子の下から彼女の顔を覗
こうとしていたが、無駄だった。

要塞の構造は次のようなものだ。片方にある区画は士官たち（あるいは誰であれ、こ
の神に見捨てられた場所の責任者）の住居であり、もう一方には陰鬱なだっ広い兵舎
がある。こんな吹きさらしの場所では、快適に過ごせる日々が少ないことがわかつてい
たから、私は兵舎の前面に店舗用ショウ・ウインドウを取り付けて、ここをサンルーム
に改造しておいた。兵舎のストーブをねこそぎ引っこ抜いてみると、暖炉が出来るほど
の大穴が残ったので、それではとばかりに幅広の煉瓦暖炉をしつらえ、座席も二つ、角
度をつけて配置していた。流木を燃すとすると、火格子よりは薪乗せ台のほうが入り用
となるだろうから、私は彼女のために一對の上品な薪乗せ台をデザインし、ブリストル
の鋳物工場に作らせた。彼女はこんなものは注文していなかったが、私はプレゼントと
して受け取って貰いたかった。厳密に言えば、それは犬ではなく、海豚だったと思う。
出来の良い、太った愉快的顔付きの獣であり、一對のコブラのように巻いた尾で立ち上
がる体だった。姉のペキニーズが頭部のモデルだった。

この薪寄せ台は当然誉められた。これがプレゼントであり、ミス・モーガンが金を払う必要がないことをどうやって打ち明けようか、私は頭をひねっていた。頭に血が昇るわ、手先は冷たくなるわ、もう大騒ぎであり、やめとけばよかったなどと神に祈りはじめた時、部屋の大きな窓ガラス越しに、私の視界の隅になにかが映った。そこで振り返って見ると、ビンディングの知恵遅れの伴が、一人残されていた階段から離れて、滑りやすい岩の上を踊りながら意気揚々と歩いていった。説明する暇もなく、私はただ飛び出していった。

それでも間に合いそうになかった。岩場に飛び下りた時、彼の足が不安定な斜面から離れるのが見えた。彼はぴちゃんど座り込み、馬鹿面に至福の笑みを浮かべながら急斜面を滑降していき、海中に突っ込んでいった。そして見えなくなった。帽子もなにも、彼のものはすべて二度と見る事がなかった。

私はコートを脱ぎ捨て、彼の後を追おうとした。やるだけ無駄なことだった。彼を救えるチャンスは万に一つもなかったからだ。私にとって幸運なことには、事件を目にして飛び出してきていた職人頭が私を抱きとめてくれた。

「生命を投げ出すほどのもんじゃねえすよ」と彼は言った。

他の者も降りてきて、恐怖に立ち尽くし、ただ哀れな精薄児が跡形もなく消えた海をじつと見ていた。ビンディング老人はゆっくりと帽子を脱いだが、弔意を表すためではなく、頭を搔くためだった。

「さて、どう言ったらいいのか、わかんねえ」と彼はやつと言い、ゆっくりと帽子を元の位置に戻した。

「これでいいのかもしれない」と老職人頭が言った。

「かもな」と老父が言った、「だが、血は水よりも濃いんだ」

私は全身を震わせていたが、ミス・モーガンはまったく動じていなかった。彼女は哀れなビンディング老人に大変優しくかったが、それは冷血を感じさせる優しさだったので、私はとても妙な気分になった。神殿はその建設時に必ず生命を要求するという老人の言葉を思い出した。まあ、この神殿もそれを得たのだ。海の神々は三回試みて、ついに成

功した。私はまた、夢の中で海の女司祭が多数の人身御供を要求していたことも思い出した。

ミス・モーガンは私に飲み物を与えようとしていたが、適当なものが見つからなかった。そこでお茶を出したが、私は止どまろうとはしなかった。家に帰りたかったのだ。かわいそうな精薄児のことやら、ミス・モーガンに対する反感―極めて非論理的であることは認める―やらで、私は心底震え上がっていた。精薄児が転落したのは彼女のせいではなかった。もし誰かのせいだとすれば、あの岩にもっと安全対策を施しておかなかった私のせいなのだ。それでも、彼を連れ去ったのは彼女の背後にいるものであると奇妙にも感じていた。

彼女は私が本心から嫌がっているのを見て取ると、無理に引き留めようとはせず、車のところまで見送りにきた。すると、なんとしたことか、このろくでなしは動こうとしないのだ！ 前夜にヘッドライトを作業用に使っていたために、バッテリーがあがってしまったのだ。これではセル・モーターが回らない。罵ってもどうにもならない場合も多々あるものである。

私にすこしでも分別が残っていれば、トレスオーウエンを呼んで、私に代わって車の始動ハンドルを回してもらっただろう。しかし私は自分が喘息持ちだということをも忘れていたのだ。しかし不運なことに喘息のほうは絶対に私を忘れない。私は始動ハンドルに全体重をかけ、車に数回活を入れてやったが、その時、しまったと思った。私は車のウイングにもたれかかり、祈った。無駄だった。そこでステップに腰を降ろした。ミス・モーガンはトレスオーウエンを呼び、彼とおかみさんが駆けつけた。運良く、彼は私の喘息を以前に見たことがあったので、彼女に大丈夫だと告げた。私やら精薄児やら、彼もかわいそうに不快な午後を過ごしていた。発作を起こしている時の私は見られないものではない。そして私はいつも、見られるのは嫌だが一人きりにもされたくないという二律背反に苦しむのである。

私は屋内に運びこまれた。彼らは私をソファに寝させようとしたが、私は嫌がった。こういう場合、椅子に座っていたほうがいいのである。彼らは私を巨大な肘かけ椅子に座らせた。まだミス・モーガンが脚を切り落としていない椅子だった。電話もないし、往診してくれる医者もないだろうから、どうなるだろうと思った。どうやらモルヒネ

なしで耐え抜く覚悟を決めるしかないと思った。発作の一番苦しい症状は、私の場合、通常二時間と続かないのだが、これは大変に長い二時間となる。

トレスオーウェン夫妻は長旅を終えたミス・モーガンに食事を出したかったのだが、彼女は断った。彼女はただ立ち尽くし、私を見つめていた。かわいそうに、彼女にできることはそれだけだったのだ。

「あなたを助けてあげられたらいいのに」と彼女は言った。

それは彼女はやさしかったし、私は大いに感謝した。しかしいつものように返答できなかったが、これは肉体的な理由からである。彼彼女がつぶやくのが聞こえた。「これはひどいわ！」私は彼女がそれほど冷血でないことを悟った。

彼女は広い部屋をあちこち歩き、また私のところへ戻ってきた。

「あなたを助けられるのなら、なんだってします」と彼女は言ったが、打つ手はないのであった。私はただ耐えるしかなかった。

それから、なにをする気だろうと思っていたら、彼女は椅子の肘かけ部分に腰を降ろし、私の体に腕を回し、肩を枕に貸そうとした。私はそうさせなかった。汗で彼女の服を台なしにするだろうと思ったからだ。彼女は私の抵抗を感じて、無理強いはしなかった。もちろん私は後悔し、機会を逸した自分にとことん嫌気がさした。しかしほどなく自尊心も羞恥心も消え失せる地点に達し、私は振り向いて彼女にもたれかかった。とても気持ちよかった。唯一の短所としては、味をしめてしまった私は、以来発作が起きるたび、どうしようもなく彼女が必要になっってしまうことだった。

ほどなく、どうしてだかわからないが――恐らく気づくことなく、《自然》それ自体が麻酔薬となる一点に接近していたのだろう――発作は収まり、私は眠りに落ちていった。

かくしてスコッティの予言は成就し、私はミス・モーガンと寝ることになったのだが、彼の考えていた寝方ではなかったのである。

第十一章

彼らが寝台まで私を運んでくれたに違いない。翌朝、ここで目を覚ましたからだ。もちろん、私ははずたずたになっていたが、気分は良かった。発作は激しかった分、素早く過ぎ去ってしまい、心臓はいつになく調子が良く、様々な薬物による馬鹿にできない後作用もまったくなかった。

ミス・モーガンは彼女の自室に私を寝かせてくれていた。彼女がどこで寝たのかわからなかった。この部屋くらいしか整頓されていなかったからだ。この部屋は要塞の東端にあるため、広い窓から朝日が差し込んでいた。私は夜明けに目を覚まし、波頭を染める薄い金色の栄光の小道を眺めていた。

夜明けの薄明かりの中、窓から外を眺めていると、なにかこの世のものでない完璧な虚無感を感じた。寝台からは陸地はまったく見え、いまだ波間に陰を残すきらめきだけが見えた。

そしてこの時刻、睡眠から目覚めたばかりのみずみずしい気分で、私は物事を以前と異なる角度で眺めていた。私が見た事物は、単なる原因と結果の短い連続ではなかった。そんな連続は少し先までしか見えず、通例人生はそう思える。私が見たものは、広漠たる影響というものであり、人はその中に身を投じることでもできれば、避けることもできる。そして出席するか欠席するかを決定するのは個人の性向そのものなのである。

ミス・モーガンの寝室でこうして夜明けに目を覚まし、あたりを見回すというのは、なかなかロマンチックであった。彼女は全体を不思議な青っぽい灰緑色に仕上げている、それに半透明の海水を思わせる光沢が加わっていた。寝台の頭部は逆巻く波の模様を表すように形づくられていた。それは青緑の真珠光沢が混ざった鈍い銀色に塗られており、夜明けの薄明かりの中では実に奇妙な現実感を放っていた。化粧台の上の道具はどれもいぶし銀と鮫皮の細工であり、幾つもの変わった形の青みがかったひび焼き硝子瓶があった。これでミス・モーガンはあの素敵な肌の手入れをするのだろう。どちらかといえば、中世の錬金術師の実験室といった趣があり、これで天体観測儀と温浸炉と蒸留器があれば、木版画が完成するといったところだった。特に私の魅了したものは巨大な絹の房飾りに包まれたスプレー式香水瓶だった。私は香には非常に敏感であり、瞬時にして

寝台から這い出して調査する決心をした。ミス・モーガンの香水の正体を知りたかったのである。どんな香水を使用しているかで、随分とその人について多くのことを学べるものだからだ。もし良心が許すものなら（許すに決まってるが）、私はその香水を一二滴くすねて記念品にするつもりだった。今言ったように、香は私にとつては大いに意味のあるものなのだ。ミス・モーガンは寝台に絹のシーツを敷いていたし、巨大な枕は白鳥の羽根の枕だった。こんな目に会えるのなら、不動産業者も悪くない！

それでも私は、なにかもが素晴らしいなどという思い違いはしていなかった。ミス・モーガンは私に優しくしてくれるかもしれないが、彼女が女司祭をつとめる祭儀は冷たい原初の海の祭儀であり、生け贄を求めるものだということは、私の本能がはっきりと教えていた。私は恐ろしいアステカの信仰について読んだことを思い出した。誰か運のない奴隷が人々の中から選び出され、一年ほど贅沢三昧させられたあげく、生け贄として血塗られた祭壇上で生きたまま心臓をえぐり出されるのである。これが――私はミス・モーガンの絹の寝台の羽根枕に身を沈ませて、明け染める空を眺めながら考えた――気をつけないと、私に振られる役回りになるのだ。そして私は自問した。この肉体の生命というものは、最高に素晴らしい経験を拒否してまで保存しなければならぬほど価

値あるものだろうか？ この疑問に対する答えは、肉体によるというものである。私のような肉体では、答えは否定的だった。

現情勢を認識することで、私を悩ませていた二三の謎が解けた。もしミス・モーガンが偽物であり、おぞましい計画を遂行するために私の協同や、少なくとも黙認を必要としているのなら、私を引掛、たらしこむのも大いに納得できるものである。しかし、もし彼女が言葉通りの存在——不思議な知識によつて若返った女性——であるとすれば、どうして彼女が私にかかずらわるのか、まったくわからなかった。私はどうつついても色男タイプではないからだ。彼女自身はどこに顔を出そうと視線を集める女性である。単にもものすごく美しいだけでなく、異常なまでに人を引き付ける力と、個性を持っているからだ。さらに、彼女は毛並みもよく、高い教養を持つ女性でもある。となれば、どうして地方名士の子弟のための学園の産物にかかずらわるのだろうか？

しかし、もし私がアステカの生け贄奴隷の役を果たすことになっているのであれば、あらゆる状況は理解できるものになる。もちろん彼女は私に優しくしてくれるだろう。私を拾って、ちやほやかわいがってくれるだろう。それはもう間違いない。私は二度、危機一髪である岩場の死に神から逃れてきた。彼女の言葉が真実であれば（そうだろう

と心の底では思っている)、犬が自分の日を迎えようというのであり、その後は捨てられ、バタシー犬の家に送られるという算段なのだろう。古代の伝承によれば、連中はいつも黄金のナイフで心臓をえぐっていたという。一体どうやって黄金に刃をつけるのか、もしつけていないとすれば、どうやって肋骨を貫いていたのか、不思議でならない。

この場に横たわり、死と直面しながら冷静かつ快適というのも妙な気分である。人生など私にとってはたいした意味もなかったが、いざとなれば必死でしがみつくことだろう。実際、私は喘息発作のたびにそうしていたのである。あれはある意味で、生死を賭けた戦いを繰り広げているような気分にはさせられるものだ。今回の発作は医療抜きのものであり、薬物投与なしで耐え抜いた最初のものであった。これを経験することで、無意識に落ち込めば、痙攣が緩和されるということがわかった。これが理由で時々クロロホルムを嗅がされるのだらうと思った。

私が冷静でいられる理由は、実のところミス・モーガンがいう彼女の正体を心底信じていないからであろう。とことん腹を割れば、私は個人的に好きだから、わざわざ観念を弄んでいるのである。ともあれ、私は成り行きに任せることにした。私の好きなこと

はすべてミス・モーガンに直結していた。代替案としては、帰宅し、喘息を起こし、姉と喧嘩し、しようもない家をしようもない奴らに売りつけることであった。

こう決心すると、私は再び眠りに落ち、次に目覚めた時にはトレスオーウェン夫人が朝食の盆を持って部屋にいた。喘息が食欲を減退させないというのも変な話である。減退すれば、まだしも同情を集められるのである。うちの連中ときたら、食が進む人間はなんの問題もないと決めてかかり、疑うことを知らないのだ。

食事をとっていると、ミス・モーガンがやってきて、しばらく話をした。いつもながら、私にはあまり語る話もなかった。また、私はカラスさながらのながら声だったし、髭も剃っていなかった。両目は老ブルドッグのように充血していたに違いない。発作の後はいつもこうである。それで、こんなに非魅力的だと、生け贄奴隷の職を失う危険があるのではないかと思われた。ほどなく彼女は私との会話を諦め、本を手に取り、座って読みはじめた。私は寝返りを打って、また眠った。喘息は重労働である。

彼女はトレスオーウェンを町にやって電報を打たせ、うちの家族に私の所在を知らせていた。母も姉も心配しないことはわかっていた。そこで私は招待を受け、週末ここに

とどまることにした。私はしばらく足もとすら定かでなかったから、二十四時間ほど安心して車を運転できるとは思えなかった。

この太陽がふんだんにある部屋で潮騒に耳を傾けているのは快適だった。ミス・モーガンは横に座り、私をまったく気にせず読書している。それでいて、とても親しみを感じさせていた。彼女がいてくれて嬉しかった。こういう場合、私は人々の心底を読み取り、何を考えているか、自分にどういふ感情を抱いているかを知ることができるように思う。私は忠実なスコッティーの深い善意に十分気づいていたものである。しばしば私は我慢の限界を越えるほど彼をいらつかせてきたが、彼は本当に私を気にいつてくれた。姉が私に心底あきあきしていることも承知していた。もちろん彼女は、少なくとも私が病気の時は、それを押し隠そうと努めてはいた。母はただ内側にこもりつきりで、何事にも気を払わず、家を廃棄処分にしても構わなかっただろう。そこで姉がすべてを取り仕切ったのであった。姉は「フレンド婦人」たちを他所に移したくなかったし、またそれほど手間のかからない家に引っ越したくもなかったからであった。私が町の指導的実業家であるかぎり、姉もある種の地位を保っていられるが、もし私が家を出て、すべてを彼女に任せてしまったら、彼女はどこの何様でもなくなってしまう。そうなれ

ば、今まで踏み付けにしてきた人々（その数無数）が、彼女に仕返しをする機会を得ることになる。そこで姉は私の唯一の機会を静かにぶちこわしてしまい、いまとなってはどうしようもなかった。その日から現在に至るまで、私は姉にあまり親切にしていないうのである。姉は私を問題なくつかまえているが、私がいまあまり愉快な同居相手であるとは思えない。

横になってまどろんでいる時、私がミス・モーガンに関して得た感覚は、奇妙な落ち着きであった。他に表現のしようがなかった。彼女は執刀外科医の神経を有しているように思えた。いまのところは万事静かである、それはわかっていた。しかし私が置かれている立場は、手術のために体調を整えている患者のそれだった。ほどなくミス・モーガンは手の内をばらすだろうが、それは、つまり、私がずらからなければの話である。しかし、自分がずらかったりしないのはわかっていた。私は生涯最高の時間を満喫しようとしているのであり、それから生け贄の祭壇に送られることになっても、まあ、それでもいい。私はどういう形の生け贄になるのだろうと考えた。ミス・モーガンが黄金のナイフを片手に私を死ぬまで切り刻む図は想像できなかった。月夜にあの岬の先端まで散歩に誘われ、大波が到来して私を呑み込み、彼女は佇んだまま、私が行くの見届け

ている、などというのがいいと思った。こう考えると、不思議にも私は落ち込むどころか奇妙な高揚感を覚え、力が漲った。このささいな覚悟を懐に入れておけば、彼女をほぼ対等に渡り合うことができるように感じたのだ。死地に赴く者が皇帝に挨拶するようなものだった。

そこでたっぷり眠った後、私は元気を取り戻し、おしゃべりになった。私はその気になればいつだって弁護士たちを大いに笑わせることができたから、彼女相手に一席お笑いをやってもいいではないか？ 私は不動産業―この商売には馬の種付け業ほどの良心もいらぬ―の裏話をして、彼女をにたつかせた。それから地方名士の醜聞話で彼女を大笑いさせてやった。私のこの手の話はいつだってクラブでひっぱりだこだったが、そのうちに背後の生け垣から撃たれて終わりになるだろうと思っている。月夜の晩ばかりじゃないぞといわれたこともあったが、いまのところは無事である。姉の女友達の亭主たちを集めて、女房連中がどえらく真剣に受け取っている物事の笑える面を開陳してやるのは大いに楽しかった。牧師の言うところ、私は町中に大変悪い影響を及ぼしている、全員の正邪の価値観を破壊しているという。牧師としても、私たち全員が悪行を種に楽しく笑った後で、その悪行の主を糾弾するのが難しかったからだろう。私同様、社

会的良心など持ち合わせないミス・モーガンは、この手の話を大いに楽しんだ。ともあれ、私たちは陽気に盛り上がり、私は悩みがあったことも忘れていたし、彼女の化粧着を借りていたのも気分も良かった。私はすでにトレスオーウエンのパジャマを着て、起床していた―それから発作後の習慣として、部屋をうろちよろして体の強張りをほぐそうとしていた。ミス・モーガンは長身の女性であり、私は中くらい程度の背丈で体格もなかったから、彼女は化粧着は実にぴったりだった。トレスオーウエンのパジャマはもう論外にだぶだぶなのである。トレス夫人が部屋に入ってきたが、髭だらけの顎のあたりにアブリコット色のふわふわを巻き付けた私を見て、目をぱちくりさせた。ブロンドの男性に関して一つ有利な点があるとすれば、髭を剃っているかいないかは、よほど明るいところでないといけない、という点だろう。

それから私たちは噂話に終始し、時は過ぎていった。この部屋から日没をみることはできなかったが、夕日が雲にピンク色に映える様を眺めていた。ほどなく満月が上り、その日二度目、光の道が波間に広がるのを見た。

さて、前にも書いた通り、私は月とかなり親密な関係にあつたから、旧友が現れた時、回りの友人のことを忘れ、ただ黙って月を見つめていた。月と交信する時はいつもだが、

私は自然の裏側を意識するようになった。海には非常に強力な生命があり、この要塞からもそれに密に接していることがわかった。海は周囲に広がり、私たちはほとんど島に等しいのであった。嵐の日には奔流と化した波が入り江から入り江へと縦横に駆け抜け、風下の窓に雨のようにぶつかる。そして巨大ヒバマタが前庭の海獣彫刻の間に投げ出されるのであった。

私たちのいた部屋は全体半透明にほの光る灰緑色、陽光を受ける海水の色だった。ミス・モーガンのドレスすらも海の緑色であり、彼女の首の回りには、不思議な光を放つスター・サファイアのネックレスがかけられていた。それは中世風の奇妙なドレスであり、きらめく縐子製で縁取りがなく、体の線にぴったりしていた。そして彼女は素晴らしい体型をしていた。襟は低く、胸元はスクエアにカットされ、背中はほとんど腰のところまで開いている。しかし袖は長く、手首のところでは魚の口のような開き方をしていた。今夜の彼女は娼婦のような赤い爪ではなかったが、代わりに虹色を放つ真珠光沢に塗られていて、なんとも不思議にして非人間的効果をかもしだしていた。

突然、私の瞑想は遮られた。

「ウィルフレッド、月についてなにを知ってるの？」

私はファースト・ネームで呼ばれたことにぎよっとして、危うくその場で喘息を再発させるところだった―いや、まじの話。ディックフォードでは、御婦人連は手前の亭主のことですらミスターだれそれと言うのである。

ミス・モーガンは私の戸惑いを見て取ったが、ただ笑うだけだった。

「わたしのネグリジエを着ている男性に、わたしが“ミスター”を使うと思ったら大間違いよ。教えて、ウィルフレッド、月についてなにを知ってるの？」

そこで私は語った。最初の喘息発作の後にくたばって寝ていた時に月と接触した模様や、どうやって月の潮流を感じるようになったか、月がどういう力を及ぼしているかを知ったかを話した。月が満ちているか、欠けているか、月の力が増大しつつあるか、減少しつつあるか、わかるようになったことも話した。月の潮流が我々にはわからない方法で万物に影響を及ぼしているが、この部分はまだ私にはわからない―しかし、いつか自分にもわかる日がくるはずだと信じていることも話した。喘息発作の後、およそ生命力がなくなつて横になっている時に、私は啓発を受けるからだ、とも言った。

彼女は頷いた。「そうね」と彼女は言った。「その時にくるでしょう。わたしが水晶球で得たものを、あなたは喘息で得たのだわ」

（「やれやれ！」と私は内心考えた。「交替してもらいたいもんだ！」）

しかし私は、この効果をもたらしたものは薬物ではなかったかと告げてみた。彼女は首を横に振った。

「昨晩は薬物抜きだったわ」と彼女が言った。「でも今晚あなたは不思議な雰囲気をたたえている。いつものあなたとは随分違うわ」

「いつものぼくをまったく知らないでしょう」と私は言った。「これが普通のぼくですよ。ごちゃごちゃ巻き込まれてる時のぼくとは違う」

「なにに巻き込まれているの？」

「神が与えたもうた世界の中で、義務を果たすということ。どうして全能の神ともあろうお方が、かくもしつこく円い穴に四角い杭を押し込もうとなさるのか、大いに知りたいところですよ」

それから私は語った。神々は恩寵と引き換えに人間に相応の支払いを求めると言われているが、私の場合、喘息という支払いを先に済ませてしまい、後は掛け勘定で彼らのために走り回っているようなものではないか、と。彼女は同意した。それから言った。

「あなたは本当に妙な人ね。こんな活気ある沈黙を保てる人には会ったことがない」

一瞬、彼女が何を言おうとしていたのか、わからなかった。それから悟った。私はしゃべることは少ないが、いつも実に活発な思考活動を展開していたのだ。私の沈黙は頭が回らないわけでもなければ抑制しているのでもなく、常に意見を異にする人間と暮らすことから生じる根深い警戒心なのである。さんざん苦汁をなめることによって、周囲が自分の真の考えを知らなければ知らないほど、自分にとっては好都合であることを学んでいたのである。

私はこの種のことを彼女に告げた。

「でも、わたしには話せる気がするんでしょう？」と彼女は言った。

そう、と彼女に言った。彼女にはいつだって話をしたかったのだが、私の会話は長らく使っていない関節のように硬直していたので、昨晚の車のようにうまく動かすことができなかったのだ。しかし彼女が見抜いたように、一旦温まってしまうえば、私は大丈夫なのであった。

彼女は微笑した。「そのうちに」と彼女、「あなたのエンジンが掛かるまで、あなたのセル・モーターを回しっぱなしにすることになりそうね」

その仕事を楽しんでくれるよう、彼女に言った。

「あなたはその気になれば本当に愉快になれる人なのに」と彼女、「なかなかその気にならずに、自分を押さえてしまうのは残念ね」

確かに彼女を笑わせるのは楽しかったし、彼女も楽しかっただろうと思うが、私はお笑いのために育てられてきたのではないと思う。それから突然――さりげなく、というか意図的というか、ともかく彼女のやり方は予想もつかない――どうして私が生け贄奴隷の役を振られたのかを占める言葉が出た。私は刻々とこれが我が運命に違いないと確信しつつあったのだ。

「あなたは病人のように見えるし、事実病人だと思うけど、あなたはわたしが会った中でもっとも生命力に溢れた人よ」

彼女が私のことをどう受け取ろうとも、それはぴんどこないと言ってやった。

「そして妙なことに、あなたは疲労困憊すればするほど、生命力に満ち溢れるようになる。あなたは本当に奇妙な磁気を発散しているのよ、ウィルフレッド。それが問題だと思うわ。あなたはきつと磁気を漏らしているのでしょう」

さてこれは本当の話であって、発作の後でへたばっている時に私はいつも一番生き生きしているように感じていたのだ。カップを口に持っていけないほど弱っていても、頭は異常なほど明晰になったものだ。実際私は、この期間中に、月の裏側を見るほどに異常な明晰性を得たのであった。

ミス・モーガンは突然身を乗り出して、大きな黒い瞳で私を見据えた。

「いま、そういう気分でしょう。どう？」と彼女が言った。

「そう、ある程度は。いつぞやほどじゃない、いつぞやほどひどい発作じゃなかったから。でも—そう、ある程度、いまでもすつきりした感じだ」

「それなら、わたしについて知ってることを教えて—なんでもいい、想像したことでも—教えられるかぎりのことを」

「やれやれ、なんにも知らないんだ」

「いいえ、あなたは知ってるわ。さあ、教えて。あとでわたしがまとめるから」

月明かりだけが差し込む海の青の部屋の中、背の高い曲線の椅子に座る彼女を見た。スター・サファイアの首飾りが光芒を放ち、彼女の胸元に蛍光の青い炎の線を引いていた。厚い黒髪は彼女の頭を覆うように巻かれている。額はそれは白く、その下の瞳は黒かった。そう、彼女はあの船首の高い船に乗って、霧と夕闇の中から滑り出た海の女司祭だった。

大きな黒い瞳をすっかり私に据えたまま、身を乗り出す彼女を見てみると、私はこの場所も時間も忘れて、黒い水のなだらかな潮流に乗ってどこかに滑りでていくように思えてきた。

「ぼくたちの国は水没しかけている。海がぼくたちの手に負えないからだ」と私は言った。「堤がもたない。海は寄せては返し、ぼくたちの土地を奪っていく。ぼくたちじやどうしようもない悪意が海にこもっている。そこで知恵を備えた女司祭を呼んだ。ぼくたちにも大司祭がいて、この岬の聖なる学舎を治めているが、彼の手にも負えないと言っている。月の諸力がこぼれてしまい、水に悪意がこもっている。日の沈む彼方の国の海人の女司祭を呼ばなければならない。この国はもう沈み、失われ、いまや南のほうに一二の頂きが残るのみで――

「アズレス諸島のこと？」

「そう」と私が言った。「アズレス、大いなる深みより聳える島、これだけが沈んだ大陸の名残。そしてぼくたちは海人の最後の女司祭、海の女司祭を呼んだ。彼女はまた月の女司祭でもあった。そうなる必要があったからだ」

「どうしてそうなる必要があったの？」

「まだわからない。しかし、そのうちわかると思う」

「それで、海の女司祭はやってきて、なにをしたの？」

「生け贄の供犠をした」

「なにを生け贄にしたの？」

「人間」

「どこで？」

「ベル・ノールの下の洞窟で」

「どうやって？」

「生きたまま祭壇石に縛りつけた。すると潮が満ちてきて、生け贄を連れ去っていく。彼女は海が鎮まるまで何人も生け贄にした」

「それで全部？」

「今知ってることはこれだけだ。もつとあるかもしれない。わからない。考えが及ばないんだ。この先、わかると思う。きつと、もつと来ると思う。もつと来るような気がいつもしている」

それから、深く潜水した人が水面上がってくるように、私も我に帰った。するとミス・モーガンが、私の頭の中の脳そのものに穴でもほがすかのように、じつと私の目を覗きこんでいたことを知った。

（やれやれ、と私は独り言をいった。ぼくのことを病人だと言ってたが、こんなことをしよつちゆうやったら、用済みになるころには、ぼくは二目と見られぬ病人になつてゐるぜ！）

第十二章

翌日私はトレスオーウエンの剃刀を借りて、髭を剃った。これが結構難しかった。自殺に使うような旧式の剃刀だったからだ。それから階下に降りて、前庭でミス・モーガンと合流した。まるで足元が船のように上下しているような、そんな頼りなさを感じていた。いつもの喘息発作後の、鉛のような体の重さとはまったく違っていた。それでも、それが特に健康な感覚だとは、私には思えなかった。

ミス・モーガンはいつもの通り非常にやさしく接してくれ、私が少々うろつき回って手足を伸ばすことを大目に見てくれた。それから私をデッキチェアに座らせたが、これが膝の裏が痛くような安物の椅子ではなくて、純正のペニシユラ・アンド・オリエンタル海運の製品だった。疲れていないと言い張ってみたが、彼女は姉のように口論はせず、ただびしやりと否定して、私の腕をとって否応無しに椅子に座らせた。こういう場合、私は叱られたほうがいいのである。私は発作後は大変なへそまがりとなるし、体によく

ないことばかりやりたがるようになるからだ。ちょうど、痛い歯でわざわざものを嚙んでしまうようなものである。

満腹になつてしまうと、ずっと機嫌がよくなつた。そもそも本気でミス・モーガンにかみついたわけではなかつた。これが他人ならやつていただろう。こういう場合、他の誰よりも私自身が嫌になるほど、私は怒りっぽくなるのである。しかし、その午後ずっと寝ていたため、お茶の時間には問題なく平常を取り戻した。まったく疲れていなかったとは言わないが、精神的には自分を取り戻していたのである。

私たちはそれぞれデッキチェアに寝そべっていた。するとスターバーの古い教会の鐘の音が止水を越えて聞こえてきた。風はまったくなくなつたが、ベル・ヘッドの海は決して静まらず、西から押し寄せるゆつたりした大きなうねりが岩々を洗い流し、柔らかいさざめきを発していた。ほどなく冷たい風が吹いてきたので、私たちは屋内に退却を余儀なくされた。するとミス・モーガンは大暖炉にしつらえておいた流木の海焚火に火を入れた。それから私は巨大なソファに寝そべり、彼女は丸ソファに腰掛け、膝に肘をついた。それから私たちは炎が塩を含んだ木材に広がる様を眺めていた。炎は青く、藤色

にして黄金色、それは素晴らしかった。海焚火の火焰はまさにオパールの閃きなのである。

その時、ミス・モーガンに意見を求められた。

「この壁をどうしましょう？」

私は兵隊さんが遊んでいた大きな部屋を見回した——つまり、哀れな兵隊さんはこんな岩場の上では遠足気分だっただろうと言いたいわけである。南の壁は一枚の板ガラスであり、蔓棚の細い支柱で仕切られているだけである。背後には幅の狭いゴシック窓が陸側の石造建築の単調なラインを破調させている。床は寄せ木細工であり、まだ新しい木の香りを漂わせている。私の大好きな香りであるが、壁の石膏はまだ剥き出しのままだった。彼女がどうする気か、知らなかったからだ。

「ぼくだったら、こんな大きな場所には鏡板をはめますね」と私は言った。「さもないければ、絵を掛けるか。壁紙はだめでしょう」

「壁画はどうかしら？」と彼女。

「どんな？」と私。

「海の光景」と彼女。

それはいい考えだったから、そう言った。しかし、こんな湿った空気はどうやってカンヴァスを壁に張り付ける気か、彼女に聞いてみた。

「カンヴァスは使いません」と彼女。「石膏に直接描くのです」

「となると、ここに人間を入れることになる」と私は言った。「それは邪魔くさいでしょう」

「とんでもない」と彼女が言った。「あなたなら大歓迎です。テンペラをなさったことはおあり？」

「一度も」と私は言った。

「では」と彼女。「生きて学ばれたし」

それで彼女の意図がわかった。（やれやれ！と私は独り言をいった。さっさとベル・ノールの生け贄洞窟を整備して、一発やっちまえばいいだろうに？）

「この思いつきに反対ご意見？」

「とんでもない」と私は言った。

おやすみを言ったとき、ミス・モーガンは私の手をやさしくたたいた。私は瞬きもできなかつた。先週の金曜、ディスクフォードを出て以来、随分遠くにきてしまった気分だつた。

私の要塞滞在を家族に納得させるのは意外なまでに簡単だつた。姉は私が美術展に作品を送ることを好んでいた。それで我が家の格が少し上がるように感じていたからだ。私はいまや単なるディスクフォードの実業家よりも少し出世していた。例えば、スコツティーの義父は美術展に作品を出品したことがなかったからだ。姉はミス・モーガンが私に金を残す旨を遺言状に記すつもりだと早合点し、飛び出していつて私に新しいネクタイと靴下を買ってきた。個人的感想としては、古いネクタイを締めて、みすぼらしくしていたほうが、金を貰える可能性が高かつたように思う。

姉はいつも私の動向に目を光らせていたが、神の摂理と私の友人たちが共謀してその目にゴミを投げ入れてきた。そして正しい方向を疑っている数少ない場合に於いても、人間性に対する洞察力不足のために、現場を押さえられずじまいだった。母親子ゆえの利点など皆無に等しいが、なにかやらかしてからずらかるにはこれほど好都合なこともない。みんな、母親子にそんな真似ができるとは思えないからである。

ともあれ、今回の場合、私はほぼ完璧に見つかることなくやっていけそうだと確信していたし、良心が麻痺すればするほど、姉は私を疑わなくなるのであった。おなじみスコッティーに関していえば、彼は我が社の資本に一銭も投下していない関係上、この問題にかかわらずわる権利がないことを承知していたようだ。実に礼儀をわきまえた話である。通常であれば、私は彼の願いを尊重するが、今回ばかりは立場をとことん利用してしまっただと思っている。彼はなにも言わなかったが、上唇を引き出すように嚙んでいた。私はキプリングの『象の子供が鼻を手に入れる話』を思い出した。

さて、取り決めでは、私は毎週土曜日に要塞に赴き、週末を作業に費やし、月曜の朝にはオフィスに戻って通信事務を扱うことになった。町中はこの件について、なんの注意も払わなかった。ミス・モーガンが九十歳以上の人物であると信じているからである。

もちろん、スコツテイーが事情を打ち明けていたヘドリーは別だが、私が土曜の午後
に車にスーツケースを積み込むのを見ても、彼はにたにた笑うだけだった。

私はパントマイムを観に行く少年のような気分でディック川にかかる旋回橋を渡つ
たが、湿地帯に入りこんだ瞬間、雰囲気は変わり、古き神々があたりに溢れたようだつ
た。湿地帯の周辺には農場もなく、家畜に草を食ませる農夫は家畜を連れて旋回橋を渡
り、夜に戻ってくる。湿原には塀もなければ、石造建築もない。洪水が多いから、どん
な石もたないのである。道自体は堤の上を走っている。私は水が引いた後、海霧がか
かった道を車で走ったことがあつた。両端には陸地が見えず、ただ細いリボンのような
道が水の上をくねっているだけであり、それは不思議な経験だった。しかし、今日は、
二番生えの干し草を造る堤の上に、熱気のための霞がかかっていた。

私はコートを脱ぎ、シャツを腕まくりして、それは陽気にジョギングしていた。到着
前に少々体調を整えようとしていたのだが、その時、農場の少し向こうから、誰あろう
ミス・モーガンが徒歩で現れた。あの古い葡萄棚に葡萄を植える件を話し合うためにト
レスオーウェンに会いにきていたのだという。帰りに車に乗せてもらえれば、暑い中を

歩いて帰らずにすむから、私に会えて大変に喜んでいた。要塞のほうで考えていたよりも、陸側はずっと暑かったそうだ。

彼女は葡萄棚のほうへ私を誘った。どうやってよじ登ったのかわからなかったが、私が小鳥のように上がっていくと、トレスオーウエンがなんとも怪しげな表情でこんがらがった憂鬱な葡萄らしきものを検査していた。ミス・モーガンの語るところ、それは彼女がアメリカから特別注文で取り寄せたコンコード種葡萄だという。もしニュー・イングランドの気候に耐えられるのであれば、ここでも耐えられるはずだとのこと。私にはその葡萄が後の胃痛の種にしか思えなかったし、トレスオーウエンもなんら希望を抱いていない様は見とれた。一番上の岩棚には、薬草畑が造られており、こちらのほうが魅力的だった。そこまで上る際に、私はかなりへばってしまった。ミス・モーガンは気付かないふりをしてくれた。これは有り難かった。自分の弱さをあれこれ言われるのは大嫌いなのだ。

ベル・ヘッドはバナナ型をした半島で、その凹面を南に向けている。そちら側は切り立った断崖であり、カラスの巣となっている。あれでは巣の中で日焼けしてしまうだろうと思った。北側の斜面はウサギが占拠する草原であり、ところどころに窪地が黒い口

を開けている。岩棚がある陸側の根元は南南東に傾斜している。私たちにとっては幸運なことに、断崖から分岐した尾根が西日を遮る形となっていたので、その日陰にある石造りの椅子に腰を降ろした。

背後には岩山の灰色の胸が百フィートばかり丘陵まで屹立し、蔦に覆われていた。丘陵の頂きから少し下がったところには洞窟が暗い口を岩棚に向けて開けていた。ミス・モーガンが語るには、下から双眼鏡で眺めると、一連の切り出し石段や棚がはつきり識別できるという。沈着冷静かつ活発な人間なら、それを使って上から下まで降りることができたはずである。

「それに」と彼女が言った。「もし砂州の背にそって丘陵沿いに線を引いて、地層の方向に従っていくと、ベル・ノールの洞窟と両端をちようど通過することになるわ。それで思うのだけど」と彼女は続けた。「夏至の日にはあの洞窟で番をしていれば、きっと太陽がベル・ノールのケルン越しに昇る様が見えたはずですよ」

もちろん、それは指摘された通り明白だった。いかに波が海岸線を侵食しようとも、長い海丘の地勢は真西、真東に伸びているのである。事実、ベル・ヘッド、ベル・ノー

ル、そしてデイツクフオードの山の背は、すべて同じ長い板状地層の激変を表している。デイツク川が川筋を変えた時、古代の隆起によって生じていた地層の隙間から滑りだし、デイツクマウスの北部にあった砂丘を湿地に変え、スターバーの南にあった湿地を砂丘にしてしまったのだ。博物学者にとっては面白い地方であるといえる。

しかし私たちの関心は博物学的なものではなかった。私たちのいる見晴らしのいい場所から、私はミス・モーガンに地勢とその意味を指摘することができた。スターバーの背後にある古代の埠頭の壁脚を記す塚や窪の線をミス・モーガンに見せてやった。それは今や海岸線から半マイルはあり、大地が隆起したことを示していた。まだ昔のデイツク川の跡と引き船道や、丘陵の下にわずかに霞んで見えるデイツクフオード、海人たちの船と合流しようと錫職人たちが下ってきた場所をさし示してやった。また、ベル・ノールの急斜面にある裂け目も見せた。私の信じるところ、ここに海洞窟が、何世代もの泥で一杯になって、隠されているのだ。

彼女は双眼鏡の焦点をその場所にあわせ、子細に眺めていた。

「気がついた？」と彼女が言った。「あの下のディック川の土手は直線で切り立っているでしょう。きつとあの背の高い草で石細工が見えないのよ。わたしがあの洞窟に来た時には、きつとあそこに船を着けたんだわ」

それから彼女は私の手に双眼鏡を渡し、スターバーまで海岸線をたどってみるように命じた。この高さからは、古代の河口ははっきり見てとれた。その口の部分に一つ、岩の塚が立っていた。それは明らかに、渡来してくる海の女司祭を誘導するために篝火を焚こうと、私が待っていた小島だった。私の手は震え、双眼鏡の焦点を合わせることに適わなかった。ここにあるとは知らなかったのだ！

ミス・モーガンは私の興奮を見て見ぬふりをしていたのだと思う。彼女は見落とすような女性ではなかった。私たちはしばらく声もなく座っていた。浜の小石を上がる満ち潮の音が下のほうから聞こえてきた。このくぼんだ土地の古代の生活が私の眼前に再現されつつあった。今は荒れ野と化した場所に葦の原が浮かび上がり、その間をナラデック川の銀色の水が波打つように広がった。洞窟の下に埠頭と道の黒い輪郭が見えた。以前にもベル・ノールの側面に頂上のケルンにいたる小道を見ることができたが、いまやケルンは風雪にさらされた残骸ではなく、横石を乗せて聳える小型のストーン・ヘンジ

のようであった。そして私は、頂のピラミッド状の影が夏至の日の出の際に私たちのいる場所まで伸びてくることを確信した。そして昇る陽光の最初の光条は太陽の神殿の塔門を経て、私たちの頭上の洞窟の入り口に射しあがるのであった。

私の眼前を、剃髪し、黄金の帯を巻いた白い長衣姿の司祭たちが列をなして行き来している。そして湿地帯の道には、慣習通り灰色の頭巾を被り、小豆色の服を着て、大地への親近を表す平民たちが見える。また明るい染めの上着を着た水夫たちや、戦士たちと武具のきらめきも見えた。夕暮れの竈の煙りがイシュタルの港に漂い、埠頭には奇妙な形の背の高い船が舷を接して並んでいて、その紫、青、緋色と色とりどりの帆が帆柱の中頃まで下げられ、鎖につながれた櫓漕ぎ奴隷たちの日よけとなっている。いまやベル・ノールの洞窟の暗い入り口もはつきりと見えた。はつきりと見えすぎて、あたかも誰が中にいるのかもわかり、また彼女が生け贄の儀式を行っていることすらわかるように思えた。それから私は我に帰り、ミス・モーガンが自分をじっと見つめていたことを知った。彼女はどれだけのことを私の顔から読み取ったのだろうか。

彼女は立ち上がり、先に降りていった。石に支えられた薬草畑の浅い傾斜した地面は、日に焼けて手もつけられないほどであり、太陽熱を吸収した大地を好む灰色の芳香性薬

草が刺激香を放っていた。その香りを嗅ぐと、あの空き家で、ミス・モーガンがコートの前を開いて、少女のようになめらかな胸元をあらわにした日のことを思い出した。

私は車に戻れたことを有り難く思った。あの急な、不揃いの階段の下り坂は、上り坂と同じくらい重労働だったからだ。要塞に続く道に達した時、ミス・モーガンが車を降りて丘陵の頂きまで昇ってケルンを見ようと言いだした。しかし私は断らざるを得ず、その理由も言った。そのため私はすねてしまい、なんともみじめな気分になってしまった。また、このことでミス・モーガンも悪いことを言ったという気になつたらしく、まごついていた。いやまったく、私という人間は扱いにくい男である。うちの家族が私にあきあきしているのも無理はない。自宅でこういう雰囲気になつてしまつたら、私はいつも姉に喧嘩をしかけることでその場を取り繕つてきた。これは難しいことではなかった。ミス・モーガン相手にそれはできない相談であるが、そのために、喘息を患つて以来、どれほど自分が性悪になつていたかを思い知らされたし、それほど親しくない人間に自分の気持ちをわかつてもらうことの難しさも知つた。こう考えるとよいよ私もまごついてしまい、車から降りた時、私はすねて黙りこくつたまま彼女の後についていた。どう言葉を発したらいいのかもわからなかった。

彼女は振り返った。私がすねた子供のようになだ立っていると、彼女は私の肩をつかんで揺さぶった。

「ウイルフレッド、馬鹿はおやめなさい」と彼女は言い、私の頬をあまりやさしくなく叩いた。

彼女がバケツ一杯の冷や水を浴びせかけてきたとしても、これほどは驚かなかつただろう。姉から十分本気で顔を張られたことは何度もあるし、お返しに顎に一発叩きこんだこともあったが、今回はまったく違うのである。私はあまりに混乱してしまい、叩かれたことが信じられないほどであったが、その混乱は以前のものとはまったく質が違っていた。ミス・モーガンはそれを見て取ると、にっこり笑った。それから彼女は帽子を脱ぎに部屋から出ていってしまい、私は一人残され、脚なし椅子に腰を降ろし、なんとか考えを取りまとめようとしていた。

私に思いつけたことといえば、ミス・モーガンが私に用がなくなつて、荷造りしてロンドンに帰ってしまったら、私はどんな気持ちになるだろうということくらいだった。それから心の中に何かが湧き上がり、こう言った――「後は野となれ山となれ」。それが

ら私は脚なし椅子に背をもたせかけ、足を伸ばして煙草に火をつけた。この次ミス・モーガンが私の肩をつかんでゆすつたら、キスしてやろうと考えていた。ともあれ、彼女が戻ってきた時には、彼女が仕掛けるどんなゲームにも付き合う覚悟でいたし、こちらからも二三仕掛けてやろうと思いはじめていた。しかし、彼女の姿を見るや、ミス・モーガンになにか仕掛けるなど不可能だと感じた。彼女はそういう手合いではないのだ。

それから、もちろん私はまたいつものように無作法に振る舞ったのだが、これはまた別の意味を持っていた。彼女はそれを理解すると、私の肩をぼんとたたいた。私はその手を握って、キスをした。するとなんと名状しがたい方法で、すべての物事がうまく収まってしまった。ともあれ、私はその後彼女と一緒にいるだけで本当に幸福な気分だった。モーガン・ル・フェイと私の間には、もはや礼儀作法を不可能にするなにかがあった。私はそれが嫌だった。それではすべてが台なしになるような気がしたからだ。私とて、結局のところ男であるから、興奮したことも度々あったことは認める。それでも、私は本当に嫌だったのだ。この時から私は彼女をモーガン・ル・フェイと呼びはじめた。二度とミス・モーガンと呼ぶことはなかったが、一方、彼女をヴィヴィアンと呼ぶこともなかったのである。ともかく、面と向かつては、である。

私たちは食堂に入り、素晴らしい鍋料理を楽しんだ。後に彼女がよく作ってくれたことになったものだった。彼女の料理の手並みを見ていてだけで、それは魅惑的だった。食堂には長い厚手のテーブルがあり、その一端に彼女がすべての道具を揃えていた。トレスオーウエンのおかみさんが準備をして、それから退出すると、要塞には、いや半島そのものには私たちだけしかいなかった。大きな銅製の鍋があり、その下にはアルコール・ランプが燃えていて、脇にはメボウキやパプリカなどの珍しい香辛料が山ほど皿に並べられていた。ヴェネガーの代わりに用いる酸っぱくなった白ワインもあった。こういったものを使って、モーガン・ル・フェイはあらゆるものをクリーム、バター、ブイヨンで料理するのである。また彼女が世界各地で製法を学んだ不思議なパン類もあった。英国にあるたった一種のパンとは大違いなのだ。また、彼女はトレスオーウエンに命じて、あらゆる煮物用野菜を作らせており、私に生の浜菜やバラモンジンを食べさせたが、これがまたいける味だった。彼女は文字通り中華料理からペルー料理まで作ることでできた。そして私はかりかりした焼きそばを髪の毛にからませずに食べる法を学んだし、マテ茶の味も覚えた。それでいて、彼女はまったく所帯じみたところがなく、中世風のドレスを着て、銀の長匙を手に長テーブルの端に立っていても、まるで祭壇に立つ女司祭のように見えるのであった。そして青い炎の上で鈍く光る銅製品は、魔女の大鍋のよ

うであった。テーブルは非常に美しい細長蝋燭に照らし出されていた―それは素敵であり、外からは海の永遠の波音が聞こえてくる。私は座ったまま、食事の用意が整うの待ちながら、彼女を見つめていたものだった。幸運にも、この女性を家庭に閉じ込めようとするのは愚者だけであると悟るだけの分別が私にもあった。アマツバメを鳥籠に閉じ込めようというようなものなのだ。アマツバメの美しさはその飛翔にあるのだから。

本人が言ったように、彼女は大変な年寄りで、神変不可思議の術で驚くべき若さを保っているのかもしれない。あるいは、彼女は非常に賢い女性で、なにか不思議な自分だけの遊びに興じているのかもしれない。私にはわからなかったし、あれこれ考えるのはとうに止めていた。私にわかっていることは、彼女はモーガン・ル・フェイであり、彼女のような人間は二人としないということだった。

さて、私と彼女の最初の食事はこんなところであり、私はテーブルに肘をついて一方に座り、手に顎を乗せて、彼女を眺めていた。何時間眺めていても満足だっただろう。彼女はまた酒類の巧みな使い方を心得ていて、その場の雰囲気とうまく作り出すのである。私は、節制するほうであるから、その恩恵に十分浴した。「ジョージ」の店には古株のソムリエがいて、彼が弁護士たちを酔っ払わせるやり口は大変に愉快なものだった。

彼は思いのままに客を泥酔させることもできれば、一晚中しらふのまままで過ごさせることもできた。そして彼に對してしかるべく紳士らしく振る舞わない者がいれば、翌朝そいつは頭をなくしているも同然だった！ 彼が混合しているものは酒類ではなく、飲ませ方であつた。私は競売で「ジョージ」のためによくワインを購入してやつていて、老ソムリエとも数多く相談をしていたから、彼の手練を私が評価していると知つた時、多くのことを教えてくれたものだった。いかなる道であれ、専門家の話を聞くのは大変に勉強になるのである。

世界に通じたモーガン・ル・フェイは、あらゆる場所の聞いたこともない小さなシャトーや地所から品物を取り寄せていた。こういつた所では、非凡な逸品が生産されているのだが、量が少ないため一般市場には出回らず、土地の購買者のみに知られているだけである。どんな田舎の宿屋でも、氣にいつた品を見つければ、彼女は産地を聞き出して、製造元を捜し出し、生産者と友人になるのであつた。私のような屋内人間にとつて、葡萄畑の写真を眺めながら、そこから作られたワインを飲むということは、大変に心をそそられるものだった。もちろん、荷持ちのよくない品もあり、そういった場合は飲めなくなつたワインを海に注いで樽を投げるしかなかつた。しかし大部分は大丈夫で

あった。モーガン・ル・フェイはきわめて有能な鑑定家だったからであり、素晴らしい逸品もかなりあった。

彼女の料理はおなじみサリーの料理とはまったく異なる次元のものだったが、もちろんサリーの料理もそれなりに良いのである。サリーは材料から美味を引き出す処方を重視しているのであるが、モーガン・ル・フェイは食物を料理の素材としか見ていなかった。姉の家事と来た日には、料理人にあれが食べたいと指示を出し、肉屋に注文を出し、両者に面倒をかけるだけなのだ。姉は鍋など大嫌いだったし、料理のことなどはまったく知らないに等しかった。それでも彼女は階段が清掃され、レースのカーテンが白いということを見届けるだけで、自分が良い主婦であると見なしているのであった。

私たちは食事の後、岩場の突端までぶらぶら歩き、月の光を浴びた海面を見に行った。深海から波が押し寄せて自分をさらっていくのではないかと思ひ、わざわざ海藻の間を歩いて行って見たが、なにも起こらずじまいであり、ついにモーガン・ル・フェイが躍起になって私を呼び戻した。すべては死んだように静まりかえっていて、ただ岩場に打ち寄せる銀の鈴のような波音だけが聞こえた。今は止水であり、潮は最下点まで引いていたからだ。ほどなく私たちが眺めているうちに、すべての海藻が一方向に流れはじ

め、潮が戻りはじめたことがわかった。それから私たちは屋内に入って暖炉のそばに座った。薪乗せ台の海豚が私たちにほほ笑みかけ、私は本当に幸福だった。

第十三章

翌朝、私は木炭を使ってあまり滑らかでない漆喰の壁面いっばいに下絵を描きはじめた。要塞の改装時に漆喰を塗った時、私は壁画のことなど契約を受けていなかったし、国防省のほうは国家の英雄たちには白塗りの壁でお釣りがくると考えていたようだった。しかしミス・モーガンは壁面を石膏で固めようという私の提案を却下し、結局トレスオーウェンが壁面を膠で上塗りすることで話がついた。次に会った時、ミス・モーガンから膠について一言二言あった。私は貯水槽でカラスが遊び放題だったころの要塞の話をしなければならなかった。すると彼女はこの場合の無慈悲を有り難く思ったようだった。膠はただの牛の踵を煮込んだものであるが、その匂いは牛一頭分に匹敵する。

広い部屋の片面全体は暖炉とそれを囲む書棚で占有されていた。自分の暖炉を自分の蔵書で囲むというのは、かなり良いアイデアのように思っている。私は自分の部屋をそうしている。モーガン・ル・フェイは、さらにヒマラヤスギ材の書棚をこしらえていた。

この木材はそれは素敵な香を書物に与えるのである。私は彼女の本をいつも借りていたから、よく知っている。いずれにせよ古書には魅力的な香があるし、それがヒマラヤスギ材の書棚に保管されているなら、手に取るだけでも快感である。

書棚以外のスペースとなると、狭いゴシック窓の間の壁と、奥にあるまっさらの壁である。まず私は風が吹く空と陽光に似合う穏やかな何もない海の図を考えた。それから漂いはじめる霧と油のような暗い海、ほの見える事物の図である。続いて鋼色の空に嵐含みの天候、風に白く砕ける波頭の図。最後は月明かりに照らされた凧の海であった。

これらはすべて海面上の情景であり、部屋の奥の壁は一面仕切りもないので、ここに深海の宮殿のパノラマを描くことにした。人魚やらなんやらを配し、中央には海の女司祭としてミス・モーガンその人を描くのである。この件は了承されたが、中央の絵は別であった。このことは彼女に教えていなかったし、ゆえに意見もなかったのである。彼女の衣紋はキプリングの言う「むちやくちや女神」風となり、顔はべた塗りとなったが、これ即ち霊感的絵画の様式なのである。

こんなことをするのも、この壁画が自分の創作以上のものになりそうな気がしていたからだ。光と陰影の中に様々な顔が浮かび上がるだろうとわかっていた。ちょうど、応接室に転がっている大昔の雑誌に見られるような、古い隠し絵みたいな感じで、まず普通の風景が目に入るが、よく見ると輪郭が輪郭を形成していて、騎手が馬にまたがっているのがわかるといった具合。どういいうわけか私は、全霊をこめて描き上げれば、海の背後にいる生命が私の壁画の中に自らを顕すだろうと信じていた。

第一回目の週末でなんとか木炭の下絵を描き終えた。これは予想以上の早さといえた。私はきつと時間の大部分をミス・モーガンとのおしやべりで費やしてしまうだろうと思っていたし、事実、そうだったからだ！ 月曜の朝、私は借りた本を山ほど車に積み込んで要塞を後にした。頭は蜂の巣のようにぶんぶん鳴っていた。モーガン・ル・フェイは実際、ディックフォードの独身男には強烈すぎる存在なのだ。この週ずっと、顧客は私がどことなくぼんやりしていることに気がついたようだし、スコツティーは私を不機嫌そうに睨んでいた。オフィスの小僧はあからさまに同情的だったから、一発殴ってやってもよかつたくらいだったし、きつとスコツティーがやってくれたと信じている。

ミス・モーガンはテンペラの話をしていたが、よく調べた結果、あの海風ではすぐに剥げ落ちるだろうと思った。どのみち、あれだけの広さをテンペラでやれというのはどれくらい詐欺のようなものだった。そこで次の金曜に私が室内装飾用のペンキの缶を車に満載して現れた時、彼女は大喜びだった。テンペラの代わりにペンキでなにが悪い？

ペンキには厚みがあるから、大胆な効果という点では右にでるものがないのだ。それに雲と波はペンキを棒でなすりつけて、櫛で削ることで素晴らしいオパール光効果が加わった。ミス・モーガンは私の作業を眺めながら楽しんでいたが、その効果が素晴らしいことを認めざるを得なかった。ともあれ、私は素早く効果を上げていった。

さて、背景がすべて終わってしまうと、まだ仕上げの部分が残っていた。しかし、これは靈感待ちであった。私の意図としては、機会を捕らえて海と交信するつもりだった。その時に海がどんな状態であれ、それに相当するパネルに取り掛かるのである。最初に海から得た気分は、実にふさわしくも、風が吹く空間と碎ける光であった。そこで私は岩場の突端に行き、ミス・モーガンが抗議するのも構わず、周囲の海の生命力を感じようとした。

突端に立ち、島ひとつ見えない西を見ると、陸地感覚はすべて消え失せた。鷗が一羽二羽飛来し、飛び去っていった。流木が一つ、先を急ぐ潮とともに流れていった。それから海も空もからっぽとなり、私は波の間に一人きりだった。

太陽は海面に所々きらめきを残しながら通過していった。あちこちで波頭が白く砕けていたが、海はほぼなめらかに流れていった。岩場にぶつかりわずかに盛り上がることもすらなかった。今日の海は強さを持っていなかった。それでいて、甘くみてはいけぬ海でもあった。西には秋の午後の夕闇以上に暗いものがあった。ここに立つと体が冷えてくるし、潮は満ちつつあった。やがて波が私の足首を捕らえ、私を慌てさせた。そこで屋内に戻ると、モーガン・ル・フェイが座って煙草を吸いながら、流木の焚火の横でお茶の準備をしていた。私の足は濡れていたし、なんの靈感も得られなかった。おまけにかなり安っぽい気分にもなっていた。しかし、私は元気を出し、その晩は遅くまでおしゃべりに興じた。翌朝は、朝日の岩場に行こうという誘惑に抵抗して遅くまで寝ていた。起床すると、私は最初の壁画に取り掛かった。

さて、あの岩場で自分の身に何が起きていたのか、波が足を捕らえたことにどんな意義があったのか、よくわからないのだが、ともかく仕事にかかるや、自分の絵に力が備

わっていることがわかった。そして私は心の目で海の背後にある生命力を捕らえていたし、また海の背後にはある知性が存在していることも知った。それは私たちのような精神ではなく、もつと広大で、もつと単純なものであった。四大の生命は私たちの生命と、段階に於いて異なるが、種類は同じものであった。それは蜂の巣や牛の群れと同じ種類の団結した存在であり、一つの体にまとまってはおらず、すべてを覆っているものであった。そして私がこの生命を人間の顔に見られるような線で表現することにしたとしても、なにが悪い？　そこで私は波長の短い波に影のような顔形を与えた。こちらに眉、あちらに口という具合だが、どこも、完全な顔はなかった。そしてこれら各部分が同様の生命を表していた―輝く、非人間的な、感情のない生命力を。それなりに極めて美しいものであったが、ある種の若い娘に見られるように、まったく魂というものがなかった。私の思うところ、人は精神を背後に控えてこそ、偉大なる美を獲得するのだろう。モーガン・ル・フェイのように。

私は一日中、小波の海生命を描いていた。私の足首を捕らえた小波だった。陽光の中にはなにも考えない若い生命の躍動のきらめきがあったが、雲の影に隠れると、まったく感情がなくなることがわかる。描き終えた時、私はかなり疲れてしまった。するとモ

ーガン・ル・フェイがやってきて、私の横の円椅子に腰を降ろし、私に話しかけたが、私は流木の焚火の前のソファーに伸びてしまっていた。疲れすぎて、とにかく休息を取らないと、食事も喉を通らないほどだった。すると彼女はスター・サファイアの首飾りを外して私に手渡し、眺めるように言った。その不思議な光条が炎のひらめきを受けてきらめき揺れるさまを眺めると、奇妙な磁気が感じられた。彼女はしばしば私に首飾りを触らせてくれたものだったが、その理由は今でもよくわからない。

その晩、私は海の夢を見た。またモーガン・ル・フェイの夢も見たが、彼女は海の女司祭ではなくて、むしろ月の女司祭だった。そして私はなぜだか月が海を支配していることを知っていたし、モーガンが海の女司祭よりもずっと大きななにかであることも知っていた。

翌日、彼女と一緒に丘陵の頂上までケルンを調べに歩いて上った。丘陵の背骨の部分を頂上まで上るのはそれほど大変なことではなかった。ちょうど地層の隆起とともに坂になっていて、ウサギたちの間を道路から一直線に上ることになり、私はなんとかやってのけた。

このケルン群は興味深い代物だった。私にとって、わずかに残る遺跡から忘れ去られた人々の生活を読み取ろうとすることほど、心を奪われるものはない。この海の丘陵に司祭たちの学舎があったことははっきりしていた。古代人たちは、神殿を設置する際には、常に人目を奪う場所を選んだものである。どんな場所であれ、驚くような特徴があったなら、その場に古代の宗教遺跡を探してみるとよい。もっとも、列石や支石墓がない場合、見つけるのはそう簡単ではないだろう。ドルイドの塚は他の塚と変わりがないし、ケルンはすぐに四散してしまうからだ。

しかし、孤立したこの丘陵では、誰も浅い土を耕したことはないし、あの危険な道路では石を運び出す気も起きないから、ケルンは崩れた場所にそのまま残っていた。草の上に着いた石の対称的な配置から、ケルンの元の様子をたどることができた。ケルンは対になって丘陵を背骨ぞいに下っていた。参道脇にちゃんとしたケルンがすべて並んだ凶はきつと素晴らしいものだっただろう。乾式石堀と同じ造作の背丈六フィートの白いピラミッドだったのである。

たぶんケルンの参道は岬の鼻から見張り用洞窟に至る危険な山道が終わる地点まで続いていたのだろうと推測した。そして確かに、ワラビの間やウサギの群棲地の柔らか

い土の上に、予想通り、石をたくさん見つけた。私たちは大いにぞくぞくした。私は喘息のことなどすっかり忘れ、二歳児のように走り回った。丘陵の最頂点で、私たちは巨大な石が三つ、倒れているのを発見した。おそらくこの石は石門の二本の石柱と一本の棟石だろうと推測した。それから、計測器具なしで判断するかぎり、この石門からはベール・ノールの頂上にある同様の石門、いや、環状列石が見通せて、夏至の日には日の出をもろに捕捉できるはずだった。

また、ケルンの道が岬の鼻まで伸びているのだから、要塞がある場所にもなにか特別のものが立っていたはずだと推測したが、国防省がその道をとことん破壊していたため、すべてが消し去られていた。しかし、私はミス・モーガンに、小潮の日の海焚火の幻視の話をした。そこで私たちは、あの岩場の先のほうを調べれば、なにか痕跡が見つかるかもしれないと思った。これは実にぞくぞくさせられるものであり、おかげでトレスのおかみさんは私たちを夕食に呼び戻すために三度も銅羅を打ち鳴らすことになった。その夕食ときたら！—おかみさんが英国の安息日は似合っていると信じる代物であり、私たちはその後、当然ながら、うとうととしてしまった。

うたた寝している間に私は不思議な夢を見た。なにを夢見たのか覚えていないが、とにかく白い長衣をまとった司祭が退出し夕闇の中に消えていき、その時、トレスのおかみさんが消えかけた暖炉に薪を放りこんだので、私たちは目が覚めた。私たちは岩場の突端まで夕焼けの名残を見にいったが、その晩は夕焼けがまったくなかつた。すべては鈍く、冷たく、鋼のような灰色であり、私たちは喜んで再び屋内に戻った。

紅茶を飲みながら、私はモーガン・ル・フェイにさつき見た夢の話をした。すると彼女は妙な顔で私を見た。彼女には驚いた様子はなかつたように思われたが、どうやら彼女の希望通りに、いや、それ以上に物事が進んでいるようだった。彼女は一言も発さずに立ち上がり、部屋を出ていった。戻った時には革靴を手を下げていた。彼女はそれを開け、中から大きな水晶球を取り出した。

「よければ、覗きこんでみて」と彼女は言い、それを私の手に置いた。

大きさの割りには大変重いものだったので驚いた。私は膝に肱をつけて重量を支え、暖炉の炎を映す水晶球の中心部を凝視した。

最初に手にした時には氷のように冷たかったが、次第に私の掌の温もりが移り、そうするうちにまるで内部の光が明るさを増したかのようだった。きつと暖炉の炎が火勢を増しただけだったのだろうが―わからない。それから、水晶球のかすんだ黄金色の明るさが一点に集中しはじめて、みるみる動きだした。しばらくして、その一点が動くのは、呼吸するたびに胸が肱を動かし、水晶球内の光の焦点をも動かしているからだとわかった。しかしこの時はそんなことは知らず、ただ動く光に魅了されていた。きつと心霊現象が起こりつつあるのと考えていた。私が出くわした客観現象にはすべて自然現象的説明が見つくものであり、真の妖精の王国は心の内にあるのだ、とこれまでの経験が語っている。

ともあれ、モーガン・ル・フェイの予想通りだったのだろうが、動く光の点は私を見事に催眠状態にしてしまった。そして水晶球の黄金の光は奥深く広がっていき、周囲に溢れ、私を黄金の雲で包み込んでしまった。そして霞みのような光を通して、海の女司祭の質問を発する声が聞こえてきた。

そこで私は見たままを彼女に告げた。丘陵を下る長いケルンの対列、月焚火の白いピラミッドが見えた。いま要塞が立っているこの場所には、石造りの王宮があった。クノ

ツソス宮殿のような、古雅なものだった。岬の鼻には炉を組んだ広い平坦な場所があった。潮が最下点に達した時に、そこで海焚火を燃すのだ。潮が満ちれば、波が炎を迎える。私が夢に見たのと同じだった。薪は芳香を放つ木材で組まれ、また陸地からの生け贄と貢ぎ物も備えてあった。海のほうが年長であるからだ。燃え盛る焚火の周囲には白衣金帯の剃髪した司祭たちが半円に並び、焚火を嘗める最初の大波を待っていた。そして炎の山がしゅうしゅうと音を立てて水中に没する時、彼らは海と陸の平和をつなぐ海の賛歌を詠唱し、月が支配者であることを思い出すよう海に説き、月に従うよう諭した。司祭たちは最古の被創造物としての海、丘よりも古い海、すべての生ける物の母たる海に敬礼をなした。しかし彼らは海に命じた。月こそが磁気的命を与える者であることを、すべての生命が生じたのは海面の月光からであることを思い出せ、と。海は無形のものであるが、磁気を持つ月は水の生命に形を与えるものであるからだ。

こういったことを語ってから、目が覚めた。目をぱちくりさせた。するとモーガン・ル・フェイは私の手から水晶球を取り上げ、今夜はこれまでと言った。しかしあいつたものを見てしまった以上、もう忘れることはなかった。その後、忘れられてしまった

生活を再構築し、その古代の様を目の当たりに見ることは、私にとっては簡単なことになった。

この経験が及ぼした影響は奇妙なものだった。大椅子に座っていると、喘息発作後初めて、楽に深呼吸できるようになったのである。そして私は、ロンドン行きを諦めて以来閉じられてしまったと思っていた人生の門が再び眼前に開けてきたことが、どう否定しようもないほどわかったのだ。私の人生が今一度躍動し、前進し、もはや苦汁のうちの後退することはない、とまで悟ったのであった。

第十四章

私の人生は週末と週末がくつつきあっているようなものだった。スコッティーの視線はますます不機嫌なものとなり、オフィスの小僧の目はますます真ん丸になっていった。私が元氣よく月曜に職場復帰してくるごとに、ますますぼんやり、心ここにあらずの体だったからだ。それでも、このところ喘息発作はなかったし、私としては、肉体が住みやすくなるものなら、不滅の魂がどうなろうと知ったことではなかった。ほとんど周囲に注意を払わない母ですら、私が喘息から解放されていることに気づき、いつか私が喘息などかからないくらいに成長するだろうと思っていたとの声明を発表した。私は何歳になれば母にとって大人になるのだろうか、としばしば考えさせられたものだった。

私はある種の夢の世界の住人と化しており、自分にとっての現実は一モーガン・ル・フエイと要塞だけだった。しかし、その補償として、別のものも現実となっていた―月と海の不思議な王国である。一度波間に様々な顔を見てしまうと、私はそれ以降他のなにも見えずじまいであり、波が打ち寄せてくれば、波の気分がわかるようになった。私に

とっては、あらゆる岩が人物となり、やがて風の気分もわかるようになりはじめた。もちろん、火もそれ自身の生命を有していた。

《不可視》と接触することは、酒びたりになるに等しい——一度始めてしまえば、やめられなくなるのだ。また、ある場所の過去を白日夢として見ることも自分の思いのままであるとわかった。こういったおもちやを手にしてしまうと、ろくな楽しみもない現実生活を捨て、《不可視》の秘められた小径を探求するのも当たり前ではないか？

この奇妙な意識の発達とともに、モーガン・ル・フェイと私の関係に対する洞察力も増してきた。私たちの間には大変不思議な共感が存在しており、これは自分にとって非常に意味のあることだった。私とて、彼女が小指一本曲げるだけで、自分がよるこんで頭から恋にのめりこむことはわかっていた。ディックフォードの童貞処女にとって、これは驚くに当たらなかった。

しかし、私はディックフォードで唯一の花婿候補的独身男であり——つまり、喘息も候補の材料とするならば、だ——、また電気仕掛けのウサギのように追っ掛け回されていたのであるが、私の頭の中にはいつも次の一節が鳴り響いていた——

「おいらの今を考えて、昔のおいらを思いだしや、

無駄に身投げしたよな気分だな」

土地のかわいこちゃんたちと、かなりいちやっついてきたことは認めるが、私のもって生まれた警戒心のために、誰ともそれほど深入りせずじま이었다から、向こうも教会を期待することはなかった。私のおやは州の半分で馬鹿な真似をやっていたから、私は生まれる前から慣らされていたという人もいるだろう。名誉のために書いておくが、私のいちやつきは首どまりであった。ある意味で、これは残念なことであろう。恋愛はハシカのようなものであり、適当な年令で罹っておけば小児病でしかないが、年取ってから罹ると、これは大変なことになるのである。

私の喘息が収まってしまうと、掛かりつけの医者が恋でもしたのかと私に尋ねた。

「おいおい」と私。「おたがいディックフォードはよく知ってるじゃないか。あり得ると思うかい？」

そして彼もあり得ないと同意した。ほどなく、本物の恋とおぼしきものの範囲内に入ると、私はいつ高熱を発しても不思議ではなかった。

ディックフォード境界の女性は、どういう血統か知らないが、私の見るところ、極めて性的魅力に乏しい。郡部のほうも似たようなものである。ある谷には丸ぼちや顔の大集塊がいて、次の谷にはあらゆる藪にかわいい娘がいるというように、分布に偏差があるのかもしれない。ともあれ、ディックフォードは誘惑という点では無に等しい町であり、おやじがどうやってあれだけのことをなしたのか、私には謎である。この方面の良心を持ち合わせないという点では、私はおやじの血を引いているのだらうと思う。もともと、私の禁欲主義は主に美学に起因するのであって、およそ倫理的ではないのである。もしモーガン・ル・フェイが本当に欲しいということであれば、それはもう、いつていただろうと思う。しかし心の奥底で、私は自分が欲していないことを知っていたし、その種のこととはなんであれ魔法をぶち壊し、すべてをずたずたにするだらうともわかっていた。

しかし、モーガン・ル・フェイが私の恋をまったく気にしていないこともわかっていて。彼女はちっとも心配していなかったのだ。さてディックフォードでは、もし男が恋に落ちたなら、結婚を申し込む。断られれば、適当な期間会わないほうがいい。しばらく親戚の元にも身を寄せる。また、もし結婚式ということにならないのなら、社会的地位に応じて週末旅行に出掛けるか、生け垣の裏のほうに行く。言葉を字句通りに解釈するなら、私はこのところずっとミス・モーガンと週末旅行をしていたのであり、彼女がディックフォードの誰かの目にとまれば、私たちの評判は完璧に地に落ちていただろう。ゆえに、この契約はあらゆる短所を備え、密通の利点をなんら備えていなかったといってもいい。

それでも、私はこの不可思議な逢い引きから確かなものを受け取っていた。もつとも、それがなんなのか、述べることは難しい。当然、しばしば私は貰う以上のものを要求したり、続いて激高したり興奮したりしたが、モーガンはそれをなんら気にかけていなかった。まるで騒ぐペットを物置に放りこんで、その件に触れないみたいなものだった。ともあれ大事なことは、彼女が私に恋をさせてくれたことであり、それも自然に、しかもなんら心配することがなかったという点である。おそらくこういった物事には個人差

があり、私のような立場に置かれた人々の中には、肉切り包丁を手に大立ち回りを演じる者もいるだろう。モーガン・ル・フェイとの関係が終わったら、岩場の突端から入水するつもりだったことは私も認める。私には、家族と喘息とディックフォードに戻る楽しみなど見いだせなかったからだ。一方私は、ついに人生を生きるに値するものにしてくれるなにかを手に入れていたし、それでいて幻覚も良心の呵責も覚えていなかったから、強迫観念にとらわれていたわけでもなかった。かかりつけの医者が、私を屋根裏部屋で診療した後、馬鹿話に興じながらこう言ったことがあった。男女関係に於いては、人はおおむねサディストとマゾヒストに分かれるものであり、平明な英語で言えば、長靴とドアマットとなる。サディストはその社会的地位に応じて、夫人をぶんなぐるか、執事の前で恥をかかせる。そしてマゾヒストは夫人にとことん張り倒されるまで決して幸福にはなれない。人生とは奇妙なものである。私自身はマゾのほうに傾いているような気がするが、しかしぶつたたかれるにも限度があるというものだ。

ともあれ、手の届かぬ月の如きモーガン・ル・フェイは、私の靴下の穴を繕うモーガン・ル・フェイよりも、はるかに私の好みにあっていた。このころ、私は月の魔法と海の宮殿の夢に浸っていて、我が恋人は大気の力の姫であると決めていたから、彼女が肉

と血を持つ身に墮落してしまつたら、すべては死海の果実のように塵と化してしまつた
だろう。モーガン・ル・フェイは、恐れも甘えもなく私に恋をさせることにより、また
惜し気なく女性の磁気を私に向かつて流すことで、多くの結婚に欠けているものを私に
与えたのであつた。無論、私は彼女に指一本触れはしなかつたのであるが。道徳家たち
は昇華の話をするが、それはモーガン・ル・フェイと私が要塞にこもつて月の魔法で学
んだものを知らないからだ。彼女が私に恋をさせてくれたやりかたは、罪の救済とい
点では決して悪くないと思われる。また、変な結婚よりははるかに見た目もよかつた。
もちろん、愛を感じた時に相手を殴らなければ収まらないタイプの人間にとつては、話
は違ふだろうが。

そういうわけで、私たちはとてもうまくいつていた。日に日に要塞は私にとつての海
の宮殿と化していったし、モーガン・ル・フェイは海の女司祭となつていった。私はこ
の世では決して体験できないと思つていた別の次元に生きるようになり、とても幸せだ
つたが、たぶん少し発狂もしていただろう。しかし、なんであれディックフオードと喘
息よりはましなのであつた。

かくして幾週も過ぎ―私にとっては、幾週末が過ぎていった。モーガン・ル・フェイとの交友によって、なにか新しいものが私の生活に入り込んでいた。私は彼女の書物を借り、彼女は私に素晴らしい料理を作ってくれ、ワインの鑑賞法をすでに覚えた私に食物の味わいかたを教えるようになっていた。それから彼女の人生を語るのである。ついでに人生哲学をも語るがあったが、それがまた私がちゃんと育てていけばそう考えただろうというほどじっくりくるものだった。私が原罪と見なしていたものは、モーガン・ル・フェイの手によって道德規範へと転化させられていった。ともかく喘息が格段に良くなったのだから、問題はなかったといえよう。

しかし他にも良くなったものがあった。医者という言葉を借りれば、倫理癒着の破壊とともに生じたとしかいいようのないものであり、これつまり私のデザイン創造能力の向上なのである。とある現代絵画の巨匠について聞いた話を思い出す。好青年で母親思いだったころの彼は、チヨコレートの箱絵みたいな絵を描いていたそうである。しかし休日に岩場から飛び込みをやって頭蓋骨を骨折してから、彼は偉大な芸術家になった―しかし母親のことなどまったく無視するようにもなったという。

私はモーガンの部屋の壁を派手にたたきつけるように塗りはじめた。モダンアートに
関して一言。やるうちに独自の技法を考案することもできるし、成果が上がっているう
ちは、苦勞して伝統を学ぶ必要もないのである。粗い石膏に室内装飾用ペンキを塗りた
くり、整髪用の櫛で撫でつけたからといって、私が芸術に反しているわけではない―実
際、たいしたものだと言ってくれた人々もいた。もっとも、私がプロの製図技術訓練を
受けていた身であることも書いておく必要がある。父が早世して、まだ若い私を責任あ
る地位に放りこむようなことがなかったら、私は建築家になっていたはずなのだ。ゆえ
に、私が波や雲を一塊として描く時には、建築家本来の比率感覚がものを言っていたの
であり、一々描くよりはずっといいことを知っていたのであった。

かくして幾週も過ぎ去った。デザイン上の力仕事はすべて終わってしまった。しかし、
内奥の精髓を表す薄明かりの姿形に取り掛かるには、まだ海の雰囲気から来る靈感待ち
であった。浅い風ぎの海のパネルはすでに完成していて、それを見てモーガンは感動し
ていた。しかしこれは序の口なのであり、まだまだ続くのである。

やがて、続きが始まった。私はある土曜の朝に目覚め、窓から外を眺めたが、向かい
の煙突が見えなかった。

「やれやれ」と独り言の私。「こっちがこの調子なら、浜のほうはどんなだろう？」

いまましい霧を目にするや、もちろん私はぜいぜい咳きこみだした。一晩中やすらかに眠っていて、その間も霧は周囲に溢れていたのであつたから、喘息がどれほど心理的なものか、わかる。わかつたからといって、どうなるものでもないが。

私が新しいシャツに着替えようとしたが、姉が繕つてくれているはずの穴がそのままだった。彼女はもつと高次元の用件にかかずらわっていたのである。そして私がぜいぜい咳きをするのを見るや、姉はシャツを引つたくつて、こんな霧の日に要塞まで行ける体調ではないと宣告した。そこで私は生協までガウン姿で行き、工事人夫用の安物服を数着買い、それをうちのツケにして、包装してもらわずに腕に下げて帰つてきた。これは姉にもこたえたようである！ もう二度とこの手のちよっかいは出さなくなった。世間体を重んじる人間は、重んじない人間に対しては大いに不利なのである。

それからベアードモア（うちの医者）のところに行き、一発薬を打たせた。

「運転できる状態じゃないよ」と彼は外に停めてある車を見ながら発言した。

「ぼくが気にしてないんだから、先生が気にすることはないでしょう」と私。

「しかし道路上の他の人はどうする」と彼。

「他人など知ったことか」と私。

「それが恐いんだよ」と彼。

町中を運転する分には、それほど問題がなかった。太陽は霧の花輪に囲まれた真鍮の盆のように見えた。しかし旋回橋を渡って湿地帯に入るや、霧は一気に濃度を増した。視界が十二フィート以上あるとは思えなかった。幸い、道路は直線で続いていたし、障害物といえ、たまにいる牛くらいのものであった。それでも私はかなり注意深く運転した。道路脇には深い側溝があるし、車はサルーンだったからだ。サルーンに乗っていれば、水深三フィートで溺死できる。私は延々時速十マイルで運転し、やっと農場までたどりついた。トレスオーウェンが車の音を聞き付け、外に出てきた。彼はこの朝、要塞まで車を走らせることなどまったくできず、おかみさんが歩くしかなかったとのこと、私は思い止どまるよう懇願された。しかしあの急勾配を私が徒歩で行けるわけがな

かった。そこで、私になるようになるだろうと言うと、彼は溜め息をついて、私に牛乳を手渡した。モーガンはどうやらこの瞬間、缶詰で生命をつないでいるようだった。

急坂を上ることには問題がなかった。路肩には十分に土手が作られていたから、溝にはまって走るのも同然だった。しかしヘアピン・カーブでは危うくオーヴァーランするところだった。土手に生命を救われた。それでも、私はかなり土手の土に突っ込んだが、ローでゆっくり運転していたから、私の車は怒り狂ったように突破していった。私はくたびれた時になるだけギヤチェンジをしなくてすむように、いつも大馬力の車を運転しているのである。

しかし私はなんとか生き延び、丘陵の頂上部に到達した。すると霧がもろに顔面を襲ってきた。冷気がゆっくりと動いており、霧は大きなうねとなって地をすべっていた。風帽の外側だけでなく、内側にも霧が入り込んできた。こんなのは初めてだった。巨大なヘッドライトを点灯してみたが、バッテリーの無駄使いになるだけだったから、すぐに消した。それから一々自分の足で前方を確かめてから、車を動かすことにした。これなら車が脱輪することはないが、自分がつまづき海に真つ逆さまという可能性は多々あった。まったく先が見えない有り様で、実際、車のボンネットの先端が見えなかった。

しかし私と車はなんとか前進し、ラジエーターは上り坂と亀の歩みのために沸騰寸前だった。私といえば、もう二度と息ができないのではないかと思っていた。

ほとんく私は岬の鼻に続く坂が始まったと感じ、神に感謝した。私はクラクションを鳴らして到着を知らせた。するとモーガンが出てきて、大きな門を開けてくれた。有り難かった。こう息が切れていては、自分であれを開けることはまず無理だっただろう。髪の毛に霧の珠を宿し、海緑色のガウンを着て霧の中に佇む彼女は、海の女司祭そのものだった。

中に入って暖炉のそばでお茶を飲むように言われたが、私は断った。この瞬間の海的气氛を捕らえなかったからだ。そこで私たちは岩場の突端に行き、じつと立ちすくんだまま耳を傾けた。最初はまったく静まりかえっていたが、耳を澄ますと、大気は音に満ちていた。はるか南では、スターバーの灯台船が俗に母子牛と呼ばれる二連の霧笛を鳴らしていた。海上では二三隻の船が霧笛で応答し、漁船が見えないところで鐘を打ち鳴らしていた。海のかすかな盛り上がりや岩の間でざあざあ音を立てており、霧は不断に動き続けていた。どうしたって静寂をたたえているとは言えなかった。

この雰囲気を捕らえたかったのだとモーガン・ル・フェイに言い、一人にさせて欲しい、中に入ってコーヒーをいれておいてくれ、と頼んだ。私が突端に立つことをいつも嫌っていたから、彼女は少しぶつぶつ言っていた。しかし潮が満ちてきて、もう突端にも行けなくなつたため、彼女も同意して、屋内に戻つた。私は彼女が霧の中に去つていく様を見送つた。優雅な物腰で岩場を動くうちに、薄いガウンの裾がひらめきながら見えなくなつた。そして彼女は霧の中に消えてしまい、私は海と二人きりになつた。

煙のような霧が周囲をすっぽりと包み、足元の草の生えた岩以外はすべて消えてしまつた。霧に顔を撫でなられると、まるで奇妙な、柔らかい毛皮のような感触があつた。沖合の巨船たちは互いに咆哮を発し、漁船は海の巡礼のように鐘を打ち鳴らしながら、ゆつくりと動いていった。

それから霧に突然の裂け目が生じ、一条の薄い陽光が差した。そして私は初めて海面を見た。それは病んだような蒼白の銀灰色であり、疲れたようにゆつくりと起伏を繰り返していた。そう、まさに病んだ海だったのだ。霧が体に合わないように思えた。それから霧が再び流れ込んで裂け目をふさいだ。さまざまの魂のように鷗が一羽、岩場から鳴いた。もう十分だと思つたので、私は戻ろうと振り返つた。

振り返る時、私は足をすべらせ、あれという間もなく、満ち潮に膝までつかっていた。ニッカーボツカーをはいていたから、そう問題ではなかった。靴と靴下を脱ぎ、暖炉の前で乾かせばよかった。しかし、奇妙な気分ではあった。あの突端に立って海と交信するたびに、海は私をつかまえていて、回を追うごとにつかむ位置が高くなっていった。最初は足首、今度は膝である。最後のパネルを描き終えるころには、冷たい手が喉まで上がってくるのだろうか？

私が膝までびしょ濡れになっているのを見て、モーガン・ル・フェイは動転していた。きつと私と同じことを考えていたのだろう。あの哀れな知恵遅れの若者の死骸は結局あがらずじまいだった。彼は行きて帰らぬ人となってしまった。このあたりの海峡はここらへんで急に深くなっているので、水面に浮かんでいないものはなんであれ、「鱈とあなごの餌になる」のであった。しかし、モーガンがコーヒーをいれてくれ、乾いた衣服に着替えると、気分はよくなった。私の喘息はまったく消え失せていた。喘息を消すにはショックに限る。かつて私は発作中に階段から転落してしまい、階下の床の敷物に座り直した時、完全に正常だったことがある。

黄昏はすぐに終わり、午後三時には明かりを灯さなければならなかった。モーガンは灯油に樟脳とヒマラヤスギと白檀油を混ぜていた。そのため彼女のランプは燃えながら芳香を放つ。私はマフィンを少し持参していたので、それを流木の焚火でこんがり焼いてみた。するとマフィンには海の味と煙の薫りが加わった。モーガン・ル・フェイは料理に合わせて火を選ぶことを教えてくれていたし、ガス・オーヴンの単調な激しい炎は、柔らかい熱を発する焚火の燃えさしに勝るものではないと語っていた。それから彼女が言ったことだが、燃やす木にもいろいろあって、ある種の料理には杜松の燠火を使うしかないそうである。彼女は古い呪文を教えてくれた――

「杜松の小枝を二本取り

重ねて、重ねて、重ねなさい。

アズラエルの炎の燠火を見つめなさい――」

すると私たちは海が伸ばしてくる冷たい手のことも、行きて帰らぬ哀れな知恵遅れのことも忘れてしまった。

いつかアズラエルの炎の燠火を見つめてみる気があるか、と彼女が聞くので、それはどういふものかと聞き返した。彼女の答えは、ある木材で焚火をし、燃え尽きた後の燠火をじつと見つめると、その中に失われた過去が見えるのだとのこと。いつかやってみましょうと彼女は言った。そうすれば海丘や湿地帯の窪地の過去がすべて再構築されるだろうという。これをやれば——私は考えた——海が私の襟首をつかむだろう。私は死地に赴く剣闘士の敬礼を思い出した。

モーガンは缶切りで缶詰を切り裂いていたのだが、それでも素晴らしい夕食を食べさせてもらった。彼女はバターとパンくずを用いてアメリカ風のハマグリ料理をこしらえた。なにせ彼女は旅先からあらゆる料理を学んでいたし、また世界中を旅した女性である。彼女が料理をしながらおしゃべりするのを座って聞いているだけで、うっとりさせられてしまう。大きな銅鍋の下ではアルコール・ランプの青い炎がゆらめき、ずらりと並んだ小瓶は炎を反射してきらめいていた。まるで彼女が私のために《不死の靈薬》をこしらえているようだったし、正直言えば、事実そうだったと思っている。

月の魔法の術を心得ているモーガン・ル・フェイのような女性は、男の飲み物用に実に不思議な《不死の霊薬》を作り出すことが出来るのだ。女性の手には食物に伝わる力がある。ゆえに、ろくでもない料理人なら、その後ドッグフードを主食にすることになるうとも、くびにしたほうがいいのである。そんな料理人の手になる料理には毒がある。感受性の高い人ならわかるはずだ。

翌日私は夜明けとともに目を覚まし、岩場の突端に行つて、素晴らしい光景を目にした。日の出とともに霧が渦巻きながら退いていくのである。軽いさわやかな風が開けた海からそよぎ、霧を巻きながら押し戻していく。すると太陽は雲一つない薄青の秋空に輝き、風の引き波を作るさざ波をとらえた。海は全体淡い金色にきらめき、雪白の霧は海岸線に土手のように横たわつて陸地を隠していた。全世界が水没し、高い海丘だけが残つたかのようにだった。

私は丘陵に向かい、石門の残骸とおぼしき三本の石がある頂上まで登つた。そしてベール・ノールがゆつくりと霞みの中から現れるさまを見守つた。私は断崖の中腹にある陸向きの洞窟で毎日行われていた見張りのことを考えていた。私もあの見張りをやつていたのだろうか。夜明け前に足元も不確かな石段を降り、夜長をずっと流木の焚火のそば

で寝ずの番をしていたのだろうか。すぐにモーガン・ル・フェイに香木の焚火をやつてもらおうと心に決めた。ヒマラヤスギの入手先はわかっていた。夏の嵐で倒れたやつが近くにある。白檀は金さえ出せば買えるし、杜松は町の裏山に生えている。そう、私たちは老いぼれないうちにアズラエルの炎を焚き、その燠火を覗き込んで過去を知るのだ。それから私が朝食に戻ると、モーガン・ル・フェイは目を丸くして私を見つめた。彼女は私が岩場の突端から海に消えたものと腹をくくっていたからである。

その日一日、私は第二のパネルに取り掛かっていた。霧の裂け目から薄日が差す光景を描き、ゆつくりとうねる病んだ銀白の海を描いた。それから裂け目に生じた海の道には《幽霊船》の影が浮かんた。古びた形の船が帆をだらりと下げ、縁綱を海中に引きずっている。高い船首楼にはフジツボだらけの巨大な鐘があり、数世紀も海中に没していたかのように滴を垂らしている。竜骨前端から渦が生じていて、それ越しに船首にしがみつくと溺死した水夫たちの顔が見えた。その中には顔のない者もいる。哀れな知恵遅れと同様に、深みにはまって海蛇の仲間と化した者たちだった。

モーガン・ル・フェイはこういった絵にもろ手を挙げて賛成したわけではなかった。彼女は言った―こんな絵と生活しなくてはいけないの？恐ろしいわ、と。

私は答えた―

「君は海と生きることを選んだんだろう、モーガン・ル・フェイ。そして海は恐ろしいものなんだ。たぶん、いつの日か、君を愛しているぼくも、顔のないこいつらと同じようになるんだろうな」

彼女は不思議そうに私を見た。そこで私は言った―

「しかし、今のところ、ぼくには顔がある」

第十五章

モーガン・ル・フェイは、アズラエルの炎用に三種類の木材が入り用だと言った。そのうち二つは入手先を心得ていたが、三つ目は探すしかなかった。

ディック川溪谷の向かい側に、この夏の嵐でねこそぎ倒れたヒマラヤスギがあった。なかなか高貴な樹だったし、緑の森に醜い傷痕が生じてしまったから、惜しい気がした。そこで私はブリッジ・ストリートところで川を越え、左に曲がって小路の迷路をさまよひ、問題の木が生えていた庭の所有者を捜し出そうとした。とにかくまっとうな手段で（そうでなくてもいいが）、丸太を幾つか入手したかった。

このあたりはディックフォードでももつとも古い、もつともみすぼらしい地区であり、長らく保健衛生局から改善勧告を受けてきたが、所帯主たちがみんな町会議員であるために、なんの対策も講じられたことがなかった。地方行政など、どこに行っても同じことだと思う。陳情したところで無駄だろう。ともあれディックフォードのディック川河岸には、これ以上ないというほどの貧民窟があったのだ。

このあたりの貧乏人がヒマラヤスギを欲しがるとは思えなかったが、私はしつこく調査を続け、ほどなくそれらしきものにたどりついた。それは古い煉瓦塀であり、私の厩舎のように古ぼけていて、漆喰などはとうの昔に剥げ落ちていた。野生のキンギョソウとモウズイカが割れ目にしがみついていた。ヒマラヤスギの林は赤い煉瓦塀沿いに続いていったから、これは見込みがありそうだった。

私は塀の下の小道をたどり、やがてかなり大きなあばら家に行き着いた。家の裏側を世間に見せる、アン女王式の建物だった。呼び鈴を鳴らすと、管理人が出て来た。サリ―・サンプソンがもつとくたびれたような、足をひきずる老婦人だった。私が用件を告げると、管理人が言うには、一族の最後の一人だった老嬢が亡くなり、彼女が遠方の相続人のためにここを管理しているという。半クラウン銀貨が所有者を変え、ヒマラヤスギは私のものとなった。ついでに、その遠方の相続人の名前を聞き出した。周囲の貧民窟のために、この家は二束三文で売り飛ばされるだろうと思っただからだ。しかし、こいつを二束三文で購入したとしても、町議会に活を入れて貧民窟をどうにかさせられなかったら、私はただの間抜けになる。かくの如くして、良識ある不動産業者はつましい生計を立てるのであった。

私は倒木を見にいった。それはレバノン・ヒマラヤスギであり、実によさそうな品だった。そこでこいつを鋸で切断し、トレスオーウエンの農場まで運ばせるよう手配した。そしてトレスオーウエンが要塞までの運送を引き受けるという具合である。ディックフオードの人間の目にモーガンを止まらせなくなかったからだ。私もあtherくでもない町で生活していく必要があった。

その家には数多くのベナレスの真鍮製品や狐の顔、下手な帆船の水彩画（細部は緻密なまでに正確）に飾られ、階段の踊り場には様々な刀剣類が掛けられていた。一見して、その家の一族の来歴がわかる。国王と祖国に何世代にも渡って奉公し、徐々に死に絶えた一族の、最後の一人となった老嬢は、九十才を越してお国に仕えることもかなわなくなったのだ。

色褪せたレバノンの素描や、ヒマラヤスギ林の素描が幾つもあった。管理人の話では、倒れたヒマラヤスギはこの家の子息が種から育てたものだったという。この英国の土がアラビアの太陽の下でなった種を育てたと考えると、不思議な気分だった。半死半生のディックフオードが古代東方と生きた絆を有していたとは、信じられない。管理人の老婦人はここの樹木の先祖である樹木の絵を見せてくれた。きつとこの樹木は十字軍を記

憶しているに違いない、と私は考えた。いや、もっと楽しいサラデインの思い出であるうか。

そこで私は木を切る作業は管理人の農夫の俵にまかして、杜松が生えているディックフォードの裏山に回った。杜松は白墨のような植物である。晴れた日だったから、山麓に沿って車を走らせていると、ベル・ヘツドの根元部にある農場がはっきり見えた。しかし、バナナのような湾曲を描く丘陵のために、要塞は見えなかった。これは嬉しかった。遠かろうと近かろうと、ディックフォードやディックマウスがモーガン・ル・フェイの海の宮殿を見下ろすなど、気持ちのいいものではなかったからだ。小漁村スターバーの場合、気にならないのであるから、不思議だった。

ほどなく私は道端で乾式石塀を補修している老紳士に出会った。彼に声をかけ、用件を説明した。彼の話では、杜松を燃やしても、ぱちぱちうるさいだけで、ものの役に立たないという。そんなことは関係ないと私が言うと、彼は杜松を薪にして運搬する話など聞いたことがないと言った。それも関係ないだろうと私は言ったが、彼は古い病んだ頭を振るばかりで、出来るとは思えないと言った。理由を尋ねても、知らないの一点張り、首を振るばかりだった。とんでもない土地だ！

私は少し車を進め、ジプシーの野営地に到着した。ここで彼らと少し話をしようと思った。どうやらまともでは分けてくれないみたいだから、老紳士の杜松を少しばかりくすねてくる気があるか、それとなくほのめかすつもりだった。言うまでもなく、ジプシーたちにはたいしてほのめかす必要もなかった。それから老婆はテントから這い出てきて、私の運命を占おうと言った。いいよと私は言った。私はジプシーには弱いのだ。彼らのように、私も人里離れて生きたかったからだ。そこで彼女は一組のぼろぼろのカードを取り出し、私に一枚引くように言った。勢いよく引いて、裏返してみると、私の手の中にはモーガン・ル・フェイの肖像画があった。イシュタルの港に背の高い船でやってきた時の、椅子に座った彼女だった。カードの中の彼女は、大きな湾曲した椅子に座っていて、膝の上に書物を持っていた。背後には石榴とおぼしき奇妙な果実があり、足下には月があった。これには私も驚いた。老婆はそれを見て取ると、もう一枚カードを引くように言った。そうすると、今度のカードは「吊られた男」だった——絞首台のようなものに若者が足首を吊られて逆さまになっており、頭には後光が差し、冷静な表情を浮かべている。私は老婆の掌に銀貨を置いた。すると彼女が言うには、私の人生には女がいて、自分の目的のために私を犠牲にしようとしているとのこと。

(なにかぼくたちの知らないことを教えてくれよ、おばちゃん!)と私は内心考えた。

それから私は街道辻のパブでサンドイッチとビールの昼食をとり、ブリストルへ向かった。

ブリストルは奇妙な港町であり、私は大いに愛着を抱いている。船舶が親しげに町中まで入ってくるし、電車がぎりぎりを通っていく第一斜橋の下を歩けるからだ。そこで私は埠頭で車を降り、白檀を求めて丸石道を闊歩していった。

さて白檀の粉末は入手しやすいが、燃やすのが困難である。私の欲しいものは白檀の木片か、できれば自分で割れる板状のものであった。私は骨董屋をさがしていたが、やがて一軒、雨具屋と教会の間に、発見した。

それは古き良き日のブリストルそのものといった店だった。これで地下室への階段でもあれば完璧だっただろう。小さく仕切られたショウウィンドウには埃だらけのがらくたが山と詰め込まれ、何があるのかもわからない体だった。おまけに絵葉書以外は値札もついていなかった。その絵葉書も、実に下品な代物で、私の見るところ、一枚二ペンスでも高すぎた。ディックフォードなら一ペニーでもっと下品なものが手に入る。

中に入ると、取っ手に結わえ付けられていたココアの缶の中の石が、私の入来を告げた。店の奥から巨大肥満蜘蛛のような男が現れた。私の姿を見て彼の目が輝いた。私が絵葉書か、絵葉書のモチーフを買おうとしていると思っただけだ。私の欲しい品を伝えようと、彼はあからさまにがっかりしていたようだった。しかし、一シリング渡すと彼は通りの端にあるくたびれた雑貨屋まで案内してくれ、扉もノックしてくれた。実際、この通り全体がまるでドックにいましも転落しそうな雰囲気であった。私の意見では、そうなるのが一番良いだろう。

ユーラシア系の若者が私を店内に入れてくれ、続いて事務所に案内した。そこで私はモンゴル系の人物と面と向かうことになった。彼は中国系ではなかったように思う。ここでは欲しいものはすぐに手に入った。私は在庫にあった薪状白檀の箱包みを渡された。値段は適正のように思われたが、決して安くはなかった。一体誰がこんな高価な木材を、なんのために燃やすのか、大いに興味をそそられた。また、彼は私がこれで何をする気だと思ったのだろう。彼は驚きもせず、質問もしなかった。

それから私は家に戻り、夕食をめぐって姉と凄まじい喧嘩をやった。私が一番頭にくるものといえば、これは夕食に出る豚肉であるというのに、姉はそれでも私に押しつけ

てくるのである。おまけにこいつは生焼けだった。それで私は「ジョージ」に食べにいき、それから肉屋に回って、これ以上うちに豚肉を配達したら、ツケをやめて他所から買うと言ってやった。肉屋はにたにた笑った。自分でも驚くようなことをする場合が多々あるものだ。

私は「ジョージ」の商談室でとても愉快的晩を送った。この先ずっとここでワイン片手に平和な夕食をしようと決心した―そして「フレンド婦人会」やらなんやらに神の慈悲のあらんことを願った。私には、よき手本を示すという考え方はどうもしっくりこない。なんで自分たちがそんな手本を示さなければならぬのか、理解に苦しむ。我々は慈善寄金を気前良く出しはしないし、それを他人がどうこう言うことがあるのだろうか？ 個人的には、今までうちの連中が気前良く出したところを見たことがない。

それからの三日間、私は苦手な競売ではなく、営業をやっていた。ボンド・ストリートの業者のための買い付けであり、これは楽しかった。三日目、業者自ら現れ、絵画を捜しにきた。私はこの方面だけは手をつけないのである。それから商売が終わった後、彼と「ジョージ」の個室で食事をした。「ジョージ」の店は感じがいい。店主の母親が料理をやり、私がワインを選ぶ。よろしいか、これが腹にこたえる代物なのだ。料理自

体は愛想のないローストと煮物とフルーツ・パイなどだが、店舗と住居が一緒なものだから、あれこれ騒々しいのである。また、個室にはなかなか洒落たアマ布張りの屏風が置いてあり、我が友はこれを買おうとしたのだが、彼らは手放そうとしなかった。調理室のほうからばあちゃんやんが売りもんじゃねえと怒鳴る声が聞こえた。それで無駄だとわかった。食事の後、私は彼をうちに連れて行って、モーガン・ル・フェイの個人輸入のワインをふるまってみた。そして彼は足取りも軽やかに家路についたのであった。これで私の勤務時間も終わりとなり、再び週末が始まるのである。

第十六章

金曜の夕方に要塞までドライブした時、白檀を後ろに山ほど積んだ私の車は、東洋の寺院のような香りに包まれていた。トレスオーウエンに会ってみると、彼は大変な怒りに燃えていた。髪の毛は杜松だらけだったし、目の回りには黒いあざをこしらえていた。ジプシーのやり口をよく知っている私は、彼らに杜松の代金をその場で払わず、トレスオーウエン宛のメモを渡しておいた。そのメモには、ジプシーたちと合意に達した金額が記してあり、私の代わりに支払ってほしいと書いておいたのである。そしてジプシーたちは問題の金額を書き換えようとして、失敗してしまい、インクの染みのために数字が判読不能となってしまう。そこでトレスオーウエンは自分の判断で値段を決め、それを受け取るか、杜松を持ち帰るか、二つに一つと告げたのであった。その金額が、元来のそれよりかなり低かったため、ジプシーたちは頭にきてしまった。ゆえに彼らはトレスオーウエンを張り倒し、上から杜松の山をかぶせてしまったのだ。おかみさんの積極介入がなければ、そのまま燻製にされるところだった。私が到着した時、彼女はステーキ用の肉を亭主の目に押し当てていた。

私は杜松を貨物車に積み込むのを手伝い、それから行幸が始まった。ヒマラヤスギの大部分はすでに運ばれていた。ヒマラヤスギは薪にすると思いでがあるものだが、これだけの丸太が一本の樹木からとれたとは到底信じられなかった。きつと、あの管理人の倅が、あの一帯のヒマラヤスギをすべて買い占めたに違いない。農業従事者の頭の中は、見た目よりも遥かに切れるものなのである。

モーガンは車内に顔を突っ込んで、白檀の香りを嗅いでうつとりし、カシミールを思い出すと言った。私の会った中国人もどきは、たぶんチベット人だろうとも言った。ともあれ、私たちは《アズラエルの炎》を心待ちにしていた。それから彼女が、トレスオーウエンの目に使ったステークの残りを私に焼いてくれた。私たちは腕を組んで岩場の突端に行き、静かな海を思索の対象とした。それから屋内に入り、コーヒーを飲んだ。私は暖炉のそばで彼女のスター・サファイアをいじり、宝石の内部に輝く光条の変化とゆらめきを眺めていた。

日曜の午前中は丘陵からスターバーの鐘が聞こえるところまで散策し、来るべき大作業に備えて、地形を頭にたたきこんだ。

ベル・ヘッドは海のほうへアメリカめがけて突出した半島であり、西風が吹けば大なる大西洋の大波がなんの障害物もなく押し寄せてくる。そのためにこのあたりの海はよく荒れるのだ。半島自体は幾重にも板のように重なる地層が屹立した形となっている。このため、地層が露出している箇所は鋭く切り立つ斜面となり、棚状の断崖を形成している。上部はかなり風に削られ、平たくなっており、陸に面した断崖上の最高点に向かって鯨の背のように盛り上がる。それから細い首のような岩屑が陸地とつながるのであり、この半島が元々は島だったことを示唆している。その横にはディック川の旧川筋が横たわっているが、今では水源を持たないために、雨が降れば小川、晴ればただの乾燥地である。

およそ五マイル北方にはディックマウスがあり、南に三マイル下ればスターバーがある。二つの町の間には潮汐水路だらけの湿地帯が広がっている。その中央にはベル・ノールが盛り上がっている。

水上では鷗が鳴き、岩棚ではコクマルガラスがぎやあぎやあ騒ぎだしたので、天候が急変するなと感じた。その晩、トレスのおかみさんが暖炉の流木の灰を片付けた後、私

たちは《アズラエルの炎》の準備をし、暗い《扉の天使》を召喚して外出の許可を求めた。

ヒマラヤスギは燃える様が素晴らしい木材であり、白檀も火の回りが良いが、杜松が燃料として薦められない理由はすぐにはわかった。しかし、杜松の枝から枝へ火炎が走り、樹液を収めた節が熱ではじけ、黄金の火花を飛散させる様子は、魅力的な光景だった。しかし炎が収まれば煙も消え、杜松は不思議な薄い炭を残していた。杜松の小枝の灰は、他の木材の赤い燠火の間に繊細な黄金色の線となっていた。それは美しい焚火だった。誰もまだ焚火という芸術を正當に評価していない。

それから私たちは腰を降ろしてそれを見た。モーガン・ル・フェイは見たものを記録するべくノートを手にかけていた。

杜松の炎はすぐに燃え尽きてしまう。いまや灰に縁取られた赤い炭火へ収まりつつある炎の洞窟の真ん中をじっと見ていると、輝く炎のヴェイルの中に大地のあらゆる王たちの宮殿が見えた。しかし私が見たものは海の宮殿ではなかったから、失望させられた。それから、白檀が香ってくるにつれ、太古の東洋が見え、寺院の鐘の音や、詠唱が聞こ

えてきた。私はあのチベット人を思い、故郷を遠く離れたブリストルでなにをしていたのだろう、彼と結婚してユーラシア系の息子を生んだ西の国の女性は誰なのだろう。

私の心は彼から離れ、彼の故郷である高山地帯へとうつろった。私はこの地に心ひかれ、多くのことを読んでいた。それから私はこの国を取り巻く崖と亀裂を見た。大地の誕生の際に神々の手によって押し上げられ、それ以来変わることがない砕かれた国―ある者によれば、人類生誕の地にして、文明が下った大いなる河の源である。岷々たる峰に住む人々は時の黎明より変わることもなく、他の人々よりも神々の心に通じているという。ブリストルのチベット人から白檀を買ったことが嬉しくなった。

あらゆる人々が、その高い峰を神々の玉座と信じているが、雪深いヒマラヤの奥には、神々を造った神々の玉座がある。ブリストルの水際で私に白檀を売ってくれた彷徨するモンゴル人、彼を通してチベットの峰々とながりを得て、私たちが魔法を使うのも、実にふさわしいことであった。

しかし私たちは世界誕生まで時間をさかのぼる気はなかった。私は太古の東洋から心呼び戻し、パミール高原をオクスス河經由で下った。これが世界最初の人智が《術士》

とともに西洋に入った経路だという。それから世界が地図のように足下に広がった。私は幻想の翼に乗って、《アズラエルの炎》の洞窟から別次元へ移行していった。

それから双子の大河に挟まれたバビロンの都を見た。イスラエルの乙女たちが柳に豎琴を下げ、ベルテシヤザルは星々の叡知を学んでいた。私はさらに西洋に近づき、モーガン・ル・フェイの胸にゆらめき輝く大サファエアの星に導かれた。私は星を崇める人々の国に来た。天の中心たる北極星が聖なる星だった。彼らの神は《現世の主》、《孔雀の天使》である。それからカルデアの放浪の民の黒い幕屋を見た。彼らの父祖はアブラハムを知っており、彼らの羊は今でもエドムの王たちが四対五で戦った谷の草を食んでいる―シナルの王アマラペル、エラサルの王アリオク、エラムの王ケダラオメル、ゴイムの王テダル。私はまたパンと葡萄酒を持って王たちに会いにきた者を思い出した。それからレバノン高地の太古のヒマラヤスギを見た。この地を彼の足が過ぎ去ったのだらう。

この地に西洋の叡知の源泉がある、とモーガンが教えてくれたことを思い出した。それはヒマラヤの神々より、ほんの少し新しいだけなのだ。しかし両者よりも古いのがアトランティスの海の叡知であった。そして私は幻視の中、アトラスの頂と、魔女で有名

なテッサリアの丘を越え、私たちの種族の発祥の地であるバルトの荒野を横断し、ついに私たち自身の国へとたどりついた。そして私は杜松の小枝がヒマラヤスギと白檀の燠火の中に薄く輝いているのを見た。

さて杜松はイチイよりも古い血統の植物であり、この島国の文明を生んだ白墨に属している。杜松は古き神々の樹木であり、オークやトネリコよりも古く、ノルド人のサンザシよりもケルト人のヤドリギよりも古い。杜松は河の流れに身を委ねた民の聖なる樹木、燧石の民よりも古い民のものなのだ。彼らのもとを大航海の民アトランティスの人々が訪れた。そして《大母神》を崇めたのもこの人々だった。私は知った。潮がもつとも引いた解きに燃やされた焚火は《アズラエルの炎》であった。生け贄のためだけでなく、幻視のためにも燃されたもので、それらは杜松の焚火だった。

それから私の眼前に太古の文明が栄光に満ちた姿で浮かび上がった。まず目にしたものは台形のような山であり、その頂には、失われたアトランティスのルタ島の《黄金の門の都》が築かれていた。そしてベル・ノールのが私の頭に浮かんだ。

私は今一度燃え上がる巨大な円錐を見た。それは火山だったからだ。それからアトランティス全土が炎に包まれ沈んでいった。彼らが自らを神として崇め、奴隷を口にするのはばかられる邪悪に捧げていた神殿も、すべて業火に焼かれ、波に呑まれた。黄金の瓦に葺かれた叡知の都と、バビロンを凌ぐその墮落は、朝焼けに薄金の如く光る屋根とともに、宝石のように輝きながら、すべて消えていった。私は見た。太古の世界の最後の夜明けの中、三回の大いなる高潮がすべてを拭い去り、すべてを呑みこむ様を。だが、遙か沖合、波に乗るように、幅の狭い背の高い船が、紫の帆に深紅の竜を刺繍して、朝焼けの黄金の海道を東に向かっていた。鎖につながれた漕ぎ手たちは朝の静寂の中に汗水たらしていた。海はアトランティスをその叡知と邪悪もろとも懐深く抱いてしまった。神々はその墮落を憎んだからである。もはや幾らかの漂流物と、それにしがみついた者たちを除いては、なにも残ってはいなかった。彼らは死に遅れた分だけ不運であったといえる。いと高き神々が呼び掛けた時には、素早く参上するのが最善だからであった。それからモーガン・ル・フェイが私を目覚めさせ、もう十分と言った。

《アズラエルの炎》は鈍色の灰と化していた。しかし夜はやさしく更けており、私たちは再び岩場の突端に行って、月明かりの海を眺めた。黒雲が西空に集まり、ゆっくり

と星々を覆いつつあったが、まだ夜空は晴れていたからだ。それから私たちは屋内に戻って就寝した。素晴らしい眠りだった。こういった経験の後には、夢のこだまがかすかに漂う深い平安があるからだ。

月曜の朝、私はディックフオードに戻り、「ジョージ」で食事をする件をめぐって姉と血で血を洗う喧嘩を繰り広げた。それから私は町中を回って、あらゆる店のツケ勘定を停止し、姉に週五ポンドを渡して、現金払いでなんとかやり繰りしろと言いつつ渡した。姉が貰えるのはそれだけで、行儀が悪ければ、それも貰えないという条件もつけてやった。火曜の朝、姉がまた癩癩を破裂させたので、十リングを取り上げ、残りは四ポンド十リングだけとなった。その後、姉も鎮静化した。それでも、私はその週残りを喘息に費やし、母は神様が私の行状を不快に思っているからだと言いつつ出した。おそろくそうなのだろう。サリーも寝込んでいた。しかし、なんで神ご自身がこんなことにかかずらわるのか、私にはまったく理解できなかった。どうして私たちをほっといて、内輪だけで喧嘩させてくれないのだろうか？ オフィスの小僧が教会合唱隊をやめた時、私はその件にかかずらわるのを拒否したものである。また、神にはどうしてそれほどの暇があるのか？ ともあれ、もし神が介入しなければならぬのなら、ちくちく刺すような方法

を止めて、もっと効果的に介入できないものだろうか？

第十七章

実際に寝込むことはなかったものの、その週はずっと喘息に苦しんでいたため、要塞に車で向かう途中、私はだんだん惨めな気分になっていった。要塞につくや、私はモーガン・ル・フェイと言い争いを始めてしまった―結婚してくれないなら、早く別れたほうがいい。いつまでもこんなことは続けられない、少なくともこっちは、といった具合だった。

私をソファに座らせ、自分はその横の丸椅子に腰掛け、彼女は私の手を取って静かに話を始めた。彼女が話し終えた時、私はそれまで理解していなかった多くのことを理解した。素敵なお話もあったし、素晴らしい話もあった。私にとっては実に苦い話もあった。

水晶球に現れた《月の司祭》から、いかにして不思議の知識を得たかを彼女は語った。世界が賢くなって以来失われてしまった不思議の知識、それは古代人の内的な直感的叡知であり、今日では一部の原住民しか持っていないものであった。彼女はまた、《月の

司祭』がいかにも由緒ある霊魂であるか、いかに何度も転生を繰り返して、ついに解放を獲得したかを語った。また地上に学ぶものがなくなってしまう、学ぶためではなく、教えるために来た霊魂もいるという。そして彼女は自分がその種の霊魂であると信じていた。彼女の話では、こういう霊魂は通常の生誕をするのではなく、いわば魔術的に受肉するのであり、環境が整うまで待機して、それから肉体に入り込むのだそうだ。彼女の場合、環境を整えたものはブレトンとウェールズの血の融合であり、そこに彼女の不思議な魂が到来した。彼女は自分が事実アーサー王の魔女の妹モーガン・ル・フェイであったと信じていたし、マーリンは彼女の養父であったそうさ。

アーサー王の母、即ちユースアーの妃は、アトンラティスの海の王女であったが、交易のために野蛮な夫のもとに嫁いだのだそうである。こうすれば、『錫の島々』の港が父王の民に開放されるからである。アトンラティスの司祭職にあったマーリンは、錫の船とともに祭儀を執り行うためにブリテン島にやってきた。そして、母なる国の聖なる山に似ていたベル・ノールを祭儀の場として用いていた。ユースアーの死後、海の王女は祖国に戻り、神聖なる種族の男の妻となって、娘を一人生んだ。

さてこの娘は、アトンラティスの習わしに従って、《処女の館》に連れていかれ、ここで訓育を受けることになった。神聖なる種族の子供たちは全員、七才に達した年の冬至の日に、大いなる神殿に連れてこられるのである。そして見込みありとされた者たちは神殿の中で育てられることになる。選ばれなかった者たちは親元に返され、十四才になると、男の子はそれぞれ戦士になるか書記になるかを選び、女の子は神聖なる種族の男たちに嫁ぐことになる。そして種族外のものと交わることは神聖なる血統にとって死を意味し、神聖なる娘を奪った者は拷問の末に殺されることになっていた。彼らは極めて厳格に神聖なる血統を護っていた。その血に幻視の力が流れているからだ。

しかし女司祭たちはどんな男にも嫁がず、魔法を目的として司祭たちと交わっていた。

そしてモーガン・ル・フェイは《処女の館》で女王蜂のように保護されながら女性に成長した様子を私に語った。彼女は隔離され、人生の喜びも絆も自分には無縁であると知っていた。それから彼女がブレトンとケルトの子供として再び生まれた時、その記憶は残っており、人間の絆は彼女をつなぎとめるものではなかった。少女のころには恋を求めたことも度々あったけれど、運命がそれを禁じていた、と彼女は言った。ほどなく彼女は自らの運命を悟り、それを受け入れた。すると人生はずっと容易になったのである。

った。しかし、それほど容易なものではなかったはずだ、と私は思った。彼女はこの世を生きているのだから。

それから、幻視の力の到来とともに記憶も甦り、失われた知識も戻ってきた。彼女は我が身が女司祭であり、魂の中に司祭の力が潜んでいることを知ったのであった。しかし彼女を教え、鍛える者が誰もおらず、ただ水晶球の中の《月の司祭》がいるだけで、しかも彼はこの世の人ではなかった。徐々に彼女は独修していったが、月の魔法には協同者が必要であるという事実のためにハンデを負わされていたし、協同者は見つけるのが難しかった。

そこで私は考えた。自分が生け贄奴隷の役を振られたと思ったのは正しかったのだ。モーガンが、白内障の手術を学んでいる時に帽子一杯分の眼球を駄目にした外科医のよきな人物かどうか、私はいぶかしんでいた。

単刀直入に、海の女司祭の協同者の役割は正確にどんなものなのか、尋ねてみた。それから彼は最後にはどうなるのか、生け贄にされるのか、と。

彼女の答えは、一部分イエス、一部分ノーであり、彼女が教えてくれるのはそれだけだった。どうやら、海の女司祭とは一緒の巫女のようなもので、彼女を通して神々がしゃべるらしい。巫女であるから、彼女は消極的、受動的である。彼女は自分では魔法を使うことができず、むしろ司祭の手の中の道具となるのである。ゆえに、彼女自身どれほど完璧な道具になろうとも、それを使う者がいなければ、なんの役にも立たないのであった。

「すると君が必要としているものは」と私が言った、「興行主としての、適切な訓練を受けた司祭なんだね」

「その通り」と彼女。

「どこで見つける気なんだ？」

「それが問題なの」と彼女。

それで彼女が私と結婚してくれない理由がわかった。

「でも心配はしていない」と彼女が言った。「こういうった方面では、道は進むにつれ開けてくるもの。一步踏み出せば、おのずと明らかになる」

「で、次の一步は？」

「次の一步は」と彼女は言い、私のほうを見ずに炎を見ていた。「わたし自身の修行を完成させること」

「それは、つまり――？」

「海の女司祭としての自分自身の魔術的像を作ること」

私は彫刻をやることになるのか、と彼女に聞いた。もしそうであれば、どうやって？ 私は人物像が苦手だったからだ。

彼女は首を横に振った。「魔術的像はこの次元に存在するものではありません。別の次元にあつて、それを想像力で作り上げる。それには、助けが必要です。一人じゃできないから。もしできるのなら、とうの昔にやっています」

「それで、ぼくを当てにしている、と？」

「ええ」

潮による人身供犠が行われていたベル・ノールの海洞窟を再発掘したらどうだろう、と思わず喉まで出かかった。しかし私は口をつぐんだ。こういう場合、思ったことを口に出すよりも、黙っていたほうがより多くのことを学べるものだ」と知っていたからだ。

「自分で魔術的像を作るには、わたしとしては自己暗示しかないの」と彼女は言った。

「そしてすべてが主観に終始する。でも、数人が一緒に作業をすれば、そう、あなたがわたしをわたしがしているように視覚化すれば、いろんなことが起こり出す。あなたの暗示がわたしの自己暗示を補助してくれて、そうすると――それはわたしたちの外側にまで及んでいって、星幽的エーテルの中にいろいろなもの構築されるようになり、それが諸力の回路となるわ」

「おっと！」と私は言った。ちんぷんかんぷんだったからである。「で、君は今以上にぼくに要求するものがあるのかい？」

「たいしてないわ」と彼女。「あなたを知って以来、魔術的像は迅速に構築されつつある。あなたが私を信じてくれたから、そしてすすんで生け贄になろうとしているから」

それはどういう意味だ、と彼女に尋ねた。すると彼女の答えるところ、この手の魔術的像というものは想像力によって構築されるものであるという。私が彼女のことを女司祭であると思った時、彼女は女司祭となったのである。

「それで、生け贄はこの件とどういう関係があるんだ？」と私が聞いた。時来りなば、いかなる一撃が降りかかってくるか、知りたかったのだ。

「生け贄は魔法の力を放出します」と彼女。「それなしでは魔法はなにもできません」

「モーガン、それは、正確には、どういうことなんだい？」と私。内心では、彼女が羊かなんかを使ってくれることを希望していたし、犯罪への加担を要求されているとは思いたくなかった。もちろん私はモーガンを高く評価するものであるが、彼女があまり世間を意に介さないことも知っていたからだ。

「説明するのは難しいわ」と彼女が答えた。「神々によって捧げる生け贄も異なるから。とにかく、どの線であっても、自分自身をいくらか差し出さなければならぬ」

「ほお」と私は言った。認めたくはないが、かなり安心させられた。「すると、どこかの奴を祭壇上で生け贄にして、はらわた引きずりだすことはないんだ」

「そう」と彼女。「誰も他人を生け贄にはできない。わたしたちはそれぞれ自分を生け贄にして、互いを助ける魔法の力を得るの。こうとしか説明のしようがないわ。あなたにはわからないでしょうから。でも、それが実際にはどういうふうに一歩一歩展開していくか、あなたにもそのうちにわかるでしょう。たとえわたしたちの手の及ばぬ領域であっても。」

「わたしたちはすでにかかりの距離を歩んできている」と彼女は付け加えた。「あなたはもうわたしを女司祭にしまったのよ、ウィルフレッド、わたしに多くのものを与えたから。きつと、あなたが思っている以上のものを与えてくれた。だから、この先どうなろうと、わたしはあなたにいつも感謝します」

私は急いで話題を変えた。お礼を言われることほど、てれくさいものはないからだ。

「アトランティスでみんな溺れ死んだのは、この魔術的像を作ったからじゃないのか？」と私は聞いた。

「この力の乱用のせいよ」と彼女が言った。それから彼女が話してくれた。魔術的像の構築は元来司祭職の特権であり、彼らは皆、神々に全身全霊を捧げ、世俗の絆や煩惱から解放されているから、知識を個人的目的に使おうという誘惑に駆られることはまったくなかった。しかし、太古のアトランティスに於いても、ここらと同様、悪ガキは悪ガキなのであった。どの世代でも若い司祭たちが数人、夜中に庭の塀を乗り越えていったのであり、いわば心得違いをした若いお嬢さんがケリー州産のテリアの群れにかわいさダックスフントを紹介したような事態が起きたのであった。結局、神々はアトランティスを水没させてしまった。おそらくケリー州の人々も同じことをテリアにしただろうと思う。水をかけるしかない。

さて、私は内心考えた。彼女が私に魔術的像を作らせたがっついていて、しかもそれが出来ているというのなら、次の出し物はなんだろう？つまり、大丈夫と言われればいわれるほど、つまるところ黄金のナイフがこっちに向かっているのだと私は確信していた。そこで彼女にずばりと聞いてみた。海の宮殿が用済みになり、魔術的像が順調に作動しはじめたら、その先私に用があるのか、どうか。

「あなたはここでいつだって大歓迎されるでしょう」と彼女。「わたしは旧友を見捨てたりはしません」

「そりゃご親切なことで」と私。

「あなたのお姉さんに同情したくなってきたわ」と彼女。

「ぼくの人生を少し味わってみたらいいよ、モーガン・ル・フェイ」と私は言っていた。「それで性格が良くなるかどうか、見てみるといい」

「さて、と。あなたはなにが望みなのか」と彼女。

「普通の人間が望むものさ」と私。「充足感。どこかにたどりついたとか、生涯かけてなにかをやりとげたという感覚だよ。ぼくは母と姉を養うことだけに満足しなければいけないのかい？」

彼女は長い間、一言も発さずに暖炉を見つめていた。

「ウィルフレッド、人生は楽しい？」彼女がようやく口を開いた。

「古女房と一緒にいるくらいに楽しいね」と私。「人生とぼくは、犬と猫のような関係を送ってる。でも、別れるとなると、つらいだろうな」

「あなたを利用することはできません」と彼女が言った。「それも、容赦なく、ぎりぎりまで。しかもあなたの人生を使ってしまったあと、渡せるお釣りはあまりないでしょうね。でも、あなたがいいというのなら、短期間でも、あなたに人生の充足を与えられると思う。その後は――わからないわ」

「かまわないよ」と私は言った。「なんであれ、今やってることよりはましだろう。どうせ無に等しいんだ」

「じゃあ、試してみたい？」

「なんでも一度はやってみることにしている」と私。

彼女は微笑した。「うまくいかなかったら、二度と試そうなんて思わないでしょうね」と言った。

彼女は火掻き棒を手に取ると、燃える流木を両端に掻き寄せ、こうしてできた中央のくぼみに《アズラエルの炎》の薪を積み上げた。それから私たちは座り、薪に火がうつる様を眺めていた。

「今回は」と彼女。「アトランティスを離れた船の行き先をたどってみて」

私は炎を見つめ、待った。やがて炭は煙を上げるのを止め、くぼみの中に、杜松が燃え尽きる際に生じる白熱した燠火が現れた。それを見つめていると、次第にそれが波間にきらめく朝焼けの黄金の光に変わっていく。竜の帆を持つ長い船体が見えた。その船は東方へ進んでおり、太陽が前方に上ったかと思うと後方に沈み、星々が天を周回した。それから写真で見たままの、テネリフェ島の切り立った高峰が見えた。船はその下で錨泊した。

それから場面が変わり、ベル・ノール周辺の湿地が見えた。今とたいして違っていないが、ベル・ノールの背後、現在では農地となっている場所は開けた荒野だった。それから違うところに気づいた。ディック川の浅い川筋は溢れんばかりの水をたたえており、横手にある石の埠頭に一艘の長船がもやいであった。

それで自分が古代に舞い戻っていることがわかったが、この幻視は他のものとは異なっていた。私は傍観者ではなく、その一部になっていたのだ。私は船を誘導するための篝火をともに岸辺まで行っていた。それから霧の中にちらりと見かけた不思議な女司祭に魅了され、船の後を内陸部まで追ってきた。今いる場所はベル・ノールの洞窟の下にある埠頭であった。よせばいいのに来てしまったのだ。しかし、彼女はかつて会ったどの女とも違っていたし、この先も彼女のような女に会えるとは思えなかった。海が要求する生け贄の話は聞いていた―人間の生け贄なのだ。そして女司祭の目は冷たかったが、なにかを欲している目でもあった。通り過ぎる際に彼女が目が自分にとまったように思えた。離れていたほうが賢明だとわかっていた。あの冷たく光る目がもう一度自分にとまるのはまずかった。それでも私は進み、後を追って洞窟下の埠頭にまで来てしまった。女司祭が上陸する様を見ると、それはモーガン・ル・フェイが岩場の上を歩く際に見せる、しなやかで優雅な物腰だった。そう、二人は同一人物だとわかった。

それから場面は夜に変わり、私は明かりが灯された洞窟の入り口に群がる人々の中にいて、なにが起きているのか覗きこんでいた。海的女司祭は高い台座に座っており、その周囲には剃髪した男たちがいた―彼女の司祭たちであり、また髭面の武装した男たち

もいたが、こちらは戦士か族長たちのようだった。族長たちはなにかに恐れおののいているように見えた。不幸をしいこんだような顔付きでもあった。おそらく、剃髪した司祭たちのせいなのだ。司祭たちの蒼白な顔と冷たい瞳、残虐に慣れた人間特有の決然たる口元―すべてが不吉な空気を漂わせていた。海の女司祭は一同に無関心な視線を送っていた。まるで恐怖の祭儀に慣れていたかのようだった。髭面の族長たちは、怖じけづいた様子で、彼女をおずおずと眺めていた。

この族長たちが、ベル・ヘツドの司祭団の命令を受け、女司祭を招いたのだとわかった。彼女の差し出す恐るべき生け贄だけが、海を宥めることができるのである。そして今や族長たちは自分たちの所業に恐れおののいていた。彼らの手によって大地に血が流され、それがいつ終わるとも知れなかったからだ。人々を襲う血の狂気というものが確かに存在し、一旦殺戮が始まれば、とどまるところを知らないのだ。髭面の族長たちは、負傷や戦には慣れていたが、司祭たちの冷静な殺戮には鳥肌が立つ思いだった。また私も、私のような女を知らない頑健な若者こそ、女司祭が選ぶ恰好の生け贄であることを知っていた。また、髭面の族長たちは、誰が自分の息子（または息子たち）を差し出すはめになるのか、思惑を重ね合っていた。神々に捧げる生け贄は、国一番の若者でなけ

ればならないからだ。そして私が洞窟の入り口に群がる人々の中に立っていると、また女司祭と目が合ってしまった。私には、こんな女の手にかかるのなら、生け贄にされても悪くないとさえ思えてきた。

彼らは一段高い食卓で御馳走を食べており、食事が終わってしまえば、当時の習わしに従って、残りものを犬にくれてやった。それから大杯が運びこまれ、食卓の中央に置かれた。それは今日見られるような輝く黄金の品ではなく、アトランティスで使われていたオリハルコン製のものだった。周囲には豪華な波模様や海獣が彫刻されており、縁にはぐるりとカボション・カットの宝石が嵌め込まれ、光を放っていた。これが神聖なる《杯》、《聖杯》の原型だとわかった。その中に、見事な細工の水差しから、濃色の芳しいワインが注ぎこまれた。それから燃えさしが投げこまれ、ワインの表面に薄い青色のひらめく炎が立ちのぼった。彼らは燃える液体を幾つもの黄金の杯に注ぎ分け、炎が収まるや、一同はそれを飲み干した。このワインはベル・ヘツドの岩棚で育った小粒の黒葡萄から作られたものであり、岩棚の最上段に植えられた薬草の精油を混ぜてあった。

それから再び場面が変わり、私は日差しの中、イシュタルの港の埠頭沿いにいた。巻き髭をたくわえ金の指輪をした、色黒の水夫たちの遙かなる船旅を思つて、驚異の念にうたれていた。

混雑した埠頭を隊列を組んだ一団が下つてきた。六名の槍兵と、幅広の剣を持った隊長と、剃り落とした眉の下に無慈悲な瞳を輝かせた色黒剃髪の老司祭がいた。全身の毛髪を剃り落とすこと、彼らの宗旨の一部だったからだ。

人々はうやうやしく道を譲つた。しかし、もろに逃げ出す者はいなかったものの、次第に群衆は小路や脇道に消えていき、やがて見物している水夫と乞食と行商人以外は、誰もいなくなった。小隊が行進するにつれ、混雑した埠頭はがら空きになっていった。

しかし群衆が素早く消え去るのと同様、小隊も素早く行進していったが、司祭には群衆に目を走らせるだけの時間があった。彼はあちこちで手をあげると指さす。すると兵隊が指をさされた者のもとに行き、小隊に連れてくるのである。抗議する者も、あかく者もいなかった。一度、息子を奪われた婦人が叫び声をあげたが、周囲の者たちが彼女を素早く黙らせてしまった。彼らは逃げようと思えば逃げられたのだが、ただ黙つて従

うだけだった。司祭の小隊は海に捧げる生け贄を徴発しているのであり、選ばれた者が抵抗することは不吉な予兆とされ、海の怒りをすべての民にもたらすものとされていたからであった。さらに、選ばれた者はとてつもなく幸運なのであった。彼は海の宮殿で永遠の至福を授かり、海の最高の美女に囲まれ、真珠や寶石、美味珍味、美酒など、贅沢三昧の限りを尽くせるのである。また、彼の親類縁者は孫子の代まで祝福され、王は彼らに土地を下賜し、金銀財宝を与えるのであった。そう、生け贄に選ばれることは実に運のよい話なのであって、選ばれた者は大いに称えられ、死の前夜にはあらゆる願いも叶えられるのである。ただ一つ、叶わぬ願いは、慈悲のみであった。

さて私は、どんな魔がさしたのか知らないが、この女司祭を目にして以来、日の下に他の女はいないとまで思いつめるほどになっていた。そして司祭の小隊が通り過ぎる時、私は躍起になって彼らの前に立ちはだかり、司祭の注意を引こうとしたのであった。注意を引くまいと躍起になっている者ばかりだというのに、である。司祭の輝く黒い目が私の目と合った。そして彼が指を上げるのを見た。兵隊が私の回りに寄ってきた。私は小隊に加わった。

それからまた場面が変わり、私は再びベル・ノールの洞窟に戻っていた。中は明々と照らされていたが、今回は私も一段高い食卓に座っていた。他には二人の者がおり、私の正面には彫刻を施された椅子に女司祭がいて、彼女は右には剃髪した高等司祭がいた。左には日焼けした顔に髭を延ばした王がいた。二人の間に女司祭は座り、私に向かって微笑していた。彼女は想像していた以上に美しく、私は生け贄を志願して十分に報われたと感じた。私は喜び、大いに飲み食いがしたが、横の二人は食物に手を出す気すら起きなかったようである。それから炎のワインが到来すると、私は実に愉快そうに女司祭の健康を祝して乾杯したから、一同は私を妙な顔付きで見ただった。そして女司祭はゆっくりと、楽しむような微笑を浮かべた。その笑いにはなんの感情ももっていないかった。彼女は私のような死に赴こうとしている男たちを実に多く目にしてきたからである。

さて、生け贄の男は、寸前まで死の時刻を知ってはいけなさとされている。そうしないと、彼の最期の時が暗くなってしまうと考えられていた。海は元気満々の生け贄を好むからだ。ゆえに選ばれた三名はその晩、豪華な食卓を囲み、三名の内、二人は自由の身となり、一人が死ぬことになっていた。こうすれば、全員が希望を持てるし、生命力

も高揚するのである。誰が死ぬことになるのか、誰も知らなかった。女司祭すら知らなかった。三基の杯が用意され、炎のワインを注がれるが、一基の中には真珠が入っていて、それを得た者が死ぬことになっていたからだ。私の両側の男たちは杯をゆっくりと啜り、飲みこむことすらかなわない様子だった。しかし私は一息でワインを飲み干し、唇に真珠を感じたのであった。私は空の杯を伏せ、「おれが生け贄だ！」と叫んだ。すると真珠は卓上に落ち、女司祭のほうに転がっていった。彼女の赤い唇は微笑しながら曲線を描き、その上にそっと彼女の手が当てられた。

それから一同が杯を差し出し、私を海に選ばれた者として称えた。主任司祭と王が私の最後の願いを尋ねた。どんな願いもかなえてやると誓いを立てたのを見て取って―私は女司祭を望んだのである！

それから彼らの間でもめぐごとが起きた。こんなことはかつてなかったからだ。遺族のために土地を望んだ者もいたし、妻の殉死を望んだ者もいた。敵への復讐を望んだ者もいたが、こんなことは初めてだったし、彼らもどう対処していいかわからなかったのだ。彼女は神聖なる氏族の人間であり、彼女を奪った者に対する処罰は拷問の果ての死であったからだ。

しかし私は微笑を浮かべ、それが私の希望であつて、かなえられなければ面会予定の海の神々に彼らの悪口を告げるであらうと言つてやった。そして女司祭も微笑したので、彼女はまんざらでもないようだと言断した。しかし高等司祭は怒りで蒼白となつた。彼の手を王が押さえなかつたら、なにが起きていたか、わかつたものではなかつた。王は、誓いは誓いである、誓いを守るか私を解き放つかの二つに一つと言つた。しかし高等司祭は、海の神々が白羽の矢を立てた生け贄を、引き渡さないわけにはいかないと言つた。そんな真似をすれば、国にこれまで以上の災厄が降りかかるだろうとも言つた。私の死は必要にして、必至だつた。王は司祭たちに恥をかかせる機会を得て、内心喜んでいたようである。おそらく、司祭がこの地にもたらした流血に牽制を加えたかつたのだろう。

それから高等司祭が陰惨な笑みを浮かべ、神聖なる氏族の掟では、血を汚した女は死刑、女を汚した男は拷問の果ての死刑に処されると言つた。

「されば、そうあれかし」と王が言い、女司祭も生け贄もこれで最後になるだろうと満足気であつた。しかし高等司祭は怒り狂つていた。彼は女司祭を台なしにする気などなかつたからだ、そこは表面を取り繕い、おぞましい微笑を浮かべ、私の願う通りにしてやる、誓いは守られる、と言つた。私は満潮まで女司祭を自由にしていいことにな

った。しかし、その後は、習わし通りに眠り薬入りのワインを飲むことなく、目を見開いたまま死に直面することになった。つまり、意識をはつきり保ったまま、ゆっくりと溺死することは、拷問の果ての死刑も同然と見なされるから、双方の掟が守られることになるのだ。それから彼は私のほうを向き、それでもいいか、と尋ねた。悪あがきしながら海の神々のもとに赴き、彼ら全員の顔に泥を塗るような真似はしないと誓えるか、とも尋ねたのだ。そして私は誓うと答えた。

その後、洞窟の中央から石床を覆っていた豪華な絨毯が剥がされると、床の板石に取り付けられた巨大な鉄環取っ手が現れた。二人の奴隷がそれに棒を通し、持ち上げた。階段が見えた。そして女司祭が、まだ笑みを浮かべながら、松明を手に階段を下った。私は後に続いた。

岩を荒削りにした階段を降りていくと、天然洞窟に出た。天井は低く、床は砂に覆われていた。砂も壁も濡れていて、海草がへばりついていたので、ここは川面と同じ高さなのだと思った。その中央には長方形の石塊があった。長さが幅の二倍、高さは幅と一緒という代物で、これが生け贄の祭壇だったのである。この上で、海に捧げられる者が海の到来を待つのであった。しかし、かつてここから旅立った者たちは、たっぷり薬を

盛られて寝ていたので、誰が来たかもわからなかっただろうが、私は両の目を見開いたまま海を待つことになる。それが思い上がった私への懲罰だったからだ。

それから潮が満ちつつある数刻、夢に見る者はおらず、知る者はさらに少ない物事が私の手の中にあつた。やがて私はトロイが女のために燃え尽きた理由を知つた。この女は一人の女ではなく、すべての女性であつた。そして彼女と交わつた私も、一人の男ではなく、すべての男性であつた。だが、こういった事柄は、司祭職の秘伝の一部であり、口にするのは掟に触れることである。私は至福の中、波の音が近づくのを聞いた。それから波が私たちの足にまで達した時、女司祭は私に接吻してから去つていった。ほどなく怒涛は押し寄せ、私は波の間に空気を求めてあがいたが、ついに呼吸ができなくなつた。

それから幻視が死の中に暗転するにつれ、私は目覚めた。そして目覚めるにつれ、喘息が喉をとらえたことを知つたのであつた。

第十八章

私はあの発作を生涯決して忘れないだろう。あれほどのやつを食らったところは後にも先にもなかった。モーガン・ル・フェイは、以前の経験からどうすればいいのか知っていたので、すぐさま車に乗って医者呼びにいった。彼女が出る前に、窓を開けさせておいた。そうすれば出来るだけ多くの空気を吸うことができるからだが、私が一人で瘧孌しながら横たわっていると、海の中から聞いたこともない低音の呻き声のようなものが聞こえた。その日一日、気圧計は下がりはじめた。この音は嵐の前触れではないかと思った。一陣の風が煙突を轟かせ、暖炉の灰を宙に舞わせた。上空ではひゅうひゅうと風が鳴りはじめた。それから怒濤の第一波が岩場にぶちあたり、しぶきが前庭にばしやりとはねる音が聞こえた。これまでも幾多の危機に直面してきた私たちだったが、どうやらかつてない難題が要塞に迫りつつあるのを悟った。モーガンが私のもとに帰ってきてくれるだろうか、医者がここまでたどりつけるだろうか、私はいぶかしんだ。そして一晩中、ここで一人、看護もなく放置されるかと思ったら、突然パニックに襲われた。

私は横たわったまま、息をしようとかあがき、また岩場に轟く波音と前庭のしぶきの音が着実に大きくなつていく様に聴き入った。ほどなく、しぶき以上に実体を備えたなにかが到来するような音が聞こえてきた。横たわっている場所から、大窓越しに外を眺めていると、突然、外側に水がきらめくのが見えた。前庭の水深は足首までくらいだっただろうが、それを目にした瞬間、私は完全なパニックに陥つたのだ。もうモーガン・ル・フェイが戻ってくる可能性はない、一晩中一人きりなのだ、と感じた。私は立ち上がり、悪戦苦闘しながら窓までこぎつけ、柱によりかかりながら顔を出して夜の様子を眺めた。かなり暗かったが、部屋からもれる明かりの中に、荒波が岩に砕け散るたびに宙を舞う飛沫が見えた。それはひどい晩であり、しかも一分ごとに悪くなつていった。

モーガン・ル・フェイが戻る可能性はないと腹をくくり、一人で切り抜けるしかないと思つた時、一条の光が前庭を回つた。それが彼女の車のヘッドライトだとわかつた。外の騒音のため、彼女が部屋に入ってきたのもわからないほどだったが、最初に聞こえたものは彼女の悲鳴だった。からっぽの長椅子を見た時、私が暴風雨の中を出ていったものと思つたのだ。私がカーテンの裏から顔を出した時は、きつと幽霊のように見えたことだろう。彼女は私の名前を呼び、走りよつてきて、私を抱きしめた。これには驚か

された。彼女がそれほど私のことを思ってくれているとは知らなかったからだ。これは何事だろうと思つて、ほとんど喘息を忘れかけた時、また発作が襲つてきて、喘息を思ひ出させてくれた。それから彼女の肩越しに医者姿が見えた。彼もまたこれは何事だろうという顔をしていたが、ともかく二人は私をソファに寝かせた。

あの一夜を要塞で過ごした私たちが、あの嵐を忘れるとは思えない。いずれにせよ、あれはかつて英国を襲つた嵐の中でも最大級のものであり、風は南西に一二度ずれた方向から吹いていた。つまり、要塞を襲つた怒涛は全大西洋の力をもろに背負っていたのである。まるで爆撃だった。二階の寝台に横たわつていても、恐るべき白波がぶつかるごとに、壁面がずしんと震えるのが感じられた。医者が帰宅するなど論外だった。彼もここにいた。残らざるを得なかったのだ。

前庭は沼地と化した。神の助けか、到来していたのは風に煽られた波頭であつて、波の本体ではなかった。窓がもつたのも幸運だった。蔓棚はおしやかになつており、そのかけらが風のために窓に飛ばされてくるのでは、と思つていたので。

外の物音は筆舌に尽くしがたいものだった。高音を発しながら飛び去る突風があり、あらゆる岩や建物の先端が独自の音程で悲鳴をあげていた。海は周囲で不断に轟き、大波が岩肌をばん、ばん、ばんと叩いていた。砕けた波が岩の隙間を突き破って破裂音を発すれば、前庭まで至る波頭のばしやりという音が後に続く。こんなのは生まれて初めて耳にした。

実際に危険はなくとも、物凄い音はそれ自体、身の毛のよだつものがある。しかも私たちは、この半島の先端でなにが起こりつつあったのか、知らなかったのだ。もし海が要塞の銃眼の一つを突破してしまえば、アトランティスのように、私たちも水没してしまう可能性が十分にあった。実際、かなりの線までいっていたのである。一週間後、基礎部を調べに降りてみると、六カ所ほど土台支柱がいかれていた。

ともかく私たちはここにいた。この半島の先端で、闇と物音に囲まれていたのだが、この祭り騒ぎに加えて、私の心臓がくたばりはじめた。結局それがよかったのである。私は面倒を他の連中にまかせて、無意識へと落ちていったからだ。

海の神々に会ったのはその時だった。私は肉体から離脱し、屍衣をまとって上方へ浮き上がっているようだった。私は要塞上空に浮いていて、周囲では物音と暴風雨が猛烈に狂っていたが、その力は感じられなかった。私は争い合う元素とは別の次元にいたからだ。引き裂かれたような雲間から、断続的に月光がさしていた。明るい時には、疾駆する騎兵隊のような起伏する長い列を組み、大西洋から次々に殺到する白冠の怒濤が見えた。また、水流と潮流がせめぎあう岬の沖合では、すべてが咆哮し、泡となつてのたうっている。沈み瀬が奔流を遮る場所では泡立つ逆波が迷走していた。

それから騒然たる物音に律動があることに気づいた。私は嵐の中に恐るべき交響曲を聞き取りはじめた。断崖の下の波の咆哮は基低音であり、岩場の突端にぶつかる波は打楽器だった。うなる突風はテナーであり、建物周辺の風音は甲高いピッコロの響きだった。それらすべてを貫通して突撃ラツパと鐘の音が聞こえてきたが、これはおそらく私の頭の中で歌っていた薬物だったと思う。しかし、その時は、心霊現象だと私は思っていた。狂乱の内に私は鷗のように突風に乗れり、風圧を受けながら平衡を保っていた。

それから波間にさまざまな顔が現れはじめた。風に飛ばされた泡と影が形を取り始め、白馬に乗った騎兵たちが登場したのだ。

翼のついたヴァイキングの兜をかぶる鎧姿の者もいれば、衣と髪を風になびかせただけの者もいた。しんがりは『死者を選び出す者』たちだった。白馬が蹄にかけた者たちを鞍の前輪につなぎ、ヴァルハラまで連れていくのである。これら天駆ける騎兵隊の背後に、大波に大うねりが続くが如く、海の神々が到来する様子が見えた。騎兵のように宙に舞うこともなく、ただ自らの元素に奥深く潜み、何者にもとめることができない勢いをもって、急ぐこともなく、休むこともなく、迫りつつあった。海の力はそれ自体の重量にあり、風に吹かれる波頭にあるのではないからだ。これら『大いなる者』たちは潮とともに上ってきていた。そして潮と同様、それ立ち向かえる者はいなかった。彼らの顔は漠にして静であった。彼らは大いなる海の支配者であり、彼らの領域に於いては、彼らの言葉は法であった。彼らの恩寵のみによって生命は海面を動く。これを知るものだけが生きていけるのであった。

それから私は海を支配できると考えた者たちの愚行をはっきりと目にした。海の神々の恩寵によってのみ、人は地の面で生きていけるのだ。海の神々が怒って力を合わせれば、地球をも水没させられる。人の生命は抗い得ない諸力によって糸のように紡がれて

いるのだと思った。その糸は一息吹きかけるだけで切れてしまうだろうが、それでもこれを通じて力を得るしかないのである。

星の彼方に生命の源泉があるように、地球には元素の力を貯蔵している場所がある。そして人間が大気を呼吸するように、人間の持つ本質的な猛りは、海の猛りから生気を得ているのである。とことん突き詰めれば、万物は一に如かず、私たちはすべて神々の一部であるからだ。

私の内部で海に応答したものは、嵐によって覚醒したのであった。そして、人間の内部には、あらゆる抵抗を勢いだけで圧倒するほどの躍動的力があることもわかった。しかし、この力は人が海と同じくらいに残酷となり、破壊も自己破壊も気にかけない時のみ存在することもわかった。この力の両極は勇気と残酷であり、その周辺に世界の愛の祭儀が忘れてしまった気高さがあるからだ。

潮が変わると、海もおさまりはじめた。そして夜も明けかけた時、デイツクマウスの医者が車で出て行って、ブリストルの顧問専門医とベアードモアに電話をかけた。ほどなく一同が要塞に会し、なにやら私の検死らしきものを始めた。デイツクマウスの医者

はありとあらゆる不思議な学位を有していて、主に本を頼りにしていた。おなじみベアドモアは、私の死亡診断書を作成する材料に事欠いていたので、本能によって行動した。そのため二人は二頭のハイエナのように私の体をめぐってもめていた。ベアドモアは、私が死んだ時は死んだ時とばかりに、モルヒネをたつぷり注射する習慣を有していたが、デイツクマウスの医者はホイルはそんなことは書いていないと文句をつけていた。それから両者が麻薬取り締まり法に関して辛辣にやりあっていて、私の呼吸は止まりかけていた。それから顧問専門医が仲裁に入り、両者を無視して私の生命を救ってくれた。彼は注射器を取り出すと、彼の新案特許の薬を丸一本、打ってくれたのだ。その成分がなんなのか両者に告げることなしに、である。それから私は午後までぐっすり眠り、目覚めた時には気分爽快だった。あの注射器になが入っていたのかは、十分にわかっていた。モルヒネを打たれたことのある人間をだますことはできない。しかし私は口を閉じていた。私は思っていた以上に永遠の眠りに近づいていたのだ。

いつものように、モーガン・ル・フェイが近くにいれば、私は元気づけられた。通常、発作後に生じる、あの憂鬱感はなかった。そしてモーガンがお茶をつきあってくれ、私は順調に回復していたが、その時、要塞の陸側から騒動が聞こえてきた。トレスのおか

みさんが怒りの悲鳴をあげていたのだ。モーガンが何事ならんと見にいって、スコッテイーを連れて戻ってきた。なんでスコッテイーがあれほどの騒ぎを引き起こせるのか、私は不思議でならなかったから、状況説明を要求した。モーガンが笑いをこらえようと必死になっているのが見えたからだ。

尋問の結果、次のことが判明した。事の発端は、ベアードモアがうちの家族に私の病状を通知したことに始まった。すると姉は、あのいかにも殉教者的な物腰で、教区活動を中断して、私の看護に要塞まで出向くと申し出た。しかし、ベアードモア（彼に神のお恵みを！）は、姉に母のそばから離れないように言い、代わりにスコッテイーに行かせると言ったのであった。

さてスコッテイーは自分の車を持たず、必要な時には私があちこち送ってやっていた。またハイヤーとなると、要塞まで一ポンドはかかるだろうし、この金額は彼にとつては歯軋りものなのだ。そこで彼は義理の父親に車で送ってもらうという素晴らしいアイデアを思いついた。さてスコッテイーの義父は、前に書いたと思うが、土地の葬儀屋であり、彼もまた私用の車を所有しておらず、棺桶やら道具一式やらを運ぶ霊柩車を運転していた。そして彼とスコッテイーが乗ってきたのもこの車だったのである。運転手は葬

儀社の社員であったが、義理のおやしさんのほうも来るといつてきかなかった。ドライブを楽しむ気だったのか、商売の機会を狙っていたのかはわからない。かくして、トレスのおかみさんが彼らの到着を見て跳び上がったのは無理もなかった。

ホイットルス老人が来ていると知るや、私は彼を通すようにいった。私はホイットルス老人が好きだったからだ。彼はかなり当惑した模様で現れた。まだ私のような段階にある顧客に会ったことがなかったからである。巻き尺を奪われてしまつては、彼もなんと戸惑っていた。彼の気分をほぐしてやろうと思ひ、死体が起き上がつてウインクしていたら、大体のところどういふ風に対処するのか、と聞いてみた。彼の答えは、まったく相手次第、というものだった―急いで棺桶の蓋をねじ留めする場合もあるとのこと。モーガンがカクテルを渡すと、彼も落ち着き、葬式ネタのジョークで私たちを元気づけようとした。私はあれほど笑つたのは生まれて初めてだった。勤務外の葬儀屋が羽目を外した時ほど面白いものはないのである。また、台所のほうからも大笑いの声が聞こえてきたが、ここではトレス夫妻が葬儀屋の社員をもてなしているのであった。それから、ほどなくブリストルの顧問専門医が私の容体を心配して、姿を見せた。彼は注射の効果を確認しにきて、戸口でホイットルスの道具一式を目にし、これはやっちゃまったと思ひ

込み、自分の評判も西方浄土に消えたものと覚悟を決めていたのであった。しかし、モーガンが彼を招き入れ、カクテルを渡して慰めてやると、彼もパーティーに加わった。さらにカクテルはそこらじゅうに広がり、私の回復は格段に進んだのであった。

どうやら葬儀屋を創業したホイットルスの祖父は、死体盗っ人として人生を始めていたらしい。この情報が明らかにされた時のスコッティの顔はちよつと見物だった！しかし、ブリストルの専門医は、自分の祖父が屠殺業者であったことを自発的に申し出て、その場の全員に安堵感をもたらした。負けてはならじと、私も押し込み強盗で吊し首になった先祖の話をしてやった。それから一同カクテルをもう一杯飲むと、今度はメンデルの遺伝の法則に関して議論を重ねた。ついにパーティーがお開きになると、ホイットルスと専門医は気の良い仲間となつてしまい、ホイットルスが湿地を抜ける近道を教えてやると言い出した。そこでホイットルスの霊柩車を先頭に、後から専門医の豪華なリムジンが続くという恰好で、彼らは要塞を後にした。これは通常の順番を逆にしたものであった。

第十九章

専門医は私の心臓の具合から見て一週間は床を離れないように忠告してくれた。これは、問題の器官の具合を比喩的に見ても字句通りに見ても、有り難い忠告であり、私はその週を思う存分満喫した。七日間、寝たきりだったとまで言うつもりはないが、ともあれ、実に快適な休日を過ごせたのである。

最初の数日間は当然、寝台にいたほうが快適だった。私は横になったまま、重砲のように岩場を撃つ暴風雨の余波の音を聞いていた。それから嘘みたいならかな晴天となった。突風の後にはよくこうなることは知っていた。私は日差しの中、前庭で日光浴を楽しみ、波に打ち上げられた残骸の間で我が世の春を謳歌する鷗たちの鳴き声に聞きいつていた。中には茎が私の腕ほどもある全長二十八フィートの巨大ヒバマタもあった。また悲劇的な残骸、救命艇の名残とおぼしき赤白だんだらの板切れもあった。また、《アズラエルの炎》を西空に燃やしたような、素晴らしい夕焼けを見た。そしてうねる海から昇る月の出は永遠に忘れられないものだった。

また、モーガンが私に歌を歌ってくれた。彼女が歌えるなど、まったく知らなかった。彼女の歌い方はまったく聞いたことのない類いのものだった。フォーク・ソングとジャズの間位置するような、四分の一音上がり下がりする、極めてリズムカルなものだった。歌自体も、古き神々への賛美歌や司祭たちの詠唱だったから、まったく他の歌とは異なっていた。また、音程が現代の音程ではなく、その中間的なものだったから、最初に聞いた時には、なんとも平板で調子外れの感じだった。しかし耳が慣れてしまえば、それなりに真の音楽なのであって、直接潜在意識に語りかけるものだと思えた。

彼女の歌はコンサート歌手のような大音量の歌ではなく、さえざるようなヴィブラートも入らなかった。口誦のような詠唱を伴うもので、大声は出さず、しかし真に響き渡る声で歌うのである。とても美しいものに思えたし、リズムは海の鼓動のそれだった。さらに、時折彼女の声に不思議な金属的な高音が混じることがあり、こうなった時には意識の変革が生じていて、彼女は誰か他人になっているのであった。

私が魔術的像とその使用法の秘密について、少々学んだのはこの時だった。歌の翼に運ばれて、彼女は自ら構築した魔術的像に同化していたからだ。それから私はアトラン

テイスの女司祭が眼前に立つのを見た。彼女はモーガン・ル・フェイ、マーリンの養女にして、養父の秘伝をすべて学んだ女司祭だった。

ある晩、彼女が歌ってくれた後、私は言ってみた――

「モーガン、君はイメージしていた通りの存在になってしまったね」

彼女は笑みを浮かべ、言った。「そうすることで、力を得るのよ」

それから私はベル・ノールの海洞窟の幻視の件を彼女に話し、こう言った。「モーガン・ル・フェイ、ぼくもその遊びをやったら、力を得られるかな？」

彼女はまた笑みを浮かべ、言った。「やってみたら？」

それから私は、幻視の中では、彼女が彼女自身ではなく、すべての女性であり、自分もすべての男性だったことを話した。こうとしか言いようがなかったのだ。自分でもよくわかっていなかったからだ。すると彼女は不思議な顔つきで私を見て、口を開いた。

「それがベル・ノールの海洞窟の鍵だわ」

「モーガン、それはどういふことだ？」と私。

「覚えていない？」と彼女、「アトランティスでは、司祭と女司祭は愛のために結婚するんじゃないで、儀式のために結婚していたことを」

「あの洞窟の中では、君はぼくにとって単なる女司祭以上の存在だった」と私は言った。「君がアフロディテそのものに思えたよ」

「アフロディテ以上の存在だったのよ」と彼女、「わたしは《大母神》だった」

「でも、《大母神》は地の女神だろう」と私、「どうしたら海の女司祭が同時に地の女司祭になれるんだ？」

「《密儀》にいわく、すべての神々は一つの神、すべての女神たちは一つの女神、そして秘儀伝授者は一人なり、というのを知らなかった？ 顕現の夜明けに、神々は太極、陰陽の両の柱の間に創造の蜘蛛の巣を張り巡らしたことを知らなかったかしら？ 万物は異なった様相を持つこれら二つのものに他ならないの。司祭と女司祭さえもそうなのよ、ウィルフレッド」

「とすると」と私、「もし君がぼくを男として愛することができないのなら、司祭としてのぼくと一緒に作業をしようとても？」

彼女は不思議な微笑をなした。「その通り」と彼女、「それこそ、わたしが目指していたものなの」

「やれやれ！」と私、「君はいい度胸をしている！」

それからモーガン・ル・フェイは彼女自身のことを語りはじめた。また、彼女の視点からは、世の物事がどう見えるかを話した。それは奇妙な経験だった。私には、そんな人間がそんな視点を持つなど、夢にも思っていないからだった。彼女は、神に選ばれし者は非人間化され、半神化されると語った。

「そんなことを言えば」と私。「世が世なら、火あぶりにされただろうし、またそれが妥当だろう」

「神々って、なにかしら？」と彼女。

「神のみぞ知る」と私。

「神々は擬人化された自然の諸力だとわたしは思ってる」と彼女。「だから、神々と同一化するというのは、自然の諸力の回路となることでしよう。そして、これはあなたが考えてるほど、珍しいことじゃないのよ」

彼女によれば、あらゆる宗教の敬虔な信者たちが、賛美と瞑想と献身によって魂を一つの焦点に結ばせることが可能であると主張してきたという。こうなった場合、神は崇拜者に下り、乗り移り、神の力がランプの光のように彼から光り輝くのである。また、彼女の話では、古代人は多くの物事を知っていたが、今や現代人にはその周辺しかわからなくなってしまうという。

「《月の司祭》が水晶球の中に現れた時」と彼女が言った、「わたしにそういったことを学ぶ気があるか、と聞いたの。それで、学びたいと答えたら、そのためには全身全霊を捧げなければならぬと言われた。だから、捧げると言った。なら、教えてやろうと彼が言い、少しずつ教えてくれたわ。」

「《月の司祭》の教えるところ、司祭職はいろいろあるように見えても、本質は一つ、《一者》への礼拝しかない。それ即ち、全生命の源泉にして終着点である。それは《未

顕現』であり、いかなる《人》もそれを知らず、この先も知ることのないものなり、と。ただ、その《作用》を通してのみ我々はそれを知り得るし、そこからその《本質》を推測する。その《本質》こそ《自然》である。原始人はその力を擬人化して神々と呼んだ。現代人はそれらを非人格化して、諸力と要因と呼んでいる。どちらも正しい。でも、どちらもすべて正しいわけではない。神々は諸力であり、その諸力は知性を備え、目的を持っているし、《一者》の性質の諸表現なのだから。

「そして《一者》と同様、創造もしかり。創造は《一者》の本質の表現だから。『カルデアの神託』にいわく、“賢者は自然の面を見て、その中に《永遠なるもの》の輝く貌を認めたり”。そして人間の本質も《自然》の一部であり、これを研究すれば、《自然》と神々について多くのことを学ぶでしょう」

それから彼女は古代人が司祭職に対して抱いていた観念を教えてくださいました―それは霊媒的なものであったが、靈感を受けた司祭や巫女を通じて語るのは人格神ではなかった。人格神とは、人間が我が身の潜在性を表現する際の一形式に過ぎず、真の神はまったく違う方向に存在するのである―司祭は神の影に入り、神の力を放つのである。彼の中に

潜在していたものが解放され、司祭は一時的に全人類の完成時にあるべき姿になるのであった。

「とすると」と私は言った、「神々とはなんぞや？」

「神のみぞ知る」と彼女。「でも、ある種のことをなせば、ある種の結果を得られることはわたしたちにもわかっている」

「で、君はなにをしようとしているんだ？」

「教えてあげましょう」

彼女は話では、男は誰でも、男性であるがゆえに、内部に司祭を秘めているという。女は女性ゆえに女司祭である。これは《全生命の源》が《未顕現の一》を《顕現する二》に分割することで世界を創造したからであり、創造された我々は自らの内に創造されざる《真実》を示すのである。各生命体はその根源を《未顕現》の内に有しているのであり、《未顕現》に回帰することで我々は生命の充足を見いだすのである。

しかし我々は限りある、不完全な存在であるから、《無限》を完全に體現することができない。また、我々は形相の次元に囚われている身であるから、《形相なきもの》を把握することができない。「そして、これが難しいの」とモーガン・ル・フェイが言った。「数学者が一番上手でしようね。でもね、ウィルフレッド、わたしたち男と女が、《自然》に顕現する《神》を知ろうと思つたら―神々の美しい形相の中にある《永遠なるもの》の輝く貌を見ることよ。指の間をすり抜けてしまふ抽象的な精髓を追うよりも、こうしたほうがもつと多くのことを学べるし、多くのことができるわ」

彼女を教えた《月の司祭》は、彼女に《大いなる未顕現》に回帰せよ、すべての小さな顕現は捨て置き、《一者》に身を捧げよと命じていた。そして彼女が献身をなし、その実現を獲得して、自分の存在の根源を発見した後、《月の司祭》は万物に顕現する《一なる生命》を見よと彼女に命じたのであった。

また彼の教えるところ、顕現する《生命》には二つの局面があるという―積極的、力動的、刺激的なものと、その刺激を受けて反応する潜在的なものとの二つである。それら二者は永遠の舞踏の中で互いの位置を変えながら、供与を繰り返し、力を蓄積しては放出し、決して止まることなく、安定することもなく、常に流動と反流動の状態にある―

月と海と生命の潮に見られるように、天球の音楽に合わせて、潮は満ち干き、月は満ち欠け、生命の舞踏は盛り上がり、終わっていくのである。それから彼は、太陽が星のきらめく黄道十二宮帯を通過する際に、あらゆるなかで最大の潮流が起きる様子を見せてくれた。

「この十二宮の潮は」と彼女が言った、「信仰の啓蒙なの。今日、太陽は宝瓶宮つまり《人間の宮》に入りつつあるから、古き神々が帰還しつつあるし、人はアフロディテ、アレスや大神ゼウスを自分の心の中に見つけつつある。これが永劫の開示するものだから」

モーガン・ル・フェイが語るところ、彼女は自分用のものとして、原初の《母》、《偉大なる女神》の祭儀を選んだのだという。この女神は空間と海と大地の内奥に象徴される。彼女はレアであり、ガイアにしてペルセポネである。しかし、それ以上に彼女は前出三者を包括する女神イシスであった。イシスは穀物の女神にして死者にして死産児の女王である――また彼女は額に月辰を戴いている。他の局面では、彼女は海である。生命は最初に海で生じたからである。また、力動的な面では、彼女はアフロディテとして波間より立ち上がる。

そしてモーガン・ル・フェイはこれらを追求しながら、様々な宗派の象徴を次々に学んでいた。すべては同じものを違った名前、違った局面で崇拝していたからである。やがて彼女は自分自身の本質によく合うものを発見した。それは厳格なエジプトの信仰でも、輝くギリシヤの神々でもなく、原初のブリトン族の祭儀であり、その根源はアトランティスにあった。これは色黒のアイオナ・ケルト人やブレトン人、バスク人にも伝わっているものである。

「なぜなら」と彼女は言った、「こちらのほうが北方の神々よりも古いし、叡知も多い。北方の神々は戦士たちが作り上げたものだから、知性がないのよ。《偉大なる女神》は神々を作った神々よりも古い。人間はまず、母の機能を理解して、ずっと後で父の役割を知ったから。だから人間は、《孕ませる者》としての太陽を崇拝するはるか以前に、《原初の卵》を生む《空間の鳥》を崇めていた。

「彼らは万物を海より生じるものととらえていた。そして彼らは正しかった。聖書にもあるし、地層も証明するように、かつて地球全体を水が覆っていた時期もあったから。それから人間は父親の機能を理解するようになり、《自然》の中に万物を生ませる父を

捜して、それが太陽だと感じた。そこで彼らは海だけでなく太陽も崇めるようになった。しかし海の祭儀のほうが古い。海は《大いなる母》だから。

「しかし、月と海に対するわたしの献身として」とモーガン・ル・フェイは言った、「私は受動的な役割を選んでいた。だからわたしは孕ませる者の到来を待たなければならなかった。今でも待っているの」

「すると」と私、「ぼくが君に対してその役を演じることになるのかい、モーガン・ル・フェイ、ぼくが君を愛しているから？」

「かもしれない」と彼女。「やってみるしかないわ。それに、あの力さえもたらすことができるのなら、あなたがわたしを愛しよう、いまいと、たいして問題じゃないわ」

「こっちにとっては大問題だよ」と私。

「わたしには問題じゃないの」と彼女。「わたしは身も心も捧げた女司祭だから。それに、あなたが気にするようだと、うまく力をもたらすことができなくなる」

その時は、彼女の言わんとするところがわからなかった。もつとも、後日、わかった。

「モーガン・ル・フェイ、いままで何人の相手を試してみたんだ？」

「それはもう、たくさんよ、ウィルフレッド・マクススウェル」と彼女が言った。「わたしは全員からなにがしかを受け取ったけれど、すべてを受け取りはしなかった。そして、もうだめかしらと思いはじめた時、あなたに会った」

「しかし、実際の話として」と私、「こう体の具合が悪くては、ぼくは君に与えるものがずっと少ないんじゃないか？」

「それどころか」と彼女、「あなたには、思いもしなかったほどの可能性があることを悟ったわ」

それから彼女が話してくれた。万物には二つの局面があるという。つまり、積極と消極、能動と受動、陰と陽、男と女。しかも物理的肉体に於いてすら、これが基本的な形で現れている。通常人にあつては、片方が優性で、片方が劣性となり、これが性を決定する。しかし、劣性のほうは、潜伏しているとはいえ、ちゃんとそこにあるのである。

これは身体成長の異常や疾病を研究した人にはよく知られたことであり、魂の異常を研究した人ならもつとよく知っているはずである。

しかし古代人は、異常だの正常だのに拘泥することなく、魂は両性的であり、片方が物質世界に顕現したなら、もう片方は精神世界に潜んだのだと言い切ったのであった。そして胸に手を当ててよく考えてみれば、これがどれほど正しいかがわかる。我々の性質には明らかに二面があるのだ―それ自体の力動によってほとぼしる一面と、潜伏したまま、霊感待ちで、喚起されるまで動こうとはしない一面の二つが。「そしてこれが」と彼女が言った、「わたしたちそれぞれの、より大きな部分です。男性にとっては、それは霊的本質であり、女性にとっては能動的な意志です」

それから彼女は、その性質の両面がほぼ均衡している人々もいると話した。これは、肉体的や本能的なものではなく、気性面での話である。異常というものは優性的要因を抑圧するところから生じるのであり、一方、彼女の話した例は、高次の自己を通じて表出する二面を有する魂なのであり、これは過去世での秘儀参入の修行の結果によるものだという。

「私はこういつたことをアトランテイスで学んだの。わたしが神聖なる氏族の一員だった時に」と彼女は言った、「そしてその時の記憶がわたしとともに甦り、それ以来、よくわかつている。でも、あなたは秘儀を伝授された司祭だったことは一度もないと思う。でも、ベル・ノールで高等司祭を相手に仕掛けたトリックで、あなたはなにかを学んだのね。それがどのくらいのものだったのか、よくわからないけど、まあ見てみましよう」

「ともあれ、ぼくは君との個人的なつながりを得たんだ」

「女司祭には個人的つながりなんかないわ」

「いずれにせよ、それでぼくたちは一緒になれたんだ」と私は言ってみたが、彼女がなんの返答もしないので、腹が立ってきた。

「まったく別の見方もあるよ」と私は言ってしまった。「ぼくの夢も、幻視も、同じところから発生していたとかね。つまり、自己抑圧と達成願望さ。潜在意識が欲求不満で一杯の男がどれくらいいるか知らないが、ぼくは間違いなくそれだからね」

「もちろん、そういう説明もつきますね」とモーガンがまったく動じずに答えた。

「それに、ミス・ル・フェイ・モーガン、君の司祭職も、我が社の顧客が君に財産を相続させたのも、魔術的像のなせる業かもしれない」

「“真理とは何か？”とピラトはからかうようにイエスに尋ねたものね」

「ここで忠告させてもらうが、ぼくをからかうのをやめないと、ぼくとぼくの共同経営者が君の前歴を本気で調べることになるぞ」

モーガンは笑った。「わたしの司祭職が魔術的像であろうとなかろうと、どうやらあなたのなかに男らしさを生み出す効果はあったようね、ウイルフレッド・マクスウエル」

これは反論できない論拠であり、私は屈服した。

それから彼女が言ったことは、ぶつたたいてやってもよいくらいのものだった。

「ウイルフレッド、あなたの中にどれくらい女性があるか、知ってる？」

「五十パーセントさ」と私。「他の連中と一緒に。ぼくの母は女だった」

「そんなんじゃないなくて、あなたの気性のことをいってるの」

「そうだな」と私。「かなり猫的に意地悪だろう。だが、喘息発作直後のぼくと議論したってむだだよ。まともなことは答えられない身なんだから」

「それもちがうわ。あなたの性格が、顕著に消極的だと言ってるの」

「君が思うほど消極的じゃないよ、モーガン・ル・フェイ。女性軍とずっと暮らしてきたもんだから、保護色を身につけてしまったのさ。厄介を避けるためには回り道もするが、おおむね予定の場所にはたどりつく。それに、ぼくはどうしようもなく保守的な町で生活し、商売しなけりやならないし、保守的でないと疑われたら、それで商売はあがったりだ。だから、今みたいに、むしろくしゃして、八つ当たりしたい気分の際は、町から三マイルは離れることにしているよ」

「まだ違うわね。あなたは獣よ、ウィルフレッド。あなたが見掛けほど穏やかな人じゃないことはわかってるし、シャイなあなたは一番嫌いよ。わたしが言いたいのは、あなたが他の男性ほど積極的で能動的じゃないってこと」

「さてさて、おねえちゃん、ぼくはそれ向きの体格がないんだ。ハストーン以下の体重でどうやってガッチリ野郎になれるんだ。張り倒されるだけだぜ。おまけに君が嬉しそうに言うぼくの内気にしたって、本当のところは戦術にして外交なんだ。ただでさえ面倒だらけだったのに、なにが悲しくてわざわざ用のない面倒を起こそうってんだ？」

「それがあなたのポリシーというのなら、どうして我慢しないの？ どうしてわざわざわたしに喧嘩を売るのよ？」

「売ったのはそっちじゃないか、モーガン。半分女だなんて言われて喜ぶ男がいるとも思ってるのか？ そのとおり、だから余計に腹が立ち、というじゃないか。おまけに、こんな遊びを前にやったことがあるかと聞かれても、君はないと答えるんだろう、違うかい？」

「あなたはもう少しものわりのいい人だと思ってたわ」

「そりやどえらい大間違いだ。古き良き日々には、《大母神》の司祭たちが女神を称えて我が身を八つ裂きにしたというが、ぼくはごめんだね。君にはうんざりだよ、モーガン・ル・フェイ」

「どんな女とでも簡単に持てるありふれた関係もあるし、本当に希有な魔術的かつ微妙な関係もあるのよ。どっちがいいの？」

「ほお、選べるのかい？ 君からもらったものだけで満足しなければならぬのじゃないのか？」

「そうね」と彼女が言った。「満足してもらいたいわ。でもあなたがそんなふうに思っているのは残念よ。あなたにそれは多くのものを与えられるのに」

「モーガン・ル・フェイ、どうしてこんな面倒を持ち込んでくれるんだ？ それがぼくにいい思いをさせるためじゃないことは確かだな。女司祭はこの種のことに興味はないと、君がしつこく言い張るのは別としても、だ」

「それはね、ウィルフレッド、もしあなたとわたしがこのことを成し遂げることができたら、わたしたちは後に続く者たちの道を開くことになるからよ。そしてわたしたちは現代の生活になにか欠けているものを引き戻すことができるから。もう忘れられ、それだけで、ひどく必要とされているものを」

「そのなにかとは――？」

「男と女の間の微妙な、磁氣的な関係の知識と、それがより大きな全体の一部であるという事実。洞窟の中でどう感じたか、覚えてる？ わたしはすべての女性で、あなたはすべての男性だったでしょう？ わたしたちの人格なんか脇に置かれて、わたしたちはただ、力の回路になっていた――創造の基となる陰と陽の力を覚えてる？そして、そうなった時、原初の諸力が《未顕現》から直接わたしたちの中になだれこんできたでしょう、あれはすごかったでしょう？ これが神殿で訓練を受けた女司祭や神聖娼婦が目指したものだつたし、こういつたことに關する現代の理解に欠けているものなのよ。毎年子供が出来て、時には双子も出来る結婚生活なのに、なにかが欠けている例は幾らでも知ってるでしょう。でも、結婚は出来ない厄介な関係なのに、大いに満ち足りている人たちもいるわ――しかも二人は必ずしも週末どこかにしけこむわけじゃない。そういう人たちもいるでしょう、ウィルフレッド。多くの人が、性は肉体的で、愛は精神的だと信じてるけど、男と女の間には、ちやうど磁石の針が北極南極を向くように、なにか磁氣的なものがあるということを知らない。そのなにかは、もちろん男の中にも女の中にもないの。それは男女の中を通り、男女を使うものであって、《自然》に属するものなのよ。

ウィルフレッド、わたしが老いぼれたお婆さんでいるべきはずの時に、わたしの若さを保ってきたのもそのなにか。そして、もともと母親子だったあなたを、ごみための鶏みたいに喧嘩っ早くしているのも、そのなにかなの」

「そういうことであれば、これはもう避けたほうが賢明なようだ。君に会うまでは、ぼくはちゃんとした青年だったんだから」

「あなたが用済みになる前に、あなたはもつとちゃんとした青年になっているわよ」とモーガン・ル・フェイが言つてのけた。「でも、これだけは理解しておいてちょうだいね、ウィルフレッド、なぜわたしがあなたと結婚しないかを。肉体的に見れば、わたしは比較的若い女かもしれない。男の若さは血液で決まるというから、わたしは女の若さは内分泌物で決まると思つている。でも精神的には、わたしはもうすごい老女なの。だから、あなたが必要とするような物事は、わたしにはなんの意味もない。それにわたしは結婚で自分を縛りたくない。もしそんなことをしたら、わたしは突然、本来あるべき姿の老婆になってしまうと思う。あなたを愛するということはわたしの頭の中にはないの。でも、あなたのこととはとても好きです。だから、わたしから学んだことを土台に、あなたはきつと他の娘をとつても愛することができるようになると信じています」

「モーガン・ル・フェイ、君を知ってしまったほうが、他の女を愛せるようになると思うのかい？」

「ええ、そう思っている、ウィルフレッド。わたしの作業がうまくいけば、きっとあなたはそうなるわ。わたしがあなたについて研究したいのは、この種の磁気回路がどうしたら開放できるか、どうしたら力が流れるか、ということですよ」

「冷血な計画だな」と私は言った。「しかし、情け容赦ない点に感謝すべきなんだろう。実際、ぼくはそんなことには慣れておくべきなんだ。それしかなかったんだから」

それで、やつとモーガン・ル・フェイが私のために用意していた黄金のナイフの種類がわかった。歴史は繰り返し返して完成に近づくのである。またアステカの奴隷のように、私も王侯貴族のようにもてなされる一年を楽しんだ後、終わりを迎えるのだ。さぞやゆっくりとした苦痛だろう。

翌日、私は嵐の海のパネルに取り掛かった。白冠の波の泡から、疾駆する海馬とその騎手たちが発する戦場の狂気を描きだした。その背後にある藍色のくぼみには、より大

いなる神々の陰鬱、沈着、無慈悲な顔が浮かんでいた。

第二十章

次の月曜、私はまだ正常とはほど遠く、まったく神経がいらついていた。そこでモーガンが小型のクーペで私をスターバーまで送ってくれた。そこでスコツティに電話をかけ、もう一週間、要塞にとどまるための手配をした。彼は万事をうまく処理しておく、家族のほうにも話をつけておくと言ってくれた。私としては、たいして話もいらぬんじゃないかと思っていた。姉は私に会うために大枚一ポンドをタクシーに費やすとは到底思えなかつたし、ホイットルスも職務以外では彼女を車に乗せることはないと誓っていた。私を泊めてくれたモーガンは実に優しい女性であつた。私は甘やかされた子供みたいに気難しくなっていたから、彼女が示した親切は不思議である。

すべてを手配して、スターバーからの小旅行から戻つた時、私の気分はまた変わった。私はすぐに荷造りをしてディックフォードに戻りたいと言ひ出した。こんな面倒はもうたくさん、モーガン・ル・フェイと別れようという気持ちがある中であつた。彼女は好きにすればと言ひ、そのため私はいよいよ荒れた。しかし、彼女は発つ前に食事をして

いくように勧めた。向こうについた時には昼食に間に合わないだろうし、私のために特別にスターバーで買い物をしておいたから、と言ったのである。私も男であるから、これには参った。その時、モーガンから別れようと言いださなにかぎり、こちらから別れるなどできないと悟ったのである。

嵐の後の最後の余波も収まり、うららかな晴天は続き、夜には雲一つない空を狩猟月が横切っていった。ある完璧に晴れた静かな晩に、私たちは丘陵の頂上までそぞろ歩き、古代宗教の崩れたケルンを通り過ぎて、石門が草の上に倒れている場所までやって来た。私たちは落ちた棟石に腰掛け、ベル・ノールの背後から上る月を眺めていた。湿地帯に霧がかかっていたため、月は奇妙な鈍いオレンジ色をして現れた。ほどなく、彼女は霧を抜け、満帆の船のように空に浮かんだ。逆方向に流れる雲の切れ端が月に速度感を与えていた。かくも素早い巨大な銀の月をかくも近くから眺めるといふのは不思議な気分のものである。ともあれ、宇宙には我々の地球以外にもいろんなものがあると実感させてくれる。

今日では、太陽光が健康と植物繁茂に及ぼす効果はよく知られている。だが、モーガンは月光の力に関する、失われた古代の叡知の話をしてくれた――月光が植物繁茂に影響

を及ぼす様子は、英国のような不安定な島国気候ではわかりにくい。しかし日光が恒久的に存在する地域では、月の影響もよく知られており、種蒔きや伐採の際には月の位相に従うように配慮するそうである。また彼女の話では、月は精神状態や気分には甚大な影響を及ぼしているという。これは精神的に病んでいる人たちと付き合う人ならよく知っていることである。また、自分は一応正常であると思っている我々さえ、想像したくないほど影響されているものなのだ。

「きつと、それでぼくはこんなに喧嘩早くなっているんだろう」と私は責任転嫁の機会を歓迎しながら言った。

「そうね」とモーガンが言った。「たぶんそうだわ。月はすべてを強調し、それを危機に至らしめるの。満月の前後にどれほど多くの危機が起きるか、気づいたことはなかった？」

「君はなんの危機を期待しているんだ？」

「あなたとわたしの危機よ」と彼女は言い、私と腕を組んで丘陵の陸側の端まで歩いていった。私はなにも言わなかった。言うべきことがなかったからだ。

湿地帯から立ちのぼる霧が月光の当たる場所に水の幻術を与えていた。ベル・ノールは霧の海に浮かぶ島のようなだった。

「陸が溺れている」と私は言った。「連中が君を呼びにいった時のようだ、モーガン・ル・フェイ」

彼女は微笑した。「奇妙じゃないこと？」と彼女、「人間も海の法を守るしかないのに、それ以外の方法で海を押し戻せると考えているなんて？」

「自然の諸力すべてについても同じことが言えると思う」と私も言った。「我々は俗に道徳と呼ぶものに関しても、同じことをやっけて、それで溺れ死ぬんだから世話はない」

私たちはゆっくりと歩いて戻った。途中、露に湿った草を幾千ものウサギが食している間を通り抜けた。露だけがウサギたちの水供給源だったか、ウサギは気にしていなかったようだ。

私たちは要塞に戻り、そのまま岩場の突端まで歩いていった。今夜の潮はとても低かった。月と太陽が共同作業に従事していたから。

「ウイルフレッド」とモーガン・ル・フェイが言った、「あの場所で海焚火を焚きましようよ」

彼女が指さす場所を見ると、それは大きな平たいテーブルのような岩だった。明らかに人の手によるものであり、ゆっくりとさざ波の中から姿を現しつつあった。今は潮が最低点まで引いているが、三十分後には潮が戻りはじめるから、一刻も無駄にはできなかった。モーガンと私は一生懸命働いた。彼女は上等の海緑色の絹のガウンをかまわなかった。そして私たちは杜松とヒマラヤスギと白檀の枝を一緒に積み上げた。その形をピラミッド状にしたのは、これが古代の習わしだったからである。その岩の端に付着した髪の毛のような海藻がゆっくりと向きを変え、逆方向に流れだした時、私たちは薪の山にマッチで火をつけた。

火の着きは良く、炎は枝から枝へ走り回り、杜松特有の火花の雨を降らせはじめた。炎の中心部ではヒマラヤスギと白檀が高熱に赤く燃え、香煙が海の上を巻くように漂った。

ほどなく浅い銀のさざ波が岩の平らな面を洗いはじめ、焚火の基底部に接した。しゅうという怒った音が応答し、墨黒の線が炎の完璧な円を切り取って、焚火を凸月のような形にした。海は少しこりたようで、その後しばらくおとなしくしていた。それから、上げ潮を背後に控え、余波が再び岩にさざ波を送り出した。怒れる炎からしゅうしゅうという咆哮と蒸気の雲が立ちのぼった。それから不思議な光景が目映った―ピラミッド形の焚火の頂が燃え続け、火炎と香煙を冠飾りとしながらも、その周囲はすべて水なのであった。

ゆつくりと潮が上がるが、頂はずっと激しく燃え続けた。海は生け贄をたやすく貪るわけにはいかなかった。それから、ついに潮の作用で焚火の基底部がねこそぎ持っていかれてしまい、炎のピラミッド全体が火花を四散させつつ暗い水の中へ崩壊していった。燃える木材はじゅつといいながら柔らかい海草の中を沈んでいき、私は海水で消された焚火の刺すような匂いを嗅いだ。

すると私のもとに万物の源としての海の幻視が訪れた。海が泥岩を生み、引き下がっていつて、岩を大地に残す様が見えた。地衣類と風化の作用によつて、岩が砕け、土と化す緩慢な過程が見えた。海が上がリ、それらを再び原初の泥濘に戻す様が見えた。その泥濘から最初の生命が誕生した。生命が泥濘を出て、岸に至り、脚や翼を生やす様が見えた。その時、モーガンが海を崇拜する理由がわかった。海は最初の被創造物であり、他のなものよりも《原初》に近いからなのだ。

その晩、私は眠ることができなかつた。寝台で身を起こしたまま煙草を次々に吸い、月の入りを眺めていた。月は上つてきた時の鈍い銅色を帯びて沈んでいった。水面に霞みがかかっていたからだ。天候が変わるな、と私は思った。

輝く銀盤を見つめていたことで、催眠状態になっていたのだらう。私は実に明瞭に事物の始まりを振り返り始めたのである。私は神々の母がレアであつたことを思いだした。私は星間宇宙の無限の深みを覗きこみ、液状の月光のような水が限りなく潤沢に噴き出す泉を見た。これが《最初の受胎》なのだ、と思った。その液状の光が宇宙の深みに集まり溜まる様を眺めた。その水溜まりに流れが生じ、ほどなく渦を巻きはじめ、その渦の中から幾つもの太陽が昇るのが見えた。水には二つの気分、流動と静止があるのがわ

かった。それが静止しないと、生命は生じないこともわかった。事物の始まりは事物の本質すべてに反映されているということがわかると、私たちの中にもこの生気の流れと溜まる場所があるに違いないと思った。こういったことは月のリズムの支配下にあるだろうとも考えた。そして私は《最初の噴出》のように、能動的であろうとするのが男性の本質であると認識した。また、生命が生まれる水溜まりにまともうとするのが女性の本質であることも悟った。またこういったことには別のリズムが存在するに違いないとも思っただのである。そしてこれこそ私たちが忘れているリズムなのである。

それから私はモーガン・ル・フェイと私の立場について考えはじめた。どうして彼女が以前につきあっていた男たちにはない可能性を私に見いだしたのだろうか。私が女手で育てられた人間だからかもしれない。あるいは不健康だからか。私が両親が年老いてからの子供だったからか、私の肉体の生命力が低いせいか。私は狂乱状態にならないかぎり、決して元気がいいとはいえないのだ。一方、モーガンは異常なほど生気に溢れた女性である。それで私はなぜ司祭だけでなく女司祭もいるのかを理解した。男性が女性を受胎させるのとまったく同じように、女性の中には男性の感情的性質を受胎させる生命

力があるのだ。これを忘れて果ててしまったのが現代文明——万物を型にはめ、因習化させてしまい、《流動と反流動の公主》たる月を忘れた我々の時代だったのである。

モーガンが私になにを仕掛けようとしているのかもわかった——彼女はこの失われた力がどういう風に作用するかを発見したいのだ。たいがい男は彼女にそんな真似をさせはしない。なんとしても主導権を握ろうとするのが男の身にしみついた習慣であるからだ。しかし、我々の習慣の背後には、原初の《自然》が存在しているのである。これで妖婦がかくも成功を収め、優しい献身的な女性が売れ残りの店晒しにされる理由もわかる。男は与えるばかりの女を愛しはしない。男が愛するのは、求めてくるがゆえに彼らの強さを引き出す女なのである。もっとも愛されるのはモーガン・ル・フェイのような、誰にもすべてを与えない女なのであつて、持てるものすべてを差し出す女ではない。愛は結果よりも過程が楽しい事物の一つである。

モーガンが一体なにを目指しているのか、どこに上陸する気なのか、私はいぶかしんでいた。私の人生経験の教えるところ、どのみち面倒に行き着くしかないと思われた。しかし彼女には別の考えがあったようだ。私に残された代替案は、ディックフォードに戻り、まっとうな市民となることであつたが、自分にそれが出来るとも思えず、結局モ

ーガンに全権を与えて、うまくやってもらうことにした。つまり、その選択権が私にあるかぎりのお話である。しかし今や選択の余地がない地点まで来てしまったのではないかと私は心ひそかに思っていた。

この決定に到達すると、私は翌朝には過去十日間よりずっと機嫌がよくなり、落ち着いてモーガンを眺め、なにをする気か見てみることにした。また私は落ち着いて最後のパネルを描くこともできた―静寂な月明かりの夜の絵であった。水と雲の光と影の中に、モーガン・ル・フェイの顔がおよそ考えられるあらゆる角度から現れていた。

第二十一章

月は満月から二日過ぎており、気圧計は下がっていたから、うららかな晴天も永遠には続かないことを知った。夕食後、私たちは岩場の突端に行き、月が上るにつれ、ベル・ヘツドの海上の影がだんだん短くなっていく様を眺めていた。岩場を歩くには一列縦隊で行くしかなかった。モーガンが先頭に立った。彼女は私にまったく注意を払わず、どうやら一人で物思いに耽りたい様子だった。私は突端までついていくのを止め、手擦りの残骸に腰掛けて、煙草を吸いながら彼女を眺めていた。

丘陵の影が足元に近づくまで、彼女は長い間月明かりの海を見やっていた。それから振り返り、月光を浴びながら月を見上げた。その静止した完璧な姿形ゆえに、彼女は彫刻像のようであった。やがて彼女は両腕を三日月のように空に掲げ、ここ数日私に歌ってくれていた不思議な歌の一つを歌いはじめた。この歌のために私は不安で落ち着かない気分させられたところ大のように思える。しかし、この時、彼女は神々を呼び出す力をこめて歌っていた――

「おおイシスよ、地にあつてはヴェイルに覆われ、

天高くあつては明るく輝く者。満月は近づきたり、

召喚の言葉を聞け、聞け、そして現れよ―

シャダイ・エル・ハイ、そしてイーア、ビーナ、ギー」

どういう言葉にせきたてられたのか、今となつてはわからないが、私は立ち上がつて彼女のほうに歩いていった。彼女の顔が月明かりにもくつきり見えるほど近づくと、それがモーガン・ル・フェイではないことに気づいた。その目は見慣れぬ、大きく見開かれた非人間的なもので、海の女司祭のものですらく、海の女神そのものの目であった。彼女は両腕をハトホルの角のように掲げ、月と海に向かつて歌っていた―

「我は地の造られし以前の女神

イーア、ビーナ、ギー

我は無音、無限の苦き海なり、

その深みより生命は永遠に湧きいづる

「アスタルテ、アフロデイト、アシユトレツ―

生命を与える者にして死をもたらず者

天上にあつてはヘラ、地にあつてはペルセポネ

潮流のレヴェナにしてヘカテ―

これすべて我なり、我がうちに見られたり

「高き満月の時は近づきたり

我は聞く、召喚の言葉を聞きて現れたり―

ヴェイルを脱いだイシスにしてイーア、ビーナ、ギー、

我は我を呼びし司祭のもとに来たれり」

それで好むと好まざるにかかわらず、私は『海の司祭』の役を振られたことを知った。

月の角の合図をしていたモーガンの両腕はゆっくりと水平になるまで降ろされ、それから奇妙な掻き分ける仕草で前後に動きはじめた。ゆったりした長い袖がゆっくりと羽ばたく翼のような効果を上げていた。悲しい羽音のようなりズムが四分の一音上がり下がりがりし、繰り返し脚韻を踏む―その歌は蛇が小鳥を捕らえるように、私を捕らえたのであった。私は一步一步彼女に近づき、ついに私の開かれた掌が彼女の掌とぴたりと合わされた。突如、私は女性の手に触ったのではなく、強力な電池の両極に触れたことを悟った。

神々を召喚するすべての古代の儀式の振動が彼女の不思議な歌声の中に覚醒していたのであった。私は彼女の手に触れた時、彼女が実際に天上からなにかを引き降ろして、それが彼女から私を回路にして大地に至っていたことを知った。潮は満ちつつあり、大きなうねりが私たちの足元の岩を洗いはじめた。それは足先に触れ、足首に触れ、危険になってきた。雲が月を覆い、私たちは暗闇の中にいた。北西の冷たい風が海面を波立てながら吹いてきた。天候が崩れつつあることがわかった。風が続いて、次々に波が押し寄せ、岩に砕け散った。モーガンのドレスの裾が水に浮かんでいるのが見えた。そこで彼女を引き寄せてみると、彼女はまるで夢遊歩行者のようについてきた。この千鳥足の女性を、暗闇の中、足首まである水の中を、砕けた岩を越えさせるのは危ない作業だった。白波は背後から迫ってくるし、風速は増しつつある。しかし私は一歩一歩進み、彼女を階段まで無事に連れてこれた。ともかくお互いの安全に気を取られ過ぎていて、私は自分のことなど考えるひまもなかった。しかし、彼女を前庭に降ろすと、窓からの明かりが漏れていて、自分たちのしていたことがわかった。彼女は突然目を開き、深い眠りから覚めたばかりのように私を見た。それで私は、なにかとても不思議なものが私たちの間を通り過ぎたことを理解した。

翌日、すべてが夢だったように思えた。モーガン・ル・フェイはそれを口にせず、私もしなかった。口に出すと壊れてしまうものがあるのだ。風は増し、冷たい雨が降ってきた。それで私たちは一日中、岩場にも丘陵にも行く気が起きず、ただ暖炉の前に座って読書をしていた。お互い、しゃべることはほとんどなかった。

しかし、就寝時、消えゆく暖炉の前に二人で座っていると、私は突然脇の読書灯を衝動的につかんで、長い部屋の向こう側の壁まで歩いてしまった。それから隅の扉以外の全面に広がる石膏に、ざっと描いておいたデザインを子細に調べはじめた。

そのデザインは深海の海の宮殿を描いたもので、シャボン玉のような虹色の丸屋根が幾つもあり、空の代わりに波頭がその上を逆巻いていた。正面の柱には海蛇が巻きつき、沈没船の宝物が前庭に散らばっていた。中央の海の王座に座っているのは碎ける波の銀色の衣をまとった人物であり、私としては靈感を受けた時に顔を仕上げてモーガン・ル・フェイにしようと思っていた。しかし、靈感はまだ到来しておらず、影のようなすかな輪郭だけがやっと見える程度のままだった。

しかし片手にランプを持ち、もう一方の手で筆を選んでいると、顔を描く時いたれりの感を覚えた。モーガン・ル・フェイは広い部屋の向こう側で本に俯きながら半分寝ていて、私に気を払わなかった。そこで私は不確かなランプの光をたよりに描きはじめた。モデルは必要なかった。彼女のことはあらゆる線と曲線にいたるまで熟知していたからだ。

しかし描いていくうちに、絵筆の下に現れはじめたのがモーガン・ル・フェイの顔ではないことに気がついた。それは男性の顔だった——立派な顔立ちの、修道者的な、この世のものではない顔だった。自分が描いたものながら、その目はかつてカンヴァス上に見たどんなものよりも生き生きとした素晴らしい目であった。彼の両目はまっすぐ私を見据えていた。私もまっすぐ見返していた。それから、どんな衝動に駆られたのか、私はモーガン・ル・フェイの水晶球をその両手の間に描きはじめた。水晶を描くことは実に難しいが、しかし私はやってのけた。水晶球は内部から輝くような光を宿していた。

描き終え、一歩下がって出来具合を眺めると、どう理解していいやらわからなかった。その時、背後に物音が聞こえ、モーガン・ル・フェイが立っていた。彼女は長い間私のなしたものを見つめていた。それから私のほうを向くと、こう言った——

「これは《月の司祭》よ！」

第二十二章

《月の司祭》と接触したことにどれほどの意味があったのか、今となつてはうまく表現できない。これまでも表面の背後に潜む不可視の実体（ちやうど人間の体と人格のような関係）に接触した経験のことは書いてきた。過去世を見るようになった力のことも書いている。こういった事物の形而上学を扱うのは私に出来る相談ではない。私にわかっているのは、それがかつてなかつた経験であり、私の人生に甚大な影響を及ぼしているということくらいである。この種の経験を判断する基準として、私は影響という点を重視したい。ことの真偽などを論じてもむだだろう。それが潜在意識の作用であると、この説には喜んで同意したい。確かに、あれは通常の意識の範囲をはるかに越えたものである。それが夢の材料で作られているという説にも、同意する。確かに、それは日常よりも睡眠中の活動に近似しているからだ。しかし、だからといって、これらを不良債務として片付けてしまったといえるのだろうか？ まだ睡眠や潜在意識といった言葉の定義もすんでいないではないか。私とて、この場でその定義をするつもりはない。なにせ、私も知らないのだから。私にとって、睡眠や潜在意識などというものは道標で

あつて、ラベルではない。魂をまるごと包装紙に包んで紐でくくりあげることができ
なら、それに「魂」と書いたラベルを貼りつけてもいいが、できないのならやめたほう
がいい。それまでは道標と思つておいたほうが無難である。道標なら方向を示すだけで
すむし、下手に限界を設定すれば、現段階では不毛な作業となるだけだろう。

ゆえに私は幻視その他を記述するだけにする。後は物好きが好みに合わせて勝手に分
類すればよい。うちの近所に住んでいた某老婦人は、長年息子の消息を聞かれるたびに、
倅はブリストル病院にいと答えていたものである。ついに怪しいと思つた人が、ご子
息はどの病棟におられるのかと尋ね、彼は病棟にいるのではなく、遺品陳列室にいと
いう情報を引き出したのであつた。ゆえに私も、存在を以て範を垂れる標本の役くらい
はつとまるだろうと思つている。

私は現代の靈感的絵画を多数目にしてきたが、どれもこれも、画家が雲や衣服のひだ
ひだにかかわつている時はいいのだが、人物や顔に取り掛かると、あつという間に一縷
の望みすら永劫の彼方に消滅してしまうのである。こうなることがわかつていたから、
私はなるべく人物を影においておくだけの分別を持ち合わせていた。なんといわれよう
と、いざ技術面となれば、いかに高尚な魂を持つていても、腕が悪ければどうしようも

ないからだ。ゆえに《月の司祭》の顔はかすかに見えるだけであり、あとは想像力で補ってもらおうといった具合であった。私は司祭を絵にしたのではなく、呼び出したのである。この方面の技術理論は別個に一体系まるごと存在するのであるが、ここに記すつもりはない。肉眼では色つきの影しか見えぬ――絵を完成させるのは知識である。なにも知らなければ、なにも見えないのだ。知っていれば、多くのものが見える。自分の絵を自分で判断する気は私にはない。興味のある人々に判断させればよい。ホイットルス老人は、私が絵を完成させなかつたのが残念だと言った。牧師は墮落した絵だと言った。姉はくだらないと言った。スコッティーは金を貰っても欲しくないと言った。ボンド・ストリートの友人は私に絵で生計を立てるよう勧めたが、しかしこれは重労働であるし、共同経営者を得るわけにもいかない。

私の絵はいろいろ言われたし、好きか嫌いかに激しく分かれるものだったが、ともかくも、この絵は自由主義教育の産物だったのである。

しかし、問題となるのは作品の美ではなく、作品からなにが生じたかであった。これらの絵を通じて、《月の司祭》が私の生活に入りこんできた。つきあってみると、彼は実に奇妙な人物であった。モーガン・ル・フェイよりもずっと奇妙であり、しかも、彼

女だつてたいがいの変人なのであつた。変な話かもしれないが、絵の中に浮かびあがつてきた影のような人物に、私は強力な個性を感じていた。私はこれまで人物といえる連中をそれほど多く知らない。ディックフォードではそんなものはあまり採れないし、たまたま育てば、若くして飲酒で身を崩している。弁護士たちの中に数人、人物がいた。また老判事の中にも、盛りの中にはさぞやと思わせる人物がいたが、裁判所の偉いさんになる頃には生気も消えうせていた。ボンド・ストリートの我が友もそれなりに人物である。我が姉もそれなりに、と言いたければ言え。ざっと考えたところ、これくらいである。他の連中ときたら、次の食事より先のこととはほとんど見えない輩であつた。

人物というものは、なにを言うか、なにをするか、ではなく、どう自分に影響するかで判断することになっている。生まれが良ければいろんなことを楽にやれるものだし、たまさか必要とされるものを持ち合わせていただけという場合もある。私の定義による「人物」では、これは認められないのである。人物たるもの、こちらからならかの反応を引き出さなくてはならないし、それが好ましい反応ばかりともかぎらない——うちの姉以上に不快なものを探すとすると、ちよつと骨だろう。私もこの地方ではかなりの嫌悪感を掻き立てる存在である。私は我が道を行つて、他人のことなど気にもとめないか

らであり、田舎ではこれは嫌われるものなのだ。人物というものは人を刺激するのである―それが魂の救済につながるか、破滅につながるかは、私の定義には関係がない。

《月の司祭》は顕著に人物であり、彼が私の潜在意識の産物とすれば、これは誇らしいことだ。それほど多くはなかったが、しばしば私は彼が何者なのか、いぶかしんだ。自己欺瞞ではないのか、自分がおかしくなりかけているのか、と思ったのだ。しかし彼に会うたびに、彼が何者であるのかはつきりとわかるようになったし、彼は私の心にしるしを残していったのである。

当初、彼が、あの生け贄の際に私の思い上がりに怒り心頭に達していた海の司祭だろうと思っていた。それで私は怖くなった。敵が跡を追ってきたと考えたからだ。その後、どうやら違うようだと感じはじめた。彼はもつと巨大な存在だったのだ。この司祭こそ、モーガン・ル・フェイの背後にいる存在であり、アトランティスの破滅を予感して彼女を連れ出した人物だったのである。

今でもその光景をまざまざと見ることができる。私の記憶に鮮烈に刻みこまれているかのように―ちようどポンペイのように、火山の周囲に建てられた聖なる都があった。

山から扇のように伸びる広い河口域の平地は、ディックフォード周辺と同様、海水のために不毛の大地となっている。水と陸のちょうど境目に、ベル・ノールがかつてそうであったような、巨大な円錐が聳え立っていた。円錐の上部は平たくなっていて、ピラミッド型ではなかった。以前の大惨事のために、そのあたりが吹き飛んでしまったからだ。そして平らな頂の上に神聖なる氏族の白い建物があった―巨大な太陽神殿である。その庭は大理石と玄武岩を交互に組み合わせた千鳥格子模様であり、巨大な二本の柱は庭全面ほどもある時計盤の指時計であった。一本は太陽のためのもの、一本は月のためのものであり、その影が床の格子を過ぎることで時間がわかるようにしてあった。モーガンの話では、これが《ソロモン王の神殿》の原型であるという。その他の《密儀》の神殿は、すべてそれにならったのだそう。

神殿の周囲には、柱廊玄関と棟石を渡した列柱を持つ建物が並んでいた。アトランテイス人は大いなる叡知を有していたが、古代エジプト人同様、アーチの秘密は知らなかったのだ。司祭たちと神殿付きの書記の住居があり、その向こうには、《処女の館》があった。神殿の境内に面してはいるものの、窓は一つもない建物だった。ここでモーガン・ル・フェイは女性に成長したのである。

《処女の館》の内部には部屋と列柱に囲まれた中庭が次々に続いていた。また、埋め込んだ貯水庫があり、階段を下っていくと、神聖水蓮が繁茂している。その上を、桑の木に似ていないこともない、古色蒼然たる樹木が覆っていた。この樹木の皮からは、神殿で燃やす芳香性の樹脂が滲み出るのである。若い女司祭たちは木の下で、古式のつむとはずみ車を使って糸を紡いでいた。どうやらアトランティスでは、アーチ同様、車輪も知られていなかったようだ。

《処女の館》から、神殿に地下道が伸びていた。そしてすべての情熱が消え失せた司祭たちが、賢女たちの保護下にある若い女司祭たちの養育を監督していた。女司祭たちは必要とあればこの地下道を通って神殿へと連れてこられるのであり、外界も俗人も目にするものがなかった。つとめが終われば再びこの地下道に戻っていくが、その時はもう必ずしも処女ではなかった。

神殿の地下には熔岩道が古代火山の心臓部まで伸びていて、どん詰まりにくぼんだ洞窟があった。そこでは常に火炎が吹き上がっていて、この山が死火山ではなく活火山であることが知れた。大地そのものが燃やす炎は彼らの信仰の象徴であった。炎は本質的

には一つであるが、三種に分かれる―火山の炎、太陽の炎、地上の炎である。《月の司祭》に長らく予言されてきた大災害が近いと警告したのもこの炎であった。

さて《月の司祭》は炎に仕える者たちとは違っていた。彼も若いころには他の者と同様、連れてこられ、訓練されたのであったが、炎崇拜がすでに墮落してしまったことを理解して、より古い信仰へと立ち戻ろうとしたのであった。彼は信仰という川を源流までさかのぼり、ついに純粹な源泉にまでたどりついたのである。彼は《大母神》を月と海の姿を通して崇めるようになった。この点で彼は賢明だった。《大母神》には人間の生命の秘密が隠されていたからだ。もともと、《すべての父》には靈の鍵が隠されているのであった。

絶頂期、彼は生命が汚されずに生きていける土地を探し求めている。滅びゆく種族の墮落は地に満ちていたから、彼は錫の船に乗って《海の島々》まで旅をした。ここでは海王たちの貿易市が栄えており、珍奇な品々、青染めや紫染め、薬草や銀などが取引されていた。

そして跳梁する炎が大惨事の警告を発した時、年老いた《太陽の司祭》は、迫りつつある事態を知ってはいたが、もはや動くこともかなわなかったため、神殿と運命をともにする覚悟を決めた。彼は若い《月の司祭》に秘密の巻物と神聖なる象徴を託した。それから彼らは夜に《処女の館》へ地下道を抜けて忍び入り、月明かりに眠る若い娘たちを眺め、彼らの目的にかなうような一人を選び出し、彼女を起こした。それから他の者たちが眠っている間に彼女を黒い衣につつんで連れ出したのである。

彼女が月明かりに外界を見たのは、それが最初で最後だった。槍兵や槍投げ兵が技量を磨き、騎兵が二頭立て戦車を駆る演習場が目に映った。それから彼女は曲がりくねった参道を下り、浜に向かい、海に出た。夜明けの陸風が彼らの船の帆をはらませ、船は素早く走っていった。夜を日に継いで彼らは進み、漕ぎ手たちは貿易風をつかまえるまで汗水たらした。それから三日目の朝、夜明け前の暗がりの中、海底が揺れるとともに三発の巨大なうねりが船を押し上げた。日が昇ると、かつてアトランティスがあつた場所に黒煙と黒雲の柱が見えた。

《月の司祭》は「三重に波立つベルムーセス」からアズレス諸島を經由して若い娘と旅をした。そして彼女を自分の女司祭とするつもりで、《聖なる島》に用意していた場

所へと連れてきたのであった。この島は《ドルイドの島》の沖合にあり、《聖人の島》即ちアイルランドに顔を向ける島であった。この地で彼は娘を賢女の手託し、司祭になるための苛酷な訓育を施させ、自身は荒野の国を行き来しながら、事の成り行きを見ていた。人は彼をマーリンと呼んでいた。

招請の時がきた。人々は、すでに修行を終え成長した女司祭をベル・ノールで聖なる学舎を治めていた司祭のもとに連れていったのである。それから、すでに記したことが起きてしまい、生け贄は無効となって、海は襲来し、地を呑んだ。それから湿地のすべての水路に潮が上がるようになり、牧草地も畑も海に帰り、農耕の民だった者たちは、再び漁労と狩猟の民となった。石造りの砦や木造の宮殿を知っていた者たちも、再び葦の間の小屋に住む身となった。そして海の女司祭にして王の義妹モーガン・ル・フェイは、アヴァロンの孤高の谷の宮殿に一人座し、魔法の井戸の中に来るべき未来を覗きこんでいた。

そして彼女は兄王が不貞の妃に裏切られるさまを見た。賢者マーリンが若い魔女ヴィヴィアンに迷わされるさまも見た。そして神聖なる炉辺の火が見捨てられたまま消える

時、国と民に到来する邪悪を見たのであった。

第二十三章

私はこういったことをモーガンに話してみたが、彼女はたいして返事もしなかった。彼女から得られた言葉はただ――

「あなたの夢はわたしのと同じ方向に進んでいるわ」

「モーガン」と私、「なにが真実なんだろう？」

「その質問を發したのはあなたが最初じゃないわ」と彼女。

「ぼくもピラトみたいに手を洗いにくいこうかと思うよ」と私は言ってしまった。彼女から何一つ引き出せそうにないとわかったからだ。

戻つてくると、彼女は料理に忙しかった。ワイン・カラーの流れるようなヴェルヴェットのドレスを着て、大きなウイング・スリーヴを肩のところまでたくしあげていたので、銀の裏地が見えた。こうすると銅鍋や蓋鍋に引っ掛からずにあれこれ作業できるの

だ。彼女の腕は実に美しく、丸みを帯びていながらも、筋肉はしっかりしていた。肌はなめらかで、陶器のように白かった。手は小さくはないが、指が長く、ラテン人たちのとの交遊で学んだしなやかさと表現力に満ちていた。私は長い食卓の端にあるいつもの席に座り、彼女を眺めていた。彼女が作っているのは、調理の途中で火を放つ素敵なフランス料理であり、ほどなくそれが燃え上がると、私たちは食事に取り掛かった。

この最中、彼女に話し掛けても無駄だった。それは難しい料理であり、彼女は料理というものを真剣に考えていたからだ。私が絵画に取り組む時以上の真剣さ、いや、私の不動産商売の時以上の真剣さだったのである。さらに、モーガンはたっぷり飯を食わせるまでは、相手に話をしないことにしていた。これは彼女が南米の大統領たちと付き合い合っていて学んだ法則だった。なにせ短気で、すぐ銃を抜く連中だったそうさ。

しかし、私が満腹になり、煙草を吸ってコーヒーを飲んでいると、彼女が唐突に私に聞いた。

「真実ってなに、ウィルフレッド？」

「それはぼくが尋ねたばかりだろう」と私。「おまけにぼくを無視してくれたじゃないか」

「いいえ、そうじゃないの」と彼女が私のあてこすりを無視して言った。「あなたが尋ねたのは、ある事柄に関する真実とはなにか、ということでしょう。わたしが聞いているのは、真実それ自体はなにか、ということよ。まず全体を定義しないかぎり、各部に入れないわ。真理ってなに、ウイルフレッド？」

「全体なんぞ」と私、「神のみぞ知る、さ。しかし、君は今回の事例をよく知っているはずだ。それをぼくに教えてくれるか、くれないかは別問題としても」

「わたしにもどうしていいかわからない」と彼女が言った。「わたしに関する真実はどういうものだと思う、ウイルフレッド？」

「ある時はあることを考えるよ、モーガン・ル・フェイ」と私、「また、ある時は別のことを考える。その時の気分次第だね」

彼女は笑った。「それが一番真実に近いんだと思うわ。わたしの立場はまさにそれなのよ。わたしも、ある時はこう思い、ある時は別のことを思う。自分を信じているかぎり、ある種のことを行えることはわかっている。自分を信じることをやめたら、私はきつと布を剥がしたミイラのように、こなごなの塵になってしまおうでしょう。真実は何種類もあるわ。わたしたちの三次元世界に存在しないものでも、四次元には存在していて、それなりに現実であるかもしれない」

「すると、四次元とはどんなものだろうか？」と私。

「わたしは物質的な数学はできないの」とモーガンがさらりと言った。「でも、実用面からいえば、精神が四次元だと思ってる。それでうまくいくのよ。それで十分なの」

「こつちには十分じゃないな」と私。「信用する前に少しばかり相手のことを知っておきたい」

「信用しなけりや、理解できないわよ。あなたは怪しいと思ったなら手を出さない人だから」

「氷つてやつは、乗ってみるまで大丈夫かどうか知らないね。大丈夫でなかったら、それつきりさ」

「でも卵を割らずにカスタードは作れないわよ？」

「で、どうするってんだ？」

「あなたがどうしたいのか知らないけど、わたしは自分がなにをする気か、わかってる」

「それは？」

「準備万端整えて、自分の責任で進むのよ」

私はコメントを控えたし、彼女も求めてこなかった。彼女はその時になれば、私がどこにでもついてくることを知っていたのだ。そういう女だった。

「今は教えてあげられないけれど、あなたにあるものを見せてあげるわ、ウィルフレッド」と彼女は言った。「とつても奇妙なものよ。わたしもそれを理解しているとは言わない。だけど、それが効果を及ぼすことは知っている。しばらくほっておきましょう。」

来週の週末には月が欠けはじめるのだから。でも、次の満月にはわたしのもとに戻って
きてちょうだい。そしたら、見せてあげる」

第二十四章

次の満月まで遠ざかれというモーガンの指示は、彼女に丸一月会えないということの意味した。彼女が要塞に来て以来、初めて無にする週末となったし、実に長い一ヶ月だった。モーガンが私にとつてどれほどの意味があったのか、実に明瞭になつてしまった。私の生活に彼女が占めていた役割を考えれば、彼女なしの人生がどうなつてしまうのか、考えたくなかつた。その月の終わりころには、母と姉が以前の別居計画を真剣に考えはじめていた。この期間中、モーガンがなにをしていたのか知らないが、私が舞い戻つてみると、要塞にはなにか奇妙な、いわく言いがたい微妙な差異があつた。ヒマラヤスギと白檀の薫りがその場所全体にしみこんでいた。要塞はまるでコンサートを前に調律を済ませたばかりのハープのようだった。また、エオリアン・ハープのような、かすかな溜め息のような音が、要塞のそこかしこから聞こえてくるのであつた。あの不思議な人待ちの雰囲気と充満した香木の薫りは生涯忘れないだろう。

海にもどこかおかしな点があったが、なんとも名状しがたい。まるで以前よりもずっと私たちに近づいていて、思いのままに流れこんで部屋に溢れそうな感じだった。それでも溺死を感じさせるような異質の元素ではなかった。私たちと海の間に関近感が存在していたし、両性類のように海の中でも呼吸ができそうな気がした。海を自由にしているような気分と言ったらいいのだろうか、とにかく不思議な感じであり、うまく言葉にならない。あたかも私を岬から連れ去る波など存在せず、霧の中に踏み込めるように海の中にも踏み込んでいけるような気がした―霧も海も、濃度に差があるだけで、本質は一緒なのだ。

モーガンは奇怪な夕食をふるまってくれた。中国人が作るようなアーモンドの凝乳、貝殻付きのホタテガイ、デザートにはマジパンみたいな三日月型の小さなケーキ―どれも白かった。奇妙に青白い食卓は、中央の土製の皿に盛られた柘榴の山によってアクセントを与えられていた。

「これは月の食物よ」とモーガンが微笑しながら言った。

「そして柘榴を食べれば」と私、「二度と帰ることができない」と言つて、柘榴を手にした。

その晩は特にこれといったこともせず、ただ暖炉の前に座っていた。私はディックフオードの噂話でモーガンを楽しませようとしてみたが、うまくいかなかった。その場の雰囲気はあまりにも張り詰めていた。私たちは早々に就寝した。

私はすぐに眠った。少なくともそういう気がする。そして実に奇妙な夢を見た。

夢の中で、どうやら私は階下の広い居間に立っていた。壁の絵がすべて本物——つまり、石膏に描かれたものではなかった。また、王座に腰掛ける《月の司祭》も本物であった。彼は立ち上がり、私の横に立った。彼の頭には、エジプト上流域の王冠のような見慣れぬ背の高い頭巾が飾られていた。私が彼の目を覗きこむと、彼も視線を返した。そして私は、彼の中にかつてどんな生者にも感じたことのない完璧な信頼感を感じたのである。

私たちは夢の流れのような動きで外に出ていった。大きな窓のガラスは私たちを妨げるものではなかった。それから私たちは、あの哀れな知恵遅れの伴が遭難した場所まで進み、そこから海に入つていった。

ふと気づくと、私はアトランティスの高い台形の頂にいた。かつて神聖なる学舎が建っていた場所だった。もつともここが大西洋の深海だったのか、はるか天上であったのか、今はわからない。私の案内人はどこかに消えていた。そして私の前に淡い光のヴェイルをまとった二つの姿があった。その顔も形もよくわからなかった。ただ、長衣が影のようにすっと動くさまと、背後に折り畳まれた大きな翼が見えた。彼らがなにを語ったのか、私になにを言ったのか、決して知ることはないだろう。私の記憶に残っているものは、ただ自分が頂の岩の上にひざまづき、周囲には虹色のオパールのような光が戯れていたこと、そして私の魂は大いなる畏敬の念にうたれ、それ以降、人生は秘蹟に他ならなくなったことである。

それから案内人が私のそばにまた戻ってきた。やがて私たちは海の彼方に飛んでいた。ほどなく私はベル・ヘッドの岩だらけの岬を眼下に見た。それから哀れな知恵遅れが死亡した場所を通過し、最初の場所に戻って、私は目が覚めた。

話せることはこれだけだ。夢だったかもしれない。しかし、これまで見たどんな夢とも違っていたし、人生をまったく変えてしまう夢だった。ただ一つ、ただ一つだけ夢の世界から持ち帰ったものは――私の献身が受け入れられたという実感だった。私は海の女

司祭に選ばれた生け贄であり、彼女の目的がなんであれ、それに力をもたらしこととなる。陸を海から救うことになるのか、海が陸地を再生させることになるのか、それはわからないが。

翌朝、階下に降りるや私はモーガンに前夜の経験を話しはじめたが、彼女は手を上げて私を制した。

「すべてわかっていています」と彼女は言った。「口に出さないで」

これは嬉しかった。口に出すと消えてしまうような気がしていたのだ。

いつものように遅い朝食をとった後、私たちは丘陵を散歩がてら上った。すると白い月のピラミッドが二つずつ再建されていたのを発見した。参道は古代そのままに続いていた。丘陵の頂にくつきりと浮かび上がる大いなる石門のことを、現地の人々はどう思っているのだろうか、といぶかしんだ。しかし、思うものにも、現地の人自体があまりいないのである。岩場には蟹捕りの漁師がちらほら迷いこんでくるだけだし、湿地には葦を刈りにくる屋根葺き屋がいるだけだった。私は現状に関するコメントを避け、モーガンもなにも言わなかった。私たちは古代の道を巡礼でもするかのように歩いていった。

二人連れ立って同じことを考えながら歩き、それでいて一言も発さず、なお相手の考えが読める時、沈黙には不思議な力があるといえる。なにも言わないかぎり、考えていることは別の次元にとどまっただけで、魔法的ですからあるが、しゃべってしまったら、それを失うのである。妖精の市場で宝石を買う民話がある。その宝石は月明かりで見れば宝石だが、それ以外の時に見ると枯れ葉になってしまうのだ。現実というものは何種類もあり、それを混同してはいけないのである。

私たちは大いなる石門を通り過ぎた。シーザーがルビコン川を渡った時は、こんな気持ちだったに違いない。なにかが私たちの通過時に封印された。もう取り消せない封印だった。それでも、私たちは一言もなく、丈の短い草の上を歩いていった。聞こえる音は下からの波音と上の鷗の鳴き声だけだった。別次元の沈黙の力は、それは奇妙なもので、しかも非常に強力だった。

私たちは長い海丘の陸側の突端までやってきた。眼下には石灰岩の断崖が崩れ落ちて、トレスオーウエンが葡萄を育てようとしている急斜面につながっていた。はるか下のほうに、わずかな土を風から守るための石垣に囲まれた狭い花壇が見えた。それを縁どっているのが、神聖なるワインに混ぜられた灰色の芳香性の薬草だった。モーガン・ル・

フエイはそれをよく鼻が曲がるような香に混ぜて燃やしたものだ。理由はわからなかった。

モーガンは急な斜面になった滑りやすい芝生を歩いて下った。一つ間違えば真つ逆さまというものであった。私は高い場所に強くなかったから、怖じけづいて膝をついてしまった。それでも彼女についていき、私たちは浅い窪地に入り、そこから進むにつれ、小峡谷に出た。その先は、断崖からバルコニーのように突出する目も眩むような高さの岩棚だった。そこには人の手が加えられた痕跡があり、幅一ヤードほどの平らな下り道となっていた。ここなら丸石でも踏まなにかぎり、かなりの安定を保てる。ただ、人の手が加えられたのは随分と古代のことであり、風化した石灰岩が丘陵から砕けて落ちてきていた。頭上の張り出し岩が重量物の落下を防いでいたというものの、かなり注意深く歩くことを余儀なくされるくらいに、いろいろ残っていたのである。大体、暗くなつてから通るような道ではなかった。モーガンは生命を賭けて月の出をここで眺めていたのだろうか、と不思議に思った。

その道の急なことといったら、国防省すら利用を諦めたほどのものだった。しかしそれほど遠くに行くことなく、私は予期していたものを目にした――暑い夏の午後、葡萄棚

に座って下から眺めていた、あの狭い洞窟の入り口だったのだ。あの時、私はシャツ姿で、モーガンは青いリネンを着ていたが、今、私はバーバリーを着込んでいるし、モーガンは毛皮に包まれていた。あの時、自分が彼女をなんと呼んでいいかわからないくらい内気だったことを思いだすと、驚いてしまう。今は、彼女が気に食わないことを言えば、姉も同様に言い争えるほど親密なのだ。親密度の試金石としては、喧嘩せずにどれだけ言いたい放題言えるかが決め手である。

私たちは粗雑だが整った石段を少し下って洞窟に入った。すると、その中央に長方形の台が見えた。明らかに洞窟の床自体を掘り下げて、その部分を残したものであり、これで洞窟入り口の石段の説明もつく。周囲の壁は半円に削られており、椅子代わりとなる石棚が低い位置に削り残されていた。入り口と石台を直線に結ぶ位置で、石棚は一段高くなっており、まるで王座か司祭の座のように思われた。石台が祭壇なのか、長椅子なのか、屠殺台なのか、私にはわからなかったし、モーガンも教えてくれなかった。思うに、この場所は最近掃除されたばかりのようだった。ここに来る途中の小径で見られた時代を感じさせるごみなど一つもなかったからだ。それから入り口の両側に、道路工事に使うような火桶が置いてあることに気づいた。また、隅にはコークスが山と積んであ

った。天井は煤煙で黒くなっていった。天井の黒くなり具合から判断すると、モーガンはかなり長い間ここにいたようだった。

それから私は入り口の近くに小さな移動式バッテリーが置いてあることに気づいた。その横には一巻きの電線があり、電線は上のほうに伸びて、先端は上部の岩の中に埋め込まれていた。

「あれはなんのためだ、モーガン？」と私は聞いてしまった。もう黙ってはいられなかったのだ。私はあの手のバッテリーと粘土でふさぐ電線の使用方法を知っていた。

「わたしの作業が終わったら、ああやって扉を閉めるの」と彼女が言った。

「それで、閉める時に、ぼくは扉のどちらがわににいることになる？」と私は聞いた。これが満ちる潮の代替案なんだろうかと思っていた。

彼女は笑みを浮かべた。「外側について、安全な距離を保っててちょうだい」と彼女。「驚かないで、ウィルフレッド、あなたを生け贄にするつもりなどないの。あなたには生きていてほしい、死なないでほしい」

「そりやお優しいことで」と私は苦々しく言った。

それから私たちは来た道を歩いて戻った。風は冷たかった。私はコートの際を立て、モーガンは毛皮を首の回りに寄せ、速足で歩いた。要塞の前庭の陰に入った時には安心した。砲座の土台が風を防いでくれるのだ。

「モーガン」と私、「いつになったらこの場所を修理させてくれるんだい？」

というのも、嵐の後、私たちは単に前庭の掃除をして、ごみを塀越しに海へ投げ捨てただけであり、なんの修理もしていなかったから、少々崩れた風に見えたのだ。

モーガンは答えず、岩場の突端のほうに歩いていった。その時突如、彼女はここを修理する意志がないのだと私の脳裏にひらめいた。

「土台の支柱をなんとかしないと、この次の嵐で向こうの塀が倒壊するぞ」と彼女の後ろ姿に向かって叫んだ。彼女は答えもせずに行ってしまった。そこで私は振り返り、屋内に入って流木の焚火で体を暖めようとした。冷たい風が骨身にまでしみこんでいた

ことを突如悟ったからである。凍えることは喘息にとって余り勧められた話ではなかった。

狼狽していたこともあり、私はすねてしまった。そしてモーガンも、帰ってくるなり、それを見てとった。しかし彼女はなにも言わなかったし、私も黙ったままだった。どちらかが口を開くたびに、なにかが悪い方向に進んでいることがわかっていたからだ。私たちは日曜の午餐をとり、それからうたた寝した。目が覚めると薄闇だった。

モーガンはまた突端まで出ていった。しかし私は暖炉の前から動こうとはしなかった。

「風がおさまったわ」と帰ってきた時、彼女が言った。

「そりゃ結構」と私。

「月の出は真夜中」と彼女。

私はなにも言わなかった。その件に関しては言うべき言葉がなかったからだ。

私たちは一種のハイ・ティーを食べた。モーガンがヨークシャーで仕込んできたアイデアである。それはデイツクフオード基準から言えば、かなりの異国趣味といえるもの

であった。日曜の正しい夕食はコールド・ビーフと根菜とブラマンジュとされている土地柄なのだ。私は克蘭ペット（マフィン的一种）を用意していた。白くてぶよぶよしているから、恰好の月の食物だろうと考えていた。

モーガンはあの不思議な微笑を浮かべ、あつという間に私の手の届かぬ所へソーセイジ・ロールを持ち去ってしまった。

「いよいよ今夜よ」と彼女は言った。

それはわかっていたが、私は生涯この時ほど神秘的なことをやりたくないと思ったことはなかったのである。自分はダンスのパートナーとしても、彼女が私にさせたがっているどんな役を演ずるにしても、落第だろうなと思った。

十時を回ると、私は眠くなりはじめたが、モーガンは活気づいてきた。彼女は白い粗織りの絹の着物を取り出した。おそらく日本で織られ、日本で漂白されたものだろうと思われた。ともあれ、その着物には繊維の持つある種の粗さがあり、まったく白いわけでもなかった。私の足元にゴムのサンダルが揃えられた。それは海水浴に使うようなものだったが、銀色の塗料で塗られていた。また頭には頭巾として大きなゆったりした四

角形の銀ラメ布がかぶせられた。彼女が適当に折りたたんでくれると、どことなくエジプト風に仕上がった。それから彼女は分厚いカーテン生地で作った暗藍青ヴェルヴェットの巨大な外套を手渡した。それは完全な円形の代物で、足首までの長さがあり、フードもついていた。生地をどれだけ使ったか想像もつかない代物であり、重さは推定一トンほどにも感じられた。しかし夜が明けるころにはそれが有り難いと思うようになった。この外套は首の所で巨大な銀の留め金で留める仕掛けになっており、留め金には三つ又の戟、即ち海神の紋章が刻んであった。

「洞窟に行つてちょうだい」と彼女は言った。「そして月の出まで、あそこで座つて瞑想して、それからわたしのもとに戻ってきて」

「なにを瞑想すればいいんだ？」と私。

「なんでも、心に浮かんだことを」と彼女。

「かなり不毛な作業となりそうだな」

「そんなことはないわ」と彼女、「わたしは先月ずっとあそこで瞑想していた。不毛な作業にはならないでしょう。やってごらんなさい」

彼女は懐中電灯を渡してくれた。

「断崖に行く時、懐中電灯は外套の下にしまっておいて。浜のほうから灯を人にみられたくないの。あの洞窟につながる小径があるなんて誰も思っていないんだから」

私は出立した。彼女の言った通り、風はおさまっていて、もう寒くなかった。まだ月は上っていないかったが、雲一つない夜空に星がきらめいていた。私は歩哨のようなケルンの間を抜けて、丘陵沿いに進んでいった。なにかしらケルンが生きているような感じであり、実際、歩哨のように見張りをしていると思えた。「通れ！ 我が友よ！」と言っているみたいだった。気のせいか、闇に目が疲れたせいか、ケルンがどれも先端のほうに向かってぼうつと光っているように思えた。

しかし、再建された石門に近づいた時、明らかに尋常でない不思議なものがあふことに気がついた。星空を背景にした黒い影以外は何も見えなかったのだが、石門のそばに寄ると、心臓がどきどきした。大気がなんとも異常な電気を帯びていた。そう

としか言いようがない。熱にあらざる熱、とても言おうか。石門をくぐると、別次元に抜けるトンネルを通過したみたいだった。石門の東は別の土地、より古い土地、幻覚が現実となる場所であった。

周囲にウサギがまったくないことに気がついた。すべて消え失せていた。ウサギたちの食餌時間であり、数千のウサギがいて当然だったが、一羽もいなかった。おそらく、歩哨のケルンが私同様ウサギにも神への畏怖を吹き込んだのであろう。

ケルンが道標となっていたから、断崖沿いの窪地はすぐに見つかった。下を見なくすむ分、夜来るほうがいいかもしれない。小径にも無事に降りることができた。足もとに十分注意しながら進んだ。すると岩の間から鈍い赤い光が見えたので、洞窟の位置がわかった。明かりが灯されていたのである。

私は狭い急な入り口をくぐった。光は二基の大きな火桶から発していた。縁まで積まれたコークスが赤々と燃えていた。中は暖かく快適であり、煙は天井の長い裂け目から吸い込まれていったので、問題はなかった。白いサモエド犬の毛皮で作ったモーガンの敷物が王座のような石に掛けてあった。司祭の座だったので私はい、ここに座

って寝ずの番を始めた。犬がダイアナの聖なる獣であることを思いだした。そしてダイアナは流動と反流動の支配者、月でもあった。潮の具合はどんなだろう、注意しておけばよかったと思つた。私は潮が引いていると想像していた。

燃えるコークスがたまに弾ける音を別にすれば、洞窟の中は無音だった。風はおさまつており、湿地帯の夜間交通量は絶無だったからだ。それから、はるか彼方、かすかに子牛を生む母牛の低い声が聞こえた。奇妙なことだが、これも不似合いなものではなかつた。月はまたイシスであり、イシスは別形ではハトホルなのだ。ハトホルの額の角は三日月と交換可能なのである。出産が進むにつれ、母牛は断続的に低い声を発し、それから静かになった。世界に新しい生命が誕生したのだと思つた。その後はコークスの弾ける音しか聞こえず、私は深い瞑想に入つていった。

奇妙な石座に腰掛け、重いヴェルヴェットの外套をまとい、銀のサンダルをはいてみると、自分がまさに司祭のような気分になっていた。フードは背中に垂らしておいたから、柔らかい頭巾の銀色のひだが顔の両端に真つすぐ下がっている。私はエジプトの神々を真似て、腿の上に手を置き、瞑想に耽つた。

この場所ですいぶんと魔法の業が行われていたことがすぐにわかった。さまざまな心象が異常な鮮明さで次々に浮かんできたからだ。コークスには香が撒かれていたから、炎が広がるにつれ、香煙が立ち昇りだし、洞窟内で渦を巻きながら不思議な形を取り始めた。そして、かつて波間に顔を見たように、私は煙の中に顔を見たのである。ベル・ノールの洞窟でも同じように火が焚かれていて、同じように寝ずの番が行われているような気がしてならなかった。もちろん理性的に考えれば、あの洞窟は長年の風化で泥に没していることは明らかだった。しかしこの晩、私の理性も合理的精神も不在となり、普通なら幻覚として片付ける物事が、今は現実となっていた。私は寝ずの番をする司祭なのであり、この世のものでない物事にかかわっていたのであった。

なんとか残っている知性をかきあつめ、気を取り直して瞑想を行おうとした。以前の幻視で見た洞窟の下に広がる土地を視覚化し、その中に自分を投射しようと試みた。しかしうまくいかなかった。記憶像はなんら幻視の鮮明さを有しておらず、深みのない二次元的なもので、カンヴァスの絵のように死んでいた。意識的努力は無益であると悟った。それで静かに座ったまま、像が浮かぶにまかせていた。

湿地帯と水路は消えていき、かわりに夜空の深い青が現れた。星のない空だった。その中心にかすかな銀色の霞みが現れ、広がっていつて土星の輪のような帯を形成していた。それから旋回するサーチライトのような光軸が空を分断した。するとすべてが揺らぎはじめ、回転していった。見る間に回転の中から幾つもの恒星や太陽が生じ、一列の船団のように位置を保っていく。それから宇宙の機構が驚異の律動を奏ではじめる音が聞こえた―すべては総合され、同期化していた。それらすべての中を星々が位置を保ったまま動いているのであった。

豎琴の調べが甘いアルペジオを奏でていた。星々が互いに言葉を交わす時、深い宇宙の中に強い大鐘の音が轟いた。私は神の息子たちの喜びの声があたりに響きわたるものと思い、耳を澄ませながら待っていた。しかし静寂があり、なにかが欠けているのだとわかった。モーガンと私が鍵を握っているなにかが欠けていたのだ。

天上の各天球には、それぞれある幻視が割り当てられている、とモーガンが教えてくれている。月の天球に割り当てられているものは『宇宙の機構の幻視』であり、私が見ていたものはこれに違いない、と思った。

機械的というよりは有機的な、しかも生き物の敏感を持つ厩大な機械が、発電機のように作動するさまを私は眺めていた。私は生命の始まりを見た。水のように動き、形を持たない生命の潮流も見た。その潮はベル・ヘッド沖の河口域に見る潮のように、寄せては返していた。形の始まりがその中に、まるで海の花の流れるように流れていると思えた。

この特徴ある潮流のリズムが万物の中に、大いなる呼吸の如く存在していたように感じた。そして私は思ひだした。月は『律動の公主』にして『生命の潮流の支配者』と呼ばれていたのだ。私の心の中に、甘くさいなむようなモーガンの一曲が浮かんだ――

「我は無音、無限の苦き海なり

すべての潮は我がものなり、すべて我に答える

大気の潮も、大地の潮も

生と死の秘められた静かなる潮も。

人の魂と、夢と、運命の潮も――

ヴェイルをしたイシス、そしてイーア、ビーナ、ギー」

ヴェイルをしたイシスは《自然の公主》であり、ヴェイルを脱いだイシスは天上のイシスであった。イーアは《空》の魂にして《時》の両親、巨人たちよりも古き者であった。《万物の暗い不毛の母》ビーナは生命が湧きいずる《大いなる海》、女性原理にして前物質であった。ギー自身は磁気的な地、我々の地球にとってのオーラのような存在であり、その中を東洋人がタットワと呼ぶ潮が流れるのである。モーガンが教えてくれていたから、私はこういつたことを知っていた。そして今それを眺めているのだと悟った。

どれほど眺めていたかわからないが、昇る月の輪郭がベル・ノールの縁からきらりと光り、司祭の座に腰掛ける私の顔は、最初の月の出の光線をもろに浴びた。

私は立ち上がり、断崖の目の眩むような小径を上がっていった。月明かりの中に白く立っている歩哨のケルンの丘陵を下った。風もなく、下のほうから海が聞こえた。そのはるかな声から、今は干潮であり、静かにしているのだとわかった。

第二十五章

丘陵を下つていると、驚いたことに、要塞の上に光の霞がかかっているのが見えた。ちやうど夜景の空のような感じだった。見まちがいようがなかった。はつきりこの目で見たのだが、今にいたるまで説明がつかない。巨大な門が私のために開放されていた。通り抜ける時、まるで濡れた海草のような、新鮮なぴちやりとした冷気を感じたが、それでいて凍えるような感じはまるでなかった。

思った通り、潮は引いており、突端の岩々がゆつくりと水中から顔を覗かせているところだった。ゆるやかな大うねりが海草を盛り上げていた。昇る月はまだ丘陵の陰にあったから、要塞は丘陵の影の中にあつた。しかし水面は銀色だった。大西洋から到来するなだらかな波がかもしだす微かな溝は、奇妙にも耕地が牧草地に戻った後に残る鋤の跡に似ていた。今夜の海は海らしくなかった。陸も陸らしくなかった。両者が同じものようだった。神の息吹が水の面をおおう前、そうであつたように。

私はモーガンを呼んだが、返事がない。そこで、大広間に明かりがついていたので、彼女を求めてそちらに行つた。

彼女は無言のまま座っていた。莊嚴な、落ち着いた様子だつた。背筋をしゃんと伸ばしていることを除けば、眠っていたのかもしれない。彼女は体にぴったり合つた銀色の長衣を着ていた。外套は藍の紗であり、まさに薄雲に囲まれた夜空の月のようだつた。額には有角の月の頭飾りを載せていた。これらは同時にイシスの三日月でもあつた。部屋に向こう側には台座がしつらえてあり、私はそこに席を取つた。私のすぐ後ろは壁画の海宮殿にいる《月の司祭》の影のような輪郭があつた。床の中央には立方体を二つ重ねた祭壇があり、銀の布をかけられていた。その上には水を張つた水晶の深皿が置いてあつた。祭壇を挟んで、モーガンと私は部屋の長さ一杯に離れて向かい合つて座つていた。

それから私は奇妙なことを意識するようになった。壁の絵がもはや絵ではなく現実となり、海が床面と同じ高さに達しているかのように見えるかのように思えてきたのだ。しかも、その海が銃眼越しに見える外の海と同じくらい現実味を帯びていた。不意に、私の背後の《月の

司祭も現実と化しているかもしれないと思ったが、振り返って確かめる勇気がなかった。

その時、モーガンが立ち上がった。暗い紗が翼のように両肩に舞い、それ越しに銀の長衣が輝いた。彼女は傍らのベルを鳴らした。やわらかな倍音が部屋中を満たし、やがてゆつくりと消えていった。彼女は片手をあげた。

「おお汝汚れし者よ、我らから遠ざかれ。我らこれよりイシスの力の降臨を召喚するものなれば。清き手と澄みし心もて女神の神殿に入れ、生命の源を汚さぬように」

私は要塞を覆うように構築されていた光のドームを思った。ここならば、汚れなく、邪魔も入らず、古の諸力を呼び覚ますことができるのだ。

「イシスの神殿は黒き大理石にて造られ、銀にて吊るされたり。女神おん自ら内奥に帳に包まれ鎮座ましましたり。イシスは人の心の崇めたるすべての女神なり、多くの女神にあらず、多くの姿を持つ一者なれば。」

「《自然のイシス》を崇める者は額に角を持つハトホルとして女神を崇める。星界のイシスを崇める者は月即ちレヴェナとして女神を知る。また女神は生命の涌きいずる《大いなる深み》なり。女神は我らの根を持つ古の忘れさられしものすべてなり。地にあつては常に孕む者、天にあつては永遠の処女。満ち、引き、満ち、終わることを知らぬ潮の主人なり。その密儀の鍵はこれらに秘められたり、ただ、秘儀を授かりし者のみ知る」

モーガンは再び鐘を鳴らした。その振動は今一度静寂へと消えていき、私たちはしばらくじつと座っていた。四方を海に囲まれた低い岩礁にいるような気がしていた。私たちは岩礁上にある黒と銀のイシス神殿にいて、柱廊玄関から海を覗いているような感じだった。

それからモーガンが再び立ち上がり、古代の女たちがそうしていたように、月に向かって両腕を掲げた。

「おお汝至聖にして敬慕すべきイシスよ、天上にあつては《至高の母》、地にあつては《自然の公主》、天と地の境にある大気の王国にあつては常にうつりゆく月よ、地の

潮と人の心の潮の流れを司るものよ。汝、汝をうつりゆく壮麗の月のしるしの内に崇め奉る。また月を映す深き海のしるしの内に崇め奉る。生命の門の開きたるしるしの内に崇め奉る。

「我ら汝を諸天の内に銀冠を戴く者として見る。地にあつては緑の衣をまとふ者として見る。諸門にあつてはとりどりの色衣をまとふ者として見る。おお星界の黄金に応える天上の銀よ！ 生者の虹色の栄光よ！」

やわらかな鐘の音がまた響いた。その鐘の音から音程を得て、モーガンが、過去数週間私にいやというほど聞かせた歌を歌いはじめた――

「おお汝、地の造られし以前は

イーア、ビーナ、ギー

おお潮のない、無音、無限の苦き海よ、

我は汝の女司祭なり、我に答えよ。

「おお蒼穹よ、大地よ、

生命を与える者にして死をもたらす者よ、

ペルセポネ、アスタルテ、アシユトレツ、

我は汝の女司祭なり、我に答えよ。

「おお黄金のアフロディテよ、我がもとに來れ！

泡の花よ、苦き海より生まれよ。

満月の潮の時は近い

聞け、召喚の言葉を、聞いて現れよ―

ヴェイルを脱いだイシス、イーア、ビーナ、ギー！

我は汝の女司祭なり、我に答えよ」

モーガンは腰を降ろしたが、儀式はまだ続いていた。しかし、自分の背後に《月の司祭》がいるかどうか、振り向いて確かめる必要もなかった。私は彼の声を聞いたのだ。

「されば光と闇の間に張られた蜘蛛の巣の秘密を学べ。その縦糸は時空に進みゆく生命、その横糸は人の生命から紡がれるものなり

「見よ、我らは時の夜明けとともに灰色の霧の海から立ち上がる。夕闇とともに我らは西の大洋に沈む。人の転生は霊の糸につながれた真珠のようだ。人は決して一人で旅をすることはしない。孤独は不毛なれば」

声は止み、静寂が訪れた。静寂の中に私は海が岩の間でつぶやく声を聞いた。窓が夜に向かって開け放たれていたことに気づいた。

それから再び声が語りはじめた。今度は部屋中に響きわたるほどの力強さに満ちていた。

「されば潮の干満の密儀を学べ。外に向かつては能動たるもの、内にあつては潜みたり。上にあるが如く、下も可なり、されど様式は異なる。

「《自然のイシス》は主たる《太陽》を待ち望みたり。呼び掛ける。死者と忘却の場所アメンテイの王国より彼を引き出したり。《億年》と呼ばれし舟に乗り、彼は女神のもとに来る。されば大地は穀物に緑なす。オシリスの望みがイシスの呼び声に答えらればなり。それば人の心も常にそうあれかし。神々は人をかく造りたりせば。これを否とする者は神々に厭われたり。

「されど天上にあつては我らの公主イシスは月なり、月の力は公主のものなり。公主はまた薄明の海より昇る銀の星の女司祭なり。その潮は人の心を司る磁気の月潮なり。

「内にあつては公主は全能なり。公主は眠りの王国の女王なり。すべての見えざる業は公主の手になるものなり。公主は誕生以前の万物を司るものなり。伴侶オシリスを経て地に緑をもたらすが如く、人の精神も公主の力を経て力を持つ。

「儀式に於いて示さん、女神の能動たる力を、人の精神もその畑の如く肥沃ならんことを」そして私の背後から鐘の音が響いた。鐘などないとわかつていた場所からだった。

「おお汝汚れし者よ、我らから遠ざかれ。女神の帳を外す時が近づきたればなり。汚れた目をもて女神を見るなかれ、汝破滅を見ることになれば。」

「無知たる汚れた者たちは地の面を見る。その者たちには闇の闇しか見えぬ。されど秘儀を授かりし、啓発された者たちは地の面を見て、神の貌を見る。おお汝汚れし者よ、我らから遠ざかれ、我ら《自然》に顕現したる神を崇め奉りたれば」

声は再び止んだ。外の海が岩をゆっくりと洗い流す音で答えた。消音したシンバルを打ち鳴らすような音だった。

それからモーガンがゆっくりと立ち上がった。彼女の銀のドレープがすべてきらめきまたたくようだった。彼女はエジプトの峻巖を持って直立していた。両腕を両脇に垂らしたまま、肘を動かすことなく手を上げて、掌を私のほうに向けた。するとその掌から発せられる力があつた。彼女の容貌が変化していたことに気がついた。口のあたりはほとんど黒人系のようになっていたが、穏やかなノルド系の額はそのままだった。それからモーガンの声でない声が、奇妙なまでに人間味を欠いた金属質の音が発せられた。

「我は至聖所の影に潜むヴェイルをしたイシスなり。我は死と生の潮流の背後の影の如く動く女神なり。我は夜に来る者なり、誰も我が貌を見ることなし。我は時よりも古く、神々に忘れられし者なり。我が貌を見て生きる者なし、我がヴェイルをとりし時、人は死す」

どんな力に誘われたのか知らないが、私は口を開いた。

「汝の貌を見る者はなし。見よ、我は汝の贅えなり。我汝のヴェイルをとり、死して生まれ変わらん」

すると私の背後から《月の司祭》が語った―

「人の死に二つあり、大なる死と小なる死なり。肉体の死、及び秘儀参入の死なり。二つの内、肉体の死が小なり。イシスの貌を見る者は死す、女神が彼を連れ去るなればなり。かくて死す者は白イトスギの下にある源泉に至る道を歩まん」

そして私は答えた―

「我は白イトスギの下にある源泉に至る道を歩まん」

《月の司祭》の声が答えた―

「死して生まれ変わらんとする者に、この密儀の女神の貌を眺めさせん。おお汝汚れし者よ、我らから遠ざかれ、いまより人が白イトスギの下にある源泉に至る道を歩まんとすれば―」

まるで昏睡に落ちていくような、奇妙な感覚が自分に忍びよってくるのを感じた。また、モーガンの手がもはや上げられておらず、平行に前に突き出され、掌同士を向かい合わせにしていることに気がついた。この掌の間に私の生命が引き込まれつつあったのだ。自分が受動的になったように感じた。眠りに落ちる人間のように、中立で、無抵抗だった。それから、はるか彼方の音みたいに、モーガンの歌う声が聞こえた。

「我は無音、無限の苦き海なり

万物は終には我がもとに來り

我がものはペルセポネの王国なり、

三つの小径が続く内奥の地なり。

秘められ泉の水を飲む者は

口にすまじきものを見るであろう。

我がもとに続く影の小径を歩むであろう

我は道のダイアナにしてヘカテ、

月のセレネ、ペルセポネ」

あたかも死が大いなる深みから私を呼びにきたようであった。出血多量で死に瀕している人のように、生命が私から引いていくようであった。かつて人が死んだことがあるのなら、私はこの時、死んだのである。しかし群がる影を通して『月の司祭』が私に語りかける声が聞こえた。

「《大母神》の娘はペルセポネ、ハデスの女王にして眠りと死を司る者なり。《暗き女王》の形のもとに、人々はまた《一》なる女神を崇める。女神はまたアフロディテなり―ここに大いなる密儀がある。他方なくして一方も理解することはあたわず。

「死して人は影の川を渡り、女神のもとへ行く。女神は夜明けまで人々の魂を預かる者なればなり。されど、生の中の死もあり、これとても再誕につながるものなり。人よ、汝何故に《暗き女王》を恐るるや？女王は《新生をもたらす者》なり。我ら眠りより目覚め、生気を回復す。ペルセポネの抱擁にて人は強くなるものなり。

「人がペルセポネに至る魂の分岐点あり。人は時の子宮に沈み、胎児に戻る。人は女神が女王として司る王国に入る。人は従容となり、生の到来を待つ。

「ハデスの女王は人のもとに花婿として到来す。人は生命に満たされ、よろこびに溢れる。眠りの王国の女王の手が人を力強きものとしたればなり」

最初から予期していたことがついに到来したとわかった。女神に力を与えるために、私の生命は祭壇上に注がれることになるのだ。しかし私は生け贄の儀式を血まみれで、残酷で恐ろしいものだと考えていた。しかし、これは活力がゆつくりと引いていくもの

だったのだ。そして無に沈みこむのは、それが終焉であるがゆえに恐ろしいだけなのだ。眠りが私を満たしていくように感じられた。まるで外にある岩に海が満ちてきて、一時間ほど大気に貸していたものを、本来の所有者の手に返そうとしているかのようにだった。私は本来の場である無に帰ろうとしていた。生はその始まりと同様、眠りの内に終わろうとしていた。

私はある賢者の言葉を思い出した―「銀の紐が緩もうとも、黄金の鉢が砕けようとも―私は自分の黄金の鉢が取り上げられ、二重立法体の月の祭壇上に注がれたように感じた。しかし、銀の紐は緩んでいなかったに違いない。私はまだ生きていたからだ。だが私は、人が死に近づいて、なお帰ってこられるぎりぎりのところまでいったのである。

幻視の中、私は天空を動く星々を目にし、また、この世の海の波が月に従い動くにつれ、同様に動く地霊の潮も見た。それから幻視を越えて《月の司祭》の声が聞こえてきた。

「我らが公主はまた月なり。ある者はセレネ、他の者はルナと呼ぶが、賢者はレヴェエナと呼ぶ。その名の中に公主の数が含まれたればなり。公主は潮の流動と反流動を司る

ものなり。この世の海の潮と同じく、《大いなる海》の水も彼女に答える。公主は女性の性を司るものなり。

「されど同様に人の魂の中にも生命の潮の干満あり。これは知る者は賢者のみ。この潮を《大母神》は月の様相を通じて支配す。女神は暁の星として海よりいずる。地の磁気の水は溢る。女神はペルセポネとして西の大洋に沈む。磁気の水は内奥の地に引きこもり、月と星々を映す暗闇の大湖に鎮まる。ペルセポネの暗い地下湖と同じく鎮まる者は、そこに動く《不可視》の潮を目にし、すべてを知るであろう。ゆえにルナは幻視を与える者と呼ばれたり」

声は止んだ。これで終わったか、と私は思った。それからまったくの暗黒の中に光が潮のように動くのが見えた。それで死すらもそれなりの生命の様式を有していることがわかった。私は地下の暗い湖を見渡しているようだった。そこにはモーガン・ル・フェイでもある。ペルセポネが、玉座に座って私の到来を待っているのだ。海洞窟の幻視に於いて、あがくことなく死に赴くよう誓わされたことを思い出した。生け贄は惜しみ無く身を捧げることで成就されなければならぬからだ―そして私は暗い水を渡って彼女のもとへ行くことを望んだ。

私はオシリスが乗る《億年》という不思議な舟に乗っていた。私がオシリスだったのだ。私の横には供をつとめる神々がいた。これは同時に私の他の己でもあった。暁の鷹ホルスが船首で水先を案内し、黄昏の神ツームは無言のまま船尾に座っていた。足元には真夜中の太陽の象徴である甲虫ケフラが、過ぎ去りし時の紋章を爪の間に抱いていた。そうして私たちは地下湖の暗い水を渡り、《死者の女王》のもとへ、我が魔法の花嫁のもとへやってきた。彼女に近づくにつれ、光が強さを増し、それが要塞の部屋の明かりとなり、向こう側にモーガンが座っているのが見えた。

見ているうちに、彼女が銀から黄金へ変化しはじめたのがわかった。彼女の周囲に虹色の輝くオーラがほとばしった。眠るように閉じられていた目が驚異の生命感を放ちながら見開かれた。彼女は栄光の夜明けのように生命に輝いていた。その時、私から彼女へ流出していった潮が向きを変え、彼女から私に逆流してきた。私は生命が戻ってきたように感じたが、異質でもあった。それは女神の生命と一つになったものだったからだ。

それから彼女は歌った。私は彼女がヴェイルを脱いだ力動的なイシスであることを知った――

「我は海より昇る星―

薄明の海

我は人の運命を司る夢を与える者

我は人の魂の夢の潮

潮は満ち、引き、再び満ちる―

これが我が秘密、我のもの―

「我は永遠の《女》、我は女！

すべての人の魂の潮は我がものなり

潮は満ち、引き、再び満ちる

人をおさめる静寂の内なる潮―

これが我が秘密、我のもの

「我が両の手より人は運命を得る

我が手は人に太極を授ける

月の潮もあり、我のもの―

天にあつてはヘラ、地にあつてはペルセポネ

潮のレヴェナ、またヘカテ

月のダイアナ、海の星、

ヴェイルを脱いだイシス、イーア、ビーナ、ギー！」

歌っている間中、彼女の揺れる両手が私の魂を撫で、魂を引き出していった。

それからゆっくりと、きぬ擦れの音だけをたてながら、モーガンが窓のほうに移動していった。私は後を追わなかった。動くことができなかったのだ。彼女は前庭に出た。いまや月は天高く輝いており、要塞は月光に溢れていた。しばらく彼女は嵐で砕かれた海獣の残骸の間に佇んでいた。薄雲が月にかかるとう光が変わり、海獣たちがすべて生き返りのたうっているように見えた。それから彼女は突端に続く階段を降りていった。手擦りは嵐で吹っ飛んでいた。彼女と海の間を隔てるものはなかった。月光が彼女に降り注ぎ、長衣がきらめいた。しかし海のきらめきを背景にすると彼女はほとんど見えなくなった。彼女は突端の一番先まで行ってしまった。そこには水面からわずか下に平らな岩の台があった。それは小潮の時にしか露出しないのだ。

（大変だ！）と私は考えた。（彼女は膝まで水につかっているに違いない！あの端を踏み越えたらどうなる？）

しかし私は、縛られたように無力で、動けなかった。

いまや彼女の姿がやっと見えるだけだった。銀色の長衣は海面の眩むようなぎらつきの中でほとんど見えなかったからだ。それから雲が月にかかり、それが外れたころには、海から軽い霧が長く尾を引きながら到来しつつあるのが見えた。その霞みの中では彼女はもはや見分けがつかなくなっていた。

最初の衝動は、彼女の後を追って安全を確かめようというものだった。しかし心の中に強力な自制心が働いた。それをしてはいけない、彼女は大丈夫だ、とわかっていた。そこで私は椅子に座り、待っていた。

座っていると、一人きりではないように思えてきた。誰かいるという気配はまったくなかったが、それでも私はある存在を感じていた。そして徐々に、地上最大級の、極めて力に富む人物の前に出た時に感じるような、畏敬と刺激の念を覚えてきた。私は耳を澄ましながら待っていた。しばらく息を止め、背後の物音一つ聞き落とさないように気を配っていたが、振り向いてはいけないと催眠術でもかけられたかのように、動けなかった。

それから声が聞こえはじめた。明らかに肉声で、朗々として、悠揚せまらず、落ち着いた―《月の司祭》の声、もはや肉体を離れた声ではなく、完全に物質化したものだった。それは流水のように次から次へと続き、小休止の際には満ち潮が岩場を呑む波音が外から聞こえた。声が続くうちに、私の眼前に声もたらす心象が浮かんできた。それで《神秘の福音》がなぜ《言葉》による万物の創造を語るのかがわかった。《言葉》は神の息吹のように水の面をおおうからなのだ。私は時空の海、《神々の夜》の深藍に浮かぶ海を見た。これが事の発端に見たものであった。そして海の暗がりの上に銀の光と金の光が長波長の瞬間波動となつて行き来するさまを見た。朗々たる声が語る中、私は耳を傾けた。あるものは理解できた。過去を説明していたからだ。あるものは理解できなかった。それが来るべきことを説明していたからである。

「三重に偉大なるヘルメスは《エメラルド・タブレット》に刻んだ―“上の如く、下も可なり”。地の面に我々は男と女の行動の内に天上の原理の反映を見る

「すべての神々は一つの神、すべての女神たちは一つの女神、そして秘儀伝授者は一人なり。

「始めに空と闇と静ありき。時よりも古く、神々に忘れ去られしものなり。無限の空の海がすべての存在の源なり。生命は無音の海の潮の如く涌きいずる。神々の夜が来りなば、すべてはそこに帰るであろう。これが《大いなる海》マール、《苦き者》、《大母神》なり。潮が起きる以前の不活性の空ゆえに、賢者はそれを本質の受容原理と呼び、宇宙の水、もしくは流れる空と考えた。

「女神は多くの者たちに多くの名前で呼ばれた。しかしすべての者にとって、女神は《大いなる女神》——空と地と水である。空としてはイーア、神々を造りし神々の親、時よりも古く、事物の子宮、全存在の根源にして、未分化、純である。またビーナ、《至高の母》、《至高の父》コクマーを受ける者。無形の力に形を与える者、そこより形を造る。女神はまた死をもたらす者である。形ある者は死することになるからである。すりへれば、秩序に従い再びよりまったき生命へと生まれかわる。生まれたものはすべて死すことになり、死より再び生が生じる。ゆえに女神はマール《苦き者》、死をもたらすがゆえに《悲しみの公主》である。また女神はギーである。女神はもつとも古い地、無形から造られた形であるからだ。これらすべては女神であり、すべては女神の内に見

られる。それらすべての性は女神に答え、女神はそれを支配する。女神の潮はそれらすべての潮であり、女神の法はすべての法である。一方を知れば、他方も知ることになる。

「無から生じるものを女神は与える。無に沈むものを女神は受け取る。女神は《大なる海》、生命の涌きいずる海である。すべては永劫の終わりにそこへ戻る。

「我らは眠りの内にこの海を浴び、原初の深みへ戻り、時の始まる以前の事物へ戻る。されば魂は《大母神》に触れ、再生される。原初へ戻れぬ者は生命の源を持たぬ者なり。草の如く枯れるのみ。《大母神》の孤児となりし、生きる屍も多くあり」

こういったことすべては、私にとって当時はいした意味もなかった。ただ、《エメラルド・ダブルト》の言葉「上の如く、下も可なり」が耳の中で響いていただけだった。しかし、その後徐々に人生が言葉の解釈をなすにつれ、語られた言葉が私にとって意味を持つようになった。実際、あの恐ろしく小さな町―因習という塀に囲まれ、塵芥で舗装したデイクフオード―は、《大母神》の孤児となっていたのである。そして私は再誕する前に死ななければならず、《大母神》はまったく私にとっては《苦き者》だった。多くのより良き先人と同様、私も文明社会に於いて忘却の水とされているものを

呑むことになるのだった。しかしこういったことはまだ先の話であり、この時にはわからなかった。

《月の司祭》が私に名前呼び掛けるのを聞いた。「息子よ、我は行く。されどまた来るであろう。業はまだ完成しておらぬ」

声は止み、私は無言で椅子に座ったまま、モーガンの帰りを待っていた。声はもう語りかけてこなかったが、自分が一人きりではないとわかっていた。《月の司祭》が私の寝ずの番につきあってくれていた。

椅子に座つてうとうとしていると、多くのことが理解できるようになった。モーガンが私と儀式にして実験も兼ねたものを執り行ったことはわかっていたが、その目的もわからなければ、次になにが起こるのか、どう起こるのか、見当もつかなかった。私には、ここで突然中断されるほど、遠くに来てしまったとは思えなかったのだ。私たちが行った儀式はなにかの序曲であったと確信していた。しかしそれがなんなのか、はっきりさせることが出来なかった。それでも、どこか終わった、行き着いたという奇妙な感じも

していた。どうしてもだか説明もできなかったが、ほどなく知ることになっていたのであった。

それで私は椅子に座ってうとうとしながら、モーガンが私の元に戻ってくるのを待っていた。やがて明け方近くに眠りこんでしまった。しかし彼女は戻ってこなかった。以来、私は彼女に会っていない。

第二十六章

八時を過ぎたころトレスオーウエンのおかみさんが部屋に入ってきた。その目から彼女が泣いていたことが見てとれたが、私はなにも疑ってはいなかった。彼女の話では、モーガンは私にすぐ帰宅してほしいとのことであり、手紙を書いてよこすそうであった。私は帰るしかなかった。おかみさんが朝食を作ってくれ、それから私は車を出し、要塞を去った。モーガンの黒い小型スポーツ・カーが車庫にないことに気がついた。

ヘアピン・カーヴを回る際は、普通わき見をしないものだが、私は敢えてやってみた。寝ずの番をしていた洞窟を見上げてみると、驚いたことに大量の岩石が崩れ落ちており、風化した灰色の断崖に白い傷痕を残していた。それでモーガンがダイナマイトを爆発させたことも、寝ずの番の洞窟の扉が永遠に閉じられたこともわかった。それでも私はなにも疑ってはいなかった。

農場を通過する時、トレスオーウエンが出て来て、私と厳肅に握手をしたがっていた。クリスマスまで後数日だったから、彼がプレゼントのことなどを考えているのだと思っていた。

それから自宅まで車を走らせた。連中は私がかくも早く帰ってきたことに驚いていたが、喜んでもいた。スコツティーが流感で寝込んでしまっていたからだ。私は彼のデスクに座り、午前の郵便物に取り掛かりだした。するとスコツティーの秘書が気まずそうに謝罪しながら、誤って開封してしまった手紙を私の前に置いた。親展と記されていないかったのだ。モーガンからの手紙だった。

「これをお受け取りになるころには」と彼女は書いていた――

「わたしはもういないでしょう。どこに行ったかは気にしないでください。もうお会いすることもありません。そうお思ってください。わたしも残念でなりません。あなたのことがとても好きでしたから。」

わたしの仕事は終わりました。あなたの助けがあればこそ完成した仕事であったことを知っていたかったです。

ウィルフレッド、わたしはあなたを大変な危険にさらしてしまいました。でも、わたしの仕事がちやんと運んでいたら、あなたは心破れはしないでしょう。わたしのスター・サファイアを、あなたが結婚なさる時に花嫁へのプレゼントとするよう手配しておきました。

わたしの財産はいまや信託にされています。被信託人はあなたとトレスオーウエンの二人です。彼がともも抜け目ない、信頼に値する人物であるとおわかりになるでしょう。わたしの死亡時には、財産はお二人で均等分割されることになっています。わたしの死亡が法的に推定されるまでは、あなたがたはわたしの不動産収入を銀行に振り込むことになります。その一割をお二人でおとりください。農場はトレスオーウエン夫妻の所有としております。要塞はナショナル・トラストに寄贈しました。わたしの文書や蔵書はあなたに贈らせていただきます。文書は現在農場に置いてあるトランクの中にあります。

あなたとはほんとうに良い友人となれました、ウィルフレッド。友人という言葉わたしは軽々しく用いませんが、それをあなたに与えましょう。

わたしの身をあなたに与えることはできませんでした。それはわたしの力の及ばぬところだったからです。古代アトランティスの訓育を思い出してください。

《死の門》の彼方でまた会う日まで、さようなら」

事務所にどれだけ仕事があるかと関係なかった。私は車を出して、要塞まで一直線に戻っていった。

いや、一直線に戻るつもりだったというべきだろう。町を外れると、空が少しおかしいと感じた。橋を渡って湿地帯に入ると、雪混じりの突風が吹きつけ、フロント・グラスを白くしていった。あれと思う間もなく、私は吹雪に突っ込んでいた。

車の鼻先も見えなかったし、私は高さ十フィートの堤防の上を運転しているのだ。しかし、両端には草の土手めいたものがあつたので、タイヤがそれに当たって悲鳴を上げ

れば、車の方向を立て直していた。私が戻ったのを見ても、トレスオーウエン夫妻は別に驚いた風もなかった。トレスオーウエンにすぐさま要塞に行こうとせつついた。彼が渋ったので、この野郎と怒鳴りあげた。やがておかみさんがエプロンを頭にかぶって雪の中を出てきて、私を台所に引きずり込んだ。そして私が落ち着くまで暖炉のそばに座らせた。

彼らの話では、私同様、大変なショックだったという。モーガンはいつも、時が来ればこういう風になると言っていたそうだ。しかし、彼らとて、今朝、台所のテーブルの上に書き置きを見つけたまでは、その時が来てしまったとは思っていなかったのだ。彼女が岩場の突端から消えたのか、洞窟に閉じこまったのか、どちらかと思うかトレスオーウエンに聞いてみた。わからないと彼は言った。バッテリーと電線が崖の小径の外にあるかどうか、彼に登って確認してもらいたかった。しかし彼はバッテリーも電線もないだろうと言った。もしモーガンが洞窟の内側から発破をかけたのなら、道具一式は彼女とともに洞窟の内側にあるのだし、外側からかけたとすれば、彼女はそれを取り外して持ち去っただろう。それで私たちは手の打ちようもなかった。この猛り狂う突風の中、あの小径を下るのは生命の危険があった。もしモーガンが洞窟の中に入れば、もう生き

てはいないだろうし、いずれにせよ、彼女は出立に際して極めて慎重に、邪魔をされぬよう、また跡をたどられぬよう、手配していたのである。トレスオーウエンとしては彼女の願いを尊重するつもりでいたし、私にもそうしてほしいと希望していた。

それから突如、モーガンの車が車庫になかったことを思い出し、夜中に彼女が出て行く音を聞かなかったか、尋ねてみた。しかし答えはノーであった。車は数日前から動かされていたのである。モーガンの書き置きには、これはすべて後日問題が生じた場合に夫妻に嫌疑がかからないようにするため、とあった。誰かが厄介なことを言い出した場合のための書き置きもあり、それには彼女が早立ちをしたので、郵便物はロンドンのフラットまで転送するように書いてあった。トレスオーウエンに最後に彼女の車を見たのがいつだったか、聞いてみた。するとその週は全然見ていないというし、車庫に行く用事もなかったとのこと。彼は家の一番奥の部屋で寝ているのだから、モーガンがエンジンを切つて、惰性で農場の前を通過しても、気づかずじまいだったんじゃないかと言ってみた。雪が降る前に、道路のタイヤの跡を調べたのか、とまで私は言った。彼は首を横に振った。

「あの方はもう旦那にとっては死んだも同然ですよ」と彼。「そうしておいたほうがいい」

「どうしてわかる？」と私。

「こうなるだろうと思っていたからですよ。あの方はこうなさるおつもりだったんです。あの方に出会った時、わしもかみさんも若かった。わしらは老いぼれちまつたが、あの方はそうじゃなかった。やらなきやいけない仕事を終えたら、こういう風に去る、とあの方はいつもおっしゃってたですよ。とにかく、ほっておいたほうがいいです、旦那。もし生きていなくなったら、あの方はわしらのおせっかいを決してお許しにならないでしょうから」

彼女が洞窟で負傷してるんじゃないか、と私は疑問を口に出した。しかし彼は首を横に振った。

「ありえないです」と彼、「あの発破はわしが仕掛けたもんです。わしはこれでも採石夫だった。生き延びるわけがない。あそこで埋まっちゃってますよ。だが、わたしはあの突端から行きなすったような気がするな。あの方はいつも海が好きだった」

「あるいは、ぼくたちに一杯食わして、車で行っちゃったか」と私。

「わしなら、ほっときますがね、旦那」と彼。

それから少し説得が続けた後、私は車を方向転換して、ディックフオードに戻った。もしモーガンが生きていたとしても、私に用がないのなら、死んでも同然だった。しかし、なぜか、彼女が生きているという気がしなかった。彼女はあの突端から歩いていて、それきり戻っていないと確信している。すると、誰が発破を爆発させたのだろうか？ それに、あの信託財産の奇妙な取り決めはなんなのだ？ 今に至るまで、トレスも私も、管理状況の監査のために呼び出されたことがない。だから、モーガンがあの晩に死んでいようといまいと、いまだあの美貌と不思議な力を備えたまま人の世を渡っていようといまいと、たいしたことではないのである。モーガンを失った時、私は死について多くのことを学んだ。どうして人々が魂の死後生存証明にあれば騒ぐのか、私には謎である。愛する相手がこっちに来られないのなら、相手が生存しているのを知ったところではなんになる？ むしろ私としては、相手の魂が永劫的進化の中で何処から来て、何処に行くのか、そちらのほうが知りたい。「見よ、我らは時の夜明けとともに灰色の霧の海から立ち上がる。夕闇とともに我らは西の大洋に沈む。人の転生は霊の糸につながれた

真珠のようだ」―《月の司祭》の言葉が湿地帯を車で抜ける私の頭の中に鳴り響いていた。雪はしばしあがっていたが、またすぐにも降りだしそうだった。うなる突風はなんとか私を堤防上から吹き飛ばそうとしていた。私はこれまでも危ないドライブをやってきたが、これほどのものは初めてだった。迫りくる薄闇の中の、吹雪の塩水湿地帯を抜けるとは。

私はぼうつとしていて、ちゃんとものを考えることができなかった。モーガンが死んだとは信じられなかったが、彼女が生きていないというのも確信していた。あれこれ考えると頭の中はぐちゃぐちゃになり、よくも無事に家までたどりつけたものだと思う。

スコッティーの秘書嬢が、モーガンの手紙を開封し、それが会社と関係がないと悟るまで、どのくらい読んでいたのかはわからない。しかし私が早々と帰ってきたのを見て、彼女は大変驚いているようだった。それから彼女が大きめのカップに濃い紅茶をいれてくれた。これは有り難かった。彼女は自分の責任で私の通信事務を処理し、返信にサインをすればいいだけの状態にしてくれた。これも有り難かった。実際、この時私に出来ることといえば、サインが関の山だったからだ。

この前後、喘息発作が起きなかったのも驚異である。きつと喘息も私同様、ほとんど呆然自失の状態にあったのだろう。うつるといけなからとのことで、スコツティーには面会できなかった。しかし彼はかなり悪いようだった。前の週に下半期決算が終わっていたのは天祐神助であった。クリスマス休暇後には、少々息抜きできる日々もあった。

クリスマス・イヴ、私はトレスオーウェン夫妻に七面鳥をプレゼントするため農場まで車を飛ばした。これがかなり陰鬱なドライブとなり、やめときやよかったと思った。ここ数日、モーガンを探しに要塞に行かないと自分に言い聞かせることしきりだったからだ。失恋の特効薬はすぱっと切ることのみ、と言ったオヴィデイウスは実に正しい。しかし七面鳥は約束だったし、私が行かなかつたら、夫妻はクリスマスの御馳走のあてが外れてがっかりしていただろう。

農場に車を止めた時、トレスオーウェンが出て来て、要塞まで乗せていってくれないかと私に頼んだ。どうしようもない突風が吹いた後で、要塞がどうなったのか、彼も少々不安だったからだ。おまけに、前回の嵐で海向きの塀がかなり危なくなっていたし、モーガンが修理をさせてくれなかったことも彼は知っていた。顔には出さなかったが、彼は要塞に一人で行くのが少し怖かったのだ。

通いなれた道を走りながら、私たちは同じことを考えていたと思う。モーガンはあの洞窟で最後の眠りに就いたのだろうか、それとも突端から海に歩いて行ってしまったのだろうか？ 後者とすれば、タラやアナゴが彼女の不思議な美貌を解体作業中なのだろうか？ それとも女司祭の伝承の通り、彼女は生きてまま海の神々のもとに行ってしまったのだろうか？

私に関するかぎり、謎のまま終わると思われる未解決の問題が山ほどあった。モーガンは結局ただの偽物であって、トレス夫妻を騙した後、車に乗ってとんずらしたのであるか？ もしそうなら、動機はなんだ？ 彼女は真剣だったが、自己欺瞞に陥っていて、本気で死に臨んだのだろうか？ あるいは彼女の信念は正しくて、一生を賭けた仕事を見事に完成させたのだろうか？ 各人、好みに合わせて解釈すればよいと思う。各人の解釈がモーガンに関する真実を明らかにせずじまいであっても、その人の人となりはかなり判明すると思われる。

ヘアピン・カーブを抜けるとすぐに、ケルンも石門もすべて倒壊しているのが見えた。いつてしまえば、あれはすべて自らの重量のみで建っていたものであったし、この場所は完全な吹きさらしだった。あの突風ではもつはずがなかった。陸側から見ると要塞は

まったく大丈夫のように見えたが、巨大門を開けようとすると、なにか内側で倒れているらしく、どうにも開かなかつた。トレスオーウェンが身の毛もよだつ離れ技で脇の岩場から回りこんでいった。ほどなく彼が門の内側で丸太らしきものを転がしている音が聞こえてきた。数分後、私がやっと通れるほどの隙間が開き、中に入ると事態が判明した。

予言通り、海側の扉は倒壊していた。土台支柱がいかれて、補修をしなかつたせいだった。波がなにもかもきれいに洗い流していた。敷地は膝まで海の漂着物やヒバマタで溢れていた。私が改装工事中になしたことはすべて、なにもなかつたように消え失せていた。要塞は事実上、最初に見た時と同じ状態だった。私は大広間に入って壁画が残っているかどうか調べようとした。しかし広間は残骸と化していた――石膏はすべて壁面から剥がれ落ち、天井も落ちていた。窓は外れ、家具もすべて粉々になって片隅にかたまっていた。ただ、私の造った海豚の薪乗せ台だけが、まだ暖炉の中で向かい合い、まったく動じない面持ちで残骸を眺めていた。

トレスと私は顔を見合わせ、何も言わずにモーガンの寝室に上がっていった。しかし扉を開けると、私たちは思わず後ずさった。床が抜けてしまっていて、向こうの壁も落ちていたから、足もとには青い海があったのだ。

トレスオーウエンを中庭に待たせて、私は岩場を調べに行った。嵐の時にかなり手ひどく波にやられていた。手擦りは跡形もなく消し飛んでおり、ただ岩のあちこちに残った支柱用の穴が、ここになにかがあったことを示すのみだった。私は岩棚沿いに進んだが、手擦りなしではきわめて危ない作業だった。やがて大波に洗われる一番先の突端にまでたどりついた。逆巻く波が飛沫と泡を岩に散らしていた。耳が怒涛の音に慣れるにつれ、頭上高く甲高い鷗の鳴き声が聞こえた。溺死した水夫の魂が海鳥になるといふ古い言い伝えを思いだし、モーガンもそうだろうかと思つた。女から海鳥に変身し、私の手を永遠に離れてしまったのだろうか。

また私は、神殿建築の生け贄となつた哀れな知恵遅れのことを思つた。生け贄がそうあるべきように、笑みを浮かべながら死に赴いたあの若者を、そして彼を愛していた哀れな老父のことを思い出した。

それから霧ときらめきの中に消えていったモーガンの姿を思い、私は海に語りかけた。海が望むのであれば、私も同じようにしていい、と告げてみたのだ。しばらく待って見たが、なにも起こらなかった。そこで私は振り返り、戻っていった。トレスはすでに中庭を去っており、私は少しの間佇んで、あたりを見回した。ここはまるで使われていない棺桶のように空虚な感じだった。

そして私はモーガンがこの世から去ってしまい、彼女の実験は成功したのだと思った。車に戻ると、トレスが一生懸命あの海豚の薪乗せ台を車に積みこんでいる最中だった。

「あの方は、こいつらを旦那に持って欲しかったんですよ、きっと」と彼は言った。「ナシヨナル・トラストにやったってしようがない」

私たちは黙ったまま車を走らせた。お互い、目にしたものについて触れたくなかったのだが、同じことを考えていたと思う。なぜだか、要塞に来たことで私たちの心が落ち着いた。私たちは現状を受け入れてしまっていた。もはやそれは過ぎたことであった。私はおかみさんに七面鳥をプレゼントし、お茶と一緒に飲んでから、家路についた。

冬の夕闇の中、湿地を抜けていると、突如、ダマスカスに向かうパウロのように、私にも目が眩むような幻視が訪れた。私は前方の道に《月の司祭》が立っているのを見た。くらしとしていてブレーキも間に合わず、彼が立っていた場所をそのまま通過してしまった。私はモーガンを失った悲しみに打ちひしがれていて、彼の出現がなにを意味するのかすら、不思議に思わなかった。

ディックフォードに戻ると、クリスマス・イヴ礼拝の鐘が鳴り響いていた。この教区の教会の鐘はなかなか洒落たものであって、大聖堂クラスで用いられる代物だった。私は教会裏手の狭い小路に車を止め、クリスマスの賛美歌を演奏するオルガンに聴き入った。するとなぜだかわからないが、私の思いは、出産する母牛の鳴き声を聞いて、あれはハトホルだと知った洞窟の寝ずの番の時へとうつろっていった。また私は以前に見たホルスに乳をふくませるイシスの奇妙な小像を思った。また生命が湧きいずる《大いなる深み》がマーラという別名を持っていたことを思う。そして聖母マリアは別名をステラ・マリス、ラテン語で「海の星」である。そして《月の司祭》が語った言葉、すべての神々は一つの神、すべての女神たちは一つの女神、を思い出した。その意味はなんだろうと思った。私が月の暗い側を見るのはしばらくの間、これが最後となった。モーガ

ンと月の魔法にかかわるものは、まるで最初から存在しなかったように、幕を閉じたのであった。

それから車を出して走っていると、オフィスにまだ明かりが灯っているのが見えたので、顔を出してみたら、スコッティーの秘書嬢が休日前の最後の整理をしていた。ここ数日の大騒ぎのさなか、彼女が実によくやってくれたことを思いだし、私はお菓子屋に行つて、彼女のためのクリスマス・プレゼントとして、チョコレートの詰め合わせを一箱買った。

お菓子屋のカウンターでは、わざわざドリギをぶらさげていてキスしてもらいたい風情の小娘とメリー・クリスマスを挨拶を交わした。その時、私の脳裏に、母校の校長の転落の原因となった化粧のお化けのような小娘のことが浮かんだ。そのお化けも、まさにこのカウンターにいたのである。今頃、あのお化けの脱色ブロンドもさぞしなびたことだろうと思った。校長はまだ彼女にべったりくっついてるのだろうか、と思った。いや、それ以上に心配なのは、彼女のほうが校長にくっついてるだろうか、であった。それから私は車を車庫に入れ、重すぎる海豚たちはそのままにし、荷物をオフィスに運びこんで、名前も知らないスコッティーの秘書嬢におごそかにプレゼントを贈呈して赤

面させた。その後、帰宅すると、サリーがほぼ残骸となり果てた私を寝台にほうりこんでくれた。翌朝、キリスト教徒の一家である我が家は、聖なる日を血で血を洗う大喧嘩で祝した。私が起床して朝の礼拝に出ようとしなかったのも、姉は断固たる決意で、私を寝せるにしても眠らせはしないと心を砕いたからであった。

第二十七章

世の中に最悪というものが存在するとすれば、これはもうお祭り気分になれないクリスマスであろう。正式にモーガンの喪に服することもできない私は、弔意をおおっぴらにすることもままならず、結局すべてを自分の胸に納めてしまおうしかなかった。思うにサリーはなんぞ気づいていたようだったが、彼女と話し合うわけにもいかなかった。大體の話、彼女に打ち明けるわけにいかないことが多すぎたから、話し合つたとしても、彼女はほとんど理解できなかっただろう。スコツティは病氣だったし、もともとこの件に関して同情的ではなかった。そこで私は「ジョージ」に行き、ソムリエに失恋したからなにか気の利いたものを持ってこいと言つた。翌朝私は「ジョージ」で目覚め、サリーに連れて帰ってもらつた。彼女いわく、今は亡き亭主もクリスマスによくこうしていたという。

その晩、姉は「フレンド婦人会」のパーティーも催しており、私にも手を貸せと言つてきかなかつた。こっちは死人も同然の心境だったから、なんとか逃げ出し布団にもぐ

りこみたかったのだが、姉がしつこくせがむので、ついに私も気を取り直し、同意した。私がヤドリギの下でご婦人連に山ほどキスしてやったので、姉はヒステリーを起こして、書斎から牧師に電話をかけた。その隙に私は薄目のパンチにシャンパンとブランデーをぶちこんでやり、遁走した。牧師が到着したころには、ご婦人連はパンチを飲み干していた。翌朝、ヤドリギが家中に散乱しているのを発見した。ちよつとしたパーティーだったようだ！ヤドリギの配置から察するに、牧師もついに真にご婦人連が友好的な人間だったことを知ったに違いない。

その翌朝、仕事に復帰できて本当に嬉しかった。休日にも馬鹿騒ぎにもうんざりしていたし、姉もそうだった、と思っている。サリーも元気がなかった。彼女は息子夫婦の家にクリスマスをやりについていたのだが、それがよくなかったらしい。夜中に心臓発作を起こしたので、パンチの残りを与えてなんとかした。銀行の行く途中、スコツティーの家に酸素ボンベが運びこまれていくのも目にした。そういうわけで、全員にとつてちよつとしたクリスマスだったのである。

しかしお笑いはまだ終わってはいなかった。オフィスへ行くと、スコツティーの秘書嬢に迎えられたが、かわいそうに彼女は、目の回りの黒あざを隠そうと慎重に化粧を施

していた。彼女は赤面しながら身の置き所もない様子で、本気であれをプレゼントしてくれたのか、と私に尋ねた。それまでいろいろと起こり過ぎていたから、なにがあっても不思議ではない気分となっていた私は、さてはチョココレートに毒でも入っていたかと思ひ、なにか不都合でもあったのか、と聞き返した。彼女はプレゼントの中身を知っていたのかとたずねてきた。チョココレートのはずだが、と答えると、チョココレートにあらぬ、宝石なり、との答えが返ってきた。

それで事情が飲み込めた。モーガンの遺言状に記載されたおよそ起こりそうにない出来事に関する条項が、万一発動した時に備えて、トレスオーウェンがモーガンのスター・サファイアを銀行に保管するよう私に頼んでいた。そして私は暗い車庫の中で、ごちやごちや積みこんでいた車のトランクから、違箱を取り出してしまったのだ。チョコレートは今、銀行の貸金庫に安全に保管され、スコツティの秘書がサファイアを貰ってしまったのである。

私は慌てて平謝りに謝り、サファイアは自分のものではないが、保管に責任があるから返してくれと彼女に頼むしかなかった。彼女は屈辱で息絶える寸前のものであり、もう自分の手元にはないと説明した。彼女の義父が取り上げてしまい、しがみついて離さ

ないのだという。それで彼女の目のあざの説明もつく。きっと彼女は父権に立ち向かって、正直者が馬鹿を見てしまったのである。黙っていれば、チョコレートはミイラ化するまで銀行に眠り続け、彼女はサファイアをネコババすることもできたはずだ。もちろん、スター・サファイアは無傷のものに較べればそれほど値打ちはないが、モーガンの首飾りは彼女のような地位にある娘にとって一財産に相当するものだっただろう。

はにかみながら、彼女は私に手紙を差し出した。「これが中に入っていました」と彼女、「それで、あたしへのプレゼントでないとわかったのです」

封筒を手にしてみると、それはサファイアの受領者に宛てられていた。

「差し出がましいようですが」とスコツティーの秘書が言った、「もう一度封をなさって、本来の方に差し上げるまでお読みにならないほうがよろしいでしょう」

そこで、私は彼女の見ている前で封をした。

それから彼女に義理のお父さんの名前を聞いた。いまやそいつの手からサファイアを回収するという仕事があったし、彼女の目のあざから察するに、かなり手ごわそうな相手だった。

そいつの名前を聞いた時、驚きのあまり倒れそうになった。よりによつてマックリーだったからだ。こいつは町でも最低の肉屋兼屠殺業者なのだ。前に書いたと思うが、我が町の貧民窟が所在する川の屈曲部に、マックリーの店舗兼住居が川面に張り出している。これがまた十四世紀に建てられた代物で、追いはぎのアジトならともかく、肉屋にするには最低の衛生状態だった。私は、あのヒマラヤスギを入手した屋敷を購入していたので、あの貧民窟もなんとかしようとして運動を展開していた。そしてマックリーは区画整理反対派を組織していた。あいつならやる。そういう手合いなのだ。

スコツティーの秘書のような、洗練された、教育もある娘が、あのおぞましい肉屋から出てくるなど信じられなかったが、その時、マックリーは彼女の義父なのであり、父ではないことを思い出した。

彼女の名前を聞いてみると、モリー・コークだという。どこか記憶に引っ掛かるものがあったので、私の母校の校長となにかつながりがあるのか尋ねてみた。すると彼女は校長の娘だと答えた。それで彼女を思い出した。あのころ彼女は黒い目と白い顔をした小さな女の子で、私たちが教室にいる時に運動場で遊び、私たちが運動場に出ると教室に入っていたものだった。我が恩師が妻と家庭と、ついでに仕事も捨てるきっかけとなったあのお菓子屋の娘はどうなったのだろう、とふと頭に浮かんだ。残された妻が再婚していたとすると、校長は明らかに死亡したのだろう。離婚訴訟費用は彼らの財力の手で終えるものではないからだ。

そこでモリー・コークにオフィスを任せて、私はマックリーに面会して、サファイアを返却させることにした。彼の野蛮な店はまだ開店していなかったが、裏庭のほうから引き裂くような悲鳴が聞こえてきたので、ほどなく開くだろうとわかった。動物虐待防止協会のメンバーが、通りを見下ろす家の最上階の窓から鶴のように首を伸ばしているのが見えた。なにが行われているのか、情報を少しでも得ようとしているのだ。彼はマックリーを憎んでいた。豚を生きたままソーセイジ製造器にほうり込むとの風評があったからだ。

待っていると、次第に悲鳴が尾を引きながら消えていった。そこで私は扉をがんがんに叩きだした。しばらくすると、旧姓コーク、現ミセス・マックリーが現れた。私の記憶にあるミセス・コークは、物静かなで穏やかな人物であり、ほとんど口をきくこともなく、オクスフォード出身の派手な亭主にただ尽くすだけで満足していた。おそらく、家柄のよい人でもあったのだろう。しかし現在では、道で会ったとしても彼女だとはわからなかったに違いない。彼女の髪は真っ白であり、もう長くないように思われた。私がここまで来た用件を話すと、彼女は顔色を変え、急いで亭主を呼びにいった。裏のほうで彼の声が轟くのが聞こえてきた。機嫌のよい風ではなかった。

その場所の悪臭は筆舌に尽くしがたかった。休日の間、なんの換気もせず、閉鎖されていたからだ。

やがてマックリーが、こちらがいらつくような上機嫌ぶりを示しつつ、豚の血にまみれて現れた。私としては、人の噂から予想するに、顔に一発食らわなければ運がいいほうだと思っていたから、これは意外だった。それから彼はかつてない最高の嘘をつきはじめた。いっておくが、競売人や不動産業者は、嘘に関しては玄人である。

「ああ」と彼は言った、「おれはモリーにあの石を返しとけって言ったんだ、あいつのもんじゃねえんだから。だが、おれが持つてるなんて嘘はいけねえな、おれは持つちやいねえ。あいつが持つてんですよ。出させたほうがいいすよ、ミスター・マクスウェル、あの泥棒あまっちよから」

「つまり、彼女がくすねた、と？」と私。

「そう」と彼、「あいつがくすねたんすよ」

「ついでに、自分の目にあざもこしらえた、と？」

彼はいやな目つきで私を睨んだ。

それから私は身構え、彼のことをどう思っているか、はつきり言ってやった。彼は驚いたようだった。未亡人の一人息子のミスター・ウィルフレッド・マクスウェルからそんなことを言われるとは夢にも思っていなかったからだ。彼はモーセのようにおどおどしながら、奥に入ってサファイアを持ってきた。同時に私は、哀れなモリーが帰宅した

らどんな仕打ちを受けるだろうか、と思った。彼はしぼんだ物欲を補うために、なにかにしなければ収まらないだろう。

オフィスに戻ってから、彼女にマックリーがどういう態度に出たかを話した。ついでに私が彼にどんな態度を取ったかを、猥褻文字削除訂正版で話した。もし面倒が起きたら私に知らせるように言った。そしたらもう一度マックリーを訪問して、無削除版増補付きを言ってやるつもりだった。しかし彼女は不平を言わなかった。それで私も彼女に不平の種はないのだと結論した。もちろんこれは、マックリーとかかわる人間がこぼさざるを得ない不平以上の不平を言わなかったというだけであった。

私たちはそれから数日、書類仕事に没頭した。それまですべてをスコッティー任せにしていたため、業務の現状を私はまったく把握していなかったから、モリー・コークの助けを借りて、とにかくももつれた糸をほぐすようにあれこれまとめる必要があった。我が社には半ダースもの事務員や事務員見習いがいたが、まともな頭脳を有する者はモリーだけという有り様であった。それもあってスコッティーは、我が社の能率と誠実を確保せんとしてすべてを一人でしよいこんでいたのであった。平時ではそれも結構だろうが、一旦なにかあれば、ややこしくなるのである。

私は家畜市場まで毎週恒例の競売会を開きに行かなければならなかった。これくらい嫌いなものもないのだ。マックリーが出してきたくずのような豚たちをめぐって、一悶着あった。あの時私は衛生検査官を呼べと主張した。マックリーと彼の相棒は、豚に関する知識量の差で私を言い負かそうとしたが、私は免許を持つ競売人としての権限を行使して、突っぱねた。私は豚のことはよくわからないだろうが、マックリーのことはよくわかつている。彼がソーセージにしようとしめない豚には、よっぱどの事情があるに違いないのだ。検査の結果、私は正しかった。豚たちは全部結核持ちだったのだ。

さて、物事はだんだん上向いてきたようであり、再び安眠できるかなと思っていたら、次の災難が降りかかってきた。ある朝目覚めて、サリーが物音を立てないなと怪訝に思っ、部屋まで様子を伺いに行くと、彼女は横になったまま息を引き取っていた。かわいそうに、と私は思ったが、これでよかったのかもしれない。このところサリーはかなり具合が悪かったし、どうにも疲れが取れなかったのだ。しかも彼女は、どう説得しても人の手を借りようとはしなかった。選べるものなら、私もこういう風に逝きたいと思う。しかし無理だろう。喘息では消耗するが死にはしない。死者を悼む者の気持ちかわからない。残された者を悼むほうがずっと理に合っている。

サリーには実に恩があった。彼女は本当に良い人物だった。召し使いを失ってかくも取り乱している私に、姉はいらいらしていた。見苦しいと言うのだ。別のをすぐに見つけてやるとも言った。そこで私は「フレンド婦人会」のメンバーはどうだろうか、と言ってやった。私は彼女たちが結構気に入っていたし、姉は婦人会の連中に洒落た仕事を世話しようと心がけていたからだ。それで姉も口をつぐんだ。以来姉もこの件にかかわろうとしなくなっただし、それこそ私の狙いでもあった。そこで私はモリー・コークにうまく考えといてくれないか、と頼むことにした。しかしことはそれほど簡単ではなかった。市政選挙が近づいており、教区の貧民に失業手当が雨あられと降り注いでいたから、下働きなどは気安く見つかりそうになかった。モリーは新しい家政婦が見付かるまで、オフィスの清掃婦を配置転換するしかないだろうと言った。そして彼女は自堕落とこわもての中間に位置する恐怖の中年女を送りつけてきた。前々から、我が社のオフィスはかなり薄汚いと思っていたのだが、ようやく原因が判明した。なんであるのを解雇していないのか、とモリーに尋ねたところ、スコツティーの細君が彼女に興味を持っているからだとの答えが返ってきた。スコツティーの義父が彼女に興味を持ってくれるとちょっと助かるんだが、と言ってやったら、初めてモリーが笑うのを見た。

さて問題の中年女ミセス・リークは、私が元気な時は問題がなかった。私は家のほうで食事をしてきたからだ。しかし喘息発作が起きた時は話が違ふ。こういう場合に私が常食としている「ベンジャー簡易食品」といへども、いわゆる「どんな馬鹿でも大丈夫」ではなく、おまけにミセス・リークは馬鹿だった。

「おかゆをお望みだろうと思つたんですよ」―彼女は私が文句をつけるとむつすりと答えた。

「その通り」と私、「しかしこれじゃ下痢も同じだ」

彼女はこの台詞をどこかで言い触らしたに違いない。趣味がよくなかったことは私も認める。とにかく、モリーが現れて、ぞつとするようなおかゆを下げてくれ、かわりにもつとましなものを作ってくれた。それから彼女は筆記用具一式と私の郵便物を持ってきて、この場で事務に取り掛かった。私が回復するまでこれでいくことになった。ミセス・リークが清掃をし、モリーが食事を作るのである。私はサリーの鍵をモリーに預けた。ミセス・リークに託すわけにはいかなかった。彼女はまっとうな正直者かもしれないが、彼女の夫がそうではないことを私ははっきり知っていたからだ。彼はマックリー

の雑役夫として、汚い仕事を引き受けていたからだ。この汚いという言葉には、いろんな意味がある。

私の喘息は症状を変えつつあった。間隔を置いて激烈な発作を起こすかわりに、激しくはないものの慢性的になったのである。私はこのところ始終ぜいぜい咳きこんでいたが、苦痛自体は軽減されていた。どっちのほうが好きかわからない。あちらのほうが楽だ、と発作の時に思うのであった。スコツティーの流感は肺炎に悪化していて、周囲はみんな心配していた。それやこれやで、我が社は病人の集まりだった。悪いことは一度に起こると言うが、それはまったく正しいと思う。

モーガンを失った悲しみは峠を越してしまったようだ、と思いはじめていた。時は大いなる癒し手であり、こちらの意図など構わずに治療してくれるのである。しかし私の人生にぽっかりあいた穴を埋めてくれるものはなかったし、ディックフォードの生活を耐えられるものにしてくれるものもなかった。正直に言えば、私は体に良くないほど酒を飲むようになっていたが、この件を知る者は「ジョージ」のソムリエだけだと思っていた。おまけに彼は私に対して父親のような口をきき、ウイスキーを注文してもラガー・ビールを運んできて、注文を「ちや」「ちや」にしたようなふりをしていたものだった。

サリーを失ったことは大変な痛手だった。彼女が素晴らしい人物だったことは当然にしても、である。ミセス・リークはなんともお粗末な代物だった。彼女が作るベッドはぼろ切れの山のようなだったし、彼女がおこした火はまったく燃え上がらなかった。彼女はいつも石炭かごを一杯にしておくことを忘れるし、私には逆立ちしたって石炭かごを引っ張ることはできないのだ。モリーに石炭を荷車で運んでもらうわけにもいかず、そうかといって火のない暖炉の前に一晩中座つてもいられない。そこで私は「ジョージ」の商談室に行つてまた飲むことになる。ここでは注文もしないでねばるわけにはいかなからだ。かくして自分で自分をぐちゃぐちゃにしていると、グラント・ファイナーレが音高々に開幕するのであった。

昼食後、自分の部屋に引つ込んでみると、姉がメイドを使いによこした。家のほうに面会人が来ているとのメッセージであった。私は別になんとも思わず家に向かい、そこで姉がマックリーをもてなしているのを発見した。これには少々驚かされた。私に会いたいのなら、オフィスのほうに来るのが当然なのだ。私たちは自宅を訪問しあうほど仲睦まじいわけではない。姉はまさに「赤ずきんちゃん」を食べようとしている「狼さん」のように見えた。どうやら姉はなにか途方もなく楽しいことがあるらしく、私は一体全

体なにぞとならんと考えた。マックリーが姉をこれほど喜ばせることができるとは想像もできなかった。しかしすぐに姉が状況を説明してくれた。

「ミスター・マックリーは娘さんのことで私たちにお話があるそうよ」

「義理の娘」と私は訂正してやった。

「あなたが娘さんにいたずらしたとおっしゃってるわ」

「げ！」としか言えなかった。私はそれくらい驚倒していたのだ。

「ちがう、というの？」

「もちろんちがう。そりやでたらめだ」

「ここのところ、ずっと彼女を自分の部屋に入れてたでしょ」と姉は言った。蹴飛ばしてやってもよかったくらいだ。この状況下で決して言うべきでないことを口にしていく。しかし姉は世間の常識も経験も知識も持ち合わせていないから、それがわからないのであった。

「ぼくが寝込んでいる間、手紙を持ってきてくれただけだよ」と私。

「最近、たくさん手紙があつたようね」と姉、「特に、夜遅くなつてから」

実際の話、モリーはずっと私の夕食の準備をしてくれていて、私が寝るまで面倒を見てくれていた。しかしミセス・リークもその場にいたから、問題はないと思つていた。しかし姉は自分がなにをしているかも知らずに、これ幸いとマックリーを利用して私をとつちめようとしているのだ。こうなつてしまうと、張り倒して気絶させる以外に、姉を止める手段はなかつた。

私はミセス・リークの名前を出した。

「それでさあ」とマックリーが言った、「リークのかみさんがしゃべつてくれたんで、あつしもうちのやつも、あんたのしつぽをつかめたんだ」

それで私は大筋が見えてきた。モリーもこの件の一味なのだろうか、と思つたが、すぐに彼女に対する嫌疑を解いた。彼女はそんな手合いではない。

私はベアードモアの名前を出し、喘息発作中の私が女性とどうこうすることが肉体的に不可能であると証言してもらおうと言った。

「その場にはいない彼になにがわかるというのよ」と姉が言った。「どのみちあなたがた男性はいつもお互いかばいあうじゃない」

その時扉がノックされ、モリーが帳簿を手に入ってきた。

「遅れて申し訳ありません」と彼女が私に言った、「ミスター・スコットに用件のある方から電話がかかっておりましたので」

姉が私の名前を使って、あたかも私が呼び出したように仕向けたのだろう。モリーはマックリーを見た。その見方から察するに、彼女はうちの応接間で彼を見て驚いていたようだが、なにが起きているのかをすぐに悟ったようだった。彼女が肩を張り、それに立ち向かおうと奮い立つ様子が見て取れた。なかなか肝の座った娘だった。

「ミス・コーク」と私は言った。「君の義理の父君が君に対する私の立ち振る舞いに關して不平を述べておられる。君のほうとしては不平はありますか？」

「ありません」と彼女は言った。

「そりやねえでしょうとも」とマックリーが言った、「それでも、この子の評判は台なしで、この先にも面倒がなかったとしてもですよ。おまけにあっしやかみさんの面目はどうなりやす？ ええ、どう落としまえをつけるんですよ、マクスウエルの旦那？」

「そうよ」と姉も言った。「これをどうする気なの、ウィルフレッド？」

姉はともかく、私はなにが起きようとしているのか十分に承知していた。私としては、うまいこと誘い出し、証人の前でマックリーに要求を明言させることのほうが、はるかにおもしろい。

「私にどうしろというんだ？」と私はマックリーに言った。

「あの子と結婚しなざるかね？」とマックリー。

「いいとも」と私。

彼らが夢想だにしていらない展開であった。息を飲む音が部屋中に広がり、広間にこだましていき、そこでは召し使いたちが耳をそばだてていた。

これはまたマックリーの希望から一番かけ離れたものでもあった。彼は一瞬たりとも私がモリーといちやついていたなどと思っていなかったのであるし、いちやついていたにしても気にも止めなかったであろう。これで彼の矛先は完全に曲がってしまった。これに直面しては、補償もなにも要求できた筋合いではなかったからだ。

姉の反応ときたら、言葉にできないくらいおかしなものだった。姉は不道徳が問題となる場合には常に天使とともにましましていたのだが、不正を正すという考え方に接して、完璧に理性を失っていた。おそらくそんな考えはかけらもなかったのだろう。姉はある方面では異常なまでに鈍感なのだ。

「できっこないわよ、ウィルフレッド」と彼女は実に辛辣に言い放った。

「どうして？」と私。

「そんな余裕はないじゃない」と姉。

「儉約すればいいだろう」と私が揚げ足を取る。

「無理よ」と姉。

「それしかないな、手当を切り詰めるとすれば」

殺しておけばよかった、という目付きで姉は私を睨んだ。いつか殺しにくるのではな
いか、といつも私は思っている。

「私にあの子と一緒に住めという気？」と言いながら、姉は演技じみた手つきでモリ
ーを指した。彼女は扉の横で石像のように立ちすくしていた。

「とんでもない」と私は言ってやった。「妻に他人と寝起きをともにせよ、などとい
う気はかけられないね」

「ふん、あなたに二つに家を支えるだけの余裕はないわ、ウィルフレッド、それはは
つきりしてる」

「母さんがいる間はやるしかない」と私。

「借金しよいこむに決まってるわ」

「だから姉さんには儉約してもらおうよ」

「私は今まで通りでいきますからね」

「週一ポンド、それでごちやごちや言うようなら、それつきりさ」と私、「母さんの面倒は喜んで見させてもらうが、姉さんの扶養義務なんぞないんだから」

この時の姉以上に狂乱した人間を見ようと思ったら、癲狂院を見学するしかなかっただろう。よくもそれまで姉の愚行を我慢して、経済力にものを言わせなかったものだと驚いている。

マックリーは明らかにこのなりゆきを楽しんでいるようだった。かわいそうなモリーがこの騒動をどう感じていたか、私にはわからない。彼女の表情はまるで仮面のようにだったからだ。私の二倍の体格を持つマックリーを叩き出すことは出来ない相談だったから、姉が引き入れた野獣は姉が追い出すべきだろうと思っていた。姉に関するかぎり、

私は騎士道精神など持ち合わせていない。姉は自分が優位と見た時には、容赦なく私をいじめたおしてくれたものだった。

私は部屋を横切って、モリーの肩に手を置いた。「ついておいで」と言い、扉を開けて、彼女を前に押し出した。すると彼女は料理番の腕の中にいた―及び女中、その他雑多な連中が、扉の前で聞き耳を立てていたのだ。彼らは会見がこうも唐突に終わるとは夢にも思っていなかったのだ。

「おまえら、一月後にクビだ、おまえら全員」と私は言い捨て、モリーを前に立てたままオフィスに続く廊下を歩いていった。

彼女は自分のデスクに座り、私は私のデスクに座り、お互い顔を見合わせた。

「あれで台なしだろう」と私。

「ええ」と彼女、「あれでは義父も手の出しようがないでしょう。でもミスター・マクスウェル、よろしければ、ご用が済み次第お暇をいただきたいのです」

「やめるというのかい？」と私。

「はい」と彼女。「もうここにはいられないでしょう。女中たちがみんな聞いてしまいました。すぐに町中に噂が広がります」

私は頭をかかえこんだ。心底自分に嫌気がさしていた。この娘の周囲をぐちゃぐちゃにしただけでなく、スコッティーにとつてもひどいことをしてかしたと感じていた。私の部屋のほうに彼女を来させるなど、分別が足りなかったのだ。喘息発作中、自分で枕に頭も置けないほど弱っている時、誰が私を疑うだろうと思っていた。どの面下げてスコッティーに会えばいいのか見当もつかなかった―彼は病み上がりでこのずたぼろに直面することになるのだ。モリーの仕事ぶりから察すると、スコッティーは彼女に頼るところ大だったはずである。私としても、彼女なしでは右も左もわからない有り様だった。

また私の独身住居の問題もあった。ミセス・リークはむちゃくちゃとはいえ、いないよりはましかった。しかし彼女は今日の一件で解雇せざるなるまい。となると、誰もいなくなるのである。もしモリーがリークの代わりの女性を見つけることが不可能になったなら、私が自分で見つけるなどまったく不可能だった。人生はレフリー抜きのバト

ル・ロイヤルのように思えてきた。私はかなりへたばっていた。さっきやったばかりの喧嘩のために、心臓もかなりいかれてきた。

その時、押し殺したような声が聞こえたので、顔を上げてみると、モリーが啜り泣いていた。

私は彼女のそばに座り、肩を抱いた。それくらいしかできなかった。私も彼女同様、うちひしがれていたのだ。

すると市議会の時計台が三時の鐘を鳴らした。私は慌てて立ち上がった。三時には公会堂で競売をすることになっていたからだ。

急がば回れ、とはよく言ったものである。私は急ぎすぎたため、息が切れていた。ただモリーのデスクに身をもたせて、あがくだけだった。モリーはそれを見てとるや、電話を手にして町の他の競売人に連絡を取り、私のかわりに公会堂にいつてくれるよう取り計らった。私は口もきけず、ゆえに抗議もできなかった。

「毒を食らわば皿まで、といます」と喘息が峠を越すとモリーは言った。それから腕を取って私を部屋まで連れて行ってくれ、寝かせてくれた。それから彼女はベアードモアを引っ張ってきた。そしてベアードモアが薬を打ってくれた。

第二十八章

翌朝私はかなりひどい気分が目覚めた。すでに十一時を回っていた。起こしてくれるサリーがいなし、ミセス・リークは賢明にも姿を現さなかったから、寝過ぎしてしまったのだ。私はオフィスに電話をかけ、どういう調子か聞いてみた。受付の事務員が、業務は無事進行中と答えた。ミス・コークはいるかと聞いてみると、はい、います、ただいま顧客と応対中との返事だった。

私は着替えて「ジョージ」に転がりこみ、朝昼兼用を食べた。モリーはいつも最後にオフィスを出るから、その時に彼女をつかまえようと思っていたが、オフィスに行ってみると、すでに彼女も他の連中同様引き払っていた。彼女と言葉を交わして、どうしているか知りたかったのだ。彼女の家ではかなり面倒が起きていたに違いないし、もし五ポンド紙幣で面倒が片付くなら安いものだと思っていた。しかし土曜日だったから、彼女はもう昼食後に帰ってくるはずがなかった。しかし三時に始まるドッグ・レースにマックリーが顔を出すことを知っていたから、私は離れに戻って、彼が自宅を出るまで待

つことにした。それからモリーと母親に会いに行き、今回の成り行きについて全面的に謝罪して、自分に出来ることがあればなんでもすると申し出るつもりだった。

離れに戻ってみると、当然ながら、朝、寝台から転げ出たままの状態だった。そこで無人のオフィスに戻ってみると、ここも暖房が切れていた。そこで「ジョージ」に行つて、マックリーがドッグ・レースに出掛けるまで暇潰しにサルーン・バーで一二杯ひっかけた。かくして我が町にも喧噪が始まるのである。ドッグ・レースに行くのはマックリーだけではなかったからだ。

グレイハウンド競技場から歓声上がるのが聞こえたので、私は店を出た。どうやら必要以上に飲んでしまったようだった。まっすぐ歩けなかつたとまでは言わないが、とにかく車を運転する気にはならなかつた。そこで私は少し散歩をして、教会の尖塔が真つすぐ見えるようになったら、モリーと母親を訪問することにした。また私は老練な助祭の手口である、ペパミントを口一杯ほおぼることによる酒臭消しに耽つた。ペパミントを買いにいつて、私はまたお菓子屋の化粧のお化けねえちゃんに会ってしまった。我が恩師が運命の破滅を見たあの店だった。しかも私は、店を出る前に、彼女の脱色ブロードを引っ張つて、ドライブしようと言つていた。新鮮な空気を吸うと、私は儀式

よろしく側溝に唾を吐き、これ以上運命を悪化させないよう、もう町をぶらぶら歩くまいと決心した。私はオフィスに戻って、あのヒマラヤスギの屋敷の鍵を持ってきて、無駄な時間を自分の不動産の点検に有効利用しようかと決意した。

家具はすべて取り払われていた。買収の際に買っておいた二三の気の利いた家具は壁際に放置されていた。一階の床の中央には、私がいろんな競売で落としていたがらくたが山と積まれていた。ここを倉庫代わりにしていたのだ。この場所を、いま流行りの一般家屋風骨董品店にしてみたら、と漠然と考えていたからでもある。あるいは、正直いってしまうと、コクマルガラス的な蒐集癖の結果だったともいえる。蒐集品の中には、金を幾ら積まれても手放したくない品もあったのだ。窓の内側には、日差しを防ぐために新聞紙が貼られていた。薄明かりの中、この部屋は、まるでその昔カード・ゲームの果てに殺人があり、以来幽霊が出るというので開かずの間にされたという感じだった。

初冬の日没のため、西空がピンクになりかけていた。低い陽光が葉を落とした木立越しにアン女王好みの長方形の庭を照らし出していた。初夏、草ぼうぼうのころに見た時、それほどたいした庭だとは思わなかった。しかし、葉を落とした今、当時は見えなかったあらゆる宝物があらわになっていった。暖かな色調の煉瓦塀を背景にした黄色のジャス

ミンがあった。庭全体に芳香を放つウインタースイートの茂みもあった。しかし一番驚いたのは、一群の小さなアイリスが、緑の葉の間から、薄い藤色や深い青、天鷲絨のような黒や緑の花を咲かせていたのである。それは私が見た中でもっとも蘭に近い花だったし、どう見ても温室に入れておくのが正しいように思われた。しかしそのアイリスは一月の日差しの中に咲き誇り、かすかな光を最大限に利用しているようだった。そこで私はモリーと母親のために花束を摘んだ。一緒にウインタースイートも加えたが、これはマックリーの家屋内では歓迎されるだろうと踏んだからである。

それから私はマックリー邸を訪問しにいった。ミセス・マックリーが扉を開けてくれたが、私を見て大変驚いたようだった。一件について、どんな話を聞かされたのだろうか、と私は思った。私が花束を渡すと、彼女は私を店の裏手にある居間兼食堂に連れていった。自分が階段を降りることができないから、私を階下の応接間に案内できないことを詫びていた。私も階段が苦手だと返事をした。それから数分、互いの病状情報を交換し、私たちは知り合いになれた。

私はいつものぶっきらぼうな物言いでは話を切り出した。そしてご母堂お一人のところに来られて嬉しい、モリーのことでお話しが伺いたい、ご母堂はなにが起きているかご

存じか、と聞いてみた。彼女は知っていると言った。私とお嬢さんの間にはなにもなかったことを天地身命にかけて誓うが、ご了承いただけれるか、と言ってみた。彼女はその点は安心していると答えたが、ただ私とモリーは考えが足りなかった、すべて身から出た錆びであると言われてしまった。

「特にあなたさまよりもモリーのほうを責めています」と彼女は言った。「あなたさまはご病気で、よく事情も存じてらっしゃらなかったでしょう。でも、私は何度も何度もあの子に警告したのでよ。なにをしているのかわかっているのか、と。それでもあの子は聞かなかったものですから」

それで前に気づいていなかったことに気づいた。モリーはなにも知らずに危地に飛び込んだのではなかったのだ。私を立ち往生させるよりはと、危険を承知で火中の栗を拾ったのであった。実際、彼女がそうしてくれなかったら、私は八方ふさがりだっただろうから、これは有り難いと思わねばならなかった。このところ流感の大流行で、看護婦はきわめて雇いにくい状況だったのだ。私はこのことをミセス・マックリーに言ったが、彼女からはなんのコメントも返ってこなかった。私たちは沈黙に包まれ、私はあれこれ素早く思考をめぐらしていた。

「ええつとですな」とついに私が口を開いた。「おたくのお嬢さんのお立ち場はどのようなものでしょうか？　つまり、ぼくはご主人に、お嬢さんにその気があれば結婚すると言ってしまったわけですけど、お嬢さんにその気がおありでしょうか？　この件に関してお嬢さんはなんら意思表示をされてないのです」

「モリーはあなたさまの言葉を真に受けてはいませんよ、ミスター・マクスウエル、たとえ戯れにおっしゃったとしても、それをたてにどうこう言うような娘では決してございません」

「そうですね、ところでお嬢さんには他にあてもおありですか？　お嬢さんはどういう処遇を受けておられます？　つまり、ぼくがご迷惑をかけて以来、お嬢さんと奥様のお立ち場を伺いたい」

「私は癌を患っております。そう長くはないでしょう。その後、モリーは宿無しになってしまいます。あの子はミスター・スコットからいただく週給二十五シリングでは生きていけません」

「なんですと！」と私。「それだけしか払ってなかったんですか！ やれやれ、彼女あつての会社なのに！」

「ええ、あの子はその気になればもつと良い職につけたでしょう。アーガス社は週三ポンド出すと言っていました、あの子は断つたのです」

「そりやまた、なぜ？」

ミセス・マックリーは答えようとしなかった。

「とにかくお嬢さんが生活費にことかかないよう取り計らいます」と私は言った。「しかしお嬢さんは昨日我が社を辞めるとおっしゃっています」

ミセス・マックリーはまだ沈黙を保っていた。

「その、ミセス・マックリー」と私、「お嬢さんが望まれるのであれば、ぼくは結婚しようと思つているんですが、自分に魅力があるとも思えないものですから。お嬢さんの叔父になつてもいいくらい年ですし、ぼくみたいな残骸には不似合いです。お

嬢さんには他に誰かいらっしやるんじゃないですか？ 我が社にも生きの良い若いのがおりますし、連中はお嬢さんを女王様のように崇めてるんです」

「あなたさま以外には誰もいませんよ、ミスター・マクスウェル、卒業の時にあの娘にピンク色の砂糖で出来たネズミをくださったでしょう。あれ以来、ずっと、あなたさまだけです」

「はあ？」と私は完全に仰天、狼狽してしまった。その時、モリーその人が入ってきた。私の姿を見るや、そのまま後ずさりして消えてしまいそうに見えた。

私はミセス・マックリーを見た。ミセス・マックリーも私を見た。それから彼女の瞳に奇妙な光が宿った。それは、生死の境を渡る覚悟が決まった人々によく見られるもので、ついに事物の核心を見抜き、真の価値観を得たかの如き面持ちであった。私はモリーのところへ行き、彼女の手を取った。

「お母さんがなにかおっしゃりたいことがあるんじゃないかと思って、お邪魔していたんだ、モリー」と私は言った。これまではミス・コークとしか呼んだことがなかったのだが。

「もうこれ以上話はありません。あとは二人で話し合ってください」とミセス・マツクリーは言い、立ち上がって、つらく重い足取りで部屋から出ていった。私はモリーと二人きりで残された。

モリーはコートを緩め、母親が去った椅子に腰を降ろし、いぶかしげに私を見た。これは正直にいくしかないと感じた。下手な言い回しを考えてもむだだろうし、自分のその才能があるとも思えなかった。

彼女に何歳か聞いてみた。二十四歳だと教えてくれた。ぼくは三十六歳だと言った。また経費の点で姉の揚げ足を取ってみたが、その気になれば十分結婚してやっていけるとも言った。もちろん、全員が常識的に振る舞うとの仮定の上での話である。

「だが、ともかく君に聞いてもらいたいことがある。その上で決めてほしい」と私は言い、それからモーガンに関する話を始めた。

難しい作業になるだろうとは予想していたが、これほど難しいとは思っていなかった。話はあつちに飛び、こつちに飛び、もうむちゃくちゃになった。超自然的な要素はモリーにはわからないだろうと思つて、その方面をカットして話した結果、モーガンを中世

の浮かれ女みたいに描写してしまった。話しているうちにすべてが記憶に甦ってしまい、私は聴衆も忘れて、べらぼうにたくさんのお話をモリーに聞かせてしまった。いままでも胸の奥にしまっていたものが一度に噴出してしまい、話し終えると私は完全にくたばってしまった。妙なプロポーズもあったものだ。

するとモリーがモーガンと同じことをした。彼女は私のほうに来て、椅子の脇に座り、私の肩を抱いたのだ。

「その人を愛してらっしゃるのはわかります」と彼女、「でもあたしを必要としてらっしゃると思います。だから、結婚します」

その時、外のほうでなにやら騒々しいと思ったら、マックリーが意外に早く帰宅していたのであり、ミス・マックリーがなんとか彼を居間に入れまいと頑張っていたのであった。私は癩癩を起こして外にでるや、マックリーに対して思う存分、なんとも議会向きでない言葉を使って罵ってやった。すると彼はファイティング・ポーズを取り、私に殴ってこいと挑発してきた。

「もちろん、あんたを叩いたりはしないさ」と私は言ってやった。「それほど馬鹿じやない。だが、あんたの商売を叩くことならお手のものさ。いつでもやってやるよ、ごちやごちやいうんならな」——それから私は明確かつ簡潔かつ決定的に、彼の店舗のどこが建築法に違反しているか、誰かがちくれば、基準通りに改築するのにどのくらいの費用がかかるか、通告してやった。彼は口をつぐみ、すぐさま出ていってしまい、それから今日に至るまで、私は彼から迷惑を被ったことはない。私はブルドッグの血統を引くものではないだろうが、猫の喧嘩ならお手のものなのだ。

そして私は居間に凱旋した。モリーと母親は私が殺されるか、手ひどく痛めつけられるに違いないと思つて大騒ぎをしていた。正直いって、自分がそうならなかったのも不思議である。マックリーはその手の評判が高かった。私は極めて自分に満足していた。マックリーほどの大男を夕食抜きで自宅から叩きだすというのは並々ならぬ快挙であった。加えて、自分の胸に秘めていた悩みをモリーに打ち明けて、すっきりしていたから、モーガンを失つて以来、これほど良い気分だったことはなかった。

そこで私はミセス・マックリーの頬に接吻をして、正式に将来の義理の息子として受け入れてもらった。それから私たちは食事をとった。私は彼女たちに持ちネタのジョー

クを幾つか、「フレンド婦人会」と薄目のパンチ酒の話も含めて、聞かせてやった。彼女たちは楽しんでくれた。モリーにキスするのを忘れたと思い出したのは自宅に帰ってからのことだった。

食事をしている時、私はある種の呻き声に気づいた。明らかに、以前から続いていた悲鳴のような感じだったが、どたばた騒ぎで注意を払っていなかったのだ。

「あれは一体なんだろう？」と私は言った。

「屠殺小屋の子牛たちですよ」とミセス・マックリーが言った。「主人がいけないのです。週末まで残しておくべきではなかったのに。殺す前に絶食させなければならぬのです」

「ちよつと行って、水を飲ませてくるわ」とモリー、「それで静かになるでしょう」

少しは静かにしていたものの、かわいそうな子牛たちはまた泣きはじめた。おやすみを言つて家路につき、音の聞こえる範囲から離れた時、私はほつとした。モリーは母親が寝る手伝いをしていた。

星霜の中、帰路をたどりながら、私はあの娘の生活環境について考えていた。母親が病弱だから、彼女は今やすべての家事をこなさなければならぬし、出勤前にそれをするととなると何時に起きなければならぬのだろうか。昼は家に戻り、マックリーの野郎に午餐を作つてやり、それから戻つてきて、彼女を奴隷のようにこき使うスコッティーのために超過勤務を強いられる。毎週末にマックリーの帳簿をつけ、他の家事もやる。マックリーはかなりしばしば泥酔して帰宅し、無意味に彼女たちを殴る。毎週、毎月、一年中、ミセス・マックリーが彼と結婚して以来、彼女たちは屠殺場の光景と物音と匂いに囲まれ暮らしてきたのだ。母親は自分とモリーの住む家が欲しくてマックリーと結婚したのであり、マックリーのほうは学校売却によるささやかな資本が目当てで彼女と結婚したのであり、それでこの野蛮な商売を始めたというわけだ。我が恩師は、駆け落ち相手の小娘が金の切れ目が縁の切れ目とばかりに去つた後、ブリストルの安下宿でズボン吊りで首を吊っていた。あの小娘もそれなりの報いを受けるべきだろう。

それから私は、なぜコーク先生がちゃんとした仕事とちゃんとした妻を捨てて、お菓子のケバケバねえちゃんと逃げたのだらうと思つた。私たち若造ですらありやひどいと馬鹿にしていた化粧のお化粧だったのだ。先生はオクスフォード卒の学士様であり、

癩癩を起こしていない時は、その立ち振る舞いは紳士そのものだった。もつとも、趣味のほうは違つたのだろう。さもなければあのお菓子屋の売り子を好きになるはずはない。

いつの間にか、自分の離れの扉の前についていた。アウゲイアスの大牛舎に等しいごみためのような我が住居に目をつぶって、さっさと寝たほうがいい、朝になったら「ジョージ」を仮の住まいにして、モリーの結婚準備が整ったらヒマラヤスギ屋敷に移り住もう、などと考えつつ階上になると、すべて清掃され、暖炉も石灰を使って火の調整すらされていた。それで私がマツクリー宅を訪問している間、モリーが外出していたわけがわかった。どうやらこの先に控える結婚で、玉の輿に乗るのはモリーではないようだと思わざるを得なかった。私は町では裕福な花婿候補と一般に思われてはいるが、内情を知る者は皆、そうではないとはつきり知っていた。

翌朝オフィスに顔を出すと、いつものようにモリーがデスクについて、私の郵便物を取り扱う準備をしていた。私は近寄って彼女を背中を軽くたたき（私はしらふじやとても恥ずかしくてキスなどできない）、婚約の記念がわりに自分の紋章指輪を渡した。彼女は礼を言い、それを自分の指にはめた。それから私たちは通信事務の整理にかかった。

「ジョージ」に移る話をしてみると、彼女の答えはノーであった。それはよくないとのことであり、理由を聞いてみたが、彼女は答えようとしなかった。彼女が言うには、彼女の家に夕食を食べにきてほしいとのこと、いつでも大歓迎、マックリーは夕方には家にいることがないという。離れの家事はどうすると聞いてみると、モリーいわく私たちの家程度の家事をこなすのに四人もの使用人は無駄遣い以外の何物でもないし、彼らが彼らの責任に於いて離れの家事をやるか、いやなら理由を言わせてみるべきだろう、私が家の主人なのだから、私が命令を下せばかたはつくとのことだった。それを思いつかなかった私も馬鹿だった。そりゃいいとばかりに、私は台所に向いて、一同を整列させた。すると私がクビにした連中を姉が再契約していたことがわかった。連中はいよいよ生意気になっていたが、女中見習いの小娘だけは別だった。彼女は孤児院出身の孤児であり、豆が煮えたものもご存じない頭脳の持ち主だった。

連中は、自分たちは姉のために働いているのであり、私のためではないと抜かした。好きなだけ姉のために働いて一向に構わないが、私が話す時にサンキューとプリーズに気をつけないと給料は出ないとやってやった。それから女中見習いを再々契約して、ちりとりを持ったままの彼女を引き立てて、モリーに引き渡した。

私はその晩、モリーとミセス・マックリーとともに夕食をとった。ミセス・マックリーに会うや、彼女に微妙な変化が現れているのがわかった。それがなにかうまく言えないが、どうやらモリーが面倒を見てもらえるとわかったため、一息ついたような感じだった。これは長くないだろうと思った。

モリーが料理の様子を見に部屋から出ていった時、ミセス・マックリーが私を呼び寄せ、私の手を握った。それから、酒をやめてくれないかと私に頼んできた。私は思わず膝をつきそうになった。そのことは「ジョージ」のソムリエしか知らないものを思っていたのだ。

「こんな町でそんなことをなさって、誰にも悟られないとお思いですか？」と彼女は言った。

私は自分がつくづく嫌になった。通常なら私は世評などみじんも気にかけない。ディックフォードのような場所の世評など、言葉にするのもくだらないからだ。しかしスコッティーを職場絡みの醜聞に巻き込んで、自分は酒に逃げているなど、まったく穴があ

つたら入りたいほどのものだったし、露見したとあつては、いよいよ身の置き所がなかった。

その時モリーが食事を運んできた。そしてなにかで私が狼狽しているのを見てとると、まるで雌虎のように母親に食ってかかった。いわく私を叱つてはいけない、私はまだそれに耐えられる健康状態ではない、あたしがついていいるから大丈夫、ちゃんと世話します、心配無用——これがすべてオフィスでは「はい、ミスター・マクスウェル」「いいえ、ミスター・マクスウェル」しか言わないモリーの口から発せられたのであつた！

心配無用、とモリーに言ってやった。私はご母堂に約束をしてしまったし、それを守るつもりだつた。実際、守りはしたが、想像以上のつらさであつたし、モリーが私をベアードモアの元に連れていって、彼にも禁酒の誓いにつきあつてもらうようにしなかつたなら、私はまず約束を破っていただろう。その後数日、私は二時間おきにモリーにまだ結婚する気があるのかと尋ねたが、そのたび彼女は、もしいまさら袖にするようなら契約不履行で告訴すると通告し、私を束縛してくれた。それほど長い期間アルコール漬けになつていたわけではなかつたから、私の禁断症状は軽くてすんだ。今では大酒のみの連中を気の毒に思っている。

予感していた通り、ミセス・マックリーは急激に衰えていった。そしてある晩、私がお邪魔していた時、彼女はモリーを部屋から出して、結婚式はいつになるか、結婚後はどこに落ち着くのか、私に尋ねた。私はヒマラヤスギ屋敷を新婚家庭とする気であり、前の家は母の存命中は母名義にしておくと言った。すると彼女はヒマラヤスギ屋敷の用意が整うのにどれほどかかるかと尋ねるので、三カ月はかかるだろうと言った。そんな待てないからすぐにモリーを連れていってくれないか、と彼女は言った。彼女が私の離れで寝起きする気があるのなら、いつだって構わないと私は答えた。ミセス・マックリーは、それで肩の荷が降りたと言い、病院を紹介してくれないか、もう持ちそうにないから、と私に頼んだ。いつ入院を希望するか、私が尋ねると、いつとは言えない、ベッドがあるならいつでもとの答えが返ってきた。自分に任せてくれ、よければ明日にでも手配すると私は言った。私がどうしてそれほど確約できるのか、わからないと彼女は言ったが、いつでも入院する、とのことだった。

翌早朝、手配通りに私は車で乗りつけて、ミセス・マックリーを救護院に連れていき、モリーのための部屋も取っておいた。かくしてご母堂も最後の日々を安楽に過ごせたの

であつた。彼女は素晴らしい人だつた。マックリーの野郎は放置しておいた。我々同様、奴もこの地方で召し使いを雇う難しさを実感するであらう。

ミセス・マックリーはそれから二週間後に他界した。モリーと私は彼女の臨終に立ち会つた。いまわの際に、モリーを私の手に託すことができ、幸せに死ぬると彼女は言つた。もし彼女が、ウイスキーを手にする誘惑と戦う私や、私が馬鹿な真似をしないように始終見張つているモリーを見たなら、話があべこべだと思つたに違いない。

燕尾服にトップ・ハット姿の私が、モリーやマックリーや親戚の叔母とともに、葬儀の先導馬車に乗っているのを見ようと、町中が振り返つた。町の連中は、醜聞ならいつでも完全に信じる用意があつたのだが、婚約の噂はてんで信用していなかつたのだ。自宅の前を通過する時、私は姉の部屋の窓のブラインドが降ろされていることに気づいた。他の部屋のブラインドは私が命令を下して降ろさせておいた。これは姉にしては珍しく心がけの良いことだと思つていたが、後で話を聞いてみると、私が家族の一員として葬儀に参列すると知つた姉が、純粹な無念の思いから頭痛を患い、午餐を嘔吐していたのだという。なんとも誠意のない弔意であつたが、まあ、弔意ではあつた。

私はモリーを母に会わせに連れていった。すると母は彼女を「フレンド婦人会」のメンバーと間違えて、堅信式を受けたのか、修道院に入る気はあるかなどと言っていた。それでも全体、母はモリーに愛想が良かったし、彼女が将来の嫁と知っていたなら色々とおつたろうから、終わり良ければすべて良し、だった。

それから私は教区の牧師に会いにいった。彼は高教会派であり、四旬節に結婚式を挙げるのは気に食わなかった。私たちに復活祭後も罪深く生きろという気か、と言ってやった。ともあれこっちにはその気がないし、仕事を渋るようなら、登記所で商売仇に鼻屑してやるつもりだった。それで彼も折れて、静かにやってくれるのなら構わないと言いだした。この状況下では間違いなく静かにやると保証してやった。彼は、自分の見るところ私の姉に対する仕打ちは目に余ると言い出した。英国は自由主義陣営に属しているから、言論の自由は保証されている、と私は言った。

救護院の婦長が、花嫁の出立は是非ともこちらからと言い張った。そして看護婦たちもかなり手広く手伝ってくれた。みんなモリーを愛していてくれたからだ。私たちの招待客はなんとも珍妙な顔触れだった。母はこの数年家から一步も出たことがなかったから、招待されてはいなかった。姉は一応呼ばれていたが、来るとも来ないとも言つてこ

なかった。来なければいい、と私たちは神に祈り、結局彼女は来なかった。私はトレス
オーウェン夫妻を呼び、モリーは苔の生えたような叔母と女友だちを数人呼んだ。「ジ
ョージ」のソムリエが教会に現れたので、彼も救護院での披露パーティーに連れていっ
た。スコッティーは生命を賭して寝台からはい出してきて、花婿の介添人をつとめ、式
が終わるや寝台に戻っていった。驚いたことに、彼は大変に喜んでいた。新しい秘書を
使い馴らさねばならないはめになったはずなのだが。

ハネムーンとして、私はモリーを週末だけディックマウスのグラランド・ホテルに連れ
ていった。スコッティーがいない今、さける時間はこれくらいしかなかったのだ。しか
も私はホテルのドアをくぐるとすぐに、喘息発作を起こしてしまった。あの娘にとって
はちよつとしたハネムーンだった！ 動けるようになる、私はすぐに彼女を連れて戻
った。正直言えば、少し早すぎたような気もする。

ヒマラヤスギ屋敷の準備が整うまで、私たちは離れに住むことになったが、離れに行
くとなると、どうしても家のホールを通らなければならぬ。さて、私の家は長い、二
階建ての二方玄関の代物であり、右端にオフィスがあり、左は居住区である。道に面し

た扉は常時開放されていて、本当の玄関はホールの内側にあり、オフィスに通じる扉と向かいあっていた。

私たちが玄関前に車で乗りつけると、事務主任が隅のほうから合図しているのが見えた。そこで車を止め、彼の話聞くことにした。主任の話では、姉が完全に逆上しているという。事務員一同は帰宅歓迎の挨拶をしたかったのだそうだが、彼は一騒動ありそうだと感じた。そこでこの場合のもっとも人道的な処置として、社を一時閉鎖し、総員を退去させ、身内の恥は身内で片付けてもらおうことにしたという。私は彼に同意して、モリーと彼を車に乗せ、騒ぎが収まるまで彼のあばら家で待たせておくことにした。それから私は姉と対峙するため車で戻った。

私が扉で鍵を使う音を聞きつけるや、姉が飛び出し、襲いかかってきた。私を泥棒の嘘つきと罵った。モリーを売女と罵り、私が性病をうつされるだろうと喚いた。モリーがいなくて幸いだった！ 喘息発作後の私は決して機嫌のいい人物ではないから、エセル（姉である）の頬のあたりを手の甲でマックリー流に張り飛ばし、追い払った。それから煉瓦職人を呼び、扉に煉瓦を積んで塞がせ、花嫁を無事に家に連れて戻った。しかし、安息の一夜は訪れなかった。私はまた喘息と心臓発作を起こしてしまった。喧嘩の

後はいつもこうだ。あの子にとってはちよつとした帰宅歓迎会だった！ 姉はごみバケツの位置を変え、裏口を使わざるを得ず、来訪者に出来るかぎりの言い訳をしていた。私は二度と彼女と口をきかなかつた。

翌日、母と姉がいつも利用していた弁護士が私に会いたいと言ってきた。私はこの紳士になんの用もないのであるが、行ってみた。どうやら、姉は台所から召し使いたちを上がらせ、騒動の場面を見せていたらしく、傷害現場の証人が複数いるようであった。エセルは唇を切っていた。（ついでながら、私は拳を切っていた）

それから弁護士は、私が結婚した以上、この先姉に対してどんな譲渡をするつもりか、尋ねてきた。なにもない、と私は答えた。母の存命中は今まで通りに暮らしていいし、その先は、デイクフォード以外の場所で暮らすことを条件にエセルに週三ポンドを渡すことにする。彼女は承知しないだろう、と弁護士は言った。姉は呑むか、呑まないかの二つに一つだし、この先ごたごた抜かすようならそれも貰えないだろう、と私は言った。彼は一枚の書類を取り出した。それには、私が姉に家屋を全家具付きで譲渡し、事業収益の半分を渡す旨が記され、私がサインすることになっていた。その横には、法廷召喚を要求する申請書類が置いてあった。私は弁護士に地獄に落ちろと言ってやった。

翌日、私は傷害の容疑で法廷に召喚された。姉は私を地方判事たちの前に、他の酔っ払いや無灯火自転車運転違反者や鑑札無しで犬を飼っていた者と一緒に並ばせてくれたのである。召し使いたちは実は大袈裟に証言をした。彼らによれば、私は姉を張り倒した後、蹴飛ばしたのである。問題点はただ一つ、私がどこを蹴ったかで意見の一致を見ない点であった。姉も足跡を証拠として提出するわけにいかず、また召し使いたちのいうことが真実であれば、姉は人間ダルメシアンと化していなければならぬはずだった。そこで判事たちは蹴りの件は割り引いたが、私が疑いの余地なく姉の顎を殴打したと宣告した。それは事実だった。そして私は和解を命じられた。

友人数人の例外を除いて、町全体がエセルの側についていた。加えて、マックリーがしつこく強請された結婚の話を広めてまわっていた。そこで私とモリーの二人は村八分にされた。もう私は酒をやめていたから、クラブにも「ジョージ」にも用がなかった。またスコッティーは慎重に私を顧客から隔離していた。顧客の家屋が汚染されていると思われないように、との配慮である。モリーについてくれた唯一の人物はあの苔の生えた叔母だけだった。二人の女友だちですら、傷害事件の後、姿を見せなくなった。苔叔母は以前にもまして私たちにくつついてくるようになったが、これは私たちが少々彼女を援

助してやったからである。あの叔母にそれにふさわしかったのかどうか、今ではわからないが、ともかく彼女は援助を必要としていた。おそらく、それは誰もが主張できる最高の権利なのかもしれない。

第二十九章

かくしてモリーと私は新婚生活に落ち着いた。私はいつもの一角におり、モリーはサリーがいた階下を占有した。私と一緒に寝るなど問題外だったからだ。クロロホルムでも嗅がされないと、一睡もできないだろう。私は睡眠中、ブルドッグのような呼吸をするし、眠っていない時は歩き回るからだ。事物の月的側面は、まるでなかったように消え失せていた。

ヒマラヤスギ屋敷の改装はゆっくりと進んでいた。やるが多すぎたせいだ。また私はほとんど金をつぎこんでいなかったから、不平を言うわけにもいかなかった。さらに、建築業界のストライキのため、資材の補給が止まっていた。おそらく私は本気で施工業者の尻を叩く熱意にかけていたのだろう。また私はすべてをアン女王風に飾り立てようと考えたため、いよいよ作業は停滞した。結局、それほどこの件に興味を持っていなかったように思う。改装はただらと秋まで伸びてしまい、私たちはまだ厩舎に住んでいた。それから天候のため、改装は中断された。

モリーののような活動的な女性には、私の独身用離れでの家事はたいした仕事ではないし、特に女中見習いが一人前になった今、彼女は手持ち無沙汰だった。そこで彼女はスコッティーが復活祭明けにオフィスには戻った時、以前の職に復帰した。そうすればスコッティーも病み上がり気分ですっきり秘書を仕込む必要もないのである。しかし新しい秘書は現れず、モリーはそのままとどまってしまった。結婚前との唯一の違いは、スコッティーが彼女に給料を支給しなくなったことと、彼女が私を、ミスター・マクスウェルと呼ばなくなったことくらいだった。実際、彼女は私をいかなる名前でも呼ばなくなったのだ。私をウィルフレッドと呼ばずにすむよう彼女が用いる婉曲表現は驚異的だった。

もちろん、彼女の生活環境は以前よりも格段に向上していた。私はマックリーのよう
に彼女をぶたないし、彼女の母親ほど夜中に呼び出すこともない。また私の商売は敷地
内で生物を殺すこともない（少なくとも斧では殺さない——もつとも、正直言って、かな
りの生命を間接的に縮めてきたような気はする。スコッティーは地獄の焼き網でもお薦
めの物件と称しかねない）。モリーは本をたくさん読み、私たちはラジオを聞くのが大
好きだった。仕事を続けることでモリーは間がもてたと私は内心考えている。私自身は

ミセス・マックリーのおかげでなんとか間がもてた。尊敬している瀕死の女性と交わした約束は、大変な拘束力を有している。私だつて天国の門前で赤い鼻をしてミセス・マックリー相手にいろいろ言い訳をしたくはなかった。

子供がいたら楽しいだろうと思つていたが、こちらの方面はまったく明るくなかった。聖職者の祝福がない場合には子供はひよこひよこ現れるというのに、家庭を築くしかないとなるとまったく出来ないというのはおかしなものだ。おまけにこの件を他人に愚痴ろうものなら、手伝つてやろうという馬鹿が現れる。

私が発作を起こしている時、モリーは一番幸福だつたと信じている。時々彼女は私の手を握つて、実に不思議な表情を浮かべて私を見ていたものだつた。こちらはしゃべれないから、なにを考えているか、聞くこともできなかった。それに酒抜きで聞けるようなことじゃなかった。少なくとも、私は聞けない。私は恐ろしく内気だつたし、モリーはきわめて慎まされた状況は、金婚式を迎えた仲の良い老夫婦ならともかく、モリーのうちの置かれていた状況は、金婚式を迎えた仲の良い老夫婦ならともかく、モリーのような女性にとつては芳しいものではなかった。「春は、扱いを間違えれば、二度とやつてこない」ということわざがある。私は彼女が気の毒でならなかった。私は自分の青春を

下手に扱ってしまい、それがどんなものであるか知っていた。しかし私になにができようか？　ない袖は振れない。

モーガンとの経験から、私は男女の関係がどのようなものになり得るか知っていた。モーガンへの愛からはどこへも発展しなかったし、なにか起きるとは私自身思っただけでなかった。それでも私は燃えるだけ燃えたのである。また、いかに苦しくても、それを捨てるはしなかっただろう。私とモリーの間には欠けているものがあり、それなくしては結婚が成り立たないのであるが、私たちには打つ手がなかった。祈祷書にあからさまに記されたことで、やっつけてはいけないとされることはやってないし、やるべきであるとされてることはやっていた。もともと私はどうにも燃えないたちだった。しかしモーガンを一目見た瞬間から、燃えるどころか爆発したのである。肉体の問題ではないし、感情の領域でなかった。知性には無関係であるし、およそ霊的な問題でもない。すると、それはなんだろう？

どうして恩師コーク先生が化粧のお化粧と駆け落ちしたか、今では理解している。私はある日、モリーののためのお菓子を買おうとお菓子屋に入った。すると売り子の娘が私

に言った―「あたしたちのドライブはもうお流れになったんですか、ミスター・マクスウェル？」

「その質問は妻にしてくれ」と私が言うと、小娘はにたにた笑った。

それでも、彼女はまったく的外してはいなかった。もちろんそんな真似をするくらいなら、自殺したほうがましだった（その前にあちらにも死んでもらう）。私はモリーをこのうえなく大事に思っていたからだ。とはいえ、彼女は商売柄、私の心理状態を適確に見抜いていたのだ。実に奇妙な話だが、あれほど心にかけているモリーが私に魅力をもったく感じさせず、それでいて化粧のお化けにそそられるのである。どうしてこうなるのか私には謎であった。これだけは夢にも思っていなかったのだ。

今では、《自然》が動物たちに於いて、それをどう用いているか、理解するのは容易である。我々はそのらのスズメよりもずっとましな存在であり、まったく異なる原理から造られているのだと考えていたいわけだが、実はそうではない。牡のスズメを少し観察していればすぐわかる。《自然》は我々の背中を押しているのであり、我々はその状況をロマンスと呼ぶ。恋に溺れるなどというが、まるで恋がアヒルの池のように空間に

位置を占めているみたいに聞こえる。それどころが、恋は我々の中から湧きでてくるものであり、ある一点を越えると、受け入れ側にお構いなしに満ち溢れるのである。その結果生じる悲劇の原因を、我々は《自然》以外のあらゆるもののせいにする。フロイトも指摘しているように、人間性の中には《自然》がむちゃくちゃにたくさんあるのである。

恩師コーク先生は不足分をお菓子屋で補おうとしていたのであり、その結果彼の結婚生活の社会的側面がおしゃやかになった。どんな馬鹿にでもそうなるとわかっていたはずだ。一方、私はモーガンに指一本触れることなく、自分の魂を肥沃化させ得たのである。卵子が胎児になるには、物理的次元でいろいろとやり取りする必要があることは常識である。しかし結婚が成功するためには、ある種の不思議なことが、より精妙な次元で生じる必要があるらしい。

モーガンがなにを狙っていたのか、私はさんざん考え、つきとめようとしていた。私にわかっていたことは、彼女自身が自分の目的をはっきり把握していて、私と彼女の関係をすべての鍵と見なしていたということだった。私にしてみれば、かなりおぞましい

生体実験であった。モーガンがすべてうまくいったと思っていたことは、彼女の最後の手紙からも明らかだった。

モーガンは故意に私を恋に落としたのである。ともかく、それは明白だった。ドイツクフオードにはほとんど他に匹敵する娯楽もないから、たいした手間はかからなかっただろう。しかしモーガンはいやなら身をかわせたはずである。彼女は思いやりのある女性だったから、そうしなかったのは不思議に思える。彼女はいいかげんな真似をする女性でもなかった。彼女がわざわざ心を鬼にして私を傷つけたのは、どうも、なにか大きな目的があつたためのように思えた。ちようど《月の司祭》が彼女をアトランティスから連れ出した時のように。

* * * * *

モリーと私にとって最初のクリスマスが近づいていた。これが怖かった。モーガンが去った記念日でもあつたのだ——命日という言葉は使えなかった。彼女が死んだかどうか、わからないからだ。そしてクリスマスの鐘やキャロルはあのころを思い出させるものでもあつた。さらに、私はモリーのためになにかお祭りらしきものをしなければならぬ。

私たちは町で完全にのけものにされていた。普通なら気にかけないところだったし彼女も慣れていたと思う。最初は父親のため、次に義父のために、彼女はいつも白眼視される日々を送ってきたからだ。しかし、周囲がクリスマスマス気分浸って、誰もが祝福を交わしあっているとなれば、いやでも意識させられるのである。もし今年姉が「フレンド婦人会」のパーティーに招待してくれれば、私はいくつもりだった。しかし彼女はなにも言ってくれなかった。彼女を殴った私が刑務所に行かなかったので、どうにも私を許す気がなかったのだ。

私はおめでたい季節を控えて、現金を降ろしに銀行に行った。すると出納係が出て来て、頭取が私に会いたいと言っているという。一体全体なんのようだろうと思った。姉が超過引き出しで私にいやがらせでもしたのだろうか？ 姉ならそのくらいのはするだろう。

頭取が奥の院から顔を突き出し、こう言った。

「おい、マックス、なにを貸金庫に入れてたかしらんが、カビが生えてるぞ。あれを引き取るか、とにかくきれいにしてくれ」

彼をともに地下金庫室に降りてみると、棚の上に一年前に預けた包装小包があった。それは完全にカビだらけだった。滲み出した液体が周囲に水溜まり風になっていて、灰色のヒゲがぼさぼさ生えていた。

「一体全体こりやなんだ？」と彼は聞いた。

私は事情を教えてやった。彼は腹をかかえて笑った。

「それで、サファイアのほうはどうなったんだ？」

「箱に入ったままオフィスの中であちこち転がってるんじゃないか」と私は言った。「もちろん、マックリーの野郎がぼくのいない時にあがりこんでなけりやの話だが。ちよつと調べてみる必要があるそうだ」

それから雑役夫がシャベルを持ってきて、チョコの残骸を焼却炉に放りこんだ。

私はオフィスに戻ってサファイアを捜してみた。机も金庫もひっくりかえし、こりやマックリーの奴かな、と思いはじめた時、紅茶その他をしまっておく棚の中でサファイアを見つけた。私はそれを家に持って帰り、クリスマス・プレゼントとしてモリーに渡

した。なにを贈ったらいいのか、皆目わからなかったせいもあった。今までチョコレートを山のように贈ってきたから、彼女も嫌気がさしているだろうと思った。加えて、私はお菓子屋のねえちゃんを見に行くのもやめようと決心していた。歴史に繰り返されては困るのだ。

モリーは小包に見覚えがないようだった。私は彼女が小包を開けるさまを見たくなかった。窓際に行つて外を眺めていた。私は川のささやきから入り江の潮の模様を知ることができた。いまは干潮の最低点にあり、潮がちょうど戻りはじめたところだった。それで、あの岩場の突端の海草がゆつくりとなびく方向を変える光景を思い出していた。その時、モリーの声が聞こえた。

「この手紙を読んだ？」と彼女は言った。

「いや」と私。

彼女は近づいてきて、手紙を私に握らせた。私は窓の外を眺め続けていた。

「読んで」と彼女、「読まなきゃだめ、ウィルフレッド」

彼女が私の名前を発するのを聞いたのは初めてだった。それで我に帰った。手紙を見た。筆跡は見まちがいようがなかった。モリーの父親が失踪して、学校が閉鎖され、骨張った若者として私がオフィスに入ってから、領収書や指示書で見てきた筆跡ではないか？ 私は読みはじめた。

「このサファイアを受け取られる方に。」

ある男性の魂がわたしの手に委ねられました。今はあなたの手にうつされつつあります。あることを成し遂げるために、わたしはこの男性を生け贄にしました。もしわたしの業が正しく遂行されていれば、人類の重荷はささやかながら軽減されるでしょう。後続く者たちの道はそれほど険しくないはずです。しかし、それはこの男性を救うことにはなりません。

もしあなた自身が、女の性の背後にある大いなる霊的原理の女司祭となるならば、この男性を救うことができるでしょう。月について瞑想なさい。月はあなたの中の女性を目覚めさせ、力を貸すことでしょう。大いなる女神の祝福と助けがあらんことを」

「あなた、わかる？」とモリーが言った。

「部分的に」と私。

彼女は手紙を私から取り上げ、サファイアを片付けると、自分用の区画へ消えていった。残された私は、まだ窓の外を見つめていた。動揺はしていなかった。すねた気分でもなかった。私は人生をしくじったものと諦めていた。気掛かりなのはただモリーだけだった。彼女のことを気の毒でならなかった。私のほうは腐った輪ゴムのようなものだった。「春は、扱いを間違えれば、二度とやってこない」

その午後、私はモリーを車に乗せて、スターバーの小さな教会の賛美歌礼拝に連れていった。私たちの最初のクリスマスだったし、なにかしなければならなかった。デイックフォード教会に行って牧師に睨まれるというのは格別おもしろいものではなかった。

湿地帯を車で抜けていると、前から後ろから鐘の音が聞こえていた―デイックフォードの鐘は徐々に遠ざかり、スターバーの鐘が徐々に明瞭に聞こえてきた。ベル・ノール

は頂上付近に若干の霧を漂わせながら、私たちの左手に見えていた。水平線には霞みがかかっていた。

モリーが沈黙を破った―私は運転中は口をきかない。ついでに言えば、私はいつだって、それほどしゃべらない。

「デイツクフォードにとどまるかぎり、あなたはうまくいかないわ」と彼女が言った。

「離れるわけにもいかないんだ、モリー」と私。「あれが飯の種なんだから」

それから私たちは黙ったまま走り続けた。前方右側には、私たちと海の間には、州が建設中の新しい沿岸道路用の盛り土が生々しい地肌を見せていた。湿地帯に傷をつけ、古代の平安を掻き乱す様子に私は腹を立てていた。この無計画な建設計画はここからデイツクマウスまでをすべてつないでしまう予定となっていた。

私はトレスオーウェン夫妻を訪問し、彼らにクリスマススの七面鳥を贈った。予期せぬプレゼントに彼らは驚いていた。彼らはキジで代用するつもりだったという。毎年恒例となると考えてくれ、と私が言うと、トレスオーウェンは首を横に振った。

「来年はここにはいない予定なんです。まあ、うまくいけばの話ですがね」と彼は言った。この場所は余りにわびしすぎるというのである。おかみさんは商店街や映画館のそばに住みたいという。そこで親戚縁者も多い故郷トルーロに戻る決心をしたのであった。彼は休日が終わったらすぐに私に会って、農場を我が社の物件とするつもりだったという。これでモーガンとの最後の絆が切れたように思えたが、なぜかそれほど気にならなかった。このごろ、なにもかも気にならなくなっていった。あまり健全な傾向ではないように思えた。

夕闇の中、スターバーから戻る途中、モリーが私に話しかけてきた。

「デイツクマウスに支店を出したらどうかしら？　今のオフィスには、あなたとミスター・スコットが二人でなさるほどの仕事はないわ。デイツクマウスはこれからの場所よ」

「薄汚い穴みたいなものさ、デイツクマウスは」と私。「あそこは嫌いなんだ。アスファルトだらけの貸家だらけ、夏はピエロがわんさかいて、冬は風しか吹かないときてやがる」

「トレスオーウェン夫妻からあの農場を買って、あそこに住みましようよ。新しい道路が通れば、簡単にディックマウスまで通えるわ」

「ヒマラヤスギ屋敷に住みたくないのかい？」

「あたしはいつでもいいの。どこでも幸せよ。でも、あなたはあの農場にいたほうがずっと幸せになれると思う」

「どうしてわかる？」

「月に話をしていたの。そしたら、月が教えてくれたの」

モリーが月になにを話していたのか、月がどう答えたのか、私は知らない。どちらも打ち明けてくれなかったからだ。

私はモリーに恩義があった。また彼女に恩返ししてやれることはほとんどなかったから、彼女がなにか要求してくれば、なんでもかなえてやるつもりだった。しかし、農場の件にはかなり怖じけづいたと言わざるを得ない。きつとあらゆる記憶が甦るに違いないと思った。また、それはモルヒネを自由に使うベアードモアの手を離れて、モルヒネ

を使わないデイックマウスの医者の手落ちることを意味していた。しかし、私はなんとかそれも克服しようと考えた。これまで、考えてきたことなのだ。落ち着いてしまえば、それほどでもなかったと言っておこう。

そこで私はトレスオーウェン夫妻から農場を買い上げ、モリーが引越しの差配をした。その模様は、ミセス・マックリーを救護院に連れていった時のことを彷彿とさせた。モリーは新しいオフィスを構え、新しい事務員を雇い、広告を手配し、家具運搬業者をせきたてた。おまけにビンドリング老人を仕事に引きずり出すことさえ成功した。彼は息子を失って以来、人が変わってしまった。しかし、ちょうどモリーが私にしたように、職人頭が彼を引っ張ってきたのであった。最終的には、私に残された仕事は、デイクフオードから農場まで、モリーを横に乗せ、アイリスを後部に積み、車を走らせることだけだった。モリーはヒマラヤスギ屋敷の庭をほぼ半分掘りくりかえし、アイリスも一緒に持ってきたのである。もちろんこれは厳密に言えば違法行為であった。私はヒマラヤスギ屋敷をこともあろうにマックリーに売却していたからだ。彼は金持ちの未亡人と再婚していた（神よ、彼女に救いの手を）。しかし彼は私が豚のことを知らないのと同様、不動産のことなどにも知らない。それに、彼が私くらい人情の機微に通じ

ていたら、モリーが私の利益をはかりだした時、目を見張っておくくらいの知恵があったはずだ。

モリーはまったく正しかった。農場につくや、私は大いなる安堵感を得た、と言わざるを得ない。まるで肩から重い荷物を降ろしたような感じだったし、喘息もすぐに軽くなったのである。ディックフォードで暮らしていたころは、二週間と間を置かずに発作に襲われたものだった。また、私の抑制と欲求不満は心理的なごみとして私の周囲に堆積していたのであった。チベットに、世界中でもっとも不潔な町があるという話を聞いたことがある。誰もが窓から路上にごみを放り出すので、糞の山が屋根より高くたまっているという。ディックフォードにいた時の私も似たようなものだったのだ。農夫が畑の鶏小屋を移動させるのを見たことがある。そうすると鶏たちは元氣よく排泄を始めるのだ。モリーは実に賢明にも私の小屋を移動させたのであった。

実際、農場はなかなか快適だった。ベル・ヘッドから伸びる二つの尾根に挟まれた農場は、おかげで風も当たらず、しかも南向きで陽光はふんだんにあった。トレスオーウエンが銀色のポプラを植えていたから、すぐに夏の日差しよけになると思われた。また促成種のイトスギの生け垣が庭の端を仕切って、冬の風を防いでいた。その日は日差し

の中に力感がこもる春の一日であり、すべての効果があいまって、かなり快適だった。私はモリーに荷解きを止めさせ、葡萄棚までの散歩に誘った。あの小さな黒い葡萄が冬の間どうしていたか、評判通りの耐寒性を示したのか、知りたかったのだ。かわいそうに、モリーは痛ましくらい喜んでいて。それほど喜ぶこともなかったのだが、彼女相手にこの種のことをしたことはなかったから、ずいぶんと意味があったのだろう。

小さな葡萄は敷藁の中に包まれていて、芽すら見えなかったから、育っているのかどうか、わからなかった。しかし灰色の芳香性の薬草は夏も冬も変わっていないかった。そこで私たちはそれを摘んで、葉を一枚一枚手の中で潰してみた。その香りは甘く、レモンのようだった。それから私たちは崖下の石に腰掛けた。モリーにその昔英国の気候が今よりずっと温暖だったころ、ここで葡萄が育てられた話を聞かせてやった。また、この種の岩棚と狼よけに使われた禿山の岩棚の見分け方を教えてやった。彼女はこの種の話に氣にいった。彼女が特に考古学に興味を持っていたとは思っていないが、彼女は私に元気にしゃべるのが好きだったのだ。実際、私はめったにこういうことをしてやったことがなかった。

それから、どう魔がさしたか知らないが、私は葡萄と灰色の芳香性薬草と一緒に栽培された理由を話した。またどういう風に薬草がワインに混合されたかも話した。彼女は自分も試してみたいと言い出し、トレスのおかみさんに製法を手紙で問い合わせてくれないか、と頼んできた。いいよと私は答えた。内心では、発酵酒を控えるというミセス・マックリーとの約束が実に手近に役に立つことになったと思っていた。

私は話を続けた―古代には、この地方はどういう風景であったか、またもとのドイツ川の旧川筋の跡はきらきら光る止水をたどればわかる、と。すると彼女はモーガンと同じく、曲がりくねる水路の中にあるしつかりした直線の旧埠頭跡に関して意見を述べた。そこでベル・ノールの洞窟や司祭に生け贄、それに古代祭儀に関してすべて教えてやった。彼女はまるで二歳児のように聴き入っていた。私はまったく戸惑っていなかった。話が行き着く先を思えば、これはしらふで話したくない話題の最たるものだったが、私は話にのめりこんでしまっていて、モーガンと一緒にいたころの自分に戻っていた。以前の熱意も戻ってきた。私はモリーに言った―モーガンが残した部屋一杯の本と書類があるから、落ち着き次第、すぐに取り掛かるう、整理がつけば、きつと興味津々のものが山ほどみつかるだろう、と。私がベル・ノールの洞窟を幻視に見て、モーガンが水

晶球で見た話もした。そして洞窟があると思われるベル・ノールの窪地を教えてやると、モリーはすごく興奮して、買収して発掘できないものかと言いだした。それは出来ない、眠った犬は起こさないほうがいい、と私は答えた。あの洞窟は十分堪能していた。そこで彼女に私が洞窟で若死にするはめになったいきさつを教えてやった。

それから、まずいことを言ったかな、と私は思ったが、寛大なモリーは話をその方面で受け取ってはいないようだった。そこで私は、海の女司祭が私にとって一女性ではなく、全女性であったことを説明した。つまり、人間が女神として擬人化した女性原理の非人格的代表の一種、と言ったのである。

モリーが妙な顔付きで私を見た。

「それはあの人を手紙に書いていたことだわ。あたしは自分をそういうふうに変えなければいけないって―女性原理の非人格的代表と」

「彼女はそう思っていたよ」と私は一生懸命考えながら言った。

その時下の農家から昼飯の鐘の音が響いてきた。そこで私たちが降りていこうとする
と、モリーが急斜面で足をすべらせた。私は腕をつかんで彼女を支えた。それから二人
で滑りおりていった。

「あれまあ、海風はマクスウエル旦那には良くねえだよ！」と女中見習いが私たちの
帰宅を見てきいきい声で喚いた。

「良いべよ！」と私もきいきい声で喚いた。

モリーが新居の最初の食事を取り仕切っている様子は、それはかわいらしいものだっ
たから、これほどシャイでなければ彼女にキスするべきだったのだろう。しかし私はな
んとか彼女の背中をさりげなくぽんと叩くのが精一杯であった。

その晩遅く、私はモーガンの書類の整理に取り掛かった。丸一年、トレスオーウエン
が使っていない戸棚に鍵をかけてしまわれていたものであり、私もこれまでどうしても
触れることができなかった書類だった。しかし、今では読みたくてしょうがなかった。
もはやそれは、取り返しがつかない損失を思い出させる悲しい記念物ではなく、友人か
らの便りに思えていたからだ。書類の中に、彼女が歌ってくれた歌の文句を記したもの

があった。知らない歌の文句もあった。これをモリーに見せ、モーガンが消えてしまう前に行った儀式の話聞かせてやった。またモーガンの歌のメロディーを、思い出せるかぎり歌って聞かせもした。それは奇妙な音程の代物で、四分の一音上がったり下がったりする、非常に音域の限られたものであった。単調な数小節を繰り返し繰り返し、異なる音程で聞かせるのだから、一発で参ってしまう！ キプリングが「生きた神経に科学的生体実験を加える」話を書いているが、それがまさにこれだった！ これはマントラ―西洋のマントラだった。

私たちはほぼ午前一時まで夜更かししながら話しあった。私はモリーに古代アトランティスの話を聞かせ、彼の地での女司祭の訓練法や、当人たちの意向など関係なく、適性によって交合相手を決められていた件を教えた。これはまたモーガンのこの方面に関する態度でもあった。彼女は人格を重視せず、力を重視していたのであった。私はモリーに話した。自分はそこまでいかなかったし、いくべきでもないと思っていたが、力が人格と同じくらいに重要だと理解することはできた、と。次の件をモリーに話さないでおくくらいの戦術は持ち合わせていたが、私はお菓子屋の安手のアフロディテが十分に力の伝達者であると認識していた。彼女の人格はまったく愛すべき代物ではないにもか

かわらずである。一方モリーは実に愛すべき人格の持ち主であるが、力の伝達者ではないのだ。第二世代があやうくお菓子屋の棚に残されるところだったというのは妙な巡り合わせだ、と私は思った。

そのことを口にしたのはモリー自身だった。

「あたしはあまりに育ちが良すぎたみたい」と彼女は言った。「彼女の手紙を読むまで、男の人にしてあげられることは、愛して、世話することだけと思っていた。

「育ちが良すぎるっていうのは」彼女は嘆息しながら付け加えた、「大変な欠点だわ」
それで私は糸口がつかめた。お菓子屋のねえちゃんは、どう見たって育ちが悪いに決まっていたが、魅力を届ける方法は知っていたのだ。一方、モリーと母親のほうは知らなかった。特に母親のほうがモリー以上に知らなかったといえるだろう。彼女は夫をつかまえておけなかったのだから。ゆえに母親は娘に商売のこつを伝授することができず、娘はハヴロック・エリスのいう《エロスの文盲》になってしまった。こういった物事は本能によってもたらされることもある。子猫がネズミを追っ掛けるようなものであるし、実際、それでなんとかなってる部分も多いだろう。しかし、子供を常時その方面から顔

をそむけるように教育すれば、手の施しようのない慢性純潔症状に落とすこともできるだろう。そして恩師コーク先生のような人々はお菓子屋に駆け込んでしまし、我々はそれをいけないことだとするのである。しかし、つまるところ彼女同様、彼も彼なりに問題を抱えていたのである。真実必要とされるものは、オールド・ミス向けの講座としてお色気女優メイ・ウエストの映画鑑賞でも組むことだったろうが、それでは実際の解決になりそうになかった。

私があの手映画を支持しないことは神のみぞ知る。台所に座って三文小説でも読んだほうがましである。しかしあの映画が女性の不道德の水準引き上げに功績大であったことは確かだ。

モリーにも同じことが適用されるのではないか、と思うようになった。いつかモーガンがあからさまに言った―情緒的主導権は女性が握るべきものであるが、慎ましい女性にはなんら情緒的主導権を持ち合わせていない人種である。もちろん、女性にとって慎ましさは、男の注意を引きたくない時には防御壁となるだろうが、永久に慎ましい女性は結婚レースに於ける出走棄権馬である。たしかジョージ・ロービーの台詞だったと思うが、暗くなつたハイド・パークに放置して飲みに行けて、戻ってきたら、まだその場で

待っているような女がいいと言っていた。そんな女性が誰の役に立つというのだろうか？
かわいそうに、彼女自身にとつても役に立たないのではないか？考えてみれば、コックも雇えるし、家政婦も置ける、看護婦が必要ななら生協に電話すればよい。なぜ結婚するのだろうか？

こういったところをモリーにどう告げてよいものやら、まったくわからなかったが、告げる必要があった。しかし彼女も似たようなことを考えていたに違いない。彼女のほうから言ってきたからだ――

「ウイルフレッド、月を瞑想したら、あたしにどういう効果が現れるのかしら？」

知らない、と答えた。自分でやってみたほうがいい、ぼくに手伝えることはなんでもしよう、と私は言った。

私は今や古典教育の価値を認識しはじめた。恩師コークは、自分は文学士であったにもかかわらず、私たち学生に徹底した現代的教育課程を施していた。これはディックフォードでは大変な利点と考えられていた。彼の学校に送り込まれた若者は皆、さして教養のいらぬ身過ぎ世過ぎで生計を立てるものとされてきたからだ。私はギボンの注釈

の大意―啓蒙的だが、精神高揚的ではない―をつかめる程度のラテン語しか身につかなかった。一方、古典を原典で読むことができれば、ディックフォードのような場所で倫理としてまかりとおっている代物に対して、実に有効な訂正的視点を得られることになる。これに関して、私はいつも鉄道労組が打つ《順法ストライキ》を思い出す。つまりあらゆる「安全第一」的規則に文字どおり従うことで、すべての列車の進行を遅らせ、どうかした列車はまったく動かなくなるという奴だ。破ることで初めて意味が出て来る規則の類もある。

そこで私はモリーにローブ古典文庫を与えて、好きにさせておいた。すると彼女は続く数週間で驚くべき変身を遂げはじめたのであった。

それはかなり緊張を強いられる数週間であった。モリーのディックマウスに不動産事務所を開設するアイデアはきわめて正しかったからだ。私は彼女にさける時間もエネルギーもほとんど持てなかったが、私たちは以前にまして幸福だった。私は彼女にモーガンの書類や本を自由にひっくりかえさせていた。彼女に全幅の信頼を置いていたからである。

なにを見つけたのか、モリーはしゃべろうとしなかったし、実のところ、私も聞きもしなかった。私はデイツクマウス市議会を説得・籠絡・脅迫・威嚇して、安手の小屋があらゆる方向にスプロール現象を起こす前に都市整備計画条例を成立させておくよう、夢中で運動していたからだ。すると市議会側は、市議会に立候補するよう私を丸め込むことで形勢逆転を図り、ふと気がつくとき、私は市の参事会員になっていた！デイツクフオードの嫌われ者の私が、である！ 生まれてこのかた、これほど必死で働いたことはなかった。私は忙しすぎて喘息につきあう暇もなかった。喘息は喘息で自活してもらったことになった。

物事は私にとって上向いてきた。私は異端児ではなく、囑望される人間と見なされるようになった。あらゆる別荘や下宿屋が増築や管理に関して指南役を求めているようであり、どうもそれが私だと決めているようだった。私はある時、勢いにまかせてのことだろうとは思うが、社会主義者の利益を代表して国会に立候補しろとまで言われたものだ。どうして私に社会主義的傾向があると連中が思ったのか、今でもわからない。ただ私はよく牧師の揚げ足をとっていたし、田舎でこれをやる者は、無政府主義的傾向があると見なされるからだろう。デイツクフオードで私が労働党の党員にされていたのもお

そらくこの理由だ。また、私が悪人と目されている輩全員と性懲りもなく“よう、久しぶり”的な関係にあったからだと思われる。実際のところ、私にはいかなる傾向もないのであった。

生まれて初めて好評に包まれてみて、これはどえらい差だとわかった。周囲すべてが敵意と反対の雰囲気に含まれていると、どれほど人生にブレーキがかかるものか、離れて初めて理解できた。私は他人の意見を無視するようになるまで、多少なりとも薄馬鹿であると見なされてきた。うちの家族にその責任がある。連中は、私が大人になるとは、なれるとすら思ったことがなかったのである。私の手をしっかり握っておかないと、すぐにそこらに座り込んでおもらしをすると確信していたのであった。誰も自分を信用していないという事実があるにもかかわらず、どこかに自信を生かし続けておけたのだから、私にもかなりタフな面があったに違いないと思う。もし町全体が人の回りに車座になり、しつこく「お前は日に日に悪くなっていく」と言い続けたら、それが彼に影響を与えないはずはない。ともかく、ナンシーではこうやってドイツ軍が勝利を収めた。人々は心理治療になにが可能か認識しているが、人を心理的に退行させることでなにが可能

か認識していない。私に言わせれば、これは井戸に毒を投げ入れることに匹敵するものである。

ともかく、私にとっては物事は大いに上向きだった。喘息の具合もよく、従って機嫌もよく、ゆえにモリーにとつてもすべてが容易に運んでいた。近ごろでは、彼女はラジオを聞く暇もなかった。私が帰宅するや、彼女は私の話を聞かなければならなかったからだ。

モーガンを失った時、私を簡単に打ちのめした恐ろしいまでの喪失感、欲求不満、空虚感を、どうやら私は乗り越えた。それでもまだ私は、自分の人生で彼女が象徴していた物事がなつかしかった。モリーと私の関係はきわめてちゃんとしたものだったが、モーガンと私のそれのように燃え上がることはなかった。私はよくモリーに当時のことを話した。長く続かなかったにしても、経験するだけの値打ちはあった、と。私にとっては驚異だったが、モリーはちっともモーガンに嫉妬していなかった。それどころか、学ぶ点が多いから、もっと話すよう私を奨励した。一旦話しはじめたら、奨励など私には必要なかった。モリーがすべてを真面目に受け取っているのはわかったが、それからな

にを得ようとしているのかは、私にはわからなかった。

第三十章

やがて夏となった。モリーと私は夏至の日に早起きをして、ベル・ヘッドの頂上まで、本当にベル・ノールから昇る太陽が石門越しに見えるのか、確かめにいった。それが間違はなく本当だとわかった。それに、光軸をそのまま延長すれば、岬の突端にまで至るのである。そこで私は初めてモリーをあゝの突端まで連れていき、海焚火を燃やす岩のテーブルも見せてやった。それは丘陵から太陽が顔を覗かせ、陽光を水平に広げる時、浅い海のわずか下に見えていた。また私たちはヒマラヤスギと杜松で一杯の二基の砲郭を発見した。そこで、これを荷車で農場まで持ちかえって、燃やしてみようと言った。モリーは、もうこれはナショナル・トラストの所有物ではないのかと聞いた。そうかもしれないが、知らぬが仏、と私は答えた。精神的な意味合いでは、それは私のものだったし、いまさら法律的にあれこれして金と時間を費やす気はなかった。もううんざりだったからだ。それから私たちは帰宅して朝食をとり、私はオフィスに出向いた。すると市の参事会員の役回りとして、私はおぞましいカーニバル・パレードに引きずりだされるわ、首の回りにキャンデーの首飾りを幾つもかけられるわ、もうむちゃくちゃだった。

首飾りをかけてくれた美女はこれまたお菓子屋のケバケバねえちゃんの類いであったが、私はそれ以上の深入りを避け、脇道に入って襟を緩め、紙吹雪を払い落としした。明らかに私はディックフォード時代からはるばる遠くに来てしまっていた。

それから、馬鹿騒ぎにたいがい飽き飽きし、このさなかでは取引もあつたものではなかったから、私はオフィスを閉めて、ブリストルまで車を飛ばした。この町には落ち着いた雰囲気が霧のように常に立ち込めている。私は例のチベット人に白檀をさらに託送するよう注文した。どこの出身か尋ねてみたが、彼は微笑するだけだった。あの高原から来たのか、と言ってみると、彼は目を輝かせ、頷いた。それから農場に戻ると、モリーは白檀に震えるほどの好奇心を抱いた。彼女はてきぱきとした女性であり、ある農夫を雇って、すでに他の材料も運送させていた。そこで夕方の涼気が海から漂いはじめると、私たちは小さな《アズラエルの炎》を居間で焚き、一緒に座って眺めていた。するとモリーがこの数週間、私が忙しくてやらなかった間、なにをしていたのか教えてくれた。本当のところ、私は自分のことで手一杯だったのだ。

彼女はモーガンが教えた通り、月と交信していたのであり、多くのことを得たが、私同様、それは実践に役立てるにはあまりに抽象的すぎたという。そこで彼女に魔術的像

の術を教えてやり、それにより事物を把握することが可能であると話した。こうして得た事物は実体を備えていないかもしれないが、十分に役に立つと私が言うと、彼女はそれは幻覚ではないかと聞き返してきた。そうかもしれないし、たぶんそうだろう、だが、役に立つ以上、問題はないと返答した。それから私たちは『月の司祭』のことを話し合った。私は彼のことをモーガンやトレスオーウェン夫妻と同じように実在の人物の如くしゃべっていることに気がついた。彼もまた幻覚かもしれないが、十二分に役に立ってくれているのだ。私たちは彼を語るうちにその存在を身近に感じるようになった。マハトマがマダム・ブラヴァツキーにしたように、彼も私たちの鼻先に手紙を落とすのかしら、とモリーが尋ねてきた。そんなことはしてほしくないな、と私は答えた。私はすでに今日一日でたっぷりいろいろなもの投げつけられたから。しかし、その言葉から察するに、モリーはモーガンの本を読んで有効に時間を過ごしていたようだった。

それからモーガンの失踪以来初めて、私は鉛筆を手に取り、絵を描きはじめた。モリーののために、海の壁画に描いた『月の司祭』を思い出せるかぎり再現してみようとした。深みの海の宮殿の玉座に腰掛ける彼の姿だった。白黒の絵ではあったが、以前と同じ生気が瞳に宿ってきた。だが、どういうわけか、空のように逆巻く波を描くことができず、

かわりに彼の両端にソロモン王の神殿玄関にある均衡の大柱二基を描いた。黒と銀の柱だった―その頂にはそれぞれ地上界の天球と星界の天球が乗っていた。

《アズラエルの炎》は暖炉内で火勢を失っていき、モーガン・ル・フェイの時と同じく、割れて火焰の洞窟を形成した。杜松の薄灰がその中に輝いていた。香煙が室内に漂うにつれ、私は要塞のことを思った。知らず知らずのうちに、突端と同様、この岩場でも絶えず聞こえる波の音に耳を傾けていた。しかし、開放された窓から、かつて聞いたことのない海の声が聞こえてきた―農場がある半島の狭い根幹部に潮が押し寄せ、る時に生じる、玉砂利を打つ軽い波のささやきであった。

この場所は要塞とはまったく違っていたが、それでも独自の生命感を帯びつつあった。ここは突端に較べて、海よりも陸のほうが多い。それはモーガンよりもモリーのほうが多いのと同じだった。しかし、その陸は宇宙的な地であり、私は《大いなる女神》が月と海と陸をすべて司ることを思い出した。モリーはモーガンのように海の女司祭になることは絶対ないだろうが、彼女の中にもなにかしら原初の女性が目覚めつつあった。そして、私の欲求に答えはじめていた。

モリーは、その我が身を構わず、疲れを知らず、勇敢に惜しみなく与える点で、永遠の母であり、私の中にある永遠の子供が彼女を求めていた。これは一つのはじまりであったが、まだ不十分だった。それだけで終わっていたら、私は彼女に対して努力なしでは真心を貫くことができなかつたに違いない。しかし、それだけでは終わらなかつた。それがなんなのか、私たちにもはつきりとわからなかつたが、それが私たちに近づきつつあると感じていた。

だが、私たちと不可視の實在との間には、大いなる深淵が存在しているようだった。私たちがそれを渡らないかぎり、このままでは二人とも滅びてしまうような気がしていた。モリーも同じように感じていたと思う。彼女がこの種のことを話す際に見せる絶望の思いは、どこか水槽の中で飢えた魚がガラスに必死で頭をぶつけている様子を感じさせた。そして私たちは夕闇の中、焚火が下火になるにまかせて、座って話し合っていた。深淵を乗り越えるために、なにかが必要なのだが、それがわからなかつた。私たちは迫りくる闇の中に沈黙し、ただ炎を見ていた。

屋外では、海が玉砂利の間で動いていた。今夜は大潮だったのだ。大波の寄せては返すやさしい音が次第に近づいてきた。これほど近くに波の音を聞いたことはなかつた。

まるで庭の塀の真下に海がきたようだった。様子を見たほうがいいと思い、立ち上がりかけた時、私は水の中に鐘の音を聞いた。それで、私たちが耳にしているものはこの世の潮ではないと知った。

開け放たれた窓から一条の月光が差し込んできた。炎の明かりと月明かりのないまぜは実に不可思議なものであり、目を眩ませた。月光は炎を照らしだし、炎を灰に包まれたオパールのように見せた。巻きあがる煙とその影は炭火からはい出る生き物のようだった。私は中世の《火蜥蜴》の話を思いだした。

香木の薫りは私たちのもとに次々に漂ってきた。炎からかなりの煙が出ているように思えた。一方、室内に海の音が、貝殻の中の潮騒のように満ち溢れだした。なにか尋常でないことが起きようとしていた。モリーも私同様それがわかっていた。

その時、突如、私たちは月光が当たる場所で煙が形を取りはじめたのを見た。煙はもはや緩慢な渦を巻くことなく、ドレープのようにひだを作って宙空から下がるかのようだった。それが煙突の胸部の前方に立ち上がるのを見た。炎が煙を吹き上げているかのようだった。それから無形のやわらかい灰色の中から、頭と肩が出現するさまが見えた。

そして《月の司祭》が私たちの前に立っていた。幻視で見たままの、剃髪した頭と修道者特有の鷹のような容貌だった。瞳は黒く、輝いており、生き生きとしていた。月光と煙は無定型だったが、瞳は結晶したかの如く実体を備えていた。

それから彼は、要塞の儀式の時と同じように語りはじめた。それを心の耳で聞いたのか、心の目で見たのか、肉体の耳と目を用いてのことだったのか、今ではわからない。なによりも白日夢に近かったが、ダイヤモンドのように鮮やかな輪郭を有してもいた。

彼がモリーに語りかけているとわかった。私はただの傍観者であった。太古の昔、《大いなるイシス》が崇拝されていたころ、力動的だったのは女性であり、司祭が全権を握ったのは異教世界が墮落してからのことだったと思ひ出した。

こうして座ったまま、影から発せられる声に聴き入り、また耳を傾けるモリーを眺めていると、アトランティスの《処女の館》を考えさせられた。古代の司祭たちもきつとこのようにして若い娘たちに話をしていたのでろう。扉に囲まれた中庭の香木の下、水蓮の池のほとりに娘たちを集め、彼女たちがなにを期待されているか、それを行う方法と理由を、司祭たちが語って聞かせていたのだ。それから外套をまもって地下道をくぐ

り抜ける旅の話が明らかにされる。娘は眠る他の仲間を起こさぬようにそつと連れ出され、また戻される。どちらがより神聖な性の作法だろうか、と私はいぶかしんだ。つまり、これと、修道女の作法のどちらが、ということである。

若い女司祭に語りかける《月の司祭》の声がどんどん続いた。私もまた、《死者の舟》に乗って地下湖を旅していた時と同じ状態に退行しつつかつた。そこから帰還した時、モリーもモーガンのように全身黄金に輝いているのだろうかと思った。

司祭の律動的な語り口は私の内部になにか振動のようなものを生じさせていた。モリーはこれらすべてをどう受け取っているのだろうか――椅子に身を沈ませたまま、前に立つ影を凝視し、その言葉に夢中で聴き入っている彼女を見ると、不思議な気持ちになった。この領域は、どういう知識で判断するかによって、理解の度合いが決まってしまうからだ。

「されば《ハデスの女王》といえども《大母神》の娘なり。同様に《大いなる海》から愛を与える者、黄金のアフロデイトは生まれる。また女神は別の様式によるイシスなり。

「平衡は不活性に保たれたり、外なる空間が均衡を崩し、《すべての父》が空間の飢えを満たさんと注ぐまでは。これらの真実は神妙なり。男と女の生の鍵なり。《大いなる女神》を崇めぬ者には知れぬものなり。」

「黄金のアフロディテは処女または犠牲として来るものにあらず、《呼び覚ます者》にして《欲する者》として来り。女神は外なる空間に呼び掛ける。《すべての父》は求愛をはじめ。女神は《父》の中に欲望を呼び覚まし、かくて世界が造られる。見よ、女神は《呼び覚ます者》なり。黄金のアフロディテ、男の性を呼び覚ます者はいかに力強いものであることか！」

声はここで止んだ。私は酒場やお菓子屋に女神として君臨する黄金のアフロディテの戯化画のことを思っていた。また、《エメラルド・タブレット》の言葉「上の如く、下も」を思い出していた。創造と生殖が互いに反映しあう様子も思った。

また声はじまった。

「されどこれらすべては一つのものなり。すべての女神たちは一つの女神であり、我らはその女神をイシス、《すべての女性》と呼ぶ。その性質にあらゆる自然のものが見

いだされる。処女にして、さらに求める者。生命を与える者にして、死をもたらす者。女神は創造の元である。女神はあゝすべての父の欲望を呼び覚まし、《父》は女神のために創造をなすからである。動揺に賢者はすべての女性をイシスと呼ぶ。

「男をして、すべての女性の面に《大いなる女神》の貌を見さしめよ。あらゆる潮の干満に女神のあらゆる面を見せ、男の魂を答えさせよ。女神の呼び掛けに耳を傾けさせよ。

「おおイシスの娘よ、《女神》を崇めよ、女神の御名に於いて呼び覚ますよろこびの召喚をなせ。されば汝は《女神》の祝福を受け、生を十全に生きるであろう」

《月の司祭》はまるで太陽神殿に佇んでいるが如くモリーに語りかけていた。そして彼女は《月の女司祭》になるための試練に備える処女であった。

「さればこれがイシス崇拜の祭儀なり。女司祭をして崇拜者に《女神》の姿を顕現させよ。女司祭をして地下の王冠を戴かせよ。女司祭をして原初の海から栄光と黄金の姿で立ち上がらせよ。女神を愛する男に呼びかけ、来らしめよ。女神の御名に於いてこれらのことをなせ。されば女司祭は男に対して女神と同じ存在となろう。女神が女司祭を

通じて言葉を語るからである。内なる世界にあつては、女司祭は戴冠したペルセポネとして全能となるであろう。外なる世界にあつては、黄金のアフロディテとしてあらゆる栄光に包まれよう。かくして崇拜者の目に女司祭は《女神》として映るであろう。女司祭は崇拜者の信仰と献身によつて自らの内に《女神》を見いだすであろう。イシスの祭儀は生なればなり。祭儀として行われたものは生の内に現れるであろう。祭儀によつて《女神》は崇拜者のもとに降臨する。その力は崇拜者の中に入り、秘蹟の糧となるであろう」

《月の司祭》は沈黙し、佇んだままモリーを見ていた。モリーがどれほど理解できたか、彼女にどれほどのことので出来るのか、果たしてやる気があるのか、いぶかしんでいるかのようだった。彼女は椅子にもたれたまままどろみ、動くこともできず、ただ視線だけで《月の司祭》に答えていたからだ。

その時、月光が薄らぎ、浜風の方向が変わったので海が静寂に沈んだ。私たちは暗闇の中に取り残された。モリーと私の二人だけだった。《月の司祭》はすでに去っていた。暗闇の中で、私たちは長い間静かに座っていた。

その沈黙の中、私たちは無形の思いを通じ合わせ、多くのことを学んで我に帰った。そして私がかつてなかった気持ちでモリーを腕に抱き寄せた。すると私たちの間に突然温かい光のようなものが流れだした。それは私たちを単一のオーラで覆い包み、私たちの生命は混ざりあい、交換され、刺激しあい、互いのもとへ戻っていった。それはモーガンとの儀式で起きた力の交流を思わせた。私たちはただ暖炉の前で無言のまま佇んでいた。炎はすでに鈍い燠火になっていた。お互い、相手の顔を見ることができなかった。私たちはほとんど相手を意識していなかった。突然私は、モリーが私に惜しみなく力を流しこんでいることに気づいた。それはモーガンが不思議の知識によって慎重に呼び起こしたものと同じ力であった。それが今、なにも知らない無邪気なモリーを回路としているのである。彼女の魂の状態が、それに適していたからだ。モリーは今、女、恋をする女だった。

第三十一章

その夜の作業の結果として、はっきりとわかったものが二つあった―第一に、《月の司祭》が私たちのところへ靈的指導を目的として現れたことである。第二に、彼はかつてのアトランティスの《月の女司祭》のようにモリーを使う気である、ということだった。そして私は、ミセス・マックリーに育てられたモリーが、どうしたらそれになじめるのか、といぶかしんだ。ただ、彼女にも教育が効果を及ぼす以前に、原罪が相応に存在していたことを願うのみだった。

我々の因習というものは、男女間の両極性を型にはめすぎてしまい、もはや固定してしまつて、どう変換したらいいのかもわからない始末である。しかし、私たちの結婚に不足している部分はヴェイルの背後にあるのであつて、それは力動的な女性である。つまり、《大いなる女神》の御名に於いて到来し、自らの司祭性を意識し、自らの力を誇る女性である。慎ましい女性に欠けているのはこの自己信頼なのである。

こういつたことはきわめて重要なことである。しかも我々はこれを忘れて久しいし、モーガンと《月の司祭》がなそうとしているのも、これらを復活させることだと思う。しかしモーガン・ル・フェイ一人では不十分なのだ。彼女は我々の進化、というか時代の人間ではないからだ。彼女は別の場所から我々のもとに遣わされてきた存在なのだ。我々自身の時代の人間がそれをやらねばならないし、誰かが後に続く者たちのために突破口を開かねばならない。誰かが結婚というもののうちに、動物的機能でもなければ原罪の救済でもない、力を降臨させる神々しいまでに制定された秘蹟を発見しなければならぬ。そしてこの秘蹟に於いて、女性は祭儀の司祭としての古の座を占め、天から電光を呼び降ろさねばならない。つまり女性は秘儀伝授者であって、秘儀参入者ではないのだ。

この目的にあたって、男である私は、受け取ることを学ばなければならなかった。これは男には容易ではない。男は自分の不足を認めようとせず、自己を充足している者のみなし、常に与える側に回ろうとするからだ。しかし、男がそうではないことは神のみぞ知る！ この世の中で、すべての男に共通するものがあるとすれば、それは男が自己充足的存在ではないということだ。内的な関係にあっては、モリーと私は因習的役割を

逆転させなければならなかった。そうしないかぎり、私たちの結婚は燃え上がろうとしないだろう。彼女は《女神》の女司祭にならねばならず、私は彼女の手から秘蹟を受け、ひざまずく崇拜者にならねばならなかった。相手の女性を熱烈に愛するだけでなく、尊敬もしていれば、これは男にとつて容易にできる業である。そうすれば、男にとつて、結婚も自動的に秘蹟となるのである。

何事であれ、純粹に個人的にして個人的であることを目標としているものに、偉大という表現は与えられないからだ。女性の肉体を美と生命の女神崇拜のための祭壇となし、男性が自らを礼拝と供犠の内に注ぎ、愛のために自身を与え、伴侶の内に礼拝をともにする女司祭を認めるならば——崇拜者たちに呼び降ろされた《女神》が両手に薔薇を持つて神殿に入り、周囲には鳩が飛び交うであろう。我々が信仰を持たないから、我々は総ての女性の背後に《女神》を見ることがなく、ゆえに《女神》を呼び出すこともないのである。また女性は《大いなるイシス》の尊厳を認識していないゆえに、我々男性に与える贈り物に敬意を払っていないのである。

もし結婚が、教会が断言するように、秘蹟であるとすれば、それが内的かつ霊的な恩寵を外的かつ可視的に示すものであるから、秘蹟なのである。しかし、この恩寵は《十

字架にかけられた者」の恩寵ではなく、「大いなるイシス」、地の生命を与える者の恩寵なのである。それを原罪の救済などと呼んでは、冒瀆もいいところだ―それは喚起の祭儀であり、喚起されるものは「生」なのである。それは「美」を称えるための祭儀である。「美」は「叡知」と「力」とともに、いと高き「天」をささえる「三聖柱」を形成するものだ。霊の神秘主義のみならず、「自然」と四大の力の神秘主義も存在するからだ。しかもそれらは二つのものではなく、一つのものの二局面である。「神」は「自然」の中に自らを顕現し、「自然」は「神」の自己表現であるのだ。自然のものを否定する時、我々は神の賜物も否定していることになる。神の賜物は我々のために神が遣わされたものであり、それ自体神の栄光なのである。神の賜物たる生命を次代に託す創造の営みの尊厳の内ほど、神を崇拜するよりよき道があるうか？動物の機能や罪の救済とするよりも、魂のすべての美の喚起と愛の表現とするほうが、ずっと聖なるものではないか？こういったことを口に出すのは不穏当かもしれないが、口に出す必要があることなのだ。

日に日に月の力が作用を及ぼすにつれ、モリーが変わっていく様子を私は眺めていた。小柄で、物静かで、誠実かつ真心ある、とても優しく、しかし性的魅力がまったくない

モリーが、モーガンの小型版になっていった。同じような生命力と磁気を持ち、同じようなしなやかさと鈴を振るような声を備えるようになっていった。どうやら、こういった特徴を月の力は女性にもたらすようだった。

また私は、モリーの中に月の潮の変化を見た。海の潮のように、満ち、引き、二度と同じであることがない。そしてなぜ女司祭が社を任され、礼拝の時を決めて崇拝者を召集させる権利を有しているのかがわかった。月の潮位を知るものは女司祭だけだからだ。男性の潮は太陽の潮であり、季節ごとに変化するだけであり、文明化した環境ではその変化は無視できるくらいごくわずかなのだ。

このころ、農場には私たちは二人きりではなかった。三人いたと聞いていい。私たちは常に、別の天球から到来した者が、行き来しているのを感じていたからだ。また、夕暮れ、月光が焚火の煙にあたる時、私たちは影のような姿が形成されるのを見た、いや、見たと思った。私たちは想像力を用いて影の中に姿を構築していた。そして私たちの目には、それが生きてしゃべるように思えた。私たちは幻想を想像していたのではなく、実在の影を想像していたのであり、その実在は降臨して、影に魂を与えていた。私が思うに、このようにして神々は崇拝者の前にいつも顕現してきたのであろう。

そして夜になるたび、《月の司祭》は信仰と幻想によって呼び降ろされ、私たちのもとに現れた。ちょうど、年老いた貧乏な女性だったモーガン・ル・フェイのもとに現れ、不思議な生と生命力に変わるパンとワインを与えた時のように。これが《月の司祭》の目指した業だったのだ。それはまた、彼が海王たちの船に乗り、海の島々にたどりついたはるか昔、失われたアトランティスから持ち出していた秘密―生命のワイン即ち月のワイン、つまりソーマ酒による生殖と再生の秘密であった。

彼は古代アトランティスやその消失した術、邪悪に堕したために、地の粛清をはかるべく大災害によって破壊された知識のことを教えてくれた。彼がその災厄を事前に予知し、書物を携え海の島々に渡った様子も教えてもらった。これが《聖杯》伝説の原型なのだという。慣習通り、より古い伝統にはキリスト教の衣装が与えられているのである。

しかし、人々の心は再び邪悪になり、アトランティスの悲劇を繰り返させないために、知識は人の手から回収された。しかし今、道さえ見つければ、知識は再び人の手に到来するかもしれないのだ。そして彼はその道の一部モーガンを通して発見した。そして作業を始め、それを出来るかぎり推し進めようとしてきたという。

しかし、モーガンは私も知る通り、不思議な存在であった。高度の達人が皆そうであるように、心の中に男性と女性を持つていた。そのため彼女は自分を人の交わりに屈させることができなかった。彼女はサルヴァツシュの山から《聖杯》を取ってきて、海岸のそばまで運びはした。しかし永遠に海の女司祭である彼女は、人の道を歩むことはなく、小潮の一番引いた時に水際まで進み、《聖杯》を掲げたまま待つていた。ついに彼女の呼び声は聞き入れられた。ある者が降りてきたので、彼女は彼の手に《聖杯》を置き、再び海に戻ったのであった。本土を訪れる際はいつでも、モーガンが《大いなる女神》のように常に顔を覆い隠していたことを私は思い出した。浜から優に一マイルは離れた、海の中にあるに等しい半島の丘陵まで来ないと、彼女は顔をあらわにしなかった。

毎晩、《アズラエルの炎》から煙が立ちのぼる時、私たちはうつろう影の中に《月の司祭》の姿を構築し、ついに彼は、私たちが互いにとつてそうであるように、実在となった。彼の姿が夢と同じ物質で織られていることはわかつていたが、その姿からは精神と精神の触れ合いが感じられた。あれを経験した者なら、自分が幻覚を見ているとは思わないだろう。

さて《月の司祭》と私たちの精神の触れ合いが、すべてを可能とした。彼なくしては、私たちは何一つ手の届く範囲に引き寄せられなかっただろう。彼は私たちの出発が可能となるよう、最初の一押しをしてくれた。私はそれを永遠に感謝するだろう。またこの件に関しては、懐疑や不信などもとせず、常に証言をする気である。マダム・ブラヴァツキーは《師》を語る。彼女の言葉には真実の響きがある。もつとも、人々の鼻先に降った手紙には真実の響きがないし、おそらく衆愚の群れの中でも特に愚なる者たちに感銘を与える目的で行われたものだろう。モリーも私も、そんな現象を経験することはなかったが、精神と精神の触れ合いや力の存在は感知できた。結局、テレパシーが事実であり、死後生存も事実であるとすれば、死者がテレパシーを送ってきていけないわけがない。手紙落としが大いに疑わしいとしても、である。私としては、どんな客観的証拠よりも、精神の触れ合いやその途方もない刺激的影響のほうがずっと望ましい。

しかし私たちが深淵を渡れないのと同様、《月の司祭》も深淵を渡って私たちに会いにくることができなかった。どこか空の狭間の中間地点で落ち合うための工夫を見つめる必要があったのだ。その工夫が魔術的像であり、これによって私たちは内的な目で内的な王国を視覚化し、彼はそこに精神の力で生命を投射したのである。それで私たちは

誰もいないところで精神の触れ合いを得て、誰もしゃべっていない場所で言葉を聞いたのだ。それは幻想の翼に乗って深淵を飛び越えてきたからである。古代の《密儀》の語る通り、幻想は櫃を運ぶロバなのだ。

さて、実に奇妙なことがある。《月の司祭》を立体鏡の映像のように見えるまで自在に視覚化できる私は、彼のことをなにか他の実在から投影された影のように感じていた。一方、彼をまったく視覚化できないモリーは、彼の実在やその場にいることを完璧に確信していて、まるで電話でしゃべっているかのように彼と内的に交信できるようだった。彼は私にいろいろと教えてくれた。アトランティスや古代ブリテン島の様子はすべて彼から学んだものだ。しかし彼は、モリーに対しては、教えることよりも、変身させることに主眼を置いていたようだ。私は彼女が変身していくさまを目の当たりにした。ついには《月の司祭》は私よりも彼女のように属している風にさえなった。彼女を彼に紹介したのは私だというのに。

それからある日、モリーが奇妙なことを言い出した。《月の司祭》以外にも誰かいるというのだ。私たちが《月の司祭》のことを始終考えることにより、彼を身近なものとしたように、今度は彼が女神を視覚化することで、女神を自分に身近なものにしようとする。

試みているという。しかもその女神はすべての女性なるものが集まる《大いなるイシス》であるという。それで私は一步退き、モリーを一人にして、見守ることにした。今度は彼女の番だからだ。

《月の司祭》に信頼を置いていたように、彼女は《大いなるイシス》にも信頼を置くようになった。もつとも、モリーは《月の司祭》の心理を理解していなかったし、女神の形而上学も理解していなかったのだ。ともあれこの信頼が女神を實在のものとして、女神を引き寄せたのである。これは私の啓蒙的神秘主義には到底できないわざであった。

モリーは、ともかく彼女自身の目で見るところ、ちよつとしたものになっていた。その結果、彼女は私にとつてもちよつとしたものになった。彼女は自分が《大いなるイシス》の女司祭であると考えるのが好きだった。すると私も彼女を《大いなるイシス》の女司祭であると考えようになっていた。彼女の気持ちに思った以上の影響を及ぼしていたからだ。そして私はモーガンが語った言葉を思い出した。私が彼女を女司祭だと思ふ気持ちだが、彼女を女司祭にするのだ。それは置いておくとしても、現状はただの信念以上のものだった。モリーは女司祭として機能しはじめ、力をもたらしはじめたからだ！

日が経ち、私の反応を知るにつれ、彼女はますます自信に満ち溢れるようになった。また彼女は女司祭として女神を召喚する権利が自分にあると感じはじめ、ついには敢えてそれをやってみた。

その夜、海霧が周囲を覆い包み、塩水湿地帯と潮水を別つ半島の根幹部も、そこに位置する農場も、すべて霧に閉ざされていた。ベル・ノールのぼやけたような巨体を除けば、陸地はすべて見えなくなり、高い海丘も失われたアトランティスのように消え失せていた。わずかに陸地を思い出させるものは、スターバーの灯台船がものうげに放つ二連霧笛がくぼんだ岩壁に反響する際に生じるうつろな残響くらいであった。私たちは完全に陸から切り離されていた。私たちに残された海は、一陣の風が風向きを変える時に霧の壁の中に開ける、長い海の道だけだった。月はその道を照らし出していた。もう空低く、月の入りに近かったからだ。こうして開ける海の道を眺めるのは妙な気分のものであった。水面はすべて月明かりで銀色に輝き、霧は幻影のフィヨルドの断崖のように、両端に壁となって立ち並んでいる。もともと古き神々が降り下るのはこんな海の小径なのだろう。月から下り、月の背後にあるものから下り来る―それは地球も月も幽明とし

てまだ濃密な物質となっておらず、まだ未分化であつたころの太古の時空から下るのであつた。

潮は満ちつつあつた。私はモリーが満ち潮とともにいつも目覚めることに気がついていた。モーガンとは違つていた。モーガンは潮が一番引いた時にもっとも力強くなるのであつた。しかし、モーガンは海の女司祭であり、モリーは穀物と炉辺と中庭の女司祭である。後者もまた「大いなる女神」の別の局面であり、彼女たちは両者とも異なつた方法で同じ女神に仕えていたのであつた。

潮が満ちるにつれ、モリーはそわそわしはじめた。しよつちゆう窓から霧の奥を覗きこみ、やがて窓を開け、室内に霧を入れた。寒いと私が抗議すると、彼女は玄関に出て、私に迷惑をかけないよう後ろ手に扉を閉めた。

モリーがあんまり長いこと外にいたので心配になり、彼女を追つて私も外に出た。彼女は玄関にも、狭い前庭にもいなかった。庭の仕切りの塀の向こうは広大な湿地帯である。私は突然狼狽した。モーガン同様、モリーも海の神々の呼び声に応えてしまったのでは、と思つたのだ。私は門から飛び出し、霧を突つ切つて浜辺まで駆け降りた。反狂

乱で彼女の名前を叫んでいた。それから霧の中から彼女の応答が聞こえてきた。その時の安堵感ときたら大変なもので、しかもなにかとても嬉しいことを自分に教えてくれた。

彼女を見つけた場所は灰色の薄明かりに照らし出された浜の波打ち際だった。彼女は小さな暖かい手で私の手を握った。その感触が嬉しかった。彼女の肩に腕を回した。そして家まで一緒に歩いて帰り、彼女を確保していたかった。私はこれ以上海の神々に機会を与えたくはなかったのだ。モーガンはあらゆる意味に於いて私のものではなかった。海の神々が彼女を呼んだ時にも、抗議する権利もなく、ただ耐えるしかなかった。しかしモリーは私のものであり、それは間違いない。海の神々であれ誰であれ、ふざけた真似をさせはしない。モリーのためならいつでも戦う。必要ならいと高き天まで敵に回してもいい、とすら思った。これは私にとって大変な驚きだった。お菓子屋のねえちゃん私が及ぼしていた支配力を認識した時と同じくらいの驚きだった。私とて、こういった物事を納得しているふりはしない。実に奇妙なものである。

しかしモリーはなにも感じていなかった。彼女は私をしっかりと押さえて、喘息などお構いなしに波打ち際にとどまらせた。彼女は私の一時的健康などよりもずっと巨大なことが起きようとしていると直感していたのだ。そしてモーガンと同じく、彼女も心を鬼

にすることができた。潮の最高到達点を示す乾いた海草の列の上に、モリーが小さな《ア
ズラエルの炎》の準備をしていたことに私は気づいた。それは伝承通り、ピラミッド型
をしていて、潮が満ちて点火の時期を待っていた。また彼女も淡いドレープに装ってい
ることがわかった。そしてモーガンのサファイアが胸元と手首に輝いていた。モリーは
物事を適切に運んでいた。

彼女にとってそれは現実味があつたから、私にとっても現実味のあるものとなり、そ
の情感すら伝染してきた。私は喘息も忘れ、起きようとしていることに心を奪われてい
た。やがて到来する波がゆつくりと砂の上を這うように近づき、波の舌先にある泡の線
が満潮とともに浜を上がってきた。背後には潮に押されるゆつたりとした大波が霧の中
にうごめいている。まるで大気の濃度のために自らの重量に押し潰されたようなうねり
だった。

ほどなく、最初の薄く広がる波が白く砕けながら海草の端を駆け上がった。そしてモ
リーはマツチで彼女自身の《アズラエルの炎》に火を入れた。見る見るうちに火が回り、
丸一年要塞で乾燥した樹脂材が、またたくまに火炎のピラミッドと化した。海草も一緒
に燃え、そのヨウ素の臭気はすべての海浜の精髓をこめたもののように思われた。そし

て私はイシュタルの港まで船を引っ張ってきていた船乗りたち―黄金の耳飾りと巻き髭をした遠洋を航海する船乗りたちを思った。

その時、霧につきものの一陣の冷たい風が、月にまっすぐ続く海の道を開いた。その中を黒い影の海がゆつくりと近づいてくるのが見えた。しかし見る間に海は月の呼び声を感じ取り、水面はまたたく銀色のさざ波となった。潮の変わり目が波のリズムを乱したのだ。私たちの目の前で、陸上深く上がっていた水が、再び海の大いなる深みに戻っていった。波はモリーの焚火に敬意を表し、去り際に焚火に接吻してしゅっと言わせ、ゆつくりと沈み戻りつ、足跡がわりに濡れた砂と新鮮な海草の小径を残していった。

モリーは月の角の形に両腕を掲げ、モーガンがしていたように《大いなる女神》を召喚した。月は西空に沈みかかっていた。モリーの足元には《アズラエルの炎》が赤く燃えていた。その向こうには沈んだアトランテイスに向かう銀色の道が海の彼方まで続いていた。彼女の召喚に応えて、過去の神々とその司祭たちや崇拜者たちがやってきたように思えた。彼女が古い祭儀を再び目覚めさせようとしていたからだ。彼女に呼ばれて、大西洋の深みから、彼らの一軍団が旗をなびかせ海を越え、長い行列を組んでやってくるのを私は見ることができた。その昔、聖なる山の頂の神殿に続く曲がりくねった参道

を上ってきた時と同様に、彼らがやってくるのを見た。正統な流れを汲む女司祭が彼らを礼拝に呼び出したからである。

彼らは私たちの回りを通過し、二手に別れ、湿地帯に向かえば、そこにはベル・ノールが夜と星々を背景に霧を冠として聳え立っている。そしてベル・ノールは彼らを迎え入れた。彼らは礼拝が行われる洞窟の大部屋の中に入っていった。そしてモリーと私は月と海とともに残され、より自然に近い静寂と暗闇の中の礼拝を行おうとしていた。

月はさらに沈み、海がその円い一部を切り取った。すると海の霧が黄金の光輪となり、月を囲んだ。すると《なにか》が暗闇の中に形を取り始め、霧を抜けて水面の銀の道を通り、私たちのほうに近づいてくるように思われた。それは龐大なものであり、頭は星々に接していた。それはすべてヴェイルに覆われ、巻かれ、くるまれていた。ただ私たちが見たものは、海に乗るその銀色の《足》だけであり、それもまた水面の月光に似ていた。

そうするうちに《彼女》、《海》の《彼女》が到来した。海と陸が出会う場所、私たちが《彼女》の到来を待っていた場所にやってきたのだ。彼女は波打ち際で立ち止まっ

た。足は水にあり、頭は星々の中、星の冠を戴いていた。《貌》は見えなかった。《彼女》は永遠にヴェイルに覆われているからだ。しかし私たちは大いなる畏敬の念に襲われた。この感情こそが神々であり、それ以外にないという者もいる。

疼くほどの恐れが私の心臓と喉と目をわしづかみにした。手は焼けるように熱くなり、鼓動する力に疼いた。目の裏側からその力が光線となって発しているかのようにだった。そして私は神々の熱による発汗のために崩れ落ちた。この熱こそ、モーガンが神々の到来を先触れするものだと言っていた。私は息を詰まらせたが、喘息のせいではなかった。私は体を堅くして、熱病に罹った人間のように震えた。私はモリーを見やめた。すると彼女がつま先立ちとなり、彼女の《女神》に向かって手を伸ばしているのが見えた。まるで天と地の間に浮いた、凍った踊り子の子ようだった。不動のまま、緊張し、それでいて苦もなく姿勢を保っていた。

その時、《大いなるイシス》がゆっくりと振り向き、ヴェイルをよりしつかりと引き寄せた。そして《女神》は長い海の道向西に向かって下っていった。霧がその後を押し包んでいった。

海は下げ潮とともに引いていき、《女神》の通過した場所をあらわにした。砂の上には銀色の水溜まりが残っていた。それは引き潮の名残であったかもしれないが、私たちには《女神》の足跡であった。そして《女神》は来る時と同様、静かに去っていった。しかし《女神》が通った場所は聖なる場所であり、力に満たされていた。なにかが私たちの魂に触れて、畏敬の念を引き起こした。そして私たちはそれを《女神の通過》と呼びたい。

そして私たちは《大いなるイシス》と呼ばれるものが、女司祭の召喚に応えてくださったことを知った。モリーが丹精こめて清掃し、飾りつけてきた聖所の祭壇に炎が灯ったのである。私は悲しみと孤独と病の中に彼女を引き入れてしまったのだが、彼女は、愛する者の幸をはかり自らの益を求めぬ、より大いなる愛ゆえに、来てくれた。そして愛のない家庭という社の女司祭となったモリーが、《女神》を呼びよせたのであった。

私たちは、おそらく、こういった物事の中に魔法を得るのであろう。モーガンも言っていたように、魔法に於いては、生け贄なくして力はないのである。海の神々は私を生け贄にしようと試みまし、要塞を彼らの神殿として受け入れる際にあの知恵遅れの若者を得ていた。ゆえに《大いなるイシス》もモリーに祭壇上に横たわることを要求してい

たのであり、ちようど、アブラハムが息子イサクを捧げて宥めようとした苛酷な部族崇拜対象のように、生命をとり、しかし肉の形は戻したのである。そう、イシスはモリーをとり、モリーはイシスに身をまかせていたのであった。

私はおぞましい恐怖の念に撃たれた。今一度、愛しい者を海に捧げよと命じられるのでは、と感じたからだ。そこで私は海にはつきり言ってやった。もし海がモリーをとるならば、私もついていく、と。するとどこか星々の間から銀の鈴をふるようなかすかな笑い声が聞こえたようだった。《女神》がおよろこびであり、それがよろこびの声であるとわかった。私はすでに適切な生け贄を捧げていたのであり、それなくしてはいかなる交わりも《大いなる女神》に奉納することができないのであった。いかなる契りに於いても女性はこの捧げ物をなすのである。女性は死の門まで下つて来るべき生命のために門を開いてやるのであるから、いかなる男性といえども、常識かいつても、女性の献身に太刀打ちできるものではない。血を流すことなくして救いはないのである。それが産褥であれ、戦場であれ、両者ともそれなりの十字架なのであり、両者とも理想によって聖とされる時、救いの力を得るのである。

それから私たちは家に戻った。足の下の大地がほてり、生きたものの肉のように温かく感じられた。それは当たり前だった。これは女神の体ではないのか？

潮が変わると、霧も巻くように引いていった。陸から吹くそよ風がそれを海に掃くように押し出していたからだ。そよ風は新鮮で風向きを変えていた。急勾配の海浜を上がっていく時、玉砂利を打つ小気味良い波の音が聞こえた。星々は藍色の夜空から姿を現していた。《大いなるイシス》はすでに波の下、アトランティスのほうへ沈み進んでいた。おそらくそこでは《女神》が、深い海の宮殿に車座に座る司祭たちに、古代の叡知が再び陸に到来することを語っているのだろう。

私たちの背後にある海は聖歌隊のように歌っていた。半島の根幹部の両側にある入り江では波打つ音が二部合唱のように、大聖堂を挟んで歌声をやりとりしていた。ベル・ノールのピラミッド型の高みが星々を背景に黒く聳え立ち、湿地帯を見張る歩哨と化していた。ベル・ヘッドの巨軀は海へと伸びていた。ブリストルに向かう船団の灯がゆっくりと海と空の間を動いていた。やがて霧の後の透き通った空の中、水平線に低くほの光るのはウェールズの港町の夜景だった。

そしてこれら動く光の中には汗水たらして働く人間がいて、ほの光るごみごみした町は鉄の浜と鉄の丘に挟まれた細長い土地に建てられ、伏魔殿のアフロデイトは薄汚い通りを歩き、小礼拝堂では不完全な神を不完全な人間に説教している。これは最大の悲劇に思えた。

第三十二章

関係者全員にとって幸運だったことに、翌日は土曜日だった。《大いなる女神》は伝承通り、彼女の聖日に現れたのである―金曜日、即ち北方のヴィーナス、フレイヤにちなんで名付けられた日である。土曜ではオフィスでたいした仕事もないから、私は家にとどまって喘息の養生をすることにした。前夜の海霧を吸ったのが、あまりよくなかったのだ。

霧明けの日中は輝くばかりに陽光に溢れていた。入り江は踊るさざ波で一杯で、とても青かった。二人で潮が引いた後の平らな砂浜を歩きながら、私は考えた―ここは子供を育てるにはどれほど素晴らしい場所になるだろうかと。しかし私たちには子供はいなかった。この思いを口に出してモリーを傷つけたくなかった。しかし、彼女が海を眺める様子から、同じことを考えていると見てとれた。

私はモリーを見た。モリーはこつちを向いていなかった。長らく彼女と一緒にいたが、こんな彼女は知らなかったとの思いに駆られた。実に不思議だった。私が変わったのだ

ろうか、モリーが変わったのだらうかーおそらくどちらもあるのだらう。《月の司祭》はきつちり仕事をしていた。彼が教えたことは明らかにモリーと私を独り立ちさせたのだ。私たちの知識を分け合えば、多くの人も独り立ちするのではないか、と思いついた。

私たちはかなりゆっくりと葡萄棚まで登った。私の息が切れていたからだ。そして日光の中、丘陵の胸部を背後に岩に腰掛けていた。喘息の時は日光浴にかぎるのだ。小さな葡萄はすでに冬の藁敷を脱ぎ捨てており、毛むくじやらの芽はかわいい黄色の葉と長い螺旋の蔓になっていた。それでもまだ、この小さな植物はどこかものうげに見えた。しかしモリーは期待していた。モリーと女中見習いは葡萄をまるで子供のように育てていた。

私たちは湿地帯の窪地を見やった。それは春の潮とほぼ同じ高さであり、陸向きの突風が吹いてくれば、海水のなだれ込みを防ぐものは堤だけだった。しかし、今日は突風もなく、ただやさしいそよ風が吹くのみであり、私たちはまだ刈り取られていない牧草が風になびいて波のようにざわめくさまを見ていた。ヒバリがたくさんいた。断崖の胸部にいる私たちのもとに、ヒバリの歌が聞こえてきた。私が子供のころ、海が引いた後に古代の埠頭の後を見た話をモリーにしてやった。

当時から湿地帯はほとんど変わっていなかった。温かい大気と燦然たる陽光の中、古代の生活が私たちの周囲に繰り広げられているように思えた。私は陸の生命の持続というものを考えた。父から息子にゆっくりと伝えられる、夫としての役目は、結局ほとんど内容に変化がないのだろう。人生は続く——種族の生命として続くのであり、私たちは巨大な全体の一部でしかないのだ。そして種族の生命そのものも、《イシス》の生命の一部なのである。

また私は人々が《彼女》を崇めていた日々を思いを馳せた。当時、《彼女》は種族に生命をもたらす者にして、集落の守護者であり、人々は港に《彼女》の名前を与えたほどであった。当時の人々はなにを知っていたのだろうか、私たちはなにを忘れたのだろうか、と思つた。その手掛かりをモーガンは与えてくれたのだが、謎を解くのは私たちに任せて去つていったのだ。古代の異教信仰には多くの学ぶべきものがある、と私は確信した。教区の牧師には私とモリーが抱えていた問題をうまく舵取りするなど出来るわけもなかった。少なくとも《月の司祭》がやったように、である。牧師にこの問題の相談をしていたとすれば、どんな顔をするか、目に浮かぶようだ！ 彼はきつと叱られた猫のようにこそこそと懺悔室の屋根裏へ逃げ出していっただろう。

暖かい灰色の岩陰にいと、なんとも快適だった。太陽熱のために薬草から芳香が漂い、まるで香を焚いたみたいだった。はるか眼下には、さざ波が玉砂利に砕けて銀色に変わるさまが見え、その音の中からヒバリの歌がここまで昇ってくる。私はコートを脱ぎ、シャツを腕まくりした。すると日差しを受けて私の体はトーストのようになりつつ引き締まった。私は実に怠け者の気分となり、ご機嫌だった。湿地帯の向こうを横切る新道路が見えた。まるでビーズ玉のように行き来する車も見えた。私たちのすぐ下には我が家の茅葺き屋根が見える。煙突からは青い煙が立ちのぼり、一陣の風がパンを焼く匂いを運んできた。居間の暖炉の横に、石造りの古式パン焼き釜があり、これがピートを使う灰掻き出し式の年代物だった。モリーがそれを使うといつてきかないのである。私としても、それで焼いたパンは最高だと言わざるを得ない。いつてみれば、私たちも湿地帯の一部のようであり、妙な気もする。湿地帯のピートでパンを焼き、その茅で屋根を葺いているからだ。ディックマウスから帰ってくる時でも、家までたっぷり距離があるうと、水路や柳に囲まれてくれば、もう家にたどり着いた気分になれる。ベル・ノールとベル・ヘッドは両者とも私たちの見張り役であった。私たちに続く陸路と水路を見張ってくれているのだ。

それから私たちは家に戻って昼食を庭先でとった。イトスギの生け垣はヨナのヒヨウタンの如く砂地に育っており、すでに半島根幹部を吹き抜ける潮風を防ぐほどに大きくなっていった。もつとも、私たちはそよ風が嬉しかった。その午後一杯、太陽が西に沈み、丘陵の影が伸びてくるまで、農場は地面に陽炎を踊らせるほどの熱に焼かれていたからだ。

私はモリーを車に乗せ、要塞まで日没を見にいった。その晩は特に素晴らしかった。海は薄い金の延べ板となり、水平線には山麓のような紫の雲が低く垂れ込めていた。その背後にはローズ・ピンクの空が広がっていた。太陽が沈むにつれ、不思議な緑の光条が余波の如く水平線の下から差し上がり、海すべてが堇紫色と化した。夕闇が迫ってきたので、車で戻ることにした。丘陵の頂に至ると、海面が眼下に広がった。私たちは東の空に夜明けのように繰り広げられる夕焼けの照り返しを見た。それは素晴らしかった。それから急な坂をローに入れたまま下り、我が家についた。

六月とはいいいながら、私たちは小さな《アズラエルの炎》を焚いた。太陽が沈めば、浜のほうは急に冷えてくるのだ。私たちは暖炉の前に座り、楽しくおしゃべりに興じた。《アズラエルの炎》の意味もまったく忘れていたのだが、その時、室内に不思議な力が

集束しはじめたのを感じて、ふと思ひ出した。私としては、一回の満月でもう十二分に楽しめたと思つていたのだが、どうやら神々はそうは思つていなかったらしい。

しかし、なにも起こらなかつた。おそろくその日の満潮時はもう一時間後だったからだろう。するとモリーが私を寝かせにかかつた。私たちに用があるのなら、神々のほうから呼ぶはずだから、と言つていた。

そこで私たちは就寝した。モリーは彼女の部屋に行き、私は私の部屋に行った。正気の人間なら、ブルドッグと犬小屋をともしようととは思えないからだ。それがいかに忠実かつ愛すべき生き物であろうとも、である。私の夜間行動は、モリーにとってすらあんまりの代物だった。

二階でも、杜松とヒマラヤスギと白檀のかすかな薫りがはつきりとわかつた。青い煙のうすもやが廊下に漂つているのすら見えた。そこで私は、どうやら煙突にひびが入つているらしい、ビンドリングはきっちり仕事をしなかつたな、と結論を出した。

私の部屋は建物の海側のはしっこにあり、月の入りにはもろに月光が寝台まで差し込んでくる。モリーはそれが睡眠によくないと考えていたが、私は月光を締め出させはし

なかった。横になり、月がゆつくりと窓を横切るさまを眺めていると、いつか要塞で見た月の入りを思い出した。海の神々を導く銀色の道、《月の司祭》とともにアトランテイスまで旅をしたこと、自分の献身が受け入れられたと言われた時の感動や、そのために生じることになった物事が脳裏に甦った。そして、その時その場で、心の中で、私は献身の誓いを再び誓った。しかしそれがなんとも曖昧で、効果がないみたいなのだ。そこで私は寝台に起き上がり、月の角の形に両腕を掲げ、声を出して再び誓ってみた。すると、声に出さずに誓った時とは異なり、外的かつ可視的なほうが効果があるように思えた。

《アズラエルの炎》の香煙の薫りはいまや非常に強くなっていた。私はかなり心配になり、煙突の欠陥のために家が火事になりつつあるのでは、と思った。しかし寝る前にはほんの一すくいほどの灰しか残しておかなかったことを思い出した。どうもこの煙には地上の炎では説明がつかないようなものが感じられた。なにが起ころうとしているのだろうかとうとう首をひねった。手を伸ばして、空気の具合を見ようとした。モーガンが儀式をやった時のような、ぴちやりとした冷たさが生じつつあるのでは、と思ったのだ。ところが逆に、空気はその時刻としては異様に温かく、蒸し風呂にでもいるかのような、乾い

た熱気を帯びていた。しかも温度もぐんぐん上がっていた。これは本気の火事かなと思
い、一体全体どうなることか、見にいったほうがいいかな、と考えていた。

その時、扉が音もなく開き、モリーが入ってきた。彼女はこれまで私の具合が悪いと
音で判断した時以外、自分の意志でここに入ってきたことがなかったから、私はいよいよ
家が火事だと起こしに来たのだと思った。しかし彼女は一言も発さなかった。私が目
覚めていることは、月明かりの中、寝台に起き上がっていることからわかったはずだ
が、彼女はなにも言わなかった。彼女は私の寝台の足側に位置を取り、窓と月光を背に
した。モリーはいつも自作の花柄の紗の寝巻を着ていて、それはそれでとてもかわい
いのだが、光を背後にしてはなんの役にも立たなかった。彼女はまるで古代の彫像、ポケ
ット・ヴィーナスのように見えた。そして両腕を私のほうへ差し出したが、その不思議
な強張った姿勢は、まるで古代の神々、鷹形のハトハルのようだった。そして彼女が首
と手首にモーガンのサファイアを飾っているのが見えた。

それから彼女が歌いはじめた。モーガンの旋律を使っていたが、彼女が歌う歌はモー
ガンが私に歌ってくれたものではなかった。

「我は海より昇る《星》、

薄闇の海より昇る

すべての潮は我が物なり、すべて我に答える―

人の魂と、夢と、運命の潮も―

ヴェイルをしたイシス、そしてイーア、ビーナ、ギー―」

「見よ、我は汝がもたらした賜物を受け取りたり―

生、また生―すべての法悦のうちに！

我は月なり、汝を引き寄せる月なり

我は汝を呼ぶ大地なり、汝を待つものなり

我がもとへ来れ、大いなるパンよ、我がもとへ来れ！

我がもとへ来れ、大いなるパンよ、我がもとへ来れ！」

歌の魔法の中に天井の低い部屋は消え失せ、広大な平原が、月明かりに照らされた剥き出しの玄武岩の火山の平原が広がっていった。私は大災害後のアトランティスと月の山々を思った。平原の中央には黒い柱を円形に並べた月の神殿があった。まるで細く優雅なドリア様式のストーン・ヘンジのようだった。その前に影となって立つのはタナグラ人形のような素晴らしい曲線を見せるモリーだった。そして私は、彼女が古代の権限を行使して、月の御名に於いて私に交合の召喚を与えているのだとわかった。それはいかなる義務や慎みの慣習よりもはるかに《自然》に沿ったものであった。内的領域に於いては、女性が積極的であり、主導権を握らなければならないとモーガンが言っていた理由がわかった。《星幽界》は月によって支配されるのであり、女性は月の女司祭であるからだ。そして彼女が月を示す古代の権限を行使する時、月の力は彼女のものとなり、男を生命の磁力で肥沃化させることができるのだ。

そして応答する力が私の存在奥深くから、肉体の欲求から生じる欲望の奔流よりももっと深いところから湧き上がってきた。彼女は私から、埋蔵されていた生命力を呼び出して、活動させようとしていたからだ―自然の法則によって、一旦緩急ある時のために保存されていたものなのだ。それは狂人に馬鹿力を与え、詩人に創造的熱狂を与えるものでもある。愛する者の召喚によってこれが呼び出されなにかぎり、我々は存在の深みまで交わったとはいえないのだ。これは、男がそうしたいからという理由で女に求愛する時に呼び出されることはない。《大いなるイシス》の御名に於いて女が男に近づき、自分とともに自分を通じて女神を崇拜せよと命じる時、それは呼び出されるのである。

平原は柱神殿とともに月の出でも見るかの如くどんどん明瞭になっていった。農場の低い天井の部屋は消え失せ、頭上には高く澄み切った空があった。しかしモリーは銀の月明かりの中に銀の姿のままとどまっていた―彼女は天から私のもとに降臨した《ヴェイルを脱いだイシス》だった。彼女は《彼女》と一体となっていたのだ。

私たちは別の次元に移行していた―それは精神の事物の次元であり、モリーと私の間にあるものは、もはや個人的なものではなく《生》そのものの一部としての意義を有していた―永遠に生成を繰り返す《生》である。私にとってモリーは一女性ではなく、女

性というものになっていた。私は彼女を見ることなく、彼女の背後にあるものを見てみると、生命はすさまじい勢いで到来してきて、私たちを木の葉のように巻き込み連れ去った。人格という障壁は取り去られ、私たちは宇宙生命と一体になっていた―お互い別々に一体となったのではない、と思う。それはきつと不可能なのだ。私たちはより大きな全体と一体になったのだ。A || B || Cとなれば、CはA、Bと等しいことになるのだから、私たちはそれぞれをより大きな生命のうちに失ったのだ。説明するのが難しい。経験してみなければわからないだろう。できるかぎり明瞭にしてみたつもりである。私自身、理解しているふりはしない。結婚の中には単なる友愛を越えたなにかがあるのだ。それは愛する相手の人格が与えることができなもののなのだ。女性の人格を越えて、本質的女性に到達しようという時に流れ出す、磁気的ななにかなのだ。思うに、この精髓、機能を通じて形を創造するこの生命原理こそ、古代人が《大いなる女神》、天上にあってはヴェイルに覆われ、愛にあつてはヴェイルを脱ぐ《イシス》として擬人化したものなのだろう。

大いなる歌声の伴奏のような、この経験の法悦のさなかにずっと、鐘のように明瞭な声が続いていた。それで私は《月の司祭》が儀式を司っていることを知った。古代アト

ランテイスに於いて、《太陽の処女たち》が大いなる神殿に連れてこられた時のように、彼はすべてを統轄していたのだ。それは《大いなる自然》そのものの過程に対応した秩序ある儀式であった。

「されば潮の満ち引きの密儀を学べ。《自然のイシス》は主たる《太陽》を待ち望みたり。呼び掛ける。《彼女》は《彼》を死者と忘却の場所アメンテイ王国より引き出したり。《億年》と呼ばれる舟に乗り、彼は女神のもとに来る。されば大地は穀物に緑なす。オシリスの望みがイシスの呼び声に答えたればなり。されば人の心も常にそうあれかし。神々が人をかく造りたりせば。これを否とする者は神々に厭われたり。」

「されど天にあつては我らの公主イシスは月なり、月の力は公主のものなり。公主はまた薄明の海より昇る銀の星の女司祭なり。その潮は人の心を司る磁気の月潮なり。内にあつては公主は全能なり。公主は眠りの王国の女王なり。すべての見えざる業は公主の手になるものなり。公主は誕生以前の万物を司るものなり。伴侶オシリスを経て地に緑をもたらすが如く、人の精神も公主の力を経て力を持つ。この秘密は力動なる《女神》の内なる性にかかわるものなり」

声が続く中、私は月の神殿の細い柱の円の中にいるように思えた。燃え尽きた不毛の平原の中央にある神殿の中、月光が集中し、他すべては暗闇だった。しばらく静寂があり、空の大きいなる潮が音を色として律動しながら行き交う様子が聞き取れた。五つの音それぞれに拍子と音色と周期性があった。まるでオルガンのような音色であり、また回転する光の輪のようでもあった。それを諸力ととらえてもいいかもしれない。あるいは天使として擬人化し、その大きいなる《形相》が力強い翼に乗って行き交いながら歌うさまを見てもよい。そして半分しか見えない《貌》を一瞥するもよい。

いまや空虚な平原の露天神殿には私たち、モリーと私の二人だけだった。ただ頭上に月が煌々と輝き、足下には回る大地があった。すべての秘蹟は静寂のうちに終わるからである。《月の司祭》すら退出し、私たちを月と地と空のもとに残していった。

それから私たちは彼方に満ちる潮騒を聞いた。玉砂利に砕けるやわらかな銀の波の音だった。そして永劫の終わりに地に水が広がっていることを知った。やがて海が近づくにつれ、《月の司祭》の声が再び聞こえてきた。

「ことなれり。イシスの按手を受けし者は内なる生命の開門を受けし者なり。その者には月潮が満ち、引き、宇宙の律動の内に決して止むことはないであろう」

それから月の神殿も大平原も消えはじめ、開け放たれた窓から地の潮の波が玉砂利を打つ音が聞こえてきた。月の入りは終わろうとしていた。

私たちは農場の低い天井の部屋に戻っていた。しかし《月の司祭》の声はまだ続いていた。

「天上の家を動く大いなる太陽は《魚の室》を出て《水瓶の室》に入らんとす。続く時代に人類は聖なるものとなろう。人間の完成に於いて我々は人を見ることになる。人を《神》にまで上げよ。《神》を人にまで下げよ。されば《神》の日は我々とともにあらん。《神》は《自然》の中に顕現したり、《自然》は《神》の自己表現なれば」